
Babyleaf 2nd season

河東悠美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a b y l e a f 2 n d s e a s o n

【Nコード】

N 9 5 9 1 Z

【作者名】

河東悠美

【あらすじ】

自サイトにも掲載しています。

<:1>

好きなひとじゃない
好きなひとにはならない
好きになっちゃだめ

Nothing great was ever achieve
d without enthusiasm .

その英文の前に、眼鏡をかけた端正な顔が曇っている。
彼は真崎英彰という。

里奈と彼の在学している高校で、恐らく一番女の子に騒がれている
少年だ。

眉目秀麗、成績優秀、ついでにバスケット部でぶいぶいいわせてい
るときたら、そりゃ、もてるわな。

野々村里奈はそんな彼が唸っている様子を意地悪く眺めながら、忍
び笑いをもらった。

「秀才誉れ高き真崎くんが、英語が苦手だとはね〜。ファンクラブ
のみんなが泣くよねー」

眼鏡の奥からむっとした視線が向けられた。

「こんな構文見たことないぞ」

「見たことあるものばかりだったら、受験で苦労しませーん」

「辞書」

「ダメ」

英彰はいよいよ腕を組んで、里奈の書いた英文をにらみつけた。

「enthusiasmがわからん」

「知りたい？ 教えてあげようか？」

「いい、絶対に言うな。withoutで、なしにはってなるんだから、achievedっていうのはachieveだよ……」

「頭のnothingがかかっているんだから……」

「enthusiasmなしには、偉業は達成されない？」

「惜しい」

「まだ、答えは出てない」

「負けず嫌いだね」

「うるさい」

「nothingはgreatのほうだと思うよ」

「……」

参りましたと英彰がシャープペンシルを放り投げて、頬杖をついた。

「everを忘れてるんだろ？」

「そうそう。熱心さなしに偉業がなしとげられた試しはない」

それを聞いて、英彰はぽかんとした。

「エマソンじゃん」

今度は里奈のほうがぽかんとする番だった。

「誰？ エマソンって？」

時は春休み真っ最中。

用事がなければ街の図書館で午後を過ごすことが里奈の日課になりつつある。

下心もあるにはあって、向学心だけのお話ではないのだが、なによりに家にいると母親がうるさい。

お買い物に行きましょ、親戚のおばさんの家に行きましょ。

普段専業主婦をしている母親は、里奈が家にいるときくらいはきやぴきやぴいいいたらしい。

しかし、里奈もなにかと複雑なお年頃だ。そんな母親が正直煩わしかったりして、学生の葵のご紋を振りかざして外出している。

「図書館にいつてきます」

お昼ご飯を食べてから図書館に行くと、丁度英彰と会うのだ。

待ち合わせたわけでもないのに、こんな風に頭をつき合わせているのが続くと、結構それがあたりまえのような感覚になってきて、自然と一緒に勉強をしている。

3時ごろまで図書館で勉強して、近くのファーストフード店に息抜きにいく。

それもお決まりのコースになってきた。

期間限定で半額のストロベリーシェーキのストローを半分くわえて、里奈は思い出したように尋ねた。

「真崎、いつも午後ここに入るけど、部活は？」

「体育館の使用が、バスケット部は午前中なんだよ」

「ふうん……。折角の休みなのに早起きしてるんだ」

「誰かさんと違うよ。ま、うちは所詮進学校の運動部だからいい加減だよ。俺も含めて練習よりは模擬テスト優先してるし」

「まっすぐ図書館に来るの？」

うん、と英彰は答える。時折髪が生乾きなのは、部活を終えてから学校でシャワーを浴びてくるからなんだ。

なにも入れないコーヒーを傾けながら、英彰はそ知らぬ顔。

まっすぐ彼がここに来る理由を里奈はなんとなくわかってる。里奈がいるからだ。

それについてはいろいろと後ろめたいものがあって、里奈としては困惑するのみなのだが、一ヶ月前の険悪なムードを呼び戻したくないで、あえて黙っている。

一ヶ月前まで、2人は実に微妙な険悪な状態だった。

だから、なおさら気を使う。

「予備校には行かないの？」

「春はパスした。塾に絞った」

涼しい顔でさらりと言う英彰に、里奈は啞然。

「朝早くから部活やって、図書館に来て勉強して、夜は塾？」

「塾は毎日じゃないよ。昼の集中講座。パスしただけ。部活やりたかったから」

「家にいる時間ないじゃない」

英彰は笑って、頷いた。

「俺んちはいつも誰もいないから別にいいんじゃない？」

これから塾だと英彰が時計を見ながら、軽く伸びをする。

里奈は家に帰ればできたてのご飯ができています。

「ねえ、ご飯とかどうしてるの？」

「母親が作っておいてくれたり、外で済ましたり、自分で作ったり」

英彰の両親はフランス料理のレストランを営んでいる。よって、午後から夜中まで家を2人で空けている。

「兄弟とかいればよかったね」

「いらないよそんなの」

眉をひそめながら英彰が言う。

里奈は首をかしげて、そうかなあとつぶやいた。

「あたしも一人っ子だから、おねえちゃんとかおにいちゃんとか欲しかったけどな」

「いらない。煩わしいだけ」

やけにきっぱりと言って、英彰は口を引き結んだ。

「俺、高校卒業したら家を出ようと思ってるし。そのあたりは親も了承してるし。あと少しの辛抱」

辛抱って、なんだろ。

里奈は首を傾げる。

それから英彰が話題をかえてしまったので、里奈も深くは考えなかった。

ファーストフード店を出てすぐにあるブティックのウィンドウに

映る自分の姿を見て、髪形をちよいちよいと手でなおした。

そんな里奈に英彰はとても優しく笑いかける。

「おまえって、ホント女の子だよな」

「え？」

「化粧なんてしてるから学校のやつは今のおまえを見てもわかんないだろうけど、学校でも、ここでも、女の子してるところは同じだよな」

照れる。

そんな優しい眼で、そんな優しいトーンでそんなこと言わないで欲しい。

里奈は思わず首をすくめて、うつむいてしまう。

意外と真崎英彰はストレートなヤツだ。

「ねえねえ、あたしって、女の子してるー？」

ぱかん、と参考書で頭を叩かれた。

いたーい、と頭を押さえる里奈に、叩いた相手はただでさえ細い眼を半分にして、呆れ顔。

「今は数学っつー高尚なもんに取り組んでるんだよ。大昔の偉人達はコイツを踏まえた上で、哲学っつーもんに取り組んだんだぞ。人間の存在価値なんてそれこそ高尚なもんをちまちまと考えてた思想論理のキホンが数学なんだよ。そーゆーもんに取り組んでる時、なにが女の子してるだ、ボケ。この間教えてやったろが」

「なんだっけ？ いたーいっ！」

里奈の頭を再びポカリとやって、天下無敵の家庭教師・都村聡明は風貌に似合わない流暢な発音でそれを口にした。

「Nothing great was ever achieved without enthusiasm。一所懸命にやらね

えと、なーんでも難関突破できねえんだよ。おまえは受験生になつたんだぞ、自覚をしろ。自覚を！」

「ねえねえ、それって、エマソンが言つたんだよね？」

「おお、大当たりだ」

「それくらい知ってるよ」

へへん、と威張って見せたら、敵はこしやくにも。

「フルネーム言ってみな。どこのお国の偉い人が言ってみな」

うっ、と言葉を詰まらせる里奈に、もう一度愛のポカリがやってきた。

「ラルフ・ウォルド・エマーソンっていうんだよ。アメリカの哲学者だよ」

そう言つて、聡明はせせら笑う。

今のところ、彼は里奈の片想いの相手だ。

多少手荒な扱いをされていても、大好きだからホント困る。

「真崎はなんでそんなこと知ってるのよー」

塾から帰つて、家の灯りをつけたのは23時。

真崎家の一室は20階建てマンションの15階にある。

3年前に新築で購入したこの部屋に、家族が揃つて団欒なんてことはめつたにない。

英彰は冷蔵庫を空けて、母親の用意した食事を手にする。

ラップをかけたままの皿を電子レンジにいれて、ふと、視線を落とす。

炊飯器の蓋を開いて、英彰は目を据わらせた。

「スイッチ入つてねえじゃん。米のまんまじゃん」

彼の母親は時として、こういう大失敗をやらかす天才だ。

そんなこんなで、ご飯を諦めておかずだけを食べていたら、両親が帰宅した。

「英ちゃん、起きてたの？」

母親はレストランのマダムをしている。

シエフである父親のご機嫌を伺いながら、来客をもてなすプロだ。

花のように微笑む顔は17歳の息子がいるなんて想像できない程の愛らしさ。

「ご飯は？ おかずだけでいいの？」

英彰はこめかみに怒りの文字を浮かべて、低い声で言った。

「炊いた記憶ある？ 今日」

「え？」

母親がオオボケをかましている背後で、父親がまっすぐにバスルームに向かって、シャワーを浴びる物音がしている。

「今日も遅かったの」

「まあ」

「明日も遅いの？」

「明日は塾ないから、早いよ」

そっけなく答えながら、くし切りにしたトマトを口にする息子に、母親はにーんまりと笑った。

その笑みを見て、怪訝そうな顔をする英彰に、彼女は得意げにこんなことを言う。

「12時すぎちゃったから、明日じゃないもん、今日だもん」

うふ、と微笑んで作るえくぼの愛らしさ。

だもんじゃねえよ。

英彰は無言で、再び眼を据わらせる。

こんな母親、どうして、母なんて敬称で呼べるか。

英彰は母親の事をめったに呼ばない。

ねえ、とか、ちょっとで済ませる。

どうしてもと言うときは、名前で呼ぶ。

「紗江子さん」

父親も結婚して20年になるというのにそっという呼び方をするから、彼女にはあっているのかもしれない。

ちなみに英彰は母親に似ている。

食事を終えて、部屋に戻ろうとした時、腰にバスタオルを巻いただけでの風呂上りの父親とすれ違った。

彼は機嫌がよい。これからビールを一杯やって、床につくのだろう。英彰は回れ右をしてダイニングに戻る。

案の定冷蔵庫をあけていた父親が、うれしそうに二本ビールの缶を取り出した。

「呑むか、英彰」

「うん」

「おかーさんもいただこうかしら」

「ダメ、紗江子さんは」

父親は母親に対してとても過保護だ。

息子は未成年なのに。

跡をつげと父親は言わないが、ついであくれたらいいなあとは思っているのだろう。

しかし、英彰の頭は理系にできていて、フランス料理を作ることに興味が持てないと言うのが本音だ。

無理につげとは言わないにしても、一人息子のプレッシャーは並々ならぬものがある。大学受験ではさほど両親に期待されていないというのに、がんばってしまうのはそんなしがらみから逃げる手段なのかもしれない。

こんな事を考える時にいつも想像して比べているのは、野々村里奈のこと。

時計を眺めて、深夜であるこの時間に、彼女はなにをしているかを考える。

たぶん、寝ているだろうな。

家族の団欒なんて、あいつの家は5・6時間前にやっているはずだろうから。

図書館で会うだけじゃなくて、本当はどこかに誘いたい。

それができて、万が一頷いてもらえたのなら、部活も塾も予定なんてすべて放棄してしまうのに。

英彰は眼鏡を外して、そっと溜息をつく。

彼のレンズには度が入っていない。

春休みが終わって、訪れた桜の季節。

私立文系志望の里奈と、国立理系志望の英彰は別々のクラスになった。

当然のように顔を合わせることは激減。

3・Aの英彰と3・Dの里奈が顔を会わせるといえば、廊下ですれ違う事くらい。里奈の親友である奈津美は志望が同じこともあり、またも里奈と同じクラスだが英彰と離れた事にかなりがっかりしている。

彼女は英彰の事が好きだからだ。

真崎英彰は実に微妙な存在。

親友の好きな男の子なのに、彼は里奈を好きだと言う。

クラスが離れたのを機会に疎遠になってしまおうかとも考えたけれど、英彰がそれを許さない。

「絶対に疎遠になってなんてやらないからな、覚悟しとけ」

そう言ったからには、やつのことだ、そうならないだろう。

里奈は溜息をつく。

なにかが一番困るって。

そんな真崎英彰がココント憎めなくなってきた、根性良くないけどイヤツだななんて思い始めちゃっている事。

廊下で会った時に軽口を叩きあうことが結構楽しかったりするから始末が悪い。

「野々村、またクラス委員だった？」

声をかけてきたのは英彰のほうだった。

2限の後の長めの休憩時間、教室移動をしていたら、反対方向からやってくる真崎英彰さま御一行とすれ違ったのだ。

英彰は学校ではいつも仲間がいて、誰かしらがそばにいる。

クラスの仲間はもちろん、バスケット部の仲間はとくに連帯感が強いのか、去年も昼休みになるとわざわざ他のクラスから英彰のクラスに昼食をとりを集まっていた。

彼が女の子に人気があるという事実はさておき、友達が多いというのはたぶんいい奴なんだと思う。

英彰が足をわざわざ足を止めて見下ろしてくる。

これは目立つ。

英彰だけでも目立つのに、自然とまわりにいた男子生徒も足を止めるから。

奈津美なんかは英彰と遭遇できる機会に、ただ能天気喜んでる。

「英彰、先行ってるぞ」

「おう」

ぞろぞろと足をすすめる友達にあっさりと頷いた後、返事をしない里奈に英彰がもう1度尋ねた。

「副委員長なんだって？」

うっかり里奈は3年生になってもクラス委員になってしまっただも3-Dの副委員長だ。

「うん。真崎のクラスは誰？」

「まだ決まってるじゃない。誰も受けなくて。担任が頭抱えてるよ」

英彰はエリートが集まるクラスに属していることもあり、今回は役職はパスしたらしい。

「受験で忙しい時にクラスの雑用なんかやってられっかよ」

そんな声が聞えてきそうな雰囲気の中のクラスの責任は持てない。

前にそんなコトをちらりと言っていたが、本当にパスするとは。

「副委員長なんだ」

噛み締めるように英彰が呟く。

嫌な予感がして、里奈は眉を寄せた。

「担任がまた頼んできたら、受けようかな」

なんて、高飛車なことを英彰は呟く。

確かにクラス委員になれば、今よりも遭遇率は高くなる。

奈津美が不思議そうな目で里奈と英彰を見比べる。

居心地が悪くなってきて、里奈は英彰に言った。

「ふーん。授業始まるから。またね、真崎」

そそくさとバイバイしたあとで、里奈はいつも気まずい思いを抱えている。

英彰にも、奈津美にも。

本日は家教の日。

大好きな聡明に会える日なので、里奈は上機嫌である。

先日お小遣いでゲットした新しい口紅をつけてご満悦。

まだ慣れない新生活に感じるストレスを聡明に甘えて発散させようとするんでいたので、ついきやびきやびしてしまふ。

そんな里奈の様子をたしなめるように聡明が言う。

「ホラ、今年こそ、真面目にやるぞ。教科書開け」

「ねえねえ、それよりさー、この唇いい色だとおもわなーい？ キスしたくなるンだってー どお？」

なんてつい、調子にのって唇突き出してみた。

すると、聡明は苦虫をつぶしたような顔で、一言。

「キスするときは口紅なんてない方がいい」

「え？」

ドキツとした。

キスという言葉で聡明の口から聞いて、里奈は後ろめたさと動揺を感じ始める。

聡明はさらに言葉を重ねた。

「こつちに色移るし、移ってそのまんままでいるのも間抜けだし、でも、ふきやーふいたで睨まれるしよ。オマケにうまくねえし…まあ、好きな相手ならなんでもいいんだろうけどな…好きな相手なら」

好きな相手なら。

聡明の呟きは里奈の胸に静かに刺さってきた。

里奈は聡明の横顔を見つめた。

もしかしたら……？

聡明の表情はなにも伺えないポーカークフェイス。教科書を開きながら、

「……と、いうことで雑談終わり」

と、話を締めくくった。

おかげで、テンションは急降下。

里奈は落ちつかなく視線をさまよわせた。

もしかしたら、わかつてるの？

聡明は2ヶ月くらい前、実験室で火傷を負ってしまい、右手と瞼に包帯をして入院していた。

当然目が見える状態ではなくて、お見舞いにいった里奈は目が見えない彼にキスしてしまった。

それはそれは、大変な自己嫌悪に陥った。

聡明にばれていないことを幸いに立ち直ったといっても過言ではない。

が。
賢い聡明のこと、もしかしたらわかっているのかもしれない。
そんな考えに囚われはじめて、里奈はぞくりとする。
身体と心を硬くしながら、里奈は一刻も早く聡明が立ち去る時間になることを願った。

不安が飽和状態で、里奈はどうにもならない。

聡明が帰宅した後、なんとか気持を落ち着けようとお風呂にはいつたりもしてみたけれど、下手にリラックスしたら涙腺が急激にゆるくなったらしい。

涙がぼろぼろ止まらなくなつて、なんであんなことをしちゃったんだろうと、自分を責めまくる。

恥ずかしい、後ろめたい、キスしたつてことばれてるつてことは、好きだつてこともばれてるはず。

絶対になわなないから、わかってるから、この気持ちだけは悟られちゃダメなのに。

「死んじやいたい……」

事実でそうすることはありえなくても、気持だけは相当本気で、深刻だ。

過干渉ぎみの母親にばれないように涙を隠しながら、2階の自分の部屋に向い、里奈はいよいよバスタオルで顔を覆う。

机に座つて、里奈は泣きすぎて赤くなつた鼻を押さえながら、頭に思い浮かべた人に自分で嫌になつた。

でも、あの人はやさしく言った。

「なにかあつたら相談してね」

それに聡明のことを誰よりも良くわかつてるしキスしちゃった現場を押さえられているから話も早い。

誰かに訴えたかつた。

今より楽になれる方法はそれしかないように思えた。

でも、デンワをかける決心がつくまで、かなりの時間を必要とした。

「え？ 里奈ちゃん？」

浜崎佳乃は受話器の向こうで、意外そうに言った後、嬉しそうな声で続けた。

「どうしたの？ 久し振りね、元気？」

受話器を握ったまま、里奈は返事をする事ができなかった。

だって、涙があふれるわ、鼻水はあふれるわ、しゃくり上げそうで呼吸困難になっているわで。

里奈が鼻をすすったところで、なにやら不穏なものを察したらしい、佳乃がおそろおそろ言った。

「元気じゃ……なさそうだね」

うんうん、と里奈は頷く。

「うっ、ごめんなさっ、突然っ」

やっとの思いで口にした言葉がこんなもん。自分でも絶望しているというのに。ロクに口もきかずに可愛くない態度を通した生徒の里奈に対して、佳乃は優しく語りかける。

「大丈夫だよ。とにかく、落ちっこうね。大丈夫、わたしならどうせ暇人だし、なんでも聞かし、秘密は厳守するし。大丈夫、泣かないで里奈ちゃん」

里奈の部屋には電話がないので、電話をかける時は玄関の前の親機か、キッチンの子機1号か、両親の寝室にある子機2号かになる。子機2号を自分の部屋に持ち込んだ里奈は、ベッドにもぐりこんでくすくすんと泣きつづけた。

佳乃はそんな里奈に柔らかい沈黙をくれて、涙をそっと沈めてくれる。

「好きなこと聡明にばれたら生きていられない。聡明は絶対にあたしのこと好きになってくれないのに。ばれちゃってるみたい……どうしよう」

はじめて、誰かに口にした聡明への想い。

それが佳乃であることがとても不思議な気がする。

全てをわかっているのか、佳乃はこんな風に言った。

「切ないね」

しみじみと言うから、里奈は瞬きを一つして、受話器を見つめた。

「聡明を好きになっちゃうと切ないことばかりね。ホント、切ないよね」

へたに慰めるわけでもなく、佳乃はため息混じりに続ける。

「ごめんね、気のきいたこと言えなくて。でも、里奈ちゃんの今の気持ちすごくわかる、わかっちゃうって仕方ないよ」

受話器を握ったまま、眠ったらしい。

気がつく朝だった。

耳にあてて確かめると、電話は繋がっていなくてほっとする。

佳乃にいろいろ泣きついたことが照れくさかったけれど、ちょっとだけ浮上した。

いろんなことがあっても、どんなに泣いても、朝は来てしまうものなんだなあ。

大泣きした後の目の腫れさえなければ、もう少し元気にもなれるんだだけ。

ベッドから降りて溜息をつく。

覗いた鏡には、別人のように目を腫らした里奈がいた。

朝食の時間が気まずいのは、里奈の顔のせい。

母親も父親も、地雷であるかのように里奈の顔をちらちらと見ながらも触れようとしない。

でも、父親が里奈よりも早く出勤してからが大変だった。

母親のなぜなぜ攻撃が始まった。

「どうしたの里奈ちゃん、その顔？ 泣いたの？ なんで？ ママに話してくれる？」

うんざり。

里奈は露骨に嫌な顔を試みせた。

自分のおかあさんの善良過ぎるところが嫌いといったら、贅沢だろうか。

「娘を想うお母さんとして当然」という正論で迫ってくるから、反抗すると里奈のほうが悪いことをしているような気持になるからだ。でも、17歳にもなると、あしらすことも少々はできる。

「ごめんねママ。なんでもない。ママに心配かけちゃってごめんね」

「でも、そんな泣きはらした顔して」

「ごめんね、大丈夫だから見守ってて」

それ以上言ったら、切れますよ。

無言の圧力を発したつもりだが、通じただろうか。

母親は不満そうに口をすぼめながら、言った。

「登校までに目を冷やしてみたら？」

電車にのって、奈津美に会った時、とても驚かれた。

教室に入って、みんなに言われた。

スゴイ顔だと。

結構傷つきながらも、里奈はへへへと苦笑い。

あんな大シヨツクを受けながら、こうして学校に来てるんだから、案外凶太くできてるのかもしれない。

死んでしまいたいと思ってしまった昨日が恥ずかしく思える。

だって、こうやって登校して授業を受けているわけだからさ。

放課後がやってくる頃にはなんとか驚かれない程度に腫れが引いた。

それでもはじめて見た場合は、かなりびっくりするらしい。

教室のゴミ捨て当番なので、よっこらせとゴミ箱を抱えて歩いていたら、ジャージ姿の英彰にばったり。

部活に行く途中らしく、何気にバスケットボールのタンクトップをTシャツに重ねている。

里奈を見て浮かんだ笑顔らしきものが、怪訝そうな表情とともに消えてゆく。

「どうしたんだそれ」

ゴミ箱を抱えたまま里奈はダンマリを決めこむ。

英彰は腕を組んで、里奈の前に立つと首を傾げるように顔をのぞき込んで来る。

そんな英彰から逃げるようにして、里奈が背をむけると、バスケット部員らしい機敏な動きで逆サイドから覗きこんできた。

「やめてって言うてるでしょ!!!」

「すげえ顔……いて！」

無言で英彰のスネに蹴りを入れる。英彰は顔をしかめながらも、手を伸ばしてきて、こんなことを言う。

「ゴミ箱貸せよ、持ってやるよ」

「いいよ」

「いいから」

軽々とゴミ箱を抱えてすたすた歩き始める英彰の後を、溜息をつきながら里奈はついて歩く。

ゴミを英彰に捨ててもらった後で、焼却炉の階段の下で待っている里奈を、入れ違いにやってきた2年生の緑のリボンをつけた女子生徒がじろりと見た。

英彰が降りてくると、

「先輩、今日は」

なんて愛想よく頭を下げている。

英彰は見覚えがない後輩なのか、意外とそっけなく頷いただけで通り過ぎる。

ゴミ箱を里奈の前に置いた後で、ガッタンという激しくコケタであ

ろろ音を聞いて、ビクツとして振り返る。

まともに見ていた里奈も言葉を失う程に見事な転びっぷりだった。小柄な少女だから、ゴミ箱の大きさに前が見えなかったのだろう。階段に躓いて、つんのめっている。

ぷつと笑ってしまった後で、英彰は顔をなんとか引き締めて、後を戻っていく。

「大丈夫かよ？」

階段でへたり込んでいる女の子の前からゴミ箱を起こして抱えあげると、焼却炉の中にゴミを捨てた。

「すみません、真崎先輩」

恥ずかしくて仕方ないという風情で、俯いたまま身体を起こす女の子。

彼女の前にゴミ箱を置いて、英彰はとうとう我慢できなくなったのか笑いながら言った。

「下までおろしてやろうか？」

「え？ でも、そんなこと先輩にさせられないです」

「そんじゃ、ココで置いてく？」

「あ…」

恐縮しまくっていた彼女も、英彰の目が笑って入るのを見てからかわれていることに気がついたらしい。

嬉しさと戸惑いを半分にしたようなはにかみ具合で黙りこくってしまっ。

英彰はくすくす笑いながらゴミ箱を抱えたまま階段を降りて、そしてそれを置くと、とても自然に里奈の持っているゴミ箱に手を伸ばす。

「いいよわたしは」

あなたの背後からの視線が痛い&怖い。

へたに敵を作りたくないの、という意識で里奈が断ったというのに。

英彰はどうにもツボにはまっているらしく、くすくす笑いをやめず

に、陽気に里奈に言う。

「いいからかせよ。教室まで持ってってやるよ」

「真崎、いいってば」

小声での抗議は無視された。

「部活、遅れるよ。どっち行くのよ、校舎と反対方向じゃない！」

「

文句を言いながらも、里奈は先刻の女の子が立ち止まったまま、英彰を見ていることに気になって、落ちつかない。

そんなことを知ってか知らずか英彰はゴミ箱を抱えたまま歩いて行く。

「あんだねー、うちのクラスゴミ箱がなくて困っちゃうでしょう？」

「いいじゃん、困らせておけば」

「他人事だと思つてさ」

焼却炉のある場所から少し歩くと、校舎の裏になり、ちょっとした庭園になっている。

桜の花びらも散ってしまったって、葉桜とも言えない様相に寂しくなつてしまった樹の元で英彰はゴミ箱を下ろした。

元々気けない場所、当然ながらこんな時間に誰かがいるわけもなく、里奈は居心地の悪さをしみじみと感じる。

「どうしてコンナトコに連れてくるの」

英彰は答えない。無言で樹の幹によりかかり、腕を組む。

「帰るよ、わたし。真崎だって部活……」

「3年の特権。遅刻しても誰も文句言わない」

「最低。あのねえ、わたし真崎と2人で見られるところ見られたくないんだ」

「なんで」

里奈は口籠もりながらも、答える。

「真崎はもてるからさ。さっきだって絶対に真崎のファン」

英彰は肩をすくめて、

「そういうの気にするんだ？」

「する。怖いもん」

「それじゃ、俺は高校在学中は彼女なんて作れないわけだ？」

「やめておいたほうが無難だよ」

「ふうーん」

なにを思ったのか英彰は笑い出して、前髪をふわりと揺らした。

「結構元氣じゃん」

「えー？」

英彰が手を伸ばしてくるので、一瞬ドキッとした。

けれど、その手はなぜか頭の上に。

ポンポンとなぜるように叩いてあっさりと引っ込んだ。

聡明と同じことをする。

驚いて英彰を見つめると、彼は優しく笑う。

ドキドキしてきた。

里奈はわずかに頬を染めて、俯いた。

はつきりと本当によくわかる。

真崎はわたしを特別扱いする。

そうされて、心地よいと思うのは女の子として当然の心理かもしれない。

でも。

好きなひとじゃない。

好きなひとにはならない。

好きになっちゃだめ。

「うちのガッコ、部活動にはムチャクチャ力いれてないからさ、5月の地区予選でたぶん俺引退なんだ」

「……バスケやめちゃうの？」

うん、と英彰は頷く。

「真崎って、レギュラーなの？」

英彰は笑ってうなずいた。

「うん、フォワードやってる」

「フォワード？」

「バスケって5人いるだろ？」

言いながら英彰は地面に足で五角形を書く。そして、1〜5の数字をふっていく。

「ココがゴールだとしたら、頂点にいるのが1番のポイントガードで、ゴール真下にいる4、5番の2人がセンターで、これも言い方がいろいろあるんだけど、俺はその真ん中。3番、スモールフォワード。サッカーのフォワードと同じような感じ」

「マイケル・ジョーダンと同じ？」

唯一知っているバスケットプレーヤーの名前を挙げてみた。すると、英彰は頭を振って、

「ジョーダンは……似たような場所にいるけど、こっち、2番。微妙に違うんだ。シューティング・ガードっていつてサインからでもアウトからでもシュートする」

へえ、と感心する里奈に英彰は俯いたまま言う。

眼鏡の縁を上げながら、低い声で。

「もうすぐ引退だから、1度くらい練習見に来ない？」

「え？」

「結構もギャラリイいるから、目立つことはないと思う。気が向いたら放課後でも……さ」

正直言えば、英彰がバスケをやっているところは興味がある。でも、行かないほうが無難だとも思う。

「真崎、背番号いくつ？」

「6番」

「レギュラーだって言ったじゃない？ バスケは5人なのに？」

「バスケは4番から始まるんだよ」

呆れたように英彰が言う。

眉を寄せながら里奈は負け惜しみ。

「体育の授業でしかやったことないんだもん、知らないよ」

せつかくそうして話をそらたのに、英彰はさらりと軌道修正する。
「待ってる」

そんな短い言葉で。

そして、ゴミ箱をもって歩き始める。

「そろそろ本格的にヤバイ時間」

いろいろ、物事が複雑になっていくような気がする。

聡明に相談したいけれど、今はダメ。

どう話せばいいかもよくわからないし。

聡明に気持がバレたかもしれないことの破壊力が少し減って、違
う悩みが訪れる。

どちらが重いかというと。

聡明が一番なのはわかっているのに、負けなくらいの重みがずっ
しりと英彰にもある。

それは友情がからんでいるからに他ならなくて、里奈はやっぱり溜
息をついてしまう。

どうしてだろう、佳乃には本当に素直になれない。

夕べのお礼とお詫びを言わなきゃと何度も迷いながら、やっとの思
いで彼女の携帯電話にかけると、佳乃はちよつと変だった。

いつものおっとりとしたところがない。

そればかりか里奈にため息混じりの弱音のようなものを吐く。

「安心して。聡明はバカだから」

「そうでしょうか？」

「うん……かなりのオオバカ。あんまりバカなもんで、辞書並みに
分厚くて硬い本で殴りつけちゃった」

へ？ と里奈は目を見開いた。

優しそうで、賢そうで、大人の落ちつきたっぷりといった風情の佳乃さんが？

聡明を本で殴りつけた？

佳乃は自分にいい聞かせるように言う。

「いいのよ、あんなサイテー男、ぶっ飛ばしても」

佳乃の呟きは元氣のないものだったけれど、里奈は素直にいいなあと思った。

里奈には絶対にできない。

聡明を殴りつけてしまうようなこと。

喧嘩なんて絶対にできない。

たぶん聡明は喧嘩なんてしてくれない。

不思議だけれども、この時里奈と佳乃は確かに同志だった。

同じ人間に恋している同志。

同じ人間のために溜息をついて、涙をこぼす同志。

佳乃は聡明を好きだとは明言していないけれど、里奈でもわかる。近くにすぎで片思いだというのは辛いよね。

友達として信頼されすぎているのも。

「浜崎先生」

「ん？」

「聡明はバカだとわたしも思います」

佳乃は少しの間後、軽く笑って、

「本当よね」

でも、好きだから困るんだ。

寝不足なこともあって、さすがにその日はよく眠れた。

ゴールデンウィーク前に行われる体育祭の準備がちらほらと始まった。

運動会といえば秋が定説だが、新しいクラスの親睦を高めるという建前のもと、進学校であるこの高校では3年生が受験期で忙しくなる前にさっさとやってしまおうらしい。

その代わり、秋には文化祭がある。

うっかり春と秋にわけてしまったものだから、普段の鬱憤もあつてか盛り上がる学校行事だ。

この時だけは仲間意識がやっぱり生まれる。しかも、学年対抗というわけではなくて、各学年のクラスごとにチームを作るから大変だ。例えば3-A、2-A、1-Aが一つのチームになって、A B C D Eの5チームの対抗戦だから白熱するのかもしれない。

さすがに中心は2年生。

3年生は半分ご隠居ぎみで、大ラスで盛り上がることは必死の組対抗の混合リレーの選手も1・2年生から選抜するのが殆どだ。

「去年は真崎が3人抜いて優勝したんだよね」

奈津美は無邪気にそんなコトを言う。

まったく、真崎のことならなんでもうっとりなんだからと里奈は苦笑交じり。

「今年はクラスが違うから、応援しづらいな」

「3年生だもん、リレーなんか出ないでしょう」

「えー？ 陸上部なんかより早いもん、出るよきつと」

面倒くさがりの真崎英彰が義務でもないのに出るものか。

去年だって陸上部員及び運動部員が乏しかったために、選手がなかなか決まらなくて、しかたなく2年の委員長だった自らが出場をきめたというだけの話だし。

そんなコトよりも、里奈は思い悩むことがある。
なので、奈津美の言葉も実は上の空だった。
今日は家教の日。

聡明がやってくる日。

聡明はいつも通りだった。

だから、里奈も努めて明るい顔をして、体育祭の話なんてしなかったりした。

「聡明、走るのはやかった？」

「それなりに。陸上やってたから」

「100m？」

「いや、走り高跳び。そんなことは、どーでもいい。問題集開きやがれがきんちよ」

その時、聡明が一瞬隙のない目をした。里奈は気がつかないほどの一瞬、なにかを思いついたみたいなの。

「ガキンチヨは薄情な生徒だよな」

「は？」

「俺が入院してた時も一回も見舞いに来てくんなかったろ？」

里奈はぎよっとする。

いいえ、お見舞いには行きました。

悲壮な覚悟でもって何って、あなたにキスしちゃいました。

……ってことはさ、あれ？

聡明は口許をすねたように尖らせて、

「入院中ってのは、マジでヒマなんだよ。やることもなくてさあ、目が見えなかったからテレビとか漫画読んでヒマ潰せるわけでもねえし、まして個室だったから、孤独だったね、俺は」

実際はそんなコトをばやくひまがない程に、ひっきりなしに誰かが訪れていた聡明の病室だ。もちろん里奈の知らないところではあるけれど。

「ごめん」

「アクシデントもいつぱいあったしよ」

「アクシデント？」

「ベットから降りたら右も左もわかんねえから、へたに動けねえし。いきなり手のひらにスライム乗せられたり、目が見えないことをいいことに俺はやら放題だったね。ムカツクのは、誰がやったかさっぱりわかんねえってことだよな」

そのアクシデントに、キスは含まれますか？

里奈が呆然としていると、聡明は手を叩いた。

「キスされちゃったりもしたな。ほら、そうちゃん、もてるから」

「う、うっそー、信じらんない」

ぎこちなくそんなコトを言ってみたものの、ギョギョギョツとして身体をすくめる里奈に、聡明は屈託なく笑った後、腕を組みながら冗談ぽく言った。

「いや、マジで。病室でさあ、一人でぼんやりしてたら、キスされたみたいなんだわ。で、俺としては、相手がわからないだけに不安なわけよ、オトコだったらどーしょーって、悩んでるんだよ」

聡明の言葉は少々白々しいこともなくはないが、当の里奈はそれどころではなくて、いろいろんなシヨックと安堵が押し寄せてきて、へたり込みそうだ。

とにかく、ばれてはいないらしい。

男だったらどーしょーには多少なりとも傷ついたが、そんなもん些細なことだ。

よ、よかったあ……。

気分が軽くなっちゃったので、里奈は元気に聡明の肩をばしばし叩いた。

「今度入院した時には、絶対にお見舞いに行つてあげてもよくなってよ。可愛い女子高生が」

「また入院しなきゃなんねえのか俺は」

「あ……」

「すみません、野々村先輩はいらっしゃいますか」

教室の入り口で礼儀正しくそう言ったのは、2 - Aのクラス委員だ。今回の体育祭でA組連合のまとめ役を担っている。

選抜種目の選手に目星をつけて、依頼して回るといふなかなか大変な仕事もあつたりで、去年、英彰と散々苦労したことを思い出した。

3年生に依頼する時はホントしんどかった。

「わたしだけど、なに？」

「えっと、さつき真崎先輩に用事があつて3 - Aに行ったら、いなくて。3 - Dの野々村先輩に訊けばすぐ見つかるって言われたんで」
里奈は目を半分にして、こめかみのあたりを押さえた。

「クラスが離れてあいつを探すことはないだろうと思ってたけど……」

…
里奈は壁にかかっている時計を見ながら、

「この時間なら屋上。いなかったら図書室。保健の先生がいない時は保健室」

2年生は怪訝そうな顔をして里奈にご質問。

「真崎先輩はそこでなにやってんですか？」

口で説明するよりは連れていってしまったほうが早い。

里奈は彼を手招きながら、教室を出た。

「寝てるの。あいつ、なにかと多忙だから睡眠時間足りないんじゃない？
ない？」

「睡眠時間足りなくなるほどなんかすることあるんですか？」

言われて里奈は首をひねった。

「さあ？ あのひとの頭の中はいまいちわかんないから。真崎にど

ういう用件？」

「体育祭のリレーのアンカーをお願いしようと思って。やっぱり真崎先輩より速い生徒はなかなかいないくて。A連執行委員全員の希望でもあるんです」

「難しいと思うけどな」

「えっ？」

「真崎、面倒くさがりだから。おいしいエサでもない」とついでにホンネが出てしまって、里奈ははっとする。

慌てて口を押さえても時すでに遅し。

ああ、同情するよ。

確かにわたしも去年大変苦労した。

でもさ、そんな子犬みたいな目ですぐらないでほしいの。

「3-Aのクラス委員は真崎になにも言っていないの？」

「あらかじめ断られたそうです。持病のヘルニアが痛いので、バスケット以外の運動は医者から禁止されてるって。嘘ですよね？」

あたりまえじゃなか、おばかちゃん。

選抜リレーの選手は放課後残って練習しなければならぬから、みんな嫌がるわけで。ただでさえ多忙な日々を送る英彰が快諾なんてするはずがない。

ニブイ頭痛のようなものを感じながらも、里奈は心を鬼にしてきっぱりと言った。

「ごめんね、わたしは協力できない。真崎に出場されたらD組連合には痛手になるわ。うちの2年生もがんばって走りまわってるから、裏切るようなことはできないの」

しゅんとされてしまったのはなんと胸が傷むけれど、こっちはだつて辛いのだ。

屋上についたところで、里奈は彼の背を押した。

「ほら、あそこにいるでしょう？寝てる時はちよつと不機嫌だから、あらっばい起こし方しないほうがいいと思う。がんばって」

「はい……」

そして、放課後になって、再びあの2-Aの委員長が教室の入り口に立った。

「野々村先輩はいらっしゃいますか？」

「副委員ちよー！」

お掃除を終えてモップを片付けていた里奈は、呼ばれた声に降りかえって、2-Aの委員長を発見。目を半分にした。

相手は大変弱りきった様子で、里奈を見下ろしている。

「どうしたの？」

「イヤ、真崎先輩なんですけど」

「真崎がどうしたの？ リレー出てくれるの？」

「いや、あの、それが」

「？」

彼はあたりを憚るように声のトーンを落として言った。

「野々村先輩が今週の日曜日にバスケット部の練習を見に来てくれたら考えてもいいっていうんです」

「なに？！」

あの、バカタレー！！

「お願いしますう、こんなことを頼んだってことも絶対に他言するなって言われてるんで、噂になっただけでもダメだとか言われちゃってるんで、絶対にばらしませんから。野々村先輩！」

土下座でもしそうな勢いなので、里奈は半分呆れながら、

「考えるって言ったんでしょ？ あいつの考えるってというのは本当に考えるってだけよ」

えっ？ と彼の表情が滑り落ちて真っ白になった。さらに事の次第を飲みこむうちに、青くなっていた。

里奈は深呼吸してから唇を引き結んだ。

「サイテーのからかい方して、全くあいつは！ おいで、文句言っ
てあげる」

「え？ 別に文句はいいんですけど」

「自分も去年苦労したんだから、少しくらい助けてあげればいいのに！！！」

去年、散々探して歩いたせいで英彰の行動パターンを知り尽くしている自分が嫌。

この時間は部活に行く直前のはず。まだ教室にいと見た。

里奈は3・Aの教室に顔を出して、英彰を探した。

英彰はクラスの女子と和やかに歓談中。

その光景もちよつとむつと来たが、そんなことはどうでもいい。

「真崎！」

英彰が一瞬驚いたように首をひねってきた。

そして里奈を見ると、やっぱり来たかと言わんばかりににやりと笑う。

廊下に出てきて、真つ先に言うことにや。

「どうしたの？ 怖い顔してさ」

「あなたねー。いい加減にしなさいよ！」

英彰は里奈のことをのらりくらりとからかった後で、思い出したように2・Aの委員長を見て、

「1年の村山つてヤツに出ろつて言っておいたから行ってみな。バスケ部に入部したばかりの1年なんだけど100m12秒台で走つてたから充分だろ」

「え？」

「3年に逆らう無謀なバスケ部員はいないから、即答で快諾するはず」

言うだけ言つて、真崎が背を向けようとする。

が、ワザとらしく大袈裟に振りかえつて、里奈を見て、

「日曜、来る？」

里奈は無言で英彰を睨みつけた。

英彰は肩をすくめる。

「あ、ありがとうございますー！」

深く頭を下げる後輩に、真崎はかるく頷いただけで教室に戻ってしまった。

里奈はそんな英彰の背中に向かって舌を出した。

キーザー！ ええかつこしい。

「真崎先輩つて、いい人ですよね〜」

しみじみと隣で言うから、里奈は呆れて言葉が出ない。

からかわれたこと忘れちゃってるのか、君は？

真崎のバカやろつ。

いたいけな2年生まきこんで人のこと、からかいやがって。

里奈のノートを覗きこみ、聡明は眉をひそめる。

彼の右手は一瞬、愛のポカリをしようと浮いたものの、思いなおしたらしい。

そして、改めてふてくされている里奈の顔を見て、聡明ががっくりと肩を落として溜息をつく。

「野々村里奈」

「はい？」

「おまえは、俺をセンセと思ってない節が多すぎることはわかりきってるけども」

「なによう」

「俺はこの証明問題をなんとかせえと言ったんだ。なんだ、このマサキのええかつこしいつーのはよ」

はっ、と里奈はノートを見つめる。

数学のノートのはずなのに、バカとか、タコとか、ムカツクとか書きなぐつてある。

一瞬、赤面して、ノートをがばつと閉じた里奈に、聡明はなにやら意味ありげな忍び笑い。

「マサキつてのはさー、真崎英彰くんかよ？ おい」

「そうだけど、なんでそんな力オして言うわけ?! ほっそーい目がなくなっちゃってるじゃん!! やーらしい、やーらしいっ、スケベー!!」

「顔はどうにもならんよ」

「自分でよくわかってるんじゃ……イタイ」

聡明は拳を固めて、里奈の頭をぽかりとやった。

「おまえみてーな、可愛くねえ小生意気な今時のガキンチョも、アカンボのころはあつたんだよな……」

「なによ突然」

聡明は穏やかな顔で軽く笑う。里奈の頭に手を置いて、ぽんぽんとする。

「何があつたのか知らんけど、いい子でおべんきょーして頂戴」

「はぁーい」

ぽんぽんとされたところをなぜながら、里奈はもつと甘えてしまったい衝動と戦う。

哀しいかな、片想い。

この人はずっとこんな調子なんだろうな……。

ふと、予感のようにそんなことを思った。

朝だというのに下駄箱前の空気がいまいち重い。

なんだろうとその原因たる人垣をのぞきこむと、その中心にいるのは英彰だった。

数人の女の子にすっかり取り囲まれてしまった英彰は、下駄箱に背中を預けるように寄りかかり、腕を組んでいた。

その中でもショートカットで姉御肌の少女が、正面からなにかを訴えるように話している。英彰はそんな彼女たちをうんざりとした目で見おろして、口は閉じたまま。

大勢の生徒たちは、そんなやりとりを好奇心いっぱい目で眺めながら通りすぎて行く。

その中には足を止めて、遠巻きから見物している生徒もいる。事態はなんとも物騒というか、なんというか。

なんでこんなことになってるんだろ。真崎の奴、なにやったのよ。辺りを見まわして里奈はバスケット部の男子生徒を発見。背後からこっそり尋ねた。

彼は石河俊信という。たしか英彰とはクラスも同じだった。英彰と昔から一番親しくしているので、なんとなく付き合いで待たされてしまっているらしい。

「真崎、どうしたの？」

「マサキファンクラブが抗議してるらしい」
目を丸くして里奈は首をひねる。

「本当にあるわけ？ あいつのファンクラブって」

「ああ、部活やってる時なんか大挙して見に来てるよ。会長が卒業したから、勢いは落ちてるらしいけど」

「なにしてんの、そのファンクラブが」

「真崎に噂を確かめにきたって言って、がんばってんだよ」
「噂？」

「真崎に大学生の彼女がいるのは本当かって言った。バカだよなあ。昇降口でやるなって感じ？ マサキも逃げちまえばいいのにな。ヘンなトコで短気だからあいつ。怒鳴りつけたりしなきゃいいけど」
悪態交じりの言葉に、正直、ドキッとした。

真崎に大学生の彼女なんて、いるわけないじゃん。
全くの誤解だ。

もしかするとその大学生は里奈のことかも知れない。

それを思った時一気に青ざめた。

そんなコトを以前に言われたことがある。

英彰の従姉弟である、とてもキレイな先輩に。

そんなこんなで背筋を冷やしていたら、背後から制服の上着を掴ま

れた。

「里奈あ」

振りかえると、奈津美が泣きそうな顔で立っていた。とっさに奈津美の肩をなだめるように抱いて、里奈は英彰に視線を送った。

英彰の表情は明らかに、不機嫌。

「あんな、俺はただの一般生徒で誰にも干渉されずに高校生活を送る権利があると思うんだけど」

そんな英彰の冷やかな言葉にも敵は負けていない。

里奈はその姿に見覚えがあった。

隣クラスの女子生徒だ。奥澤いずみとか言ってたっけ。

昔から真崎のことが好きなんだと公言して憚らず、以前に何度か告白して断られているという噂を聞いたことがある。度胸が据わっているというか、気が強いと言うか。

「校内にヘンな噂が立つと困るんだよね、後輩なだめるのも大変なんだから」

「大変つて……なにを証拠に。大学生つてどこから出てきたんだよ」「春休みに見たって報告があったのよ。英彰くんが毎日のように図書館で勉強した後、女の人とコーヒー飲んでたつて。たまに二人で買い物に行つて、荷物持ちみたいにその女の買った袋持つて歩いてたつて」

「げっ。」

「やっぱわたしのことじゃん?!」
血の気が引いてしまった里奈同様、さすがの英彰も驚いたらしい。春休みの行動をズバリ言われて、英彰は一瞬絶句。それから赤面しながらも、狼狽を隠そうと表情を引き締めた。

「報告?」

「英彰くんが部活を終えた後、追っかけやってみたみたい。やめなつて言つておいたから、もうそんな事しないと思うけど」

「追っかけ?」

呆れたように英彰が言う。

「はつきり言って迷惑だよ。俺がなにしようが、誰の荷物持ちしようが文句言われる筋合いはないし、日常を誰かに見られてると思うとぞっとする」

英彰の声が低くなっているにも関わらず、奥澤いずみはひるむことがない。

「付き合ってる人がいるなら、そう言ってよ。わたしからみんなに邪魔しないように見守ろうって説得するから、ね？」

ね？ で、周囲の少女たちに同意を求めると、それぞれに頷いたり、俯いたり。

英彰はいよいよ呆れたように溜息をついた。

「わかんないヤツだな、放っておいてくれって言ってるんだよ」

「英彰くん、誰かとまではきかないから。ヘンな噂のおかげで悩んでるのよみんな」

やばい、と思う。

英彰の目つきがとてもやばい。

里奈はそんな目をした時の英彰に何度か遭遇したことがある。

クリスマスに聡明の前で暴言を吐いた時と、生物室で告白された時だ。

里奈は拳を固めた。

クラスも違うし、過去の委員長&副委員長コンビのような大義名分はないけれど、こーゆー時にしゃしゃりでなくて、いつ出るとゆーのだ。

里奈は奈津美の肩から腕を外した。奈津美が驚いたように里奈を見る。

「里奈?!」

「あたし、副委員長だからさ」

英彰とはクラスは違っているところが、勘違いっぽいのはこの際無視する。

里奈は1歩、前に歩み出そうとしたとき、肩を掴まれた。

かわりのように石河が口を開いた。

「マサキ、いい加減にしねえと遅刻すつぞ」

英彰が顔を向けてきた。石河が目配せをすると、軽く頷いてみせたりした。

「うるさい、石河は黙っててよ!!」

「おまえが黙れよ」

英彰に睨まれて1度は口を噤んだものの、奥澤いずみは怯まなかった。

「わたしだって悪いとは思うけど、仕方ないじゃない!」

彼女の背後にいる後輩たちが顔を見合わせる。きつと頼られてしまったのだろう。

だけど、石河くんにはヤツあたりするのはいただけない。

とうとう里奈も口を開いてしまった。

「悪いと思ったら、自分の教室に帰ったほうがいいと思う。こんなことしたらマサキだってみんなの不評を買うし」

里奈に言われて、彼女ははじめてあたりを見回した。

そうして、しらけた目で見られていることを察して、唇を噛んだ。

「ごめん、ね」

つぶやくように英彰に言っつて、背中をむける。

彼女の後に続く少女達が早足に教室を出て行くのを眺めていたら、英彰が何事もなかったかのように下駄箱から身体を起こし、歩み寄ってきた。かといって立ち止まるわけでもなく、ただ、すれ違いざまに里奈の肩にポンと手を置いて、視線を合わせることもせずニヤンキュと小さくつぶやいた。

英彰と石河が並んで歩き出すと、どこからわいたのかバスケット部の面々が集まってきた。なんだかんだと心配していたのか、からかうためか、見物していたらしい。

英彰はその輪の中に混ざった。石河が英彰の背中を叩いて、まず一言。

「マサキー、なんだよ、あれ? いい加減にしてくれよ、俺もうや

だぞ」

「ゴメン、ホント、ゴメン」

「んなことより、大学生の彼女ってなんだよお、おおおおーい！」
「しらねえよ」

頭を小突かれまくっている英彰の様子にほっとした時、奈津美が里奈に言った。

「里奈、ひどいよ」

「え？」

「あんな言い方しなくてもいいじゃない。奥澤さんすごく恥ずかしい思いしたよきつと」

「でも、ああ言わなきゃ……石河くんがさ……」

奈津美にしては攻撃的な態度に里奈は目を丸くした。

唇を尖らせて、奈津美は言う。

「確かに常識は外れてるけど、あの噂で悩んだりした子いっぱいいるんだよきつと。奥澤さんだって絶対に悩んでたと思うよ。里奈はわかってない。同じ女のこなんだから気持察してあげなよ」

ずしんときた。

思ってもみない方向から切り込まれて、油断をしまくっていただけにかかり傷ついた。

なのに奈津美はさらに言った。

「副委員長ってそんなにえらいの？」

翌日に控えた体育祭の準備が始まっているらしい。各クラスの体育委員が中心になって校庭にラインを引いている。

里奈もクラス委員なので、そろそろ顔を出さなければなあと思いつながら、教室のベランダに奈津美と並んでぼんやりしていた。

今朝、奈津美に「副委員長ってそんなにえらいの？」と言われてしまつてへこんでいたら、放課後になって、奈津美のほうから謝ってきた。

そんな事情もあって、友達を優先して、里奈は役目をサボっている。
「4月にこんなことやってるの、うちの高校くらいだよ。やって
もせいぜい球技大会だよー」

「うん……」

騎馬戦とか棒倒しとか、男子はいろいろと激しい競技がある。

しかし、女子にもあるんだ、伝統の格闘技が。

「タイヤ引きって、格闘技だよー」

奈津美が言う。

里奈は頷いた。

校庭の中央に詰まれた自動車のタイヤを2チームに分かれて奪い合
うという実に単純なものだが、シンプルゆえに激しくもある。

1年から3年まで入り乱れての大混戦だからなおさらに。

「創作ダンスとかないだけましかな」

「確かにねー」

「最後の体育祭だね。進学してからはさすがにないよね」

「たぶんね……」

自分の言葉に返事をするだけの里奈を、奈津美はのぞき込むように
じっと見つめた。

視線に気がついた里奈が首をわずかに傾げると、奈津美は半分すね
た顔でこんなことを言った。

「いいなあ、里奈は」

「えー？」

「真崎と仲良くてさ。わたしなんか里奈と仲良しじゃなかったら絶
対に名前もおぼえてもらってないよ」

「……真崎ってさ、そんなにカッコイイ？」

いやにあっさりと奈津美は頷く。

「うん」

「具体的に言うところか？」

「顔」

「それだけ？」

「背が高くて、足が長くて、頭だつていいし。性格もいいっていうか、猫みたいな感じなの」

「猫？」

奈津美ははにかむように微笑んで、頷いた。

「わたしなんかにはさ、すごくそっけないのに、友達といる時なんかすごく楽しそうに笑つてるでしょ？ 少年っぽく。そういうの、なんかいいんだ」

「よく見てるね……」

感嘆をこめて里奈は言った。

好きな人のことはどうしても知りたいし、見つめていたいよね。すぐくわかる。

ごめんねって思つちゃうのはやっぱり高飛車かな。

奈津美のほづがいい子なのに、奈津美のほづが真崎のこと真剣に想つてるのに。

「里奈がうらやましいな。わたしも廊下とかで声をかけられてみたいよ」

もう、里奈はなにも言う事ができない。

できるのは伏目がちに視線を落として、口許を引き結ぶだけ。それだけ。

はつきり振つちゃえばいいのよ。

そうすればきつとすごく楽しんだ、わたしは。

でも、ここのところ真崎英彰と話したりするのは、なんだか楽しかったりもする。

頭にきたり、そんなコトばかりだけど、どうしてか。

廊下で会うと、話しかけてくれる事を期待してる。

心のどこかでそう感じている自分がいて、里奈は戸惑う。

そんな時に浮かぶのは聡明で、そうすると、きゅっと胸が痛くなっ
て。
思い出すだけで胸が痛くなるような、そんな想いがあるのに、どう
してふらふらしちゃうんだろう。

大嫌いだって、あんなにも大嫌いだって思ってたのに。

毎年、体育祭当日になると里奈の母親が騒ぐ。

「ママ、行かなくていいの？ お弁当を持って行かなくていいの？」
ママ、ごめんね。娘が高校生にもなってお弁当を持って応援に来てる人は誰もいません。

行きたくてうずうずしているんだろうなあ……。

父親がダイニングのテーブルで新聞を読むのをやめて、嬉しそうに言った。

「お、今日はポニーテールか」

「うん、体育祭だから。みつあみでもいいんだけど。偶にはね」

「かわいい、かわいい」

「……パパに言われると、恥ずかしい」

「えっ？」

「里奈ちゃん、遅刻するわよ」

「あ、ホントだ」

バッグを抱えて里奈は小走り。

「いつてきまーす」

「英ちゃんの走るところ見たいなあ」

英彰の母親がポツリと呟く。

英彰は玄関でスニーカーを履きながら、そっけなく言った。

「今から駅まで走っていくから、それ見れば」

ぱしっと、母は英彰の背を叩いた。

唇がすねている。

「英ちゃんの最後の運動会なのよ」

「だからなんだっての。運動会じゃなくて、体育祭。ギャラリーなんていないよ高校生にもなって。第一店休めないでしょ。」
ドアを開けて出ていこうとする英彰の背中に、興奮ぎみの母親が言う。

「英ちゃん、行ってきますは?!」

「いーってきます」

やる気のなさそうなめんどくさそうなご挨拶に、母親はますます唇を尖らせる。

そんなこんなで体育祭だ。

お空は哀しいかな、透けるような青空、まさにピーカン。

そんな体育祭日和の朝、D組連合は1年生から3年生まで同じ場所に集まっていた。

イザ、始まってしまえば盛り上がる盛り上がる。

ご隠居したはずの3年生が受験勉強のストレス発散とばかりに、一番元気だったりして、異常な空気が生まれちゃってるし。

後輩達に過激なハツパをかけたたりして、ちよつと物騒だ。

里奈は結構流されやすいタイプなので、まわりが盛り上がれば、自然と盛り上がる。

「うー、うち3位か」

「1位がE連合、2位がA連合、妥当なトコだね」

なんて奈津美のほうが冷静だし。

里奈は拳を固めて、クラスの委員長の所まで走って行った。

「大野 つ!!!」

今度の相方は英彰と違って、探さなくてもちゃんとどこかにいてくれる。

大野と呼ばれたクラス委員長はノリノリなご様子で額にはちまきを締めて、ロングヘアをきりりと一つにまとめていた。

まだ4月だというのにジャージを脱いで、半袖短パンのお姿。

キレイなおみ足を惜しげもなくさらしていらっしやる。

その姿に一瞬びびったが、彼女の性格があっばれなことは3年間同じクラスだった事もありで、1年生の時から承知している。校内全クラスで女子の委員長&副委員長コンビは里奈たちだけだが、なんの、男なんぞに負けていられるか。

「野々村も学校ジャージ脱いで！ 気合が足りないわ！」

「なんでそうなるかな。それより総合でうち3位だよ。最上級生として士気を高めるべく演説の一つもやっておいたほうがいいと思うんだけど？」

「もちろんそのつもりだったわ。あんたって、つくづく参謀タイプよね。よく気がつくつたら」

それから大野こと、大野涼子委員長は各運動部のキャプテンや応援団長などを引き連れて、各学年のD組の生徒たちの前でジャンヌダルクよろしく演説をぶっこいた。

普段は冷めている今時の高校生達も、すっかりその気になってくるから大野涼子は恐ろしい。

「めざせ、優勝！！」

「おー！！！」

「準優勝は敗北だと思えー！！ そのほか何ぞはもつてのほかだ！！！」

後で冷静になった時、盛り上がって「おー！！」なんて言っちゃったことを恥ずかしいと思うんだろうな、みんな。

里奈は一応回りにあわせて拳をあげながら、首を傾げる。

しっかりジャージは上下脱がされて、寒いくらいだ。

石河が目を半分にしながら言った。

「……Dの大野がアジリはじめやがったな」

「あいつはいまいち正体がわからん」

A組の座席から英彰はぼやいて、かしゃと切られたカメラのシャッ

ターの音に眉をひそめた。

「真崎先輩、もう一枚お願いしまーす」

「またおまえか」

「小関君って呼んでください。新聞部の真崎先輩担当なんですから同じ場所にいることをいいことに接近してきた2年生の男子。」

行事となると、英彰の所にちよろちよる現われて写真を撮っている。自然と名前と顔を覚えてしまっていた。

何人もの女の子達に隠し撮りされていることに気がついてむっとしていた英彰も、小関と名乗る男子生徒に堂々と来られると気が抜けて、ノンビリと尋ねた。

「俺の写真、焼き増ししたのでいくらになっただ？」

「250〜500円くらいですよ。どうしても隠し撮りじゃ遠目からになりますからね、先輩のアップは売れますよ」

「あこぎなコトやってんじゃねえよ」

「なんならモデル料払いますか？ポーズでもつけてもらえるとはずみまずけど」

「考えとく。とにかく今は撮るな。うっとおしい」

新聞部のお仕事にも裏と表があつて、彼は裏の仕事に勤しんでいる。表写真は校内新聞を華々しく彩り、裏写真は新聞部の部室にてアイドルの生写真よろしく販売される。新聞部の裏稼業として、暗黙の了解として成り立つ商売である。裏とはいえ18禁ものは厳禁。そこまでくるとケーサツ沙汰になっちゃうし、撮られた生徒のほうが気の毒だから、次から商売が成り立たなくなる。

しかし、裏の裏では何かがあるかわからず、実に不透明だ。

「先輩、表バージョンでいいの撮りましたけど」

「はー？」

小関はデジタルカメラもご携帯。

ディスプレイに出された姿を見て、英彰は口許を歪めた。

「生足が見られる下バージョンもありますよ。カレンダーでも作ってあげましようか？」

「いらねえよ、バカ」

小関は笑いながら、スイッチをオフにする。

野々村里奈がグラウンドに腰をおろして、ジャージを脱いでいるところ。

襟がポニーテールが引っかかって痛かったらしく、片目を閉じている。

英彰は言った。

「そんなん表でも裏でも出しやがったら、ぶっ殺すからな」

「真崎先輩ってわっかかりやすうーい」

小関のアホウが逃げるように走り去った後、ずっと地蔵のように黙っていた石河が英彰をまじまじと見つめて、

「おまえ、マジでわかりやすいよな」

「うーるーせーえ」

午前中のハイライトは女子によるタイヤ引き。

チームは5つ、タイヤは60個、中央に積んである。

それをめがけて300人余りの女子が乱闘戦を繰り広げるわけで、まさに異種格闘技、無差別級3本勝負。

「怖い。なんで、全員参加なの？」

「競技が単純だからだよ」

怯える奈津美を励ますように、里奈は言った。

競技開始のピストルの音の後、きゃー！ と奇声があがって突撃開始。

足の速い生徒がタイヤの山に飛びついて一気に昇って、片っ端から自分のチーム方向に放り投げる。

トロイ奈津美は見捨てて、里奈はせっせと投げられたタイヤを掴ん

で引つ張った。

なんせタイヤを掴める確率は60/300もつとわかりやすくすれば、1/5。

この一個だつて貴重だ、絶対に離すもんか、と思つたら。

反対側に見たことのある女の子がしがみついていた。

名前は思い出せないけど、憶えてる。誰だっけと思つた瞬間、相手が叫んだ。

「あんななんかドイツキライよ!!」

「なッ……」

面と向かつていきなり脈絡も無くそんなコトを叫ばれて、里奈は絶句しながらも、頭に血が昇ってきてタイヤにしがみついた。

「大嫌いで結構よ!! なんだかわかんないけど、離せっ!!」

「ちよつと可愛いからつて 図にのるな、ブス!」

「なににい?!」

と、叫んだら、どこからかスニーカーが飛んできて、里奈の顔にすつこーんと当たつて落ちた。左目の下のあたりがずきずきする。

「誰だ、投げたの!」

味方の誰かが叫ぶ。

目から星が出るかと思つたが、代わりに出たのは痛みで涙。しかし、当たつた左目を押さえればタイヤから手を離すことになる。できない、やったら今までの苦労が水の泡。そんなの絶対嫌だつ。

こんな風に取りあいになると、野球の乱闘よろしく、助っ人がわらわらと現われる。

気がつくと、取り合つていた相手に味方がついていて、多数に無勢、里奈は引きずられて、片目から涙をこぼしながらも必死でタイヤにしがみつく。

「しぶといなあっ」

髪を引つ張られ、里奈はたまらず悲鳴をあげた。

「いたっ!」

ちくしょう、ポニーテールになんかしてくるんじゃないなかつた!

歯を食いしばってタイヤにしがみつき直したら、足を踏まれるわ、蹴られるわ。

これは1対1の勝負じゃない、敵は複数。こうなったら意地だ、絶対に放すもんか。里奈は叫んだ。

「誰でもいいから、助けにこーい！」

「今行く！」

「野々村、死んでも離すんじゃないわよ！」

「ムチャ言つな　！！！」

「里奈、どーしたのよその目?!」

いやそのつ、と、やっていたら、またスニーカーが飛んできた。

「真崎先輩に馴れ馴れしくして、むかつくんだよッ！」

「英彰くんが、嫌がつてるのわかんないわけ?!」

スニーカーが当たったのは額の上のあたり。目よりはましだが、やっぱり痛い。しかし、同時に投げつけられた言葉に里奈は耳を疑った。

真崎い〜?!　やっぱりあいつがらみのこーゆーわけか!

怒りで言葉が出ない里奈の代わりにように、味方の誰かが怒鳴り返した。

「私情挟むんじゃないよ、学校行事に！」

味方がわらわらと来てくれたので、情勢はこちらに傾きつつある。

こんなときに手を離れたら、それこそ命にかかわる。絶対に放すもんか。なんだかもうてんやわんやだ。

「悔しかったら、真崎に名前覚えられてみな!!!」

「3年だからっていい気になるな!!!」

「それがどうした、バーカッ」

「どっちもうるさい、うるさいっ!　真崎なんかわたしとなんのかンケーもなーい!!!　スニーカー飛ばしたの誰だ　っ!!!」

砂埃舞う中、Dの陣地まで敵数名ごとタイヤを引っ張りこんで、その場に里奈はへたりながら叫んだ。

「両足裸足になってるの、誰だっ!!!」

すでに中央にあったタイヤの山はあとかたもない。あちこちで取りあいになって、まさに戦場のありさま。

女の戦いを遠巻きに戦々恐々眺めながら、男子生徒たちはひたすら野次る。

「こえーな、女は怖い」

午前中の競技は恐怖のタイヤ引きをもって終了。

昼食を取った後もしばらく痛みに耐えていたが、まわりから散々救護テントに行くことを勧められた。

養護教諭は里奈の顔を見て、まず絶句。それからたまらなそうに噴出した。

「派手にやったわねえ、冷やしておきなさい、目の下。痣になるかもしれないけど、すぐに消えるから、大丈夫」

いつの間にかすりむいていた肘にほんぽんと薬を塗ってくれて、麦茶を振舞ってくれた。

そんないきさつの元、救護テントの中ですっかりくつろいで里奈は速報で配られた各チームの獲得点数表を睨んでいる。

左目を濡れタオルで押さえながら、ふつふつと沸いてくる怒りと痛みに耐えながら。里奈の乱れたポニーテールを奈津美が丁寧に結いなおしてくれている。

しばらくして大野涼子が様子を見に来たのか姿をみせた。

「野々村、速報見た？」

「見てる。3位は変わらずかあ。みんながんばってるんだけどなあ」

「でも、追い上げてはいるよ。タイヤ引き優勝したし」

奈津美が里奈の髪をすきながらノンビリと言う横で、大野涼子委員長閣下が頭を抱えている。

「なんとか大ラスのリレーまでに点数つめとかなきゃと思ったんだ

けど、競技もそろそろ終盤よ」

「委員長、本気ね」

「これでリレーでビリにでもなりやがったら、魔法陣つくって呪ってやるわ」

「……あんだだと、本気でやりそうで怖いんだけど」

そんなことをぼそぼそと話していたら、なにやら背後が騒がしい。養護教諭が立ち上がった。

「やれやれ、忙しいなあ、次から次と」

担ぎこまれた1年生の男の子は里奈よりも重症だった。

なんと階段から落ちたというのだ。足首をぶつくりと腫らしている。いで、いいいいい!!」

悲鳴をあげる一年生をどなりとばして養護教諭は足首に湿布を巻きつける。

「医者につれて行ったほうがいいわね、これは」

「ええ ! ! ! ?」

本人含め、まわりにいた男子が驚愕の悲鳴をあげている。

「走ったりなんかは……しちゃだめですか?」

「なにを言ってるの。こんなに足を腫らしてどう走るっていうの。ぴしつとたしなめられて、全員揃って顔面蒼白。」

何事よ? と眺めていると、いよいよ沈痛な空気が漂って、彼らは顔を見合わせる。

「どーする、リレー」

「すみません、俺もっと上手く階段から転げればよかったです」

「なに言ってるんだよ」

怪我した当人は今にも泣きそうだ。

リレーの選手か、お気の毒だなあ。

里奈が同情をこめて眺めていると、なんと真崎英彰とバスケット部の3年生が姿を見せた。

「村上、階段から落とされたってマジか？」
落とされた？

物騒な台詞に里奈と奈津美は顔を見合わせた。
視線を落とし、怪我人村上少年は申し訳なさそうに頭を下げる。
英彰は黙ったままだ。

表情が硬いのは怒っていると見た。

「村上くん、怪我したの?!」

どこかで聞いたような大絶叫と共に現われたのは、いつぞやのおめでたい2 - Aの委員長。

気配り少年なのか、離れたところで麦茶を飲んでいる里奈を見つけ、ぺこりと頭を下げた。

そして、村上少年に心配を顔に書いて歩み寄る。

「走れない……ね、それは」

「すみません」

「仕方ないよ、こういうことは不可抗力だ」

「でも、リレー……」

2 Aの委員長は弱々しく笑いながら、それでも胸を叩いた。

「大丈夫、最後までに選手見つけるから。村上くんは責任なんか感じることはないよ。いざとなれば僕が走るから」

事前の選手集めにも苦労したのに、直前になって今更見つけられるものだろうか。

関わりがなかったわけでもない後輩のピンチに、里奈も気が気ではなくなってきた。

そんな時、今までむっつりと黙っていた英彰がぼそりと言うには。

「おまえ、足は速いのか？」

「いえ、僕はあんまり」

暗い顔で俯きながらの答えに、涼子が小声で、

「あんまりどころか、子供の3輪車の方が速そうよね」

「バカ」

里奈が小声でたしなめたあと、英彰が言った。

「それじゃ、俺の方が速いな」

「え？」

その場の視線が一斉に英彰に集まる。

ようやく思い出して、里奈はああと唸った。

村上つて、真崎が紹介したバスケ部の1年生だ。

だから真崎たちバスケ部がここにいるわけね。

1人で納得する里奈に涼子がなぜか肩をすくめる仕草。

「俺が走る。今すぐ登録の変更して」

英彰はかなり頭にきているのか、冷たい目で低い声。

反比例のように2・Aの委員長はぱつと笑顔で立ち上がった。

「はい！」

ばたばたと実に鈍行な走り、彼が消えた後、怪我人・村上少年に英彰が尋ねた。

「おまえを階段の上からどついたのは、誰かわかるか？」

「真崎、雪辱戦はやめような？ おまえは顔に似合わずホントすぐカツとくるからもー」

「村上、答える」

「ひーであき！」

お仲間がたしなめるのにも聞く耳もたずで、英彰は視線でまでも答えを促す。

「いや、マジでわかんなくて」

すると、付き添いだった少年が言った。

「はちまき、紫だったんですよね。それだけは見たんですけど。村上が落ちていくからこっちもあせっちゃって」

「紫って言うと、Eのヤツらか。英彰、顔が怖いよ。暴力は反対ね、試合出られなくなるから」

「誰も報復なんてしないよ。Eのヤツらに前を走らせないだけだ」

「おお」

なんともいえない拍手が起こる。

里奈はぼかんとしながら、その様子を眺めていた。

究極のええかつこしいな発言だ。

奈津美の目はもちろんハート型。

でも、英彰はぼそりと。

「できるもんなら、村上と同じ目にあわせてやるけどな」

英彰はとうとう頭を叩かれた。

叩いたのはバスケット部のキャプテンと見た。

「真崎、たのむよ？ 試合で退場になるのおまえがダントツの一番なんだから。ハタケ先輩もすっげえ心配してたぞ」

ハタケときいて、里奈は密かに動揺。でも、英彰はなんでもなさそうに答えた。

「あの人も乱闘得意だったくせによく言うよ」

そんな和やかになりつつある空気に水を差したのが、大野涼子。D委員長閣下。

「悪いけど、あんたが出たって負けないわよ」

「どうかな」

英彰はとぼけながらも、どこか余裕たつぷりな風情。

棒倒しの競技の集合がかかった。

それを合図にぞろぞろと男子生徒たちが出ていく。

「あーあー、やだな、俺暴力嫌いなのに」

「英彰、怪我しない程度に発散しろよ、棒倒しで」

「やだよ、棒倒しなんか。3年になってまでマジでやってられるかよ」

聞いて里奈は目を据わらせた。

悪かったねえ、3年にもなつて、競技で熱くなって顔に痣まで作っ
てさ。

出口で英彰が振りかえった。

今まで里奈なんか存在していなかったかのように振舞っていたくせに、視線を向けてきた。

「野々村」

「なに？」

目の下を指でさしながら、

「大丈夫なのか？ それ」

すると養護教諭が里奈の代わりに陽気に答える。

「しばらくはパンダみたいになるかも知れないけど、お嫁に行くころにはキレイに治ってるわよ」

英彰は軽く笑って、今度こそ出て行った。

それを見届けた後、涼子が言った。

「真崎英彰。侮れないわね。顔だけ一流のええかつこしいと思ってたけど、あんな顔もするのか」

「そのとおりじゃない、顔だけ一流のええかつこしい。間接的にはあいつのせいで、この痣なんだからね。いたたたっ！」

奈津美が里奈の手の甲をつねったので、里奈は悲鳴をあげた。

涼子がわかってないなあと肩をすくめた。

「結構、いい男になるかもしれない。短気っぽいところも悪くないな」

里奈と奈津美は目を見開いて、涼子を凝視。

涼子は呆れたように、

「バカね、一般論よ」

救護テントを追い出され、しぶしぶ応援席に戻った里奈は、グラウンドで繰り広げられている棒倒しの光景に圧倒されてしまった。

「なんだかんだいって、男子の乱闘戦は迫力あるなあ」

ちなみに真崎英彰さんは言葉の通り、お手抜き参戦。

「あのヤロお……」

ラストの混合リレーを控えて、集合場所にぞろぞろと選手が集まる。

現在の経過、トップはE、次点はD、A、B、Cと順位が続いている。

上位3組までの得点は僅差でまさに接戦。

男女6人で走るこの混合リレーで優勝が決まるということで、熱気は最高潮。

激励にそれぞれのクラス委員も集まって、実にぎやかな光景が繰り広げられている。

もちろん里奈もクラス委員なのでその場にいたわけで、そんな中、A組がバトンプアスの練習をしてるのに気がついた。突然参加になった英彰のためらしいけれど、すんなりとそれができるようになるのにはそう長い時間はかからなかった。

涼子が選手にエールを送っている間、そばに控えていた里奈の元に英彰が走ってきた。

里奈の前に立つと眼鏡を外した。

「持ってた」

差し出された眼鏡を反射的に受取りながら、あせって里奈は英彰を見上げた。

「な、なんで。それにあんた眼鏡なくて走れるの？ 見えるわけ？」

「

「本気で走るから邪魔なんだ。持ってた」

「え？ 見えるの？」

見えるよ、と英彰は言いながら、里奈から遠ざかる。

本気で走る？

本当にわかんないヤツだ。

真崎英彰というヤツは。

里奈が応援席に戻ると、奈津美がきゃいきゃい言いながら手招い

てきた。

「里奈、里奈！」

「なに？」

「真崎が眼鏡外してるの。カッコイイよ、ほんと」
知ってるよ、目の前でやられたんだから。

リレーの選手たちが配置につく。

「里奈、それ」

「え？」

奈津美の視線は里奈が持っている眼鏡に注がれている。

「もしかして、真崎の？」

一瞬、しまったと思ったが、へたに嘘をつくのも白々しいような気がして里奈は素直に認めた。

「持ってるって……頼まれた」

奈津美の表情が曇った。

けれど、すぐに消し去って、取り繕うように明るい顔をする。

「な　んだ、そっか。ふーん」

里奈は奈津美の横顔を見つめたけれど、彼女の視線がこちらに返される事はしばらく無かった。

混同リレーはスタートが女子なので、奇数が女子走者、偶数が男子走者となる。

村上くんはトータルで4番走者だったらしい。

最初から英彰が出るようになっていれば、文句無くアンカーだっただろうけれど、順番を組み変えている余裕もなかったらしい、英彰は4番走者の所にいた。

棒倒しをかつたるとサボりまくっていた男とは別人のような真面目な顔。

眼鏡が無いだけ際立つ端正さ。

後輩が怪我させられた事、よっぽど頭に来てるんだな。

らしくないよ、後輩の敵討ちなんてさ。

全然似合わないから、そんな真面目な顔しなきゃいいのに。そんなことを考えていたら、背後から頭を叩かれた。

奈津美もやられたらしい、ベソをかいて頭を押さえている。

犯人はもちろん大野涼子さんだ。

「よそのエースに見とれてないで、自分トコの後輩にエールを送る！」

「見惚れてないよ！」

里奈がむきになっていい返すと、奈津美はキョトンとして、涼子はなんだか意味ありげにぼんぼんと肩を叩いてきた。

「ごめんね、素直じゃなくなっつ　女の子は素直じゃないとダメ

だぜべいべー」

「誰がべいべーだっ、古い歌、歌うなッ」

スタートしたとたん、歓声であふれかえったグラウンド。

トップはDだったので、里奈のまわりは一際歓声が高い。

「行け　ッ！！」

なんとそれに、E、C、A、Bと続いて、後続はなかなかの混戦状態。

しかし、2番走者にバトンが渡っても、Dはぶつちぎりの1位独走。それには奈津美と手を取り合っつて、きゃいきゃい飛びあがりながらも、Aの不振が気にかかる。

しかし、去年も同じような状況で英彰が全てひっくり返して優勝した。

それを憶えているだけに、油断ならないところだ。

第3走者の女の子が走るころには奈津美は本格的に英彰の心配をはじめたらしく、胸の前で手を組んでいた。里奈はそれをちらりと見て、なんとも言えない気分になる。

Dがトップ、Aは相変わらず4番手。あ、コケたよこの女の子、繰

りあがって3位。

第4走者にバトンが渡る。

英彰にバトンが渡った時、Aの応援席からの歓声がとてつもなく大きくなった。

「な、なんであいつあんなに人気あるのよ」

「だって真崎だもん」

奈津美が早口に言う。根拠もなにもあつたもんではない。彼女はもはや自分のチームの行く末などどうでもよろしいらしい。

こうしている間にも、英彰はあっさりと接近していたEの走者を抜きさる。その様子に真崎突然出場の理由がまことしやかに囁かれていたチーム内、Aの応援席は沸きに沸いた。

涼子が負けじと2-Dの委員長をにハツパをかけながら、声を張り上げる。

「声がたりないっ！」

「ちよつと、また抜いたよ、なんであんな事できるの?!」

真崎ファンらしい女の子が叫ぶ。

「げ、1位のDに迫る勢いじゃんか。里奈は思わず口許を押さえた。

「ちよつと、大野やばい、真崎にうち抜かれちゃうかも知れない！」

言葉では自分のチームを心配して焦っていたけれど、ちよつとだけ他の女の子みたいに英彰が抜いちゃったりするのに喜んでいたり、声のトーンが高くなってしまった。

けれど、涼子は意外と冷静にこんな事を言った。

「あいつがアンカーじゃなくてよかったわ。距離が短いもの」

女子100m、男子200m、アンカーの男子のみ怒涛の400m。英彰はバトンを渡した。

Dの走者は寸でのところで逃げきり、そのままなんとか1位を死守。よほど本気で走ったのか、英彰はグラウンドに膝をついて、そのままごろんと仰向けに寝そべってしまった。

里奈は彼に渡されていた眼鏡を見つめて、そうしてからまたグラ

ンドで転がっている英彰に視線をさせた。

「似合わないよ、ドロだらけの体操着なんて」

校舎内の水道で顔を洗っている英彰の背中に声をかける。

彼は一人だった。

体育祭の最中、校舎への立ち入りは基本的に禁止なので、人の気配はなく、静けさが漂っていた。

タオルで顔を押さえながら、英彰が振りかえる。

「ああ……」

里奈はなんとなく照れながら、英彰に歩み寄る。

「真崎って汗とか根性とか似合わない感じするもの」

英彰はまだ、余韻を引きずっているらしい。水道の蛇口をひねりながら、うなるように言った。

「歳は取りたくないよな、絶対に抜けると思ったんだけどな」

「なっ、あんた本気で1位になるつもりだったの？」

「進学校の運動不足の連中相手じゃいけると思った。甘かったな。

距離があと5メートルあれば……」

なんてぶつぶつ言っている。

どうやら本気らしい。

眼鏡を渡すと、英彰は受けとって里奈にも言いたげな視線を向けてきた。

「リレーの後、なぜか外野がうるさくてかなわないから、しばらく隠れてようと思って」

「なにそれ」

「閉会式、サボろうかと」

「え？ まずいんじゃないの、それ」

「そうかな」

「そうだよ」

「あんたのところは準優勝じゃない。うちは優勝しちゃったし」

眼鏡をかけて顔をあげた英彰は、いつもの涼しい顔になっていた。そして、なぜかあくびを噛み締めて、言うことには。

「今日は昼寝してないから、眠いな」

里奈は呆れて目を半分にしなから、

「子供じゃないんだから」

笑いながら英彰が踵を返す。

「どこ行くの、屋上？」

里奈が尋ねると、頷いて英彰は階段を昇り始める。

「野々村も来る？」

「なんでわたしが」

そっけない答えに、つまんなそうに英彰が階段を昇っていくのを見上げながら、ついていってもいいかな、なんてちらりと考えて慌てて打ち消した。

ぶんぶんと頭を振って。

でも。

汚れた英彰の背中が、いつもの姿よりも好ましく思えた。

片付けの後すぐにゴールデンウィークに突入。

不本意に痣などを顔に作ってしまった里奈は、しばらく学校へ行かなくてよい事にほっとしていた。

連休が明けるところには痣も消えているだろうし。

しかし、家教聡明をお迎えするにあたっては、あまりにもあっぱれな痣になった目の下を隠すために眼帯を試してみた。

さすがの都村聡明先生も何事かと思っただけだが、事の顛末を聞いて、楽しそうに笑い転げて、

「いいじゃん、コーコーセー。それでこそせーしゅんだな、せーしゅん」

「なにがせーしゅんよ。バカにしてっ。後で考えたんだけどさ、スニーカー投げたんじゃなくて、絶対に飛ばしたんだよ。あーした天気になーあれッってやるじゃない?! あの勢いで飛ばしたんだよ、絶対」

エキサイトする里奈に聡明はますます大笑い。

そして、あるうことが眼帯を取ろうと手を伸ばしてきた。

「見せてみな、どんな痣なんだか」

「やだ、やだっ」

「すっげえ、見たい。見せてみ？」

「やだっ」

聡明にこんなお化けみたいな顔、見られるのはごめんだもん!

里奈が必死でガードするけれど、聡明はやるとなったらやる人間だ。トンでもない方面から問題解決に挑むやつなので、なにをするかわからない。

聡明は里奈の片方の手首つかんで、えらっそうに言い捨てた。

「悪い、ちよつとセクハラするわ、耳貸せ」

「へ？」

手首を掴まれたことと、「セクハラ」に驚いて動きを止めた里奈の耳に手をかけて、いとも簡単に眼帯をはずしてしまふ。

「……たいしたことねえじゃん」

顔をのぞきこまれて、ますます焦る。

今、聡明の目を近く感じる。かなりニアミスしているはず。

一瞬思い出した、病室でしてしまったキス、聡明の無防備だった口許。

里奈がこんなに焦っているのに聡明は、諭すようにこんなことを言う。

「片目で活字読んだりすると疲れるからさ、俺といる時は気にしなくていいから。んなのは許容範囲」

「で、でもさ」

「学校じゃさすがにおまえが気になるだろうからそれでも仕方ねえかもしれないけど。でも、家にいるときくらいは無理すんな」

触れられた耳を押さえながら真っ赤な顔で俯く里奈を横目に、聡明はこほんと咳払いして参考書を開いた。

「全然平気だ。おまえが思ってるほど目立たねえよ、それ」

「うそ」

「まじで」

「……変だよ」

「色がついてるだけじゃなか。別に腫れてるわけじゃねえし。いつもと変わらんよ」

「普通の顔がそんなにブスなわけ？」

拗ねながら言う里奈に、聡明はいたずら坊主みたいな意地悪な笑みを浮かべる。

「ブスって言うって欲しいのかよ？」

「……ふんだ、いぢめっこ」

悪態をつきながら、里奈はそつと先刻掴まれた手首を違う方の手でそつと押さえた。やっぱり男のひとなんだなと思った。力が強い。ちよつと掴まれたただけなのに動けなくなつた。

些細なことなのに、心臓は弾けそうだ。

あー、どきどきする。

聡明は時々心臓に悪すぎる。

あなたにだから、見られたくないんだけどな。

ゴールデンウィーク中、一人娘が受験生だということで、派手な行楽を控え、ノンビリ昼下がりを過ごしている野々村家に1本の電話が入つた。

受けたのは母親で、浮かればかりの喜びようで里奈の部屋までやってきた。

「里奈ちゃん、お電話」

「へ？ 誰？」

「真崎君っていう子から。すつごく礼儀正しいのね」

真崎、と聞いて、里奈は首をかしげながら母親の差し出した子機を受取る。

会話の内容が気になるのか、名残惜しそうな母親を押し出して、ドアを閉めると、里奈はベッドに座つて、子機に語りかけた。

「ごめんね、お待たせ」

「いや、突然ごめん」

英彰の声が心なしか掠れている。

図書館は祝日はお休みなので、里奈は出かけていない。

「どつ？ 顔の痣」

「喧嘩売つてんの？」

「いや、心配してる」

「ほんとかあ？……ま、いいや。おかげさまで1週間もたてば自立

たなくなりました」

「そっか、それならいいか。明日、なんだけどさ」

「明日？」

「部活終わったあと、勉強会みたいな俺んちでやるんだ。石河が来るんだけど……野々村も友達誘ってこないか？」

「真崎、塾は？」

「ないよ」

「ふーん」

ふーん、といいながら、里奈は赤面しちゃったりして、どうにも照れて仕方ない。

「真崎家に行けるとなったら、希望者殺到だよ、きつと」

里奈がからかうように言うと、英彰は興醒めっぽい溜息でお返事。

「大野は？」

「大野？」

「あいつ、おもしろいから」

おもしろいのもあるけれど、大野涼子は真崎英彰に一カケラの興味もなさそうだからに違いない。

「大野も多忙だからね……一緒に行ってくれる人がいたら行ってもいいけど……奈津美でいいかな？」

「ああ、根本？ いいよ」

奈津美なら、きつと2つ返事でOKだ。

英彰の家に行けるとなれば、きつと喜ぶはず。

「俺の携帯教えておくよ。都合ついたら連絡して」

「うん」

「野々村は持ってたよな？ よかったら教えて」
不思議な困惑が里奈をつつむ。

嫌じゃない、でも、困る。

なんだろう、この気持ち。

「いいけど……言っね」

「うん」

里奈は自分のナンバーを口にしかけて、やっぱりやめたと言を出した。

肩透かしをくらって英彰がブーイング。

「なんだよ、それ」

「うちのママが真崎からの電話楽しみにしそうだから、親孝行」

「うちのママが？」

英彰はからかうように繰り返して、しかたねえなあと言った。

「俺のナンバーいうから、メモってよ」

「あ、うん、わかりました」

ナンバーを交換して、電話を切った。

そうしてから、里奈はふうと、息をつく。

この2ヶ月で、ホント急接近。

英彰はやるようになったら、実行派。

疎遠になんて絶対になつてやらないと言ったこと、本気だったんだなと里奈はしみじみ思う。

でもそれを嫌だと思つてない自分も、なんか変だとも思うわけで、なにかとココロは複雑極まりない。

奈津美の好きな男の子、恋と友情では友情の方がまだ重いはずだし。なにより、わたしの好きな人は聡明だ。

エンドレスな片想いだけど、聡明より好きになれるひとのことなんて未だ想像できないし。

想像。

「ちがーうー！！」

里奈はぶんぶんと言を横に振った。

真崎英彰は論外。

だめだめ。

ベッドに横になつて、里奈は枕を抱えこむ。

2ヶ月前まで、大嫌いだったあいつを。

大嫌いじゃなくなっている。

ちよつと頭がイタイ。

いや、かなりイタイな。

奈津美に電話をして英彰の家での勉強会のことを伝えると、はじめは飛びつくように2つ返事でOKだったが、そのうちに声のトーンが落ちて、こんなことを言い出した。

「他の友達誘うの？」

「うーん、みんな予定あるだろうからね。真崎は大野なんか呼んでくれて言っただけ」

「涼子?!」

「おもしろいんだって」

「確かに涼子はおもしろいけど」

里奈はくすくす笑いながら、奈津美をからかった。

「いいよ、1人でも増えれば真崎と話せるチャンス減っちゃうもんね」

「そういうわけじゃないの、違うよ」

「いいよ 電話をかけるのも面倒だし、2人で行こう」

「うん」

奈津美の返事がわずかに曇る。

それは里奈には届かないほどに微妙な響きをしている。

新緑の季節は外出も心地いい。

真崎家には行った事がないので場所がわかりません、と言ったら、最寄の駅まで迎えに来てくれると英彰は言った。

奈津美と電車で揺られながら、里奈は殆どなくなった目の下の痣を指でさすった。

今日は学校の友達に会うので、里奈は控えめに唇に薄い色のリップをのせただけの顔。紫外線よけに日焼け止めを塗っただけ。ファンデーションだったら痣も完璧に隠れるのに、なんて考えて溜息をつ

いている。

「勉強会なんて真崎がやるとは思えないけどね」
里奈が言うと、どうして、と奈津美が問い返してきた。

「なんとなくね、そういうけじめってしっかりつけてそんな感じがする。あいつ。去年の予備校の冬期講習でもずっと1人でいたし」

偶然一緒になった予備校の冬期講習で、学校ではいつも誰かに囲まれていた英彰が、殆ど誰とも言葉を交わすことなく、もくもくとペンを走らせていたり、ぼんやりと外を見ていた姿を思いだす。

「里奈は真崎のこと結構わかってるよね」

「んー？ そんな事ないよ。勉強会なんてテストがあるからね、そのせいかもね、きっとそうだ」

連休明けにはお決まりの実力テストがある。

コースが分かれた今となっては、英彰ら理系と里奈たち文系ではテスト科目も違ってくる。

それで誘うあたり、やっぱり矛盾しているけれど。

「里奈に会いたかったりして」

奈津美が突然さらっと口にした言葉に、里奈は表情を止めた。

思わず奈津美を見つめると、奈津美は冗談よ、といったものように明るく笑って里奈の背中を叩いた。

けれど、衝撃度はかなりのもので、里奈は上手く笑い返すことができなかった。

改札を出ると、英彰と石河少年が律儀にそこで待っていてくれた。挨拶もそこそこに、すんなりと合流して、4人は歩き始める。

英彰が里奈のトートバックが大きいことに気がついて、

「随分張り切って抱えてきたね」

「お昼ご飯。ママが……じゃなくて、母親が持ってきているさくて、お弁当。奈津美は昨日焼いたお菓子持ってきたんだって。奈津美はそういう女の子っぽいこと得意なの」

奈津美に話題を向けると、彼女は恥ずかしそうに首をすくめた。

「それは嬉しい」

石河が奈津美に笑いかける。

奈津美はいよいよ首をすくめて、里奈のカーディガンを掴んだ。

真崎家は高層マンションの15階だった。比較的できたばかりらしく、真新しさが目に付く。

「キレイだね、この建物」

「できて3年くらいなんだ」

エレベーターを降りてすぐに英彰は右に曲がり、一番奥の部屋のドアに鍵をさしこんだ。

「どこでもドアが欲しい」

「無理」

石河の優しくも容赦のない突っ込みに英彰は肩をすくめる。

里奈がものめずらしさの余り辺りを見まわしていると、となりで奈津美が深呼吸する音が聞えてきて、なんとなく笑ってしまった。

「ご両親いるのかな」

こっそりと奈津美がささやいてくる。

里奈は首をひねった。

「たぶんいないと思うよ」

英彰が皆を促して、それぞれ靴を脱いで足を踏み入れた。

長い廊下にドアがいくつあつて、最後に広いリビングとそれに続くダイニングキッチンだった。ベランダが広く作られていて、リビングはもちろん、キッチンにも明るい陽射しがさし込んでいる。

「親はもう出かけたから、ココでやろう。俺の部屋より広いし」
英彰の声がキッチンから聞こえてくる。

冷蔵庫を開けて、のぞきこんでいる。

「なんか飲むかー？」

石河は勝手知ったるという感じで、ソファーに座ってそれぞれ参考書なんかを出し始めている。

「麦茶とジュースがあるけど……野々村、悪いけどヘルプ」
「え？」

顔をあげた里奈に、対面式のキッチンから英彰が呼びかける。

カウンターのの上に1.5リットルのペットと麦茶の入ってるボトルをのせている。

「俺、コップ出すから、このペット頼むわ」

「はいは……」

返事をしかけて、里奈は思い止まった。

英彰が関わる事は、全て奈津美に振ってあげよう。

「わたし疲れちゃった。奈津美、ごめん、お願い」

「いいよ」

奈津美がカウンターでジュースを受取っている姿を見ながら、里奈はやれやれと息をついた。

我ながら、なんて白々しいことをしているのだろう。

「わかんない、あれ？　なんか忘れてる気がする、何か足りなくて」

「んー？　ああ、これ、垂線1本入れるんだよ」

「真崎はなんで英語がダメなわけ？　数学すらすらとけるのに」

「頭が理系なんだよ」

「英語なんて暗記科目じゃん」

「そおか?!　絶対違うよ。だってさ、コレってもんがない」

「なに、コレって」

「数学は答えが一つだろ。なのに方法はいろいろあるわけ。どんな問題だっているんな方面からつついて答えが出てくるけど、英語は

知らない単語があつたらアウトじゃん。俺、知らない数字ないし」

「えー？ それは数学だよ。公式知らなかったらそれこそアウトだもの。英語は前後の意味がわかればなんとかなりそうな感じがするし。わたし、三角関数習った時、数学には絶望しかないと思ったよ。物理でやったモンキーハンティングなんかどうしたよそれが、つて突っ込みたくなる」

「あんなにおもしろいもんないだろ。俺、古文もキライだな。日本語じゃないよ」

「かつては日本語だった……はず」

「俺はあいにく現代人なんだよ」

「わたしたちがお勉強してるのはあいにく現代英語」

「だから、アレはモロに日本語じゃないって」

「数学のほうに絶対一般人のやることじゃないよ。だって数字だよ？ 暗号じゃないんだから絶対に意志疎通を図れないし」

「学問は見聞を広めることであつて、意志疎通を図るもんじゃない」「孤独なんだね」

「そ、孤独な作業だよ」

英彰との会話が途切れて、ふと顔をあげると、他の2人がもの言いたげに英彰と里奈を眺めていた。

代表して石河が世界史の問題集で口許を隠しながら言った。

「おまえら、同じ科目やったら？ 野々村が数学やって、真崎が英語やって、お互いにわかんねえトコ訊きあうから脱線するんだよ」

「あ、ごめんうるさかった？」

「いや、うるさいというか」

応接セットのふかふかのソファに身を沈めたまま、里奈は参ったなと口を噤む。

英彰は床に直接腰をおろした状態で、そのまま背伸びをしてソファに寄りかかった。

そして、里奈を見上げてくる。

「コンビニ行かない？」

「コンビ二？」

「息抜き」

息抜きと言われて里奈は壁にかけられている時計を見た。勉強をはじめてから2時間が過ぎている。

「真崎、チャリで行ってきてよ。俺、なんだか腹減った」

石河がお腹の辺りを押さえながら言う。

ギョツとして里奈は石河を見つめた。

「さっきご飯食べたばかりじゃない」

「さっきって、もうかなり時間が過ぎてるよ」

「さすがバスケット部、その大きな身体を維持するにはかなりのエネルギーが……」

「え？ 俺なんか普通だよ。真崎は1日にどれくらいご飯食べる？」

食うとなったら、俺、2合は軽くいけると思う。あ、3合か4合……

……？」

「俺はそんなに食わないけど、食おうと思えばいけるな」

奈津美も2人姉妹の妹をやっているの、そういうすさまじい食欲というものに直面したことがないらしい。目を文字通り真ん丸くしている。

「2人とも太ってないのに、どこに入るの、ご飯」

英彰と石河が顔を見合わせた。

「どこって……腹？」

「胃だよな」

ダイエツト中をのぞけば、女の子からするとよく食べる里奈でさえ1日2合が軽いという食事が想像がつかない。

英彰が思い出したように奈津美に言った。

「根本はホント食べないね。学校でも野々村の半分くらいの弁当だったしさ」

里奈は無言で英彰の後頭部を張り倒した。叩かれたところを押さえ、英彰が軽く睨みながら振りかえる。

「あんたってほんっとヘンなこと見てるし、覚えてるし……」

「だってさ、あんたたちの弁当つまそうだったから」

「あー、俺も根本の弁当覚えてる。卵焼きがつまそうだったけど、一口でいけそうな弁当だったよな」

石河がのほほんと言っているので、ただでさえ赤面していた奈津美がいよいよ俯いてしまう。

そこで里奈ははっとした。

「そうだ、奈津美の料理上手をアピールしよう。」

「そう思ったらなぜか右手に握りこぶしを作って、力説していた。」

「奈津美はね、毎日自分でお弁当作ってるの。お姉さんの分と2つ。ね？」

「うん、うん」

「へえー」

英彰と石河が感心したように奈津美に注目するから、戸惑いの表情で奈津美は里奈に視線を向けてきた。

「可愛い。可愛すぎる。」

「こういうのを女の子っぽい反応っていうんだらうなあ。」

里奈は奈津美の肩を抱き寄せて、

「高校卒業したら結婚しようね。わたし一生懸命稼ぐから、奈津美はおいしいご飯をつくってね。幸せな家庭を作ろうね」

「うん、考えとく」

里奈の大袈裟なボケに奈津美がようやく笑顔を見せた。

呆れたように英彰が肩をすくめて、やれやれと腰をあげた。

そして、当然のように里奈に言った。

「なんか買いに行こうよ。石河も腹減ったらしいしさ」

「うん、俺の胃がブリト を求めている」

石河はお供するつもりはサラサラないようで、床に座ったまま英彰を見上げて手なんか振っている。

里奈は一息ついて、石河に倣って英彰に手を振った。

「わたしのお腹はティラミス、ティラミスって言ってるんだ」

「なんだよ、そのバイバイは」

「わたし、もう少しでこのページが終わるからやっちゃいたいの」
ワザとらしく問題集を広げなおすと、そっか、と英彰はあっさり頷いた。

1人で行くつもりになったらしい、ついとリビングから消えて、自分の部屋から自転車の鍵を持ってきた。

「奈津美、真崎ひとりに任せておくと外れ買ってきてさうだから、一緒に行ってきてくれる？」

「え？ あ、いいけど」

「うん、ごめんね」

自転車の鍵をくるくる指先で回していた英彰は、わずかに目を眇めて里奈を見ていたかと思うと、やがて首をかしげて奈津美を促した。

「根本はスカート平気？」

「え？」

英彰は玄関に向かつて歩き出しながら言った。

「2人乗りするのに、スカート平気？」

「重い？ ゴメンネ」

英彰の背中に遠慮がちにしがみついて奈津美が何度もそう言うつから、英彰は笑いながら答えた。

「全然」

奈津美からすると今の状況は夢にだって見ないような、すごいことになっている。

だって、だって、真崎英彰の自転車にのせてもらって、背中につかまってるなんて、こんな大接近どきどきするなと言うほうが無理だ、絶対。

フレアーのスカートを片手で押さえながら、ここのとこの複雑な感情をどこかに押しやって、ひたすら里奈に感謝する。

どうか、心臓の音が彼に伝わりませんように。

英彰がいないので石河に教えてもらいながら、ようやく難解な図形問題を解き終えて里奈はほっと息をついた。思わずグラスに残っていた麦茶を一気のみ。

「野々村はさ」

「え？」

グラスに口をつけたまま横目で石河を見ると、彼は口籠もりながらも、渋い顔をして、

「なんていうか、罪な女だよな」

麦茶を噴くかと思った。

寸でのところで飲み干してけほけほせきこみながら、里奈はグラスをテーブルに置いた。

「なにそれ」

「いや、タイムリーな現代用語が出てこなくて申し訳ないんだけど、なんか真崎が気の毒になってきた」

「真崎が気の毒？」

「本人は絶対に自分から言ったりなんてしないけど、真崎って単純だからさ、野々村のこと好きなんだってわかつちゃってるわけだよ、オールバスケット部員は」

「気のせいだよ、そんなの」

イヤな方向に話がむいてきたので、里奈は居心地の悪さの為に石河から視線をそらした。

そんな里奈を石河は見上げてきて、言うことに。

「バスケット部の3年で賭けやってるんだよ」

「は？」

「真崎は野々村を落とせるか」

「なっ……！！」

里奈は頭に血が昇って弾けるように立ちあがった。

「真崎には内緒で頼む。あいつ切れると怖いから」

「あつたりまえ。切れて当然よ」

「期限は卒業までなんだけど。俺の五千円がかかってる大勝負なんだ」

「バカじゃないの、バスケット部って」

「真崎はイヤツだよ。基本的には」

石河はどちらに賭けたと明言することなく、さらりとそんなことを言っけて口を閉じた。

大きな戸惑いを抱えこまされて、力なくソファーに腰をおろした。

「あ、真崎君彼女？」

コンビニのレジのおねさんが英彰に親しげに話しかけてきた。

女子大生のアルバイト的な雰囲気にな津美はたじろぐ。

英彰はにっこり笑って、友達と答えながらかごを手にした。

そして、さつさと雑誌のコーナーを回って、お弁当コーナーへ足を運ぶ。

奈津美はとことこ彼について行き、英彰に尋ねた。

「どうして真崎の名前まで知ってるの？」

「俺、ここの常連だから」

「常連……って、名前まで？」

「ねえ、ティラミスってこれ？」

「うん、そう」

「根本は？」

「レアチーズ……あの」

「なに？」

英彰に見下ろされて、奈津美はその次の言葉が出てこなくなってしまう。

なんでもない、と首を横にふるだけ。

大学生の彼女って、あのひとじゃないよね。

英彰はくすりと笑って再び陳列されたデザート類に目を向け始めた。

「女の子ってこういうの好きだよな」

「うん」

「来月あたり」

「え？」

「野々村とうちの親のやってるレストランに来なよ。土曜の午後はデザートバイキングやるらしいから」

誘っている言葉の割には他意はなさそうで、英彰は足をすすめて隣の棚に移動する。

「うん、行く行く」

奈津美が笑顔で返事をする、改めて自分の言葉に気がついたように英彰は足を止めた。奈津美をゆっくりと眺める。

いつも里奈の側にいるから、お互いにたくさん話しているような気がしているけれど、実際はまともに言葉を交わすことが少ない二人だった。

奈津美が笑顔を見せ始めたので、英彰は一気にくだけたように奈津美に尋ねた。

「野々村の目の下の痣なだけどさ、あれ、偶然？ にしては随分ひどいよな」

奈津美はどうしたものか、言葉を選んでしまう。でも、隠してもいずればわかることだろう。

「タイヤの時にね、靴が飛んできたの」

「靴？」

「うん、里奈の事狙って」

英彰の表情が止まった。そしてそのまま黙りこむ。

「里奈は、そういうのに負けないから、ずっと……そんなことがあっても負けないから」

「ずっとって、今までもそんなことあったわけ？」

奈津美は英彰をちらりと見上げた。英彰が視線で問いを重ねてくるから、英彰にはどうしようもなく弱い奈津美はどうしても隠すことができない。

「真崎と……一緒にいることが多いから、去年から靴をかくされた

りとか、睨まれたりとか、階段の上からテニスボール落とされたりとか、生卵だったりとか……それは里奈にあたったことないんだけど。あとは不幸の手紙もらったりとか……あの、真崎のこと好きな子多いから」

「不幸の手紙?!」

英彰がギョツとする。

「あいつ、それどうしたの」

「家庭教師のひとに渡してるみたい」

「家庭教師。渡してどうするの」

「笑い飛ばしてもらおうと、安心するんだって。御払いみたいなもんだって言ってた。ヘンな呪文を言いながら目の前で破いてくれるんだって」

一瞬、英彰の瞳が不自然に揺らぐ。

でもそれは、眼鏡の奥のことだから奈津美には見えなかった。

「そっか」

力なく咳く英彰は溜息をつく。

「あの気にしないでね、里奈は元気だから」

「うん、大丈夫。ちょっとむかついてるけど」

「むかついてる?」

奈津美が問い返すと英彰は繕うように首を振った。

「なんでもない。早く帰ろう。待ってるよ、あいつら」

帰り道、自転車の後ろに乗せられて、奈津美はもう1度やってくる切なさこそやるせなくなってきた。

もしかしたら、ううん、たぶん。

真崎は里奈のこと、好きなんだよね、特別扱いだものね。

受験生なんだから、こんな不安定な気持を抱えこんでいたくない。里奈と友達でいることに行きは感謝していたのに、帰り道は寂しさを感じている。

ひらひらひらひら。

スカートが揺れて広がりそうになる。

それを押さえなきゃならないことも、なんだかイヤ。

いつそのこと、名前なんて覚えられないほうがよかった。

コンビニから帰ってからの英彰のテンションが低く、もくもくと問題集に取り組んでいる。男の子はいざ集中し始めるとスゴイなあの的外れなことで感心している里奈を奈津美が横からしみじみ眺めている。

夕暮れが迫る時間に、里奈と奈津美は英彰の家を後にした。

英彰と石河はこれからどこかに食事に行くと言い、一緒に出て駅まで送ってくれた。

帰り道、それはそれぞれに想いを抱え込んだものになり、石河だけがそれを感じているのかどうなのか、能天気なことを英彰に語りかけていた。

「どうしてポチっていう名前の犬は雑種とか日本犬限定なんだと思うっ？」

「ドーベルマンだのプードルだのをポチなんて呼びたくないからだろ」

英彰の実にそつのない答え。そんなもんか？ と首を傾げていた里奈に英彰がなにげなく視線を向けてきて、ふっとそらす。

それをされて、心臓がドキリとした。

意味もない、ただのそれなのに、どうしてか。

胸が痛んだ。

英彰は携帯電話を耳にあてながら、ベッドに横になった。天井を眺めながら呼び出し音を聞いている。

「珍しいじゃない？ どうしたの？」

今春、女子大生になられた従姉弟の岩崎玲子さまは、相変わらず高飛車なもの言い方をする。

「訊きたいことあってさ」

「なに？」

「訊き辛いんだけど、俺のこと好きだって言ってる連中ってそんなにいるの？」

「訊きづらいつて割には、あっさり尋ねてくれるじゃない」

「うるさいよ。どうなの？」

「校内に団体さまでいるし、ああなるとファンクラブよね。別に公式団体じゃないけど。英彰を眺めてきやいきやいって喜ぶことで、仲間意識を連帯感として持ちながら、お互いにお互いを牽制しあってるってどうか。ああして騒ぐことで真崎英彰様不可侵条約を結んでるのよ。ちなみに桜ヶ丘女子高にもあるわよ。うちの学校の女の子達とは仲が悪いけどね」

英彰は不覚にも言葉を失っていた。

わが身ながら、そんなことになっていとは思ひもなかった。

そりゃあ、一般的な男よりはもてることは自覚していた。

目に見えるところでは、バレンタインのチョコレートだって抱えきれないほどいただいたりしているから。

「マジで？」

「あなを騙して遊ぶほどひまじゃないわ」

「……野々村が、いやがらせされてるのも知ってた？」

「うん」

「そっか」

今更になって、里奈が英彰と2人で行っているのがイヤだと言った重みを理解する。

本音であったことに傷ついてしまいそうになっている、己の度量の狭さがイヤだ。

「俺、あいつに迷惑かけてたんだ？」

「間接的にかなりね。どうしたの今ごろ」

「体育祭で競技中に運動靴ぶつけられて、あいつ顔に派手な痣作ってた」

「あらまあ」

さすがの玲子も言葉が出なかったらしい。

しかし、そこはさすが玲子で立ち直りも早かった。

「英彰にできることって何も無いのよ。疎遠になることくらいしか。でも疎遠になったって、みんな勘ぐるからね。カムフラージュじゃないかとかいろいろ。結局同じよ。彼氏だったりしたらそれこそ手をだすな言えるだろうけど、英彰は違うしね」

相変わらず、ずけずけとものを言う女だ。

彼氏になれるもんならさつさとなりたいたいだよ、俺だって。

「そうなるだろうと思って玲子さんは秘密兵器を授けたのに、あの子そのの意味に気が付いてもいないんだだろうな」

くすくすくす。

彼女の軽やかな笑い声が癩に障る。

英彰は眉を寄せて、低い声を出した。

「笑うなよ」

「久し振りに野々村さんに会いたいな」

「よせよ」

「受験生でしょ？　せーしゅんのお悩みなんてやってるヒマないはずよ」

正論で突かれて英彰は唸る。

そう、そうなのだ。

「大学生活楽しいわよ」

「うるさいよ」

電話を切った後で、英彰は眼鏡を外して机おいて、深く息をつく。

そして、体を横たえたままベッドの上で頭を抱えこんで天井を睨んだ。

どうしてこう、俺は。

あいつに疎まれる条件が揃っているのだろう。

ゴールデンウィーク最後の日。

日曜日で祝日ではないので、図書館も開かれていると考えた里奈は、昼食の後、数学の問題集を持って出かけた。

学校向けのスタイルの昨日とは違ってお洒落もちゃんとした格好で。

口紅をのせた唇はちゃんとお気に入りの色に染まっているし。

確かに大学生に見られてしまつかもしれない。

確かに今の姿は「みつあみで髪をまとめている当然のようにノーメイクの優等生さん」からはかけ離れている。

両親はそんな里奈の隠れた背伸びを正直快く思っていない様子だが、登校時には高校生らしさを貫いているのでよしとしているようだ。

図書館の入り口の階段をのぼり、中に入ろうとした時、里奈は目を眇めた。

図書館の隣に面した公園には、ハーフコートのバスケットゴールがある。

普段は3on3をやる少年たちでにぎわう場所だが、休日の午後なのに人影がなくて静かなもの。里奈が目を止めたのは、英彰が歩いてくるのが見えたからだ。

部活帰りなのか、いつもの大きなバッグを肩から下げている。

そんな彼の右手にはバスケットボールがあつて、人差し指の上でまわして遊んでいる。歩きながらなので手元が狂ったのか、ボールが落ちた。英彰はフットワークも軽く、跳ね返ってきたボールをすくうように片手で拾って顔を上げた。里奈に見つめられていることに気がついたらしい。彼も足を止めて静かに見つめてきた。

心臓がドキリとはしたけれど、彼がいたことには驚かなかった。

どこかで予感のようなものがあつたから。

里奈は英彰のもとに足を運んだ。

英彰は黙って里奈が来るのを立ち止まって待っていた。

「部活だったの？」

「うん」

英彰の様子が微妙に違う。

怪訝に思つてのぞきこむと、彼はどこか落としがちの視線。

「昨日はありがとう」

「こつちこそ」

くすぐつたい時間だった。

英彰が言う。

「その大学の前、通つてきたんだ。都村さん、いるかなって一瞬考えた」

「なんで真崎がそんなこと思つるの？」

英彰の口から聡明のことを言われるとは思っていなかったもので、里奈は目を見開いた。

里奈がこの図書館に通つのは、聡明が籍を置く大学が近いから。それを英彰も知っている。だから、口にすることに不思議はないけれど。

彼らが顔を合わせたのは里奈が記憶する限り2回だけだったような。

「なんだろう……あの人と話したい気分だからかな。野々村がうらやましいよ。ああいう人が家庭教師なんてさ」

英彰がととてもとても素直な目をして言うから、里奈もあっさりとしてそれを認めた。

「うん。ラッキーだったって思つてる」

「野々村が頼りたくなるのもすぐわかるよ」

言つて、英彰は空を仰ぐ。ため息混じりに目をわずかに細めて。さらさらとした前髪を風が揺らして通りすぎる。

「聡明に会いに行こうか……?」

伺うように里奈が言うと、英彰は笑って首を横に振った。

「いいよ。会えば会ったで、へこむから」

へんなの。

なんだかテンションが低いぞ。

首をひねりながら里奈は英彰の手元に腕を伸ばした。

「ボール貸して」

「どうぞ」

ボールを受取ると、里奈は緑色に染められたコンクリートの上に落としてみた。

それはポン、と小気味のいい音をたてて、里奈の手元に戻ってきた。

「大きいね。片手で掴める男子が信じられないよ」

「俺からすれば、野々村の手の小ささのほう信じられないけどな」

「そお?」

2人はそれぞれの手をなんとなく眺めて、ふっと笑いあった。

里奈がボールを鞠つきのような手つきでドリブルする。

「バスケット苦手じゃないけど……シユート、どれが得意?」

「んー?」

「いろいろあるんでしょ?」

「あるよ」

「見せてよ」

「シユート?」

「うん」

英彰にボールをバスすると、英彰は片手で受けとめた。

「外したらごめんな」

肩にバッグをさげたままでボールを片手で掲げる。目を眇めてゴールをのぞきこみ、わずかな背伸びと共に投げた。

距離が近かったせいもあり、ボールはすんとネットをくぐって落ちた。

感心もしたけれど、あまりにもあっさりと決めてくれたので、里奈

としてはなんだかおもしろくない。

「もつと芸のある奴が見たいなあ。ドリブルシュートとか」

「ドリ……レイアップのほうが簡単なんだけど」

「レイアップ？」

「おまえのいうところの、ドリブルシュートだよ」

転がってきたボールを英彰が拾う。彼の手にボールが吸いついてゆくようにも見えた。

肩からバッグを下ろして、英彰はわずか3回のドリブルのあと、地面を蹴った。まるでゴールに置いてくるような手つきでシュートをする。

「スゴイ！」

里奈が無邪気に喜んで見せると、英彰は困ったような、照れた顔をした。

「こーゆーので喜ばれてもな」

「ダンクってできる？」

「できない」

「ええー?!」

里奈がブーイングすると、英彰はだつてさ、とブツブツ。

「身長が足りないんだよ、身長が。ジャンプ力はあるほうなんだけど、遊びでやってる時は10回に1回くらいはまぐれで入ったりすることもあるけど……」

「真崎、身長いくつ？」

英彰のフットワークは軽い。

ドリブルをしながら、腕を背中にまわして、ひょいとシュートをする。

「182cm」

「充分大きいじゃない」

「野々村がテレビとかで見てるNBAの選手は2m近いのがゴロゴロしてるわけ。みんなでかいから2mの大男も普通に見えるんだよ」

「2m?!」

「そつだよ」

言いながら、英彰は片手にボールを持って、ゴールにむけて高く飛びあがる。

「あー、ダメだ」

ダンクシュートとして叩きつけられたボールは、リングに当たってはねかえってきた。

里奈は笑いながら彼を冷やかした。

「ハズレ〜!」

「うるさいって」

英彰はそんな里奈に顔をしかめて見せて、今度は離れたところからのロングシュート打つ。

「野々村」

「んー?」

「ごめんな」

「なにが?」

「いろいろ。顔の痣とか」

言われて里奈はなんとなく痣のあった目の下を指で押さえた。

「なんで。真崎とは関係ないよ。競技中の乱闘なんて結構あるじゃん」

ボールがコートを跳ねる音が途切れた。

里奈の顔からだんだんと笑みが消えていく。

動きを止めた英彰が真摯な目で見つめてきたから。

彼はそうしてから、視線を落とす。

「野々村の真面目なところが好きだ」

突然ストレートに言われて、里奈は驚いて身体をすくめた。

「はじめは見た目だった。第一印象は硬そうなヤツだって思ったけど、顔とかそういうのクライじゃなかったから、なんとなく気になつてたんだ。でもさ、おまえの爪がキレイに手入れされてるのに気がついて……もっと気になるようになった」

思わず開いていた手をグーに握ってしまった。

ソナトコ見られていたとは。

里奈が落ちつかない気分になっているのに、英彰は淡々と言葉を続けた。

「一緒にクラス委員やってわかったことなんだけど。おまえが成績がよかつたり、バレー部でもないのにやたらレシーブが上手かつたりするのは、ちゃんと練習してる……コツコツバカ正直に努力してるんだって気がついた。俺にはそういうけなげさがなかったから、びっくりしたんだ。マジで」

くすぐったい気持も手伝って、里奈はワザと不機嫌な顔を作った。

「わたしのことバカにしてる？」

「うん。バカ正直過ぎて、びっくりして、もっともつと気になった。掃除とかそういうのもサボればいいところもアホみたいに丁寧にやってさ。育ちがいいんだろうなって思った。こういう奴の家はいつも誰かがいて、あたりまえみたいに明るいんだろうなって、思った」

「……」
「野々村は俺にないもんばかり持つてる。だから、なんだと思う」
そんなことを言われた後で、英彰に笑いかけられて、里奈は言葉を失う。

何てきれいに笑うんだろう、コイツは。

大好きな聡明の笑顔に負けなくらい、すんと胸に入ってきた。

英彰が再びボールで遊び始めた。

止まっていたかのような時間が流れ始める。

空気が動き始める。

ボールをゴールにぶつけるように投げて、英彰は言った。

「俺は野々村に憧れてるんだと思う」

泣き出しちゃうかと思った。

不器用な自分がうまくできるようにするには、練習したりするしか方法がなかったこと、そんなことを見ていてくれるひとがいると思

わなかったから。

本当は、そういうダメな部分を知られるのは嫌だ。見栄っ張りなのだと自分でも思うけれど、スマートになんでもできるひとだと思われたかった。

でも。ときには努力していることも認めて欲しいという矛盾もあって。

聡明は里奈のそういう部分をはじめから認めてくれた。

それがとても嬉しくて、もっとがんばろうと思った。

ダメな里奈のこともはじめから見ぬいていたくせに、きちんと認めてくれた。

ダメだから努力する里奈を誉めてくれた。

そんな大人に出会ったのははじめてだった。

泣き出しちゃうかと思った。

だって、英彰は。

それこそ、里奈がうらやましいと思うくらいになんでもできるように見えるのに、憧れているなんて言う。

ダメな里奈がいることもちゃんと知っていて、それで努力する里奈が好きだと言う。

口惜しいけれど、嬉しかった。

だから、泣きたいのを我慢しなきゃならなかったんだと思う。

<t:5>t;

どうせ失恋するなら。
早いほうがいいと思う。

奈津美はそんなことを考え始めていた。
自分は受験生なのだし、悩んでいる時間がもつたいない。
決定的に振られないと、きつと変な期待を持ってしまつて、いつまでも引きずるだろう。

好きな人が自分の親友を好きだろうという事実は正直、辛すぎる。
姉のように自分を大切にしてくれる里奈も好き。
だから、きちんと失恋して、気持の整理をしまおう。

真崎英彰に告白してしまおう。

おとなしい自分がこんなことを思うなんて我ながらびっくりだが、
思いつくとそれはとても名案のように思えた。
でも、どこかに嫌な自分もいることに奈津美は気がついて、哀しくなる。

親友が告白して振られた相手と里奈は付き合い合ったりしないはず。
2人とも好きだけど、付き合い合ったりされるのは嫌。
そうして、里奈と一緒にふたりで英彰から遠ざかれればいい。
クラスも離れた今、不可能なことではないのだから。

里奈の好きな人は真崎英彰じゃない。

だから、だから。
悪いことなんて、そんなにはいはずなんだから。

そう決めてから数日が過ぎた。
いつもならなんでも里奈に相談するのに、今回はさすがにできなくて。

里奈が背中を押してくれない事の行動を起こすことはとても怖い。
でも、やらなきゃならない。

思いきって英彰の家に何度か電話をかけたけれど、いつも誰も出なかった。

留守番電話にメッセージを残しておくことはどうしてもできないから、奈津美は無言で切った。
そうするたびに、拒絶されているような気がして、辛かった。

「真崎っていつもいないの？ 夜」

奈津美に突然そんなことを問われて、里奈は手を休め驚いた顔をした。

朝のホームルーム前、机の中を整理していたらしい。

里奈はいつもきちんとしている。

いつもどんな時も。

里奈の机に手をつけて、奈津美は溜息をついた。

里奈は椅子に座ったまま、静かに奈津美を見上げている。

「あいつ塾とかでいないんじゃない？」

「塾か……」

「どうしたの？」

なんでもない、と首を横に振りかけて奈津美はふと、思いつく。

「真崎って携帯もってたよね。もしかして、里奈知ってる？ 番号」

「え？ 番号？」

「この間、真崎から電話もらって家に呼んでもらったんでしょ？」
「うん」

里奈は気まずそうに頷いた。
奈津美に悪いと思っっているのがありありと見取ることができた。
同情されているのだろうか。

わたしは彼に電話をかけても通じることもないのに、里奈は彼から電話をかけてもらえる。

惨めだなあと正直思った。

自分を笑ってやりたくなってきた。

どうしてこうなの。

「どうしたの、奈津美」

奈津美は両手で顔を覆って、俯いた。

泣いているわけでないけれど、気分は泣いていたし、これから自分が言うことはあまりにも醜いから、里奈の顔を見ることが怖かった。そして、今の自分の顔を見られるのも嫌だった。

「真崎に告白しようと思うの。でも、言えなくて」

「え？」

里奈の驚きが小さな声になる。

「里奈から伝えてくれないかなあ。自分じゃ言えないよ」
言葉を重ねるたびに、奈津美のどこかが冷えていく。

奈津美は手のひらを顔から外して、そつと里奈を伺った。

里奈は言葉もなく、戸惑いの表情。

だから、奈津美は手をあわせた。

「お願い。すつきり失恋して受験勉強にはげみたいの」
しばらく躊躇した後、里奈は口許をほころばせた。

頷きながら、不器用に微笑んで。

「いいよ。奈津美の気持、伝えるだけなら。その代わり、結果は…」

「ダメだと思う。それは最初からわかってるから。でも、泣いちゃ
うと思うから、そのときは里奈、側にいて」

「うん」

里奈が頷いたとき、予鈴が鳴った。それを機会に奈津美は口を閉じて、自分の席に向った。

とても憂鬱。

どうしてだろう。

里奈が引き受けてくれることも、少なからず戸惑うことも、予測していたのに。

どうしていいよなんて言っの。

里奈は、どうしてそんなに「いい子」なの？

朝から参ったなー。

とんでもない難問を押しつけられて、里奈はがっくりと机にのめっ
てしまう。

あー、あー、あー。

聡明、助けて。

声にならない呟きが唇からもれる。

聡明が来てくれるのは明日。

始業ギリギリの時間に、教室のドアに、ひょろりと背の高い男子生徒が立った。

「野々村先輩つていますか？」

頭がいたい日というのはいろいろと続くもので、里奈は見たことのない後輩に呼び出されてしまった。

今からいいですかと、と始業直前にのうのつと言つから、里奈は機嫌が悪かったこともあり、はつきり断った。

「自分の名前を名乗りもしないで、授業が始まる前に呼び出すのはわたしのことバカにしてるってこと？」

相手はいささか怯んだらしく、2年の小関輝樹であると名乗った。へらへらしたどこか軽薄な風貌なのに、眼差しに隙がなくて、里奈の嫌悪感はますます深くなる。

「俺、新聞部で写真担当してるんです。そだな。昼休みにでも……うん、部室に来てもらえます？」

「昼休みはあいにくヒマじゃないの」

と、背を向けかけた里奈の背中に、小関輝樹は言った。

小さな声なのに、強い調子で。

「図書館にいましたね、真崎先輩と驚きを隠せずに、里奈は振りかえる。

小関は場違いなほどにつこりと笑った。

「やっぱり、あれは野々村先輩だったんだ」

一緒に図書館にいたことぐらいで、なぜ、あれほど顔色を失ってしまったか。

里奈が学校と外では装いがまるで違うと言つことが理由その1。

今までどんなに一緒にいる現場を目撃されても、野々村里奈だとばれたことはなかった。大学生の彼女とか妙な呼ばれ方をされてしまっただけ。

そして、英彰に告げられた言葉。

あんなことを言われたあとだったから、奈津美に対しても、小関とかいう男の子にしても、過剰に戸惑ってしまったのかもしれない。

憂鬱さが加速してきて、里奈は時間が過ぎることが苦痛になっていた。

それでも、授業は淡々と終わり、昼休みになった。

「時間通りですね」

小関という奴はどーにもへらへらして、見ていて気分が悪い。里奈は新聞部の部屋に漂う奇妙な匂いに顔をしかめる。

「なにこの匂い」

「写真を現像する部屋がこの後ろにあるんですよ。先刻までおれ、現像してたから」

「ああ、薬品の匂いなんだ」

「キライですか？」

「うん……わるいけど」

申し訳なさそうに里奈が俯くと、小関はきよとんとして、それからくすりと笑った。里奈のことをゆっくり頭から足元まで眺めて、参ったなあと頭に手を乗せた。

「野々村先輩って化けますよね？ 今の姿見たら昨日のは嘘みたいですよ」

否定できないところが痛い。

かっちりみつあみの髪型、すっぴんの顔。

制服は校則通り、ソックスまできちんと白。

決まりごととなるときちゃんと守らなければ気が済まないのが里奈の性質だったりする。別に学校を出てからのことまでは校則は制限していないはずなので、大好きなお洒落に全力投球するわけで。先生にでも見つかつたらまずいかなあとは思っが。

「俺、不思議だつたんですね。真崎先輩がどうして野々村さん狙いなのかわからなくて」

「……真崎って、なんであんなそんなこと」

ギョツとした里奈の焦り具合をせせら笑うように小関は言う。

「あの人、ムチャクチャわかりやすいじゃないですか」

「……」

いいながら、里奈の前に缶コーヒーを置くあたりちよつと気配りくんなのかもしれない。

小関は自分の缶コーヒーのプルトップを引くと、何気なく里奈の手

に視線をおとして、

「開けてあげましょうか？」

「いい」

「爪が気になるんでしょ？」

「……コーヒー嫌いななの」

爪が割れそうでプルトップを引くのをためらっていたことを見透かされ、里奈は無然として嘘をついた。

「おっかしいなあ、真崎先輩とコーヒー飲んでたじゃないですか」

「ばっかじゃないの！？　なんでそーゆーことを言うわけ?!」

「だって、見たんですもん」

「……見たって」

「真崎先輩に彼女ができたなんて大事じゃないですか。新聞部には大打撃ですよ。で、ちよつと真崎先輩が部活の後に女と逢ってるって言うんで、部長命令で昨日……」

「真崎のことつけてたの？」

「あの人もね、オンナドモに散々尾行されてるんだし、あれだけ目立つ顔してるんだからもう少しまわりに気を配ればいいんですけどね」

「そんな芸能人じゃあるまいし」

「あの人は昔から注目されて育ったんでしょーね。だから、見つめられることに慣れすぎて鈍感なんですよ。カメラ向けられると露骨に嫌な顔しますから、きつと見られているのを知ったら怒ると思いますけど」

「で？　用件はなに？」

ケンモホ口口な里奈の口調に小関は肩をすくめた。

「真崎先輩が野々村先輩狙いの謎が解けました。俺、昨日みたいな野々村先輩のほづがいけてると思うんですよ。学校でもあん風になりませんか？」

「場所を選んでるのよ、場所を。いきなりあれで現われたら先生が腰抜かすわよ」

「真崎先輩と付き合ってるんですか？」

いきなり核心を突かれて、里奈は一瞬言葉を失ったが、視線をおと
して唸るように言った。

「違う。付き合ってるない」

「ホントですか？」

「本当」

「ま、それならそれでいいです。真崎ファンに大学生の彼女の正体
をばらされなくなかったら、俺と付き合いませんか？」

里奈は目を半分にした。

「本気で言ってるの？」

「はい」

にっこり笑う。

その笑顔。なんか腹がたつ。

「君ももてるんじゃないの？ 顔悪くないし。真崎に比べたら申し
訳ないけど」

「結構、言いますね、先輩」

「彼女いないの？」

「先輩が付き合ってくれて言うなら、別れます」
お話になりませーん。

こういうときこそ、都村聡明の教え子である成果を生かすべきだ。
右をぶたれたら、左右張り倒して蹴りつける。

さすがにそこまではできないが、無礼には無礼をだ。強気になって
やる。

「先輩からかうな。まったく。言っておくけどわたしと真崎はなん
でもないし、面食いでもないんだ。悪いけど却下。冗談はキライ」

「はー見かけによらずキツイすねえ。俺、真崎先輩との2ショット
の写真撮りましたけど。これが噂の女子大生だ！！ ってスクープ
写真。……かなりの金額で売れると思いませんか？」

「思いません。犯罪です」

「いいじゃないですか、需要と供給ですよ」

「風紀委員会と職員室に通報するわよ。停学とお小遣いどっちがいい？ 新聞部廃部にもなりかねないわね」

「野々村先輩、意外といい根性してますね」

「まあね」

いいながら里奈は腕時計見て、小関に言った。

「もう授業が始まる時間だ。これ以上妙なこと言わないでね。真崎が怒ったら怖いし、わたしもなんか頭に来るし」

小関は肩をすくめた。

「知ってますよ」

「それじゃね。あ、コーヒー飲まなくてごめんね」

里奈はそそくさと部室を後にした。

逃げる口実が欲しかったのもあるし、そろそろ昼休みが終わるのも気になっていたし。

里奈が出て行ったあとで、里奈が手をつけなかった缶コーヒーを手にして、小関はやれやれと溜息をついた。

「ネガよこせくらい言えばいいのに。肝心なトコで抜けてるんだな」

「冗談でも、告白されてしまったらしい。

あんもんは無視すればいいと自分に言い聞かせながら、里奈は教科書を開く。

落ちつかなかった。

真崎英彰と休日に会っていることを知られてしまった。

憂鬱さが加速してくる。

本当にもう、真崎英彰がらみでいろいろなことがあるすぎる。

里奈は頭を抱えこむ。

奈津美には申し訳ないが、恨みたくなってきた。

なんで自分で言わないのよ。

自分のことじゃない、どうして。

でも、請け負ってしまったのは里奈自身だ。

昨日、里奈に憧れていると言った英彰の眼差しが思い出された。透明な瞳をしていた。

冗談なんかじゃない、彼は本気なのだと思う。それは心から信じられる。

里奈の口から奈津美の気持を告げたら、英彰は怒るだろうか。

いつかみたいに、怒って、ひどいことを言うだろうか。

でも、このごろの英彰は優しい。

だから大丈夫だ、と考える気持もあって、里奈はそれにすがりたくなる。

里奈の口から言った事とはいえ、断るときは断るだろう。

べつに、真崎英彰は友達だし。

そうそう、好きでもなんでもないし。

奈津美は親友だし。

親友に頼られたら、なんとかしてやるのが筋というものだ。

真崎が怒ったら、そのときは。

……どうしよう。

いまいちすつきりしない朝を迎えて、里奈はどうにも沈みがち。

聡明が家庭教師として来てくれる火曜日だというのに、この憂鬱さはなんだとゆーのだ。

いろいろと考えるから憂鬱になるんだ。

いろいろと。

朝一番で英彰の携帯電話にメールを打った。

6時30分のメールはさぞや迷惑だろうけれど、電話をしてしまうよりはましだろう。

お悩みの深い里奈は例にもれず寝不足で、溜息ばかりがついて出る。髪の毛を編みながら、鏡に向かって自分の打ったメールを反芻する。

お話ししたいことがあります。今日、時間はありますか？

30分後、英彰からの返信。

放課後、部活前に4階の生物室で待ってる。

また、生物室か。

確かにあそこは人気がなく、込み入った話をするには最適だけれども、よくよくまわりを見ると、カエルやらヤモリやらのホルマリオン漬けとかが置いてあって大層ブキミなので里奈はどうにも好きになれない場所だったりする。

人気がないのは気味が悪いからだ、きつと。

以前、生物室で話した時は、目を覆いたくなるくらいにサイアクの展開だった。

英彰は怒って言いたい放題言っ出て行ってしまった。

あのときの彼の様子を思い出すと正直、恐ろしい。

何度目かの溜息をついた時、突然浮かんだ疑問。

なんの前触れもなく、本当に、突然に。

一昨日、誰に会いたくて図書館に行ったの？

自分の胸に浮かんだ疑問に里奈は表情を止めた。
指先が震えるほど、動揺した。

「聡明に決まってるじゃん」
呟いて里奈は口許を引き結ぶ。

1日憂鬱だった。

今から奈津美に謝って、やっぱり自分で言ってくれと哀願したくも
なったが、それではなんかずるい気がする。

授業の教室移動が少なかったことも幸いして、里奈はほとんど教室
から出なかった。

英彰に会うのが怖かった。
英彰の姿を見るのが怖かった。

自分でも可哀想なほど、時間が過ぎれば過ぎるほど緊張が増した。
まるで里奈自身が英彰に告白するような気分だった。

放課後、里奈は掃除を終えて、生物室に足をむけた。
奈津美には先に帰ってくれと頼んだ。

申し訳ないが、教室で待っていていられたら、やつあたりでもしかねな
い。

奈津美はいささか不服そうだったが、里奈の顔色に口をつぐんだ。
絞首台に昇るみたい。

特別教室へ向うの階段を昇りながら、そんなことを思った。
「聡明く助けて」
呟きは困ったときの聡明だのみ。

でも、聡明はこんな所までは助けに来てくれないし、ガキの単なる
恋愛事情、首を突っ込むような野暮は嫌うだろう。

深呼吸してドアを開けると、英彰が振りかえった。

大きく開かれた窓から5月の風が入ってくる。

バスケット部のロゴが入ったTシャツ姿の背中。

振りかえった彼もなぜか、憂いの顔。

風のせいでさらりと揺れる茶色の髪が目許で乱れて、表情の心もとなさを深くする。

里奈は彼にぎこちなく笑いかけた。

窓辺に歩み寄る。

英彰に歩み寄る。

「気持ちいいね、晴れてて」

「うん」

「部活、大丈夫なの？」

「少しくらい遅れても大丈夫だよ」

それから少しの間、無言だった。

見下ろした窓の外は自転車倉庫になっていて、下校の生徒達の声でにぎやかだ。

「話ってなに？」

「うん」

心臓がこれでもかというほどに、強く打っている。

隣に立つ英彰が見下ろしているのがわかるから、里奈は前を見つめ続けた。

窓の外、青い青い空。

「奈津美が……ね」

「なに？」

「真崎の事好きなんだって」

言ってしまった後、彼の沈黙が痛かった。

振り仰げない、怖くて、後ろめたくて。

気持ちを知っているのに、こんな事言っつてごめん。

「だから？」

英彰の声に里奈はぎゅっと目を閉じた。

やっぱり。

冷たい響き。怒った時の、あの声だ。

「返事、もらえるのかと思ったのに」

「……」

「イエスにしる、ノーにしる、潔く聞こうと思ったんだ」
なのに、と英彰は続ける。

「野々村は俺の気持ちを知ってて、それを言うんだ」
返す言葉がない。

俯いたままの里奈に英彰が近づく。

それを気配で察した里奈はますます身をすくませた。

怖い。

怒らないで。

ごめんなさい、ごめんなさい。

謝ってしまおうと息を吸いかけた時、英彰が言った。

「いいよ、付き合っても」

驚いて里奈は英彰を見上げた。

彼は予想以上に里奈の近くにいて、彼の表情に背筋がぞくりとした。
またこんな眼で見られるなんて。

「交換条件」

「え？」

「逃げなかったら……根本と付き合っよ」

「付き合っなんて奈津美のこと好きでもないんだったら、やめてよ」

「そうなればいいって思ってるんだろ？ だから言えたんだろ？」

そんなに大切な友達のためなら、なんでもできるよな」

ちがっよ、という言葉がのどまで出かかってきた。

ちがっよ、と。

でも、言えなかった。

「キス……逃げなかったら」

言いながら英彰が近づいてくる。

肩に手を置かれて俯いたまま身体を強張らせる里奈に、頬を寄せて

くる。

頬を手のひらで押さえられて、里奈は目をぎゅっと閉じた。逃げればいい、こんなの嫌だって逃げればいい。

頭ではわかっているのに、できなかつた。

あっけなく乾いた唇で触れられて、ますます固く目を閉じた。

触れただけのキスが終わる。

立っていられるのが不思議なほど、里奈の足元は頼りない。

「逃げるよ」

英彰の声がした。

「そんなに友達が大切？」

目を開いて仰ぎ見ると、とてもとても冷たい眼で見下ろされていた。傷ついているのがありありとわかる表情。

軽く肩を押されて、後ろに2・3歩よろめいた。

「わかつた。付き合うよ。今夜、俺から電話する」

「真崎」

「俺はおまえみたいに無神経なことしないから。泣かせたりしないから安心しろよ」

言い捨てて背中を向けられ、里奈はその場で呆然とする。

英彰が大きなバッグを肩にかける。

里奈のことは1度も見なかつた。

ドアがしめられて、1人取り残されて、里奈は押された肩を押さえた。

そんなに友達が大切？

どんな落ち込む事があっても、やる事があればなんとか立っていられるものだなと思う。

事実、里奈は1人で泣く事もせずに、生物室を出て、駅まで歩いて、地下鉄に乗れたし、家まで歩いて、着替えて、髪をほどいて、唇に紅をのせた。

聡明が7時に部屋に来て、いつもの調子で陽気に笑いかけられたときは、笑い返す事もできた。

それでも聡明は聡明だった。

淡々と言われるままに数学の問題に取り組む里奈の横顔を、観察するかのように冷静な目で眺めていた。

問題を解き終えて、里奈は聡明にノートを差し出した。

聡明は無言でそれを手に取ると、軽く眺めて、そっけなく正解していることを告げた。

「つぎはこれ」

「うん」

うん、と言いながら、里奈は聡明を見つめた。

やっぱり好きだなあと思う。

するとどうにもならない感情が湧いてきて、里奈は唇を震わせた。

聡明のこと、絶対に好きなのに。

どうしてこんなに悲しいんだろう。

傷つけたから？

キスされたから？

それだけじゃない、「何か」がある。

その「何か」の正体がわからなくてあやふやで。

だから、余計に悲しい、切ない、口惜しい。

聡明がノートを閉じた。

里奈は俯いたまま、肩を震わせる。

聡明は細い目に一瞬だけいたわりを浮かべて、頬杖をつく。

なにも言わず、訊かず、里奈の様子を見守っている。

涙が雫になつて落ちた時、里奈は勢いよく立ちあがった。クローゼ

ットの引出しの一段を開いて、バスタオルを取り出した。

その場にぺたんと座りこんで、タオルに顔を埋める。

背中をむけたままのその様子に、聡明は動じる事もなく視線をそらした。

手に持っていたボールペンを指先で回し始める。
時間が過ぎる。

過ぎる時間を聡明は過ぎるままにしておいてくれた。

「死んじやいたって思う事ある？」

30分は泣きに泣いた。

なのに涙が途切れずに、しゃくりあげながらの里奈は問い。

聡明の返事はすぐにはなかった。

聡明は難しそうな建築関係の本に視線を落としたまま。

ようやくもらえた言葉はどことなく冷たい響きをしていた。

「死んだほうが楽だなあということだろう、それは」

「違うよ」

「死ぬのは楽じゃねえぞ。俺はごめんだ」

「聡明は強いから、そんなこと言えるんだよ」

「強くなくても言えるぜ。言うだけはタダだからな」

「違うよ」

聡明は口を閉じた。そして、再び読書。

里奈は振りかえった。

タオルで顔を隠して、眼だけで彼の様子をうかがう。

聡明が上目遣いに視線を向けてきた。

「……聡明がうらやましい。聡明はなんでもできるから、傷付いたり、傷付けたりなんてしないもの」

「んなことねえよ」

「そつだよ」

からんでいるだけの里奈に聡明はやれやれと肩をすくめて、本を閉じた。

頬杖をついて、里奈を眺めている。

あふれてくる涙を里奈は押さえられずに、タオルをぎゅっと握り締めた。

「ごめんね、聡明、困ってるよね」

「いや。べつに」

聡明は淡々と答えた。

そして、こんな事を言った。

「おまえ、腹減ってんじゃないの？」

「は？」

「なんか食えば」

「いらない」

「一口食つと、食べるもんだけどな」

「いらない。ママにこの顔見られたくない」

聡明は肩をすくめた。そして、懐から携帯電話を取り出して、時間を見る。

「近くにファミレスあったよな」

「えっ？」

人がこんなに悲しんでるのに、なんで腹減っただろとか、ファミレスとか言うのよ、バカ。

にわかに腹が立ってきて、里奈は聡明を恨めしげに睨んだ。

「ファミレスがどうしたのよ」

「行くか」

「ヤダ。こんな顔で外に行くのやだ」

「そう言うなよ」

「それにこんな時間に、勉強やってるはずなのに、外に出たりしたら親に聡明が怒られるじゃない」

「おまえさー、夜に家を抜け出したりした事ねえだろ？ 1度くらいはやつとけよ。太他愛のない事で親の目を盗めるのって今のうちだけだぞ」

涙が引つ込んでいた。

聡明がバカなことばかりいうから、拍子抜けしてきて。

聡明はにやりと笑う。

「課外授業。1時間以内にファミレスに行つて戻つてくる」

「無理だよ」

「わかんねえだろ。お父さんはまだお帰りではない。残る関門はお母さんだけだが、お母さんは家教が終わる9時まで2階には上がつてこない。しかも、この時間はテレビ夢中だ」

聡明はさっさと腰をあげてしまう。

里奈はタオルを持ったまま、聡明を見上げた。

「ばれたらどうするの？」

「星座の勉強してましたつて言つさ」

不謹慎かもしれないけれど。

足音を忍ばせて、玄関に向うのはおもしろかった。

階段を降りると玄関があつて、リビングと隔てているドアにはガラスがあつたりして、母親がテレビをみて笑っている様子が見えたりして。

聡明が身を屈めて玄関に向うから、それに倣つて後をついて行つてみたけれど、なんだか奇妙な緊張感に、里奈は笑いたくなくなってきた。聡明が人差し指を口許にあてる。

生真面目な顔でにらんでくるから、ますますおかしい。持っていたタオルで口元を押さえてこらえた。

聡明が靴下のままたたきに降り立ち、スニーカーを手にする。

だから、里奈も裸足のまま、サンダルをもった。

慎重に聡明がドアのノブをひねる。カチャと音がしたときは、心臓が冷えた。

そつと背後を伺う。

ガラス越しで母親が涙を流して笑っているのが見えた。

聡明が眼で合図してくる。

出ろ、と。

聡明がドアを開いてくれている。里奈は素足のまま、外へ出た。聡明も出てきて、そーっとドアを閉める。

そして、もう1度人差し指を口許にあてて、手首を返してくる。家の門をくぐる。

道路に出たところで、里奈はサンダルを履いた。聡明も塀に隠れてスニーカーを履き、そして、走れと言う。

こみ上げてくる笑いをこらえながら、里奈は走り出す。

聡明が速いから、文句を言いながら。

家から離れるごとに笑い声が出てきて、聡明にたしなめられた。

「バカ、笑うな、ばれるだろ」

「こんなに離れたらママには聞えないよ」

50メートルくらい走って、聡明は走るのをやめた。

里奈はその場で笑い転げた。

聡明が眼を細めて、その様子を眺めている。

くすりと笑う、その口許がばーかと言う。

「死んじやいたいんじゃないのかよ？」

「バカバカしー。こんな事やってバカみたいー」

「バカはおまえだ」

「ほんとだよね、わたしはバカだー」

笑いが途切れて、里奈はしんみりと聡明を見上げた。

「史上最悪のことをやっちゃったんだ」

「ふうーん。またか」

「なに、またかって」

「なんでもねえよ」

「これからキツイ毎日になりそうなの。むちゃくちゃ」

「勉強しな。受験生なんだから。今夜は風邪薬でも飲んでさっさと

寝ちやいな」

里奈は視線を落とした。

ふふふ、と静かな笑いが口許に浮かんでくる。

寂しい、本当に。

里奈は口許に指をあてた。

眼を閉じる。

どうして逃げなかったんだろう。

うつろによみがえる、伏し目がちの英彰のこと。

触れられた乾いた唇、あっけなく離れていった。

どうして……あんなに泣いちゃったんだろう。

聡明にキスしたことがばれたのかと思いこんだ時のような、あんな
涙を。

どうしてあんなやつのためにわたしは流しちゃったんだろう。

夏服の季節を迎えているのに、このところ続く雨のせいで肌寒い。野々村里奈さんは日々何事にも全力投球。

以前からそういうタイプではあったが、輪をかけてそういう状態なので、クラスメイトでありクラスの委員長である大野涼子閣下がそのへんのところを突っ込んできた。

「野々村、もう誰も掃除してないから、やめれば」

「へ？」

もくもくと教室のガラスを磨いていた手を止めて、あたりを伺うと確かに誰も掃除なんてやっている生徒はいない。腕時計で時間を確かめても下校時間はとうに過ぎている。

涼子が呆れ顔で腕を組む。

「ばかねえ、気がついてなかったの？」

「放っておいて」

すねながら里奈が空雑巾をたたむのを見ながら、涼子が言った。

「根本は先に帰っちゃったの？」

「うん。帰りは別になったの」

「ケンカでもしたの？ 昼の様子からは伺えないと言っか、ますます気味が悪いくらいに仲良しだけど」

里奈は軽く笑う。

奈津美が英彰と付き合い出して一ヶ月がたとうとしている。

真崎英彰の校内での立場はアイドルもいいところなので、それは秘密としているけれど今の時間は校舎を出たところで英彰が奈津美を待っているはずだ。

里奈は物憂げに溜息をついた。

彼の予告通りにバスケット部は5月末の地区予選で敗退して、あっけなく英彰たちは引退した。

その試合の翌日、英彰と廊下ですれ違ったけれど、見事に無視された。

彼は視線を合わせることもなく、表情ひとつ変えずにすれ違って行った。

残念だったね、がんばってたのにね。

言ってあげたい言葉が胸に閉じこもったまま行き場をなくして、里奈をいろいろと苛んでいる。

でも、それを言葉にする権利を自ら放棄したのは里奈自身だ。

「根本、真崎と一緒にいるって噂になり始めてるよ」

「うん……」

曖昧に頷く。

奈津美が満面の笑顔で抱きついてきた朝を、里奈は今もはっきり思い出せる。

付き合おうといわれたと嬉しそうに報告する奈津美に、里奈は笑顔でよかったねと答えた。

よかったね。

そう言った自分がひどく後ろめたかった。

英彰の心の中を知っているから。

その前の日の、あのキスを忘れてないから。

「野々村、一緒に帰らない？」

「え？」

「付き合ってよ。お茶でもしようよ。おいしいコーヒーが飲みたい」
涼子にしては女子高生らしい提案に里奈は軽く驚いた。

でも、微笑んでOKする。

彼女なりの心遣いが嬉しかった。

「真崎、明日なにしてる？」

「え？ 明日？」

上の空でいた英彰は突然の問いに少々慌てた。

大袈裟な英彰の反応に奈津美が困ったように見上げてくる。

「週末だから、学校休みじゃない？ どうしてるのかなあって」

「ああ」

英彰は天井を仰いだ。

「家に いると思う。もしかしたら、友達と会うかもしれない」

嘘をついた。

口許を歪めていると、奈津美が視線を落としたことに気がついた。

「どうしたの？」

「なんでもない」

寂しそうな笑顔を向けられて、英彰はああそうか、と思った。

付合っていることになっているのに、二人でどこにも出かけたことがない。

「あかさ」

「ん？」

「根本がヒマだったら、日曜、どこか行こうか」

「本当に？」

「うん」

奈津美の嬉しそうな顔につられて英彰も笑顔になる。

でも、心からは笑えなくて胸に重々しさがやってくる。

引退して、部活がなくなった英彰の日常は大きく変化した。

中途半端な時間に家に戻ってしまっから、塾の時間まで一時間くらい、うたた寝をするようになった。

練習をしていないのでエネルギーの消費もかなり減って、昼寝をする必要もないのに。

夕暮れにベッドの上で、いつでもお出かけOKの私服姿で横になる。まどろみながら、30分ほど前までかわっていた会話を思い出そうとしているけれど、うまくできない。

……一緒に買い物に行くって約束したんだ。

いつもそうだ。

はにかみ屋の奈津美が、英彰と会話をしようとして一生懸命に話しかけてくる。

電車に揺られながら相槌を打つ自分なのに、内容はほとんど覚えていないなんて。

校内で野々村里奈の姿を探さなくなつて、しばらくになる。

はじめは怒っていたのでそれは容易いことだった。

無視をしていたといつてもいい。

でも、気がついた。

里奈は別に堪える様子もなく、淡々と毎日をすごしていること。

そんなもんか、と英彰は思った。

英彰が探さなければ二人は会うこともない。

子供地味な感情の赴くまま、里奈と下校を共にしている奈津美に言ってみた。

「一緒に帰ろうか」

奈津美は一瞬困惑を顔に浮かべたものの、里奈に相談してみるなどと頬を上気させて答えた。仲のよい二人に水を差してしまった後ろめたさを感じて、英彰はまたひとつ憂鬱になった。

しかし、里奈はあっさりとしていたらしい。

優しく承諾したと奈津美が言った。

あいつにとって俺の存在なんて別にどうでもいいこと。

それならば。

英彰は腕に頭を抱えこむ。

「どうして逃げなかつたんだよ」

あのとき、キスしたとき。

怯えていたのに逃げなかった。

逃げてくれと思っただのに、願ったのに。

そうしなかった里奈の姿。

それをしてしまった自分の惨めさと共に忘れられない。

本当に友達のために我慢したというなら、かなり重い話だ。

いつものように聡明が部屋に入って来たとき、違和感に襲われて里奈は眉をひそめた。

「なんだよ？」

里奈の顔を見て怪訝そうにする聡明を里奈はまじまじと見つめて、自分の意識が鼻に集中していることに気がついた。

「……聡明、ココに来る前に煙草吸った？」

「吸ったけどなんで？」

くんと鼻を動かして里奈は言った。

「煙草の匂いがする」

今度は聡明が眉をよせて、

「犬みたいな奴だな」

「だって。聡明、吸う人じゃなかったよね？」

「たまにな。吸うときあるんだよ」

「たまにつて」

「煙草つて落ちつくんだよ」

「へえー」

里奈は首をかしげながら、いたずらっぽく聡明を見上げた。

「里奈も吸いたいな」

「ダメ」

「なんで？」

理由なんてわかっているけれど、甘えたくて里奈は尋ねた。

聡明はこつんと里奈の頭に柔らかい拳を落として、

「まだ似合わないから。あんたには」

「まだ、似合わないってことはさ、わたしの歳が似合っていないの？
それともわたしには似合わないってこと？」

「そうだなあ……まだってのは違うな。がきんちょには煙草は合わねえな」

「煙草を吸う女って嫌い？」

「いや、別に」

意外だった。

聡明はそういう女性を嫌っていると思っていた。

「べんきょーはじめます」

「はい」

土曜日の朝、母親がまだ寝ている英彰の枕もとに立った。

「英ちゃん、今日はお休み？」

「土曜日だから休み」

ベッドにもぐったまま、生返事をする息子に、母は溜息をついた。

「英ちゃん、聞いて」

「聞いている」

本当は聞いていなかった。

まどろみのほうを優先して意識は虚ろだったし。

「英ちゃんが大学に受かってからの話なんだけど」

「え？」

シビアな話題だったらしい。

英彰は目を開いてこすりながら身体を起こした。

ベッドの端に腰をおろして、母親が言う。

「お父さん承諾したみたいなんだけど、お父さんがいいならそれもいいのかなってお母さんも思ってたんだけど、やっぱりお母さんは反対だわ」

「なにが」

英彰が不機嫌そのままに呟くと、母親は伏目がちに顔を俯かせて早口に言った。

「都内の大学に行くのにうちから通わないなんて不自然よ。一人暮らしなんて大学を卒業してから考えればいいじゃない」

英彰はうんざりとして両目を押さえた。

「……今更」

「今更じゃないわ。受験はこれからじゃない。お父さんもお母さんも英ちゃんに無理して欲しいなんて思っただけだし。英ちゃんの行きたい大学に行けばいいって思ってる。がんばってる英ちゃんはエライとは思っけど、無理しすぎてない？ 勉強とか」

「高校卒業したら家を出るってのは高校に入った時からの約束だろ？」

「でも、ちよつと」

「経済的な問題でもある？ それなら俺、学費だけ出してもらえば生活費はバイトでもするよ」

「どうして家にいたくないの？」

「どうしてわからないの？」

顔を上げて英彰はまっすぐに母親を見つめた。

母親の動揺は手に取れるほどわかりやすかった。

視線をさまよわせるようにしたあと、彼女は心もとなげな様子で言った。

「今まで……家族3人でうまくやってきたじゃない？」

「俺がね」

英彰はベッドから降りた。

つられるように母親も立ちあがる。

「あんたたちにあわせてやってきたのは俺だよ。もういいだろ？」

俺は俺のペースでやりたいよ」

「英ちゃん」

必要もないのに英彰は眼鏡をかける。

着替えるから出ていってと告げても母親が出ていく様子がないので、仕方なく机の椅子に腰をおろす。

「お母さんが家にいればいいの？」

「なに言ってるの。そんな時期は10年前に終わってるよ」

「でも、英ちゃんがそうして欲しいって言っなら、お母さん、夜は家にいるわ。昼間の手伝いだけして、家にいるようにする。お父さんに相談してみるから」

「どうしたわけ？」

逆に英彰が彼女に問う。

今更…… 本当に今更、なにを思ってこんなことを言い出したのか。

彼女は答えられずに黙りこむ。だから英彰はいよいよ呆れて言葉を重ねた。

「わけわかんねえな、もう」

父と母が仕事に出かけた。

英彰も当然のように家を出る。

行き先には自分でも呆れてしまっけれど。

休日というといつも里奈は姿を見せていた。

でもあれ以来、一度も訪れていない

静まりかえる図書館で英彰は、あくびをかみしめながら飛行機の構造についてわかりやすく書いている専門書を眺めている。

漫画でもあれば飛びついたが、公共施設でのそれは手塚治虫か日本の歴史くらいなものだろう。

今日は少し出遅れたせいで机をとれなかったので、一般の閲覧席にすわり、机が空くのを待っているのだが、なかなか空く気配がない。そろそろ帰るかなあと、本を閉じたとき、信じられないものを見た。

しかし、ありえないことではないのだ。
ここは都村聡明の在籍する大学院から歩いて5分とかからない場所
なのだから。

妙な具合になってきた。

英彰は首をすくめて、閉じた専門書を開いた。

「アホか、おまえは」

聡明がそう言っている相手は、浜崎佳乃。1度だけ会ったことがある。

頭によさそうな美人だ。白衣が似合う。

静まりかえる場所だけあって、聡明の声のトーンも落としがちで、よく聞きとれないが、二人の表情からするとかなり険悪なものがある。

こっちに来ないでくれ、と目を閉じ祈るような気持ちでいた英彰の前を二人は闊歩して行く。

「アホで結構。バカじゃなくて安心したわ」

「違わねえだろ、バカ」

「バカって言ったほうがバカなのよ」

「そんじやおまえもバカだろが」

……子供の喧嘩だな。

どちらかというと、佳乃が闊歩するのを聡明が追かかっているような二人が2階からふきぬけている階段を降りて一階に向かったことに英彰はほっとして堂々と首を伸ばした。エントランスで言い争う二人がいる。

が、状況はさらに英彰の目を点にするものに。

「まじかよ？」

驚きのあまり英彰は、呟いて立ちあがってしまった。

インテリ風の眼鏡をかけた男が自動ドアからはいつてきて、佳乃に笑いかけたのだ。

聡明と佳乃の二人は気まずそうに口を閉じる。

そして、佳乃は彼と行ってしまった。

それを見送りながら、聡明は溜息をつく。

ふうーん、ヤバイとこ見たなあ。

たいしてヤバイとも思わずに英彰は踵をかえした。今となつては読みたくもない航空専門書なんぞ、さつさと棚に戻して逃るに限る。

どこだったかと棚を眺めてちよつとろろろして、おおこだよと手を伸ばした時、背後になにやら人の気配。

今度こそいやーな予感をひしひしと感じて、英彰はそのまま金縛り。振りかえらずにいると、相手がこんなことを言う。

「背が高いと便利だねえ」

「そんな変わらないじゃないですか」

「俺も180? 欲しかったんだけどね、実は。2? 足りなかったんだ」

「俺も2? 超えただけですから」

「真崎君は冷たいね。俺をシカトするんだ?」

「……いえ。そんな大それたことはできません」

「そうかなあ。とつと逃げようとしてるのがよくわかるんだけど」

「俺がいたの知ってたんですか?」

おそろおそろ振りかえると、都村聡明はにっこりと笑って英彰の肩に手をのせた。

「バカじゃねえんだから、目の前通れば気がつくだろ普通」

万事休すだ。バケモンじゃないだろうかこのひとは。

絶対にダツシュで階段を駆け上がって来た違いはない。

先刻の喧嘩といい、つくづく大人気ないひとだ。

「気がついたなら、気がついたりアクションしてください」

「勉強しにきたんだ? 真面目だねえ」

「ええ、まあ」

「優秀な家庭教師が面倒みてやるよ」

「いえ、いいです」

「そう言うなよ。余計な事は全部忘れるくらい、いろんなことたつきこんでやるから」

「……」

不敵な様子で腕を組む聡明を目の前にして、英彰は顔を引きつらせた。

ヤバイ現場を押さえられたのは聡明のほうなのに、偉そうなのはなんでなんだ？

「よく考えたねえ」

聡明は英彰の綴った英文を指さして、感心したように言う。

「はあ？」

「んーつと、真崎君、頭よこしなさい」

「え？ またですか？」

ばかん、と丸められた参考書でやられて、英彰は叩かれたところを押さえた。

「英語なんか通じればいいんだから、もっと単純に考えたほうがいい。こんなに難しくしなくてもいいよ」

「はあ……ますますわけがわからなくなりそうです」

「仮定法はなあ……。教える側になって英語ってどうしてこういう考え方するのかってむかついた時あったな」

「現役のときはどうしてたんですか？」

「カン」

「……」

聡明は英彰のルーズリーフを一枚外すと、さらさらと絵を書き始めた。

「仮定法っていうのは、言わば別の次元の話で、パラレルワールドなわけよ。でも、日本語でも天気予報なんか見てバンバン仮定法つかってるわけだから。文句は言えねえわな」

英彰は聡明の手元をのぞき込む。

「仮定法の中でもこの問題はかなりの難易度だよなあ。あっちこっちで引っ掛けてるし。どこでこんな問題発掘して来るんだか。こんな受験で出されたら俺浪人してたぜ」

「またまた」

ここは英彰の家のリビング。

当然のように誰もいないから、英彰が聡明を誘ったのだ。

聡明は笑って先刻脅かしたのは冗談だよと言ったけれど、英彰の顔を眺めた後、2時間の授業料の代わりに夕食ということを手を打ってくれた。

彼が英彰の表情からなにを感じ取ったのかは、英彰自身よくわからない。

「俺、塾やめて都村さんに家庭教師してもらおうかな」

参考書を閉じながら英彰がしみじみ言う。

実にわかりやすかった。

聡明は懐から出した煙草をくわえて、かかかつと笑った。

「俺はガキンチョと中ボアのボクちゃんだけで精一杯。それより随分高度なことベンキョーしてんだな。俺、一瞬わからなかったぜ。

真崎君、英語ダメっていうけど並みのコーコーサーよりはよっぽどできてると思うよ」

「都村さんの大学第一志望なんですよ。だから気が抜けないというか」

「ふうーん……。理工学部だっけ」

「はい。灰皿いります?」

「うん。ごめんね」

火をつけながら聡明が頭を下げる。

英彰は来客用の灰皿をキッチン棚から取り出して、リビングのソファに腰をおろしている聡明の前に置いた。

「俺も一本いいですか？」

「真崎君、吸うの」

「習慣はありませんけど。部活も引退したし……いいかなって」

聡明は無言でライターとマイルドセブンライトのボックスを放り投げてきた。

「煙草は憶えたのいつ？」

「中1の頃ですかねえ。めったに吸いませんですけど」

「それでその身長になるんだから、タバコで成長が止まるって説もなんだかな。がきんちよ……じゃねえ、野々村里奈がさ、ムチャクチャ鼻がきいてこの間びっくりした」

野々村里奈と聞いて、英彰の顔が一瞬強張ったのを聡明は見逃さなかった。

ふんふんなるほどね、と勝手に頷いて、スムーズに話題を変える。

「親御さん、いつも帰り遅いの」

「ええ、ガキの頃からずっとです。慣れました」

「俺もガキの頃は1人が多かったんだ。親父が再婚するまで父子家庭だったからさ。でも、寂しいのは何時までも慣れなかったけどな」
英彰はそれを聞いて押し黙る。

今朝の母親とのやりとりを思い出した。

今更なにを勝手なことを言うのだと、キレかかったあの会話。

「親ってのは勝手ですよ。自分の都合で好き勝手やって。こっちがいざ好きにやるうとするとブレーキかけようとして」

「得てして親つつのはそんなもんだろ。俺の親父はちょっと変わってるからそうでもなかったけどさ」

「勝手ですよ」

それっきりむつつりとしたまま煙を吐く英彰に、聡明は諭すように言う。

「寂しい時は寂しいって言わないと、自分が損するぞ。必要以上の痩せ我慢なんて相手を付け上がらせるだけだったり、傷つけるだけだったりするもんだし」

「都村さんこそ浜崎さんに早く謝ったほうがいいですよ。どうせ怒らせたの都村さんでしょ」

目を据わらせて聡明がそっぽをむいて煙を吐く。

「……言ってくれるじゃねーの」

それから聡明はしばらく黙っていた。

その間、口をつけず指に挟んだままの煙草から立ち昇る細い紫煙を眺めていた。

なにを思ったのか、軽く笑い、それを灰皿にもみ消した。

数本のこっている煙草の箱を英彰に向って投げた。

「やるよ」

「え？」

「制服では吸うなよ」

どういう時にあのひとは普段吸わない煙草を口にするのだろうか。

聡明が帰ってしまった後、英彰は二本目に火をつけた。

この家では煙草は厳禁だ。

料理人の父は舌が鈍ると、英彰にも煙草を吸うことをよしとしなかった。

一種の反抗もあって口にしたのは最初。

閉じたまぶたの裏に、帰り際の聡明の背中が浮かんだ。

どういう時にあのひとは普段吸わない煙草を口にするのだろうか。

なんらかのダメージを受けているのだろうか、あのひとも。

こうして置いていったということは、もう癒しの道具なんて必要ないということ？

まぶたをうつすらと開いて、英彰は虚ろに天井を見つめながら呟く。

「強いなあ……」

闘わなきゃならないことが多い気がする。

未熟な自分は、防具さえ整っていないままの状態で闘わなければならない。

勉強なんて楽なもんだ。

やっていればなんとかなる。

ならないものって、なるようになるのかな。

「あれ？」

奈津美が隣で呟いた。

里奈は下駄箱から自分の上履きを下ろして、履きかえながら彼女を見下ろした。

「どうしたの？」

奈津美の表情は蒼白に近い。口許に指をあてて、泣きそうな顔をしている。

「上履きがない」

「え？」

あわてて里奈も奈津美の下駄箱の中をのぞき込んだ。がらんとしている。なにも入っていない。

「全く……」

渋い顔で里奈はこめかみのあたりを押さえた。

上履きを隠されるという卑劣な行為は、里奈も数回やられたことがある。

「真崎のファンの子かな」

奈津美はこたえない。

黙って俯いている。

里奈は彼女の肩を叩いて、

「お金ある？ 無いなら貸してあげるから、購買部に行こう。上履き新しいの買って、それから探してもいいし」

「うん」

奈津美の返事は元氣のない呟き。

里奈もなんとも言えない気分です空を仰いだ。

「真崎に言おう。言っただけで、なんとかしてもらおう。あいつが言えれば効き目もあると思うし」

「里奈は言わなかったじゃない。真崎に。いっぱいいろんなことされたのに」

「わたしと奈津美は違うよ。奈津美はあいつの彼女なんだから」

努めて明るい調子で言う里奈に、奈津美はすねたように言った。

「言えないよ」

「それもわかるけど」

奈津美はちらりと伺うような視線を向けてきた。

「里奈から……言ってくれませんか？」

里奈は思わずムツときてしまう。

言えるわけがない。

だって、口をきいてもいない、視線を合わせることもすらしていない。最近では英彰の徹底した無視加減に里奈も頭にきて、里奈からも無視しているし。

あまりにも見事に視界から省いてくれるからかなり頭にきてしまつて、あんたの無視攻撃なんて絶対に気にしてないんだからと拳を固めたり、平然とした態度を貫いてやると決意しちゃったりなんてことは日常茶飯事なのだから。

「そういうことは二人で解決することだと思っただけよ。それくらい話せなくてどうするの」

語気の強まった里奈に奈津美もかちんときたようで、唇を尖らせた。

「実感ないんだもん。真崎と付き合ってるなんて全然実感なくて……」

「……」
毎朝電車であつたたびに英彰ののろけを散々聞かせてくれるくせに、

なにを言うのだ。

「真崎……心配してくれるのかな」

奈津美の呟きが心細く聞こえてくる。

うそつき真崎英彰。

なにが泣かしたりしない、だよ。

奈津美はこんなに不安がつてるよ。

あんたなんてやっぱり大嫌いよ。

「嫌な男っているよねえ」

「ああ？」

里奈の呟きに聡明が顔をしかめる。

里奈のお勉強はすっかりお留守。

信じられないことに聡明のほうが真面目に勉強しているのだ。

里奈は聡明のメモをのぞきこみ、首をかしげた。

「なにそれ」

「来月から俺、美術専門学校の建築科の非常勤講師やるから予習。

産休で休む講師がいるらしくて」

里奈は目を見開いた。

「え？ 聡明は大学院生じゃない？」

「なんだけど、仕事しながらやるの。専門学校つてのはコマ数契約

だからさ。非常勤だし水曜と木曜に2コマずつ担当するだけだから。

院のスケジュールと調整すればなんとかなるんだよ」

「ええー?! じゃあ、家庭教師は辞めちゃうの？」

いつになく真面目に声を強張らせた里奈に聡明は優しく笑いかける。

「やめねえよ。がきんちよが第一志望受かるまでは」

里奈はいつもの天邪鬼さはどこへやら、机に突っ伏して安堵の溜息を盛大についた。

「よかったあああ」

それを聞いて、聡明が意外そうに目を見開いた。

「えらく素直だな、がきんちよ」

「えー？ わたしは天使のごとくいつも素直じゃない」

「天使つつ 単語を辞書でひいてみな」

聡明の憎まれ口にも里奈は溜息でお返事。

「なんで突然、仕事しようなんて思ったの？」

「いつまでも親に甘えっぱなしでもいらねえからだよ。自分の住むところくらいは自分でなんとかしたいしな」

「ふーん。聡明って1人暮らしなの？」

「いや、ねーちゃんと一緒」

「聡明、おねえさんいるんだよねえ。聡明に似てるの？ 目、細いの？」

「細くねえよ。さっぱり似てない」

「ふーん……じゃあ、美人なんだあ」

「どーゆー意味だコラ。でも、ま、美人だわな。天然ボケがはげしすぎてめまいがしそうになるときあるけど」

「ひとりっ子って性格に弊害が出るよね」

そんなことを言う里奈は、自分を棚に上げて目を据わらせた。

聡明はそんな里奈をしみじみながめて、それからなぜか口許を笑わせる。

「んなことねえよ」

「あるよ」

聡明はいよいよ笑い出して、里奈の頭をぼんぼんと叩いた。

「おまえも意外といい子だし、どっかで同じようにすねてるあいつもいい子だよ」

「なにそれ？ わけわかんない」

「わかなくていいよ」

からからと陽気に笑う聡明。

軽く里奈の頭を叩いて、さっさと勉強しなさいと促した。

気をとりなおしてシャープペンを握って、里奈はこっそりと数回目の溜息をつく。

「陰険な女ばかりなんですかね、真崎先輩のファンって」
昼休みに図書室で仮眠を取っている英彰の前に、ふらりと新聞部の小関が現われた。

英彰はちらりと顔をあげて視線だけで彼を確認すると、再び目を閉じた。

「ファンなんていないよ」

「いますって。現に、真崎先輩の彼女、被害にあってますもん。昨日上履き買ってましたよ、購買部で」

英彰は目を開いた。

小関の意味深な目に、押し寄せる不快感。

「野々村先輩と一緒にいる小さい女の子ですよねえ。先輩」

「おまえ、いい加減にしろよ？ 俺の後つけまわしてどうしようってんだよ」

眼鏡を外した目で睨まれて、小関は肩をすくめながら英彰の向かいに座る。

「先輩に彼女ができたってことになったら、うちの収入半減です」

「その収入とやらでなにしてたんだよ、新聞部。ちゃんと生徒会から活動費がでてるだろ？」

「カメラとかは自己負担なんです。フィルムだって活動費から出なくもないですけど絶対的に足りません。うちは写真部も兼ねてますから」

「だからって俺に迷惑かけるのは筋違いだろ」

「迷惑じゃないですよ。話はちゃんと聞いてくださいよ」

「なんだよ」

「先輩、釈明会見開きましょ」

いよいよ英彰は目を据わらせた。

話にならんと返事もせず目目を閉じた時、小関が言った。

「意外です。先輩があんなおとなしいだけの女と付き合うなんて」

「おまえにはカンケーねえだろが。なんなんだよ」

「先輩、ものは相談なんですけどね」

小関は机に突つ伏したままの英彰の髪を馴れ馴れしく引つ張る。それを手で払う英彰にも臆することもなく彼はのほほんと言った。

「先輩が野々村さん狙いじゃないってことがわかったんで相談なんですけど」

野々村？

英彰が顔をあげると、小関はあつけらかんと、

「俺、野々村先輩いいなあって。学校にいる時じゃなくて、外の。

女子大生みたいなの野々村先輩、美人ですよねえ」

「おい」

一瞬焦つた顔をする英彰に、小関は不敵に笑う。

「ばらしませんよ」

「余計なこと言つなよ。校則違反じゃなくても、あいつは優等生で通つてるんだ。実際どんな奴より真面目だし。あいつの息抜きみたいなもんなんだから」

「学校のド真面目な野々村先輩と外の綺麗なお姉さんな野々村先輩、どっちがホントの先輩だと思います？」

「どっちもあいつに決まってるだろ。とにかく、あいつにはかまうな」

にやにや笑いながら小関は頭の後ろで腕を組む。

「真崎先輩にそんなこと言う権利ないっすよ」

英彰はぐつと言葉を飲む。

その通りだ。

が、むかつくぞ、コイツ。

「俺の知る限りの人間で、野々村先輩のこと一番知ってるの真崎先

輩みたいなんできいてると教えてもらおうかなって」

「がったん、と音を立てて、英彰は立ちあがった。」

図書室の注目を集めてしまったこともかまわずに、英彰は倒れそうになった椅子をつかまえて、机に押しこみながら、

「訊く相手大間違いだろ。俺はあいつのことなんてなんにも知らねえよ」

「でも、彼女が親友でしょ、野々村先輩の」

親友、という言葉のアクセントにからかいを感じて、英彰は目を眇めた。

そして、そのまま彼を一瞥して、返事もせずに背を向けた。

胸がざわついている。

どうしようもなく。

権利がない。

それを言われたことがこんなにもショックだとは。

「権利なんて最初からねえじゃねえかよ、なにやってんだ」

自分に悪態をついて英彰は奥歯を噛み締めた。

最低最悪の振り方をしてくれた女に今更。

権利なんかあるわけねえじゃねえかよ。

放課後、小関は里奈の前に現われた。

1人で校門を出る里奈に、背後から声をかけてきたのだ。

うんざりとした目で里奈は彼を見た。

そんな里奈に小関はちよつとだけすねた顔をして、里奈の隣を歩き始めた。

「怖いですね、先輩」

「なんか用？」

「用がなきゃ声をかけちゃダメですか」

「ダメです。とくにあんたは」

「ひでえなア」

小関はからからと笑って、悠然と隣をキープ。

「受験勉強は進んでます？」

「おかげさまで」

「受験勉強の邪魔にならない程度でいいですから、今度、デートしましょ」

「……」

思いつきり顔をしかめて里奈は小関の横顔を見上げた。

このナンパ男、なにを言い出すかと思えば。

小関は里奈を見下ろしてきて、突然笑い出した。

なんなんだと里奈が眉をひそめると、小関は笑いながら、こんなことを言う。

「野々村先輩ってわかりやすいつすね」

「だからなんなのよ」

「俺のことそんなに嫌いですか？」

ため息が出る。

里奈はうんざりと肩を落とした。

「からかわれてうれしい人間いないわよ」

「俺、性格悪いから嫌われちゃうんですかね」

自分でわかっているなら直せばイイのにと一瞬考えたが、それが大間違いであることに気がついた。

こいつは、己の根性の悪さを悪いことと思っていないのだ。

「今週、デートしましょよ」

「やだ」

すると小関は制服のYシャツの胸ポケットから、写真を取り出した。ひらひらと里奈に向けてやったかと思うと、

「これ、匿名で長者番付の掲示板に貼り付けちゃいますよ」

これってなんだ？ と写真を見て里奈は絶句。

奈津美と英彰と一緒に歩いている写真。

それも私服で。

どうしてこんな写真がという驚きの中に、なぜか落胆もあって、ますますのどが詰まってくる。

「……どうしてそういうことばかりなの？」

「えっ？」

「卑怯過ぎて嫌い。そういうやり方」

「冗談ですよ。そんなマジにならなくても」

「冗談でも嫌。そんな写真撮ること自体嫌。もうついてこないできっぱりと里奈は言う。」

小関が驚いた顔で写真をポケットに収めて、早歩きになった里奈を追いかけてくる。

「どうしてこの写真見て、先輩が泣きそうな顔してんですか？」
ますます頭に来た。

どうしてこいつは言うて欲しくないことをストレートに口にするのだろう。

返事をせずに里奈は唇を噛んでさらに歩調を速めた。

泣きそうな顔なんてしてない。

泣くもんか。

泣く理由がない。

だから、絶対に。

泣くもんか。

英彰から電話をもらって、話があるから一緒に登校しようと言われたとき、正直怖くなった。

付き合おうのをやめようと言われるのかと思ったので。

話があるなら今言つてよと、言えばいいのに奈津美は言えず、頭の中で一緒に登校している里奈への謝罪を組み立て始める。

翌朝、いつもより一本早い電車で英彰と待ち合わせた。

どんなことを言われるのかとびくびくして一夜を過ごしたくせに、英彰が待っていてくれるという事実は奈津美を舞い上がらせる。

英彰はすし詰め状態の車内で、ドアの脇に寄りかかっていた。

奈津美を見ると、手招いて奈津美が人に押されたりしないように場所を作ってくれた。

ときどきするなあ。

挨拶を交わしただけで、言葉のない二人の間。

そつと伺つと、英彰の横顔は涼しげに正面を見ている。

「変わったことない？」

改札口を出た後、突然英彰にそう言われて、奈津美は驚いて顔を上げた。

英彰は背が高いから、首が痛くなるほど見上げなければならない。

「ないよ」

はにかむ奈津美に、英彰は怪訝そうに眉をひそめる。

「本当に？ 困ったこととか起きてない？」

困ったことが起きていないわけではない。

上履きが盗まれて、嫌な思いをしている。

それが英彰のせいだということもわかっているけれど、英彰が故意にしているわけじゃない。

「大丈夫」

英彰は奈津美の言葉を信じていないのかもしれない。まだもの言いたげな目をしているし。けれど、それ以上はなにも言わなかった。

嫌な予感を抱えながら、奈津美はどうか上履きがありますように、と手を合わせながら靴箱の小さな扉に手をかける。

靴箱の中身を見て、奈津美はショックを隠しきれずに唇をかんだ。今日もなかった。

もしものためにと予備に持っていた上履きを、バッグから取り出して奈津美は泣きそうな顔を引き締める。

英彰の3-Aの靴箱はDと背中合わせになっている。靴を履き替えた英彰がDの靴箱まで回ってきた。

「どうしたの？」

様子がおかしいと思ったのか英彰がそう言ってくれるけれど、奈津美は首を横に振ることしかできなかった。

里奈が登校しているというのに、校門から出てきた生徒がいる。

時刻はもちろん朝。

「あいつだ」

里奈は小関輝樹という2年生がどうにも好きじゃない。やるのがなんだか汚くて。

無視して通り過ぎようとしたら、小関が里奈に気がついて陽気に手をあげてご挨拶してきた。

「野々村先輩　おはようございます」

「おはよ」

しぶしぶ返事をしてやって通り過ぎようとしたら、小関はあわてて里奈を呼び止める。

「先輩」

「なによ」

「怒ってます？ まだ」

困惑しながら里奈は小関に尋ねかえした。

「あの写真、どうしたの？」

「先輩に泣かれると辛いんで、捨てました」
にこりとする。

里奈は小関を見上げて軽くにらんだけれど、表情よりは嫌な気分ではない。

「先輩は知ってると思いますけど、真崎先輩の周りにはいろんな人間がいますから。俺を含めてですけど」

「わたしと真崎はもう会話もしないってば」

「でも、友達が先輩の彼女じゃないですか」

「……」

「一度、自分の周りで何が起こってるのか、あの人にちゃんと知らせたほうがいいですよ。なんなら俺が言っちゃりましょうか、はつきり。陰険なファンがいるんですよとかなんとか」

里奈は笑って肩をすくめる。

その顔を見て、小関も笑う。

「どこに行くの？ 忘れ物？」

「家に帰るんですよ。夕べガッコに泊まったんで」

「泊まった？ 部活で？」

驚いてたずねてくる里奈に、小関は歯切れ悪く言葉を濁した。

「つつか、好きでそうなったわけじゃないんですけどね」

そんじゃ、と小関はひらひらと手を振って、歩き出した。

いまいちはずきりしない部分が気にならないでもないが、里奈も首をかしげながら歩き出す。

陰険なファン。

そういうものが実在するとは思いたくないけれど、奈津美の上履きは2回盗まれた。

「里奈、どうしよう。なんか世界中が敵って感じ」

奈津美は激しく落ち込んでそんなふうになり奈に泣きつくし、それを見ていた大野涼子委員長はあきれたように辛らつなお言葉。

「ああいう男と付き合っつていうことはリスクもあるのは当然ですよ。野々村に泣いたって盗まれるものは盗まれるのよ。野々村に甘えてないで彼氏に言いなさい」

「だって、言えないよ」

「本当に付き合ってるの？」

奈津美はうつむいてしまう。痛いところを突かれたらしい。

涼子はやれやれと頭に手を置いて、今度は里奈に矛先を向けてきた。

「野々村も過保護よ」

過保護かもしれないけれど、仕方ないじゃん、と里奈は唇を尖らせた。

「そんな風に言わなくてもいいじゃない」

涼子にすけすけ言われたことがずいぶん頭にきたらしい。

奈津美は珍しく強気な顔をして、

「頭来た。下駄箱見張る。朝来てないってことは早朝か放課後ってことでしょ？」

「なにが？」

「盗むの」

「まあ、そうだね」

「張り込むよ、わたし」

涼子は奈津美の手元を見ながら、冷やかな目つき。

「根本、一人でやりなね」

奈津美の手は里奈のブラウスをつかんでいる。

今日は家庭教師が来る日。

つまり聡明の訪問日なので、里奈は急いで家に戻った。

「これから風呂に入って……うーん」

今日着る服は夕べのうちに選んでおいた。

それを鏡の前で体に当てて、もう一度似合うかどうか確かめる。

「いいか、よし」

さて、お風呂に入るぞ、とバスタオルやら抱え込んだとき、電話の音が鳴り始めた。

母親が出たらしく、それはすぐに止んだ。そして、階段を半分降りたところで名前を呼ばれた。

「里奈ちゃん、女の子から電話よー」

「女の子？ 誰？」

「ごめん、名前は聞き忘れた」

「もお」

首をかしげながら、受話器を母親から受け取って耳にあてた。

「はい」

「野々村里奈さんですか」

「そうですけど」

「お友達の根本さんが困っているみたいなので電話しました」

知らない声だ、誰だろうこの子。

「わたしのこと、言わないでくださいね。あの、うちのクラスの女の子が上履き盗んでるのを偶然見ちゃったんです。たぶん、またやると思います」

「え？」

彼女は名前を2つ挙げて、一方的に切ってしまった。

聡明が髪を切っていた。

「聡明、頭小さいね」

「これだけあれば、脳みそは十分だってことだな」

聡明の髪は、色は真っ黒で、さらさら。

細い目からのぞく意志の強そうな瞳も真っ黒。

そこに頭が小さいとくれば、案外何を着せても似合いそうな気がする。

「聡明、もっとおしゃれすれば？」

「あ？」

「スーツとかさ。イタリアものは狙いだよう、今」

素晴らしいながら里奈が机にひじをつけて見上げると、聡明は目を半分にした。

「靴とか、スニーカーばかりじゃなくて」

「そのうちにな」

「非常勤で講師するんでしょ？」

「白衣着るから何でもいいんだよさつさと参考書開け」

ちえ。

聡明の服を見立ててあげたのになあ。

「ねえ、聡明」

「んー？」

参考書を開きながら、少し口ごもって里奈は言った。

お悩みは聡明にたずねるに限る。

解決しなくても、なぜか頭の中がすっきりしそうな聡明さんのお言葉だから。

「友達がピンチなんだ」

「友達？」

生返事をしながら聡明が机に手をつけて、参考書に視線を落とす。

「嫌がらせされてるの。かなり陰険なやつ」

「で？」

「誰がやってるのが教えてもらったのね、さつき、電話で」

「本人から？」

「うっん、知らない子。同じクラスの子が上履きを靴箱から盗んでるのを見たんだって」

「上履き。懐かしい響きだなおい」

「ちよつと、まじめに聞いてよ」

「ああ、わかった。で？」

「その友達がね、悪いことしたわけでは全然ないの。なんていうか、彼氏ができたんだけど、その彼氏がなんていうか、根性よくなくて、性格もいまいちなんだけど、顔だけよくてええかつこしいだから、女の子に人気あつて。だから、その、彼氏のこと好きな子たちが…

…なんかね、いたずらするんだ」

「友達つて、あの、ちつちやい奈津美ちゃんかよ？」

里奈は目を見開いた。

どうしてわかつたんだろ？

そんな里奈の驚きも気にも留めず、聡明はふうん、とつぶやく。

「奈津美ちゃん、彼氏できたんだ」

「誰も奈津美だつて言つてないよ」

「違うのかよ？」

違わないけどさ。

むすつとして口を閉じる里奈に、聡明はあつけらかなと言ひ捨てた。

「そんなん、彼氏に任せりゃいいんだよ」

「でもさ、友達だし」

「友達には友達の役割つてもんがあるだろ」

「わかんないよ、困つてたら助けてあげたいよ」

「助けてあげるつて、保護者かお前は」

ぽかんと問題集で頭を叩かれた

「友情と恋愛だったら、友情のほうが重いじゃん」

すると、聡明はなぜか笑い出した。

里奈が大真面目に言ったことなのに。

「俺、ほんと、お前のこと誤解してたつてしみじみするわ。初めてここに来たとき、大福食ったあとみたいな白い口してたしよ。アホ娘相手にどうすっかななんて考えたことが懐かしすぎる」
嫌なことを思い出させるなとばかりに里奈は赤面しながら聡明をにらんだ。

あの時は、塾に行きたかったんだい。

父親が超過保護で、夜の塾通いを許してくれなかったから、家庭教師を雇うことになってしまつて、面白くなかつたんだい。

「だからなによ」

笑いながら聡明は里奈の頭を手のひらでぼんぽんと叩く。

「質によるだろ」

「質？」

「そつだよ」

聡明はそれだけ言つて、またまた笑つ。

からかわれているような気になつて、里奈はむっとしながら唇を尖らせた。

「だけどな」

聡明の瞳は笑いながらもどこか懐かしむような色を浮かべている。

「ホントのときは、俺にもわかんねえよ」

明日の自分と今日の自分は変わらなくても、5年後、10年後の自分は確実に変わつている。

明日と今日の間のほんのわずかな変化とも呼べないようなそれが、5年後、10年後の自分を創る。

里奈は聡明の横顔を見つめた。

聡明は机に手を突いたまま、窓の外を見ている。

この人の10年前は、どんな少年だつたんだろう。

そして、この人の10年後、どんな大人になつているのだろう。

好きだな。

以前のように泣きたくなるような、切羽詰つた気持ちではなくて、乾いた砂にやわらかい雨が降つたときみたいにその想いを感じる。

安心する。

この人はわたしを傷つけない。

守ってくれる人だと感覚でわかっているからかもしれない。

「奈津美ちゃんの彼氏ってどんなやつ」

「え？」

里奈の頬から笑みが消えた。

胸の中に降る柔らかい雨が、強い雨になる。

里奈の表情を見て、聡明がわずかに目を見開いた。

驚いたらしい。

聡明の目が和んで、細くなつて。

ぽんぽんと頭をなせてくれる、その手のひら。

そんなにやさしいのはどうしてなの。

わたし、どんな顔しちやっただらう。

里奈も散々嫌がらせはされてきた。

春の体育祭では痛い目にも遭わされた。

正体がわからない相手からの嫌がらせは怖い。

ほかならぬ奈津美のためだ、何とかしてやりたい。

「根本の問題なのに、どうしてあんたがここで張ってるのか理解に苦しいわ」

放課後の昇降口で、物陰に身を潜めるように、壁に寄りかかって下駄箱を伺う、里奈と涼子。

奈津美は申し訳なさそうにうつむくばかり。

「奈津美本人が張ってて盗む馬鹿いないでしょ。奈津美帰っていいよ」

「あ、真崎には先に帰ってもらったから、大丈夫」

「隠れててよ？ 奥のほうでちっちゃくなって」

「あんたもその筋ではかなり有名人だと思うけどね、野々村」

「そもそもなんで大野まで」

「上履きを盗む輩というのは、どういふ人種なのか興味があつて」
「ああ……」

里奈はおへその下のあたりを押さえながら、顔をしかめた。
実は本日、女の子の日でおなかが痛かつたり。

「大野、鎮痛剤もつてる？」

「持つてるけど、野々村そんなに重かつたっけ？」

「最近辛くてさ。受験プレッシャーかな」

「ちよつと待つてて」

「ごめん」

涼子が自分のバック中を探る姿を見ながら、里奈はさえない気分を
もてあます。

「はい。眠くならないらしいから、早く飲んできなさいよ」

「ありがとう」

「里奈、無理しなくていいよ？」

奈津美が心配そうに見つめてくるから、里奈はにこりと笑いかけた。
錠剤を2粒手渡されて、水道へと向かう。

涼子は腕を組んで壁に寄りかかり、靴箱を伺っている。

蛇口から勢いよく出てくる手で水をすくうと、ひんやりとして心
地よかつた。

まもなく本格的な夏になる。

そうすると夏休みになつて頼られ屋の役目から解放される。

無意識にそんなことを思った後、里奈はぬれた手で口を押さえた。
なにかんがえてんのよ、わたし。

呆然としていると、涼子の声が聞こえたような気がして振り返つて
驚いた。

「うっそ、大野！」

3・Dの靴箱の前で、涼子が仁王立ちをしている。

奈津美がその背後で口元を引き締めて、精一杯の睨みを利かせてい

るし。

涼子の声は凜と響いた。

「その上履きどうするつもりなの、現行犯！」

奈津美の上履きにはきちんと名前が書いてある。

高校生にもなつていやとべそをかく奈津美を無視して、涼子が内側にしつかり「根本奈津美」と記したからだ。

女の子が二人いた。

涼子が一人の手から上履きを取り上げて、確認する。

確かに奈津美のものだ。

里奈は夕べの電話を思い出して二人に尋ねた。

夕べ言われた2つの名前を口にしてみた。

「違う？」

お互いを見合つて目配せをし合つて、それでも二人は黙っている。

今までの嫌がらせをしていたのがこの二人だと思つたら、頭に血がのぼつて里奈が声を張り上げようとしたとき、それを制したのは奈津美の声だった。

「いい加減にしてね。最低だよ、こんなこと」

涼子からもらつた上履きを抱きかかえながら、奈津美は続けた。

「先生には言わないでおくから、もうやめてねこんなこと」

すると、二人は奈津美に鋭い視線を向けてきた。

「真崎先輩、趣味疑う」

ぼつりとつぶやく。

奈津美の顔色が変わる。

「みーんな、あんたなんて認めてない。彼女みたいな顔するのやめてよ」

「あなたたちね」

一歩前に出かけた里奈の足を涼子が止めた。

なにすんのよ、と涼子をにらんだとき、里奈の耳は奈津美がしつかりと言り返すのを聞いた。

「認めてもらわなくていいよ。別にあなたたちに認めてもらわなきゃならない理由なんて全然ないし」

「彼女みたいな顔じゃなくて、彼女なの。真崎英彰に存在すら知られていないあんたたちに何の権限があるのか教えてもらいたいわね。それにあなたたちのやっていることは窃盗よ。わかる？ 犯罪なのよ？」

ゆがんだ嫉妬はやめなさい。

そう、そんなものは自分を貶めるだけ。

涼子の言葉の後、里奈は視線を落としながら、

「奈津美はちゃんと認められてるよ」

3月の卒業式。

閉じたまぶたには、あのきれいな人の微笑が浮かぶ。

英彰のこと、よろしくたのむわね。

このリボンの利用価値は高いわよ。

「岩崎玲子先輩、知ってる？ 真崎の従姉の」

こくと、一人がうなずいた。

「奈津美はね、岩崎先輩からリボンをもらってるの。英彰を頼むって」

身に覚えのない奈津美は何がなにやら見当がつかず、目を見開くばかり。

里奈は奈津美の腕をつかんだ。

「ね、もらったよね」

頷いとけ。

視線で訴えると、奈津美はこくこくと首を縦に振った。

「うそ。証拠見せなさいよ」

「リボンを見せるってこと？」

「そうよ」

「明日、見せてあげる。奈津美、いいよね」

ぼんぼんと言葉を返していくものの、里奈の横顔が固いのに気がついて、奈津美は首をかしげる。左手で右手を硬く握って、血の気が失せるほど白くなったそれをみて、奈津美は思う。里奈はもしかしたら。本当は口論するのとか怖いのかなあ。

2年生も帰り、奈津美と里奈も帰る事にした。けれど、涼子はなぜか慄然とした表情で用事ができたといい、二人に手を振った。愛想のカケラもないその態度を里奈は怪訝に思いながら、階段を登ってゆく涼子の背中を見送った。

「みてたの」

「一応」

「どうしてあんたまで？」

2階へと階段を登ると廊下がある。

そこは1階の昇降口を見下ろせるように吹き抜けていて、様子を伺うにはよい場所だと思う。

涼子は怒っている。

「真崎。いい根性してるわね。高見の見物ってわけ？」

腕を組んで手すりに背中を預けた英彰は、涼子から目をそらして黙り込む。

「全部、あんたのせいよ。あんたに悪気がなくてもあんたがきつかけで全部のことは起こってるのよ」

英彰が返事をしないので、涼子のため息をつく。

「なにがあつたかは知らないけど。いい加減目に余るわ。ここから

どんな風に見えたか知らないけど、あんなふう言い合う野々村をはじめて見たけど……野々村は強くないわ。別の意味では強いかもしれないけど、ケンカしながら声の震えを抑えて自分の手を必死で握り締めてる女の子のどこが強いよ」

英彰は視線を涼子に向けて、目を眇める。

それでも口は開くことがなくて、いよいよ涼子は強い口調になった。

「野々村はきつと、今まで一人でそれをやってきたのよ。必死で自分に降りかかるものを払ってきたのよ。ねえ、あなたがどんなに野々村を好きなのか知らないけど、根本と別れて野々村からきっぱりと離れてあげなさいよ」

「誰が誰を好きだった？」

「あなたが、野々村里奈を好きなのよ。バカじゃないんだから見ていればわかるわよ。だから今まで散々野々村が嫌がらせされてきたんじゃない」

「憶測でものを決め付けるな」

「憶測じゃないわ。それじゃ根本のこと好きだっていえる？ 根本だって気の毒よ」

それは英彰にもわかつている。

けれど、今更。

涼子は髪をかきあげた。

苛立ちが伺えるそのしぐさは英彰の癩癩を乱暴に呼びつける。けれど、それを押さえつけて彼女の言葉を受けとめた。

彼女は正しい。

正しいことしか言っていない。

こんな場面に出会ったび……誰かと争うことになるとき。同じ後悔がいつも付きまとう。

どうして俺は。

野々村里奈に対して抑えられないのだろう。

苛立ちや尖った感情とか。

できないことはないのに。

「ちょっと、真崎」

涼子が英彰の寄りかかっている手すりに歩み寄ってきて、手をついた。

下を見下ろしたまま英彰の腕を叩く。

つられて見下ろして、英彰はわずかに目を見開いた。

奈津美の靴箱の前に女子生徒が一人いる。

「何者？ 二年っばいけど。見覚えある？ 真崎」

「いや」

奈津美の靴箱の扉を開けて、上履きを手にした彼女は何事もなかったかのように歩き出した。

英彰と涼子は顔を見合わせた。

「どこに行くのかしら」

さあ、と首をひねりながら、英彰の足は追いかけて始める。

そんな英彰をあわてて引き止めて涼子は言った。

「すぐに捕まえちゃだめよ。もう少し様子を見たほうがいいわ」

「そもそも、どうしてあんたあそこにいたのよ」

「根本が先に帰ってくれって言うし、昨日非通知の怪しい電話もらったし」

「怪しい電話？」

「根本の上履きを盗ってる奴の名前を二人言っただけ切れた」

「携帯に？」

「家の電話。出かける前ギリギリで受けて……女の子の声だった」

先刻の奈津美の上履きを持った生徒の背中を見ながら、二人がそんな会話を交わしていると、校舎を出てしまった。

「ちょっと、どこに行くのよ」

「この先は焼却炉？」

涼子は渋い顔で髪をかきあげる。

「最悪ね」

「わけがわからないな」

英彰が人差し指でメガネを抑えてうなるようにつぶやくと、彼女は焼却炉に続く渡り廊下を歩いていく。

「わからないことないじゃない。捨てるのよ。嫌いな女の上履き盗んだとしたら、大事に持って帰ったりしないわよ」

「女って」

「そういう言葉でひとくりにしないで欲しいわね。ほら、現行犯逮捕！」

涼子に促される前に英彰の足は踏み出していた。

あつという間に彼は100メートル先の焼却炉の前で上履きを放り投げようとしていた彼女の手を捕まえた。

悠長にそれを眺めながら、涼子は感嘆のつぶやき。

「本当に脚は速いわねー」

「なんですか」

腕をつかまれた少女は英彰を冷たく見上げてくる

背が高い。英彰と視点があまり変わらない女の子なんてあまりいないので、すぐにそんなことを思った。

自分の非は全くないかのようなその目つきに、英彰は眉を寄せる。

「それ、誰の」

「あなたには関係ありません」

「なくないだろ。昨日電話よこしたろ」

「なんのことですか。離してください。大声出しますよ」

英彰は彼女の腕をつかんだまま、彼女は上履きを握ったまま。

焼却炉の開いた扉の前でにらみ合っていたら、ようやく涼子が来た。

「出してみなさいよ。大声でもなんでも。真崎の弁護はわたしが引き受けるわ」

そして、涼子は彼女が固く握って離さない上履きをのぞきこんで、にこりと笑う。

「根本奈津美ってわたしが書いたのよ。自分の持ち物に名前を書くのは基本よね。あなた名前は？」

けれど、この少女は先刻の2人の少女とは趣が違う。

焦りの色が全くないというか、平然としている。

そればかりか落ち着いた声で、

「真崎先輩、腕が痛いです」

なんて言う。

言われて英彰が手を離れた瞬間、彼女は上履きを持っていた手を振り上げて、上履きで斜め横から英彰の顔を殴りつけた。

眼鏡が吹っ飛ぶほどの勢いのあるそれに涼子が目を見開いた。

「ちよつと」

「待てよ！」

英彰の表情を見て、涼子はあーあーと思う。

こんなに気の短い奴、本気で怒らせたらだめじゃないの。

英彰を殴って逃げようとしたのか。英彰に再び腕をつかまれて彼女は何度も腕を振り解こうとしてじたばたとする。

完全に目が据わってしまった英彰は力の加減をすることもなく、彼女の話の聞くこともせず歩き出した。

「痛いって言うてるでしょ！ 離してよ！」

「真崎、どこに行くの」

「職員室」

「エ？ いきなり？ 情けも容赦もあつたもんじゃないわね」

のほほんと涼子が後をついてきながらそんなことを言うけれど、英彰は歩みを止めない。

「現行だしな」

「教師なんて誰もいないわよ。こんな時間に」

「いるよ」

「ねえ、真崎。落ち着きなさいよ。職員室っていうのも天晴れだけ

ど、魂胆を知りたいわ。あんたをぶん殴るあたり絶対にあんたのフアンじゃなさそうだし」

「んなのどうでもいいよ」

そう言ったあとで、英彰は足をとめた。

黙っていると思ったら、泣いていた。

「あんたって、甘いわ」

「言っなよ」

涼子から眼鏡を受け取って、英彰は曲がってしまったフレームを治してみたりしたため息混じり。

彼の口元にはほんのりとあざができていて、口の中は切れている。

「泣いてるだけで許してもらえるなら、ほんと楽」

「言うなって」

「でも、あれ、嘘泣きだと思っ」

「嘘泣きであんなに泣ける？」

すると涼子はさらっと、

「泣けるわよ」

彼女はスミマセンでしたと涙ながらに頭を下げたけれど。そういえば名前もなにも自分のことは言っていないかった。

「まんまと逃げられたってわけね」

英彰の手には奈津美の上履きがある。

それを奈津美の靴箱に入れて、英彰は浮かない顔をする。

「ねえ、真崎」

「なに」

「あんた眼鏡がなくてもさつきからすすた歩いているけど、夜道平気なの？ 見えるの？」

「大丈夫」

「だといいけど」

二人はなんとなく一緒に下校する具合になり、英彰は駅までみつき涼子に説教された。

「野々村は、強がりなだけで、強くないのよ」
わかっているよと、英彰は思う。

おそらく、目の前で毅然とそれをいう君よりもぼくは彼女のことを理解している。

それくらい見つめてきたんだよ。

今だつて。

見たくないのに、見つめてる。

自分でもあきれてるんだよ。

3月に岩崎玲子さんからもらったりリボンは大切にクローゼットの引き出しにしまつてある。

卒業式に彼女はさすがしく笑つて、利用しなさいと言つた。プレスのきいたハンカチにはさまれたりリボンを見つめていると、泣きたくなつてきた。

手放すのがとても惜しくて、奈津美にあげてしまふなんてことをどうして言つてしまつたのだらうと、自分を責めたりして。

唇が何度もごめんなさいとつぶやいている。

利用しなさいって、先輩は言いました。

大切な友達のために、使います。

だから、ごめんなさい。

翌朝、電車で奈津美と顔をあわせると、挨拶もそこそこに里奈はカバンを開いた。

「奈津美、これ」

「え？ああ……」

里奈が夕べしょんぼりしながらカバンにしまつたりリボンだということに、奈津美はたいした感動もなくあっさりを受け取つた。

「これをもつてるだけで、本当に嫌がらせされなくなるのかな」

「わからないけど、ないよりはましだと思つよ」

「でも、なんで里奈が岩崎先輩のリボンを持つてるの？」

里奈の目が泳いだ。

焦りは上ずつたトーンの返事になつて、里奈をますます焦らせる。

「あ、あの、わたし、ホントは岩崎先輩と仲がよくて、うん」

「知らなかった」

「ごめんね」

なんでわたしがあやまってるんだろ。

そつとため息ついた。奈津美がその先を詮索するつもりがないことに安堵した。

「ありがと里奈。大切にするね」

奈津美がそういつてにこりと笑うから、里奈もにこりとした。

そのとき、電車がぐらりとゆれて、奈津美が里奈の腕にしがみついた。

里奈はといえば、しつかり脚を踏ん張っちゃって奈津美を受け止めちゃって。

「大丈夫？」

「うん。やっぱり里奈は頼りになる」

てへへ、と笑いながら見上げてくる。

女として、わたしはいけないかもしれない。

フクザツを噛み締めながら、里奈は自分の足元を見た。

「英ちゃん、どうしたのその顔」

朝、洗面所で母親と遭遇するのはイヤだ。

彼女はここ数日、朝になると英彰にまとわりついて、いらぬことばかり言う。

そう、彼女は英彰の高校卒業後の一人暮らしについて、未だに納得できないでいる。

夜は夜で、母親と父親が帰ってくる頃には部屋で勉強しているという名目のモト、無視を決め込んでいる英彰も、朝になるとさすがにそういうわけにいかず、部屋から出てきて、付きまとわれるというわけ。

「口のところに、あざになってる。ねえ、どうしたの」

「なんでもないよ」

うんざりしながら、英彰は髭を剃り始める。

母親は英彰の背中の中ほどのほうでちよろちよろとして、鏡に映る英彰をフクザツそうに眺めている。

そうされていると、居心地が悪いというか、トラウマがうずくというか。

中学生のとき、髭を剃っていたら母親に悲鳴を上げられてしまったという、古傷。

「英ちゃんに髭なんて!!」

それだけではない。

両頬をつかまれて引つ張られたあげく泣かれた日には息子的に大変ツライものがあった。そして、まだ可愛い中学生だったから母親が泣くような行為を、つまり髭剃りなんぞをいたしてしまった自分が罪深いと錯覚してしまって、激しく自己嫌悪。

そのときは父親が豪快に笑い飛ばしてくれたので、なんとか場が納まったものの、すっかり英彰にはトラウマになっている。

そう。

今となつては思い出すたびに目が据わつてしまうほど、アホらしい出来事なんだけど。

母親はできちゃったわけでもないのに16歳で父親と結婚して18歳で英彰を生んだ世間知らずだから。

少女のまま大人になってしまったようなところがあって、父親と英彰は彼女を守る人として家族をしてきたような気がする。

だから、泣かせてしまうなんてとんでもないとココロの中ではいつも思っていて、彼女が悲しそうな素振りでもしよものなら、口や態度ではどんなに冷たくしても、胸はいつでも傷む。

母親には本音を言えない。

「英ちゃん、一人暮らしなんてだめよ。タダじゃないし」

「それなら学費だけ払ってよ。バイトでもなんでもして生活費は自分で何とかするから」

「そんなこと英ちゃんにできるわけないでしょ。それにバイトバイトって学生の本分はどうなるの」

「学生の本分って意味わかってるの？」

「また馬鹿にして。とにかくだめよ」

顔を引き締めてみせる母親に英彰は冷たい目を向ける。

そうされて、母親はひるみかけたが、まけるもんかとかがんばっている。

英彰はタオルで口を押さえながら、彼女から目をそらした。

「志望校、関西にもあるんだ」

「え？」

母親が目を見開く。

英彰は澄まして彼女の肩先を通り過ぎる。

「どうということなの、英ちゃん」

「遅刻するから」

そこに父親がやってきた。

寝起きそのもののぼさぼさのアタマで。

「また君たちは」

「英ちゃんが関西の大学も受験するって」

母親がすがりつくように訴えると、父親は意外そうに英彰を見つめた。

「関西？」

英彰はばつが悪いまま、視線を落とすことで肯定の返事。

「まさか、一人で暮らしたいから？」

「それだけじゃない。調べてたら面白そうな学部があったから」

「そうか……。英彰はどうして家を出たいんだい？」

「それは」

英彰のプライドとか両親への遠慮とかがなければ、即答することができる。

でも、英彰の口は別のことを言う。

「高校入学したとき、俺、父さんと話したよね。高校卒業後は家を

出たいて」

「うん、したね。でも、僕にすら理由を言えないまま、ただしいからというのには理由にならないよ」

「ちよつと待つてよ。話が違う」

「今の英彰には説得力がないんだ。それじゃ、お父さんは味方になれないよ」

唇を嚙んで英彰は両親に背を向ける。

自分の部屋のドアを閉めて、感情の赴くまま、机を殴りつけた。

かなり激しい音がしたので、両親は今頃飛び上がっていることだろう。

あんたたちの息子は怒り狂っているという意思表示だ、思い知りやがれ。

怒りで詰まっていた息が通り始めると、右手から痛みがやってきた。右手を押さえて肩で息をつきながら、英彰はそれでも納まらない何かを目頭に感じて、頭を抱え込む。

こうなったのは、すべて自分の性格ゆえのことだとわかっている。

どうしようもなく短気で、なのに両親には遠慮してしまう臆病者。

誰も自分を知らないところに行きたい。

煮詰まっている環境のすべて、それを放棄できるのは遠くに行くことだけだ。

母親に勢いで言ってしまったことを思い出す。

「関西か」

悪くないなと本気で思えた。

今までは、ちらりと頭を掠める程度のその思いつきが、英彰の腕を頭から外させた。

里奈のことが思い出されて、痛みのようなものを感じたけれど、彼女を思い出した今、尚更遠くに行きたいと思った。

それは現実逃避の典型。

何かかもをさらけ出すというか、つまりは今の本当の気持ちをすべて吐き出したところで、自分の期待する方向に事が進むなんてどうしても信じられない。

そればかりか、なまじ本心だけに拒否された場合の瑕は大きいだろう。

遅刻した英彰の生徒手帳を風紀委員が手にして、2時限の休み時間にも生活指導主任の教師のところまで取りに来てくださいと言った。

1時間目が始まるうとしている。

廊下に出ている生徒はいないので、英彰の足音だけがキュツと響く。足を止めてしばらく考えた後、英彰は半分まで上った階段を降り始めた。

「具合悪そうだね」

扉を開くと平井養護教諭がにやりと笑いながらそんなことを言った。冴えない顔で英彰が彼女のデスクまで歩み寄って、壁に立てかけてあるパイプ椅子を勝手に開いて座ると、彼女は英彰の方に体を向けた。

「真崎、コーヒー」

言われて、英彰は無言のまま腰を上げる。

かつて知ったるところと云うところで、戸棚を開いてコーヒーセットを手にする。

「いつものですか」

「うん、3種混合で」

「はい」

「どうした？ 担任には言ってきた？」

「いえ」

「今日は本当の客がないから、寝ててかまわないけど、どうする？ 頭痛か？ 腹痛か？」

「食欲ないんで、腹痛にしておいてください」

「わかった」

英彰にはいまいちこの平井養護教諭の基準がわからない。

ただ眠くてサボりたいだけでもベッドで寝かせてくれることもあるし、気分が滅入ってしかたない時でも追い払われてしまうこともある。

でも、追い払われたときは気弱になっているというか、気持ちの問題というか。

そのまま時間を過ごしていれば何とかなるようなことが多いとも思う。

「どうぞ」

「悪いね」

英彰が椅子に座ると、彼女は口元を歪めた。

「寝ないの」

「なんとなく、気分じゃないです」

「そっか。実はこいつを1時間で仕上げなければならんだ。相手はしてやれないけど」

「いいですよ。そんなの」

半分すねて英彰はデスクに肘をついて頬杖をつく。

平井養護教諭はペンをすらすらと走らせながら、

「1年の2学期だったかなあ、真崎がはじめてここに来たのは」

「よく覚えてますね」

「まだお前もちびで女の子みたいだったから、あんな顔して頼られるとおばさんはほつつとけなくていろいろ世話を焼いてやったもんだけど、そこまですてかくなると世話も焼きたくなくなるもんだね。

顔にあざまで作ってるし。日ごろの行いが祟って殴られたか」

「ほつといてください」

いささか赤面しながら英彰は唇を尖らせた。

「半年で10センチ？」

「伸びましたね。2年になるときは175cm超えてましたから。制服作り直したんですよ」

「まだ伸びてる？」

「どうだろ。最近停滞気味ですね。これ以上欲しくもないけど」

「それだけでかければ十分だわな」

「うん」

言いながら英彰は立ち上がって、近くにあつた身長計に乗った。

「いくつあります？」

「183？」

「げ」

また伸びたらしい。

英彰に付き合うように腰を上げた養護教諭は持っていたボールペンで英彰の頭をこつんとやった。

「寝てる。3時限からは出るよ」

言われるままに英彰は保健室の一番奥のベッドのカーテンを開いた。

靴を脱いでベッドに横になってカーテンを自分で閉めた後、目を閉じた。

眠れるといいなとぼんやり思った。

5時限の途中から降り出した雨が、いよいよ強くなっている。

廊下の窓ガラスから見える景色はどんよりと暗くて、また一段と雨が強くなりそうな気配。

放課後の掃除がおわると3年生は塾に行かなければならないから、急いで校門を出ていく。

奈津美も英彰を待たせたくないからと、あわただしく帰りの支度をはじめていた。

塾に行っているわけではない里奈は急ぐこともなく、モップを手に廊下にある掃除用具入れの扉を開いてその中身のすさまじさに、眉をひそめた。

見事にぐちゃぐちゃである。

下においてあるバケツにモップが4本突っ込まれてて、柄はあつちこつち。

雑巾は絞ったままでモップの柄に引っかかっている状態で、ひどいのは洗ってさえいない有様。

「入らないじゃない」

もっていたモップを壁に立てかけて、ブツブツいいながらロッカーの中で絡まっているモップを取り出そうとしてみたものの、バケツに引っかかって出てきてくれない。

「もお、男子は！」

廊下の隅で掃除用具入れに頭を突っ込んで、絡み合ったモップを取り出そうと半ば意地になってガンガンやっていると背後で人の気配手を止めて振り返ると、英彰がいた。

バッグを肩にかけているから、奈津美を迎えに来たのかもしれない。驚いて目をわずかに見開いた里奈は、なぜか決まりが悪くて掃除用具入れに向き直った。

すぐに通り返るのかと思ったのに、なかなか英彰の足が動かないから、里奈は必要以上にモップを一生懸命取り出そうとしてガタガタと音をたてる。

バケツの中にモップを無理やり押し込んでいるから引っかかって動かなくなっているらしい。

モップは出てきてくれないし、英彰は突っ立っているしで、気まずくて仕方ない。

「かせよ」

「え？」

空になってしまった手の置き場に里奈が困っているそばで、英彰はいつも簡単にモップを4本まとめて取り出して壁に立てかけた。

どう反応していいのかわからずに里奈が呆然としていると、英彰は絡んだモップを1本ずつはずして里奈に預けてくる。

久しぶりに声を聞いたような気がした。

4本目を手渡された時、英彰があきたような目つきで見下ろして

きた。

それをされて気がついた。

息苦しい。

自分がどうしてこんなに息を詰めているのか、里奈はにわか戸惑い始めて、英彰から背を向ける。

こんなに近くに英彰がいるなんてあの時以来だから、尚更そう思うのかもしれないけれど、落ち着かなくてどきどきする。

「ありがと」

ちらりと英彰はこちらを見てくれたけれど、それだけ。

一言もなく、英彰は歩き出してしまふ。

奇妙な時間だった。

英彰が遠ざかるそれを背中意識しながら里奈はことさら意地になつて箒だの雑巾だのを取り出した。

こうなつたら用具入れを掃除してやる。

気を取り直してロツカーの整理整頓を始めた。

モップをきちんと並べて立てかけて、バケツは定位置に。

「ねえ、野々村さん」

「はい？」

女の子にしてはハスキーな声だった。

副委員長と呼ばれないのが新鮮で、里奈は手を止めて体ごと振り返る。

奥沢いずみだった。

英彰のファンを公言してはばからないことで有名な隣のクラスの生徒だ。

数秒前まで英彰といただけに、里奈の驚きはなおさら大きかった。

「整美委員でもないのに、なにしてんの」

「モップが入らなかつたのよ」

「それ、時間かかりそう？」

「え？」

箒をにぎつたままぼかんとする里奈に、奥沢いずみはむっとしたよ

うで、早口に言った。

「一緒に帰らない？ 野々村さんがよければの話だけど」

「え？」

「ますますぼかんとする里奈に、いずみはますますむっときたらしい。

「手伝ってあげるから、一緒に帰ろうって言ってるの」

「あ、ありがとう」

「いいのね？」

「う、うん」

奈津美は英彰と下校しているから、里奈はフリーだし。

「だけど、どうい風風の吹き回しだろ。」

「ちよつと待つてて、かばん持つてくるから」

「いずみは颯爽と自分の教室に戻って行った。」

「何事だと首をかしげながら、里奈が再び掃除道具に挑み始めると、

「今度は背中からブラウスを引っ張られて、叩かれた。今度はだれよ

と振り返ると奈津美だ

「痛っ」

顔をしかめて、奈津美が頬を膨らませて立っている。

「今度はお前かと里奈が肩をすくめると、奈津美は鞆を振り回す勢いでまくしたてた。」

「里奈、奥澤さんと帰るの？

「ねえ、最近大野とかと仲良すぎない？」

「は？」

「は？」

「なんか寂しいな。里奈のこととられちゃうみたい」

「里奈の目が半分になる。」

「腕に雑巾がなかったら頭を抱えているところだ。」

「あのねえ」

「大体、あんたに彼氏ができたからこういうことになったんでしょ

が。」

「わたし、今日、里奈と帰る」

「むっつりと唇を尖らせる奈津美に、里奈は諭すように言った。」

「真崎が待つてるんでしょ。さつきあいつ歩いていったよ」

「いい。真崎には先に帰ってもらおう」

「バカなこと言ってるんでないで、奥澤さんと約束しちゃったし。わたしは奈津美の親友です。奈津美が一番です」

「すっごいめんどくさそうな言い方してる」

「だって、奈津美が変なこと言うから」

「寂しいのは本当なんだよ」

「なんだかイライラしてきた」

「やきもちを焼いてくれるのはうれしいけど、このごろ自分勝手だ奈津美は。」

「それじゃさ、真崎と一緒に帰るのやめて、ずっとわたしと帰ってとか言ったら奈津美困らない？」

「奈津美が言葉を失っている。」

「迷うなよ、と突っ込んでやりたいところだが、入学以来あこがれ続けた彼氏だ、迷うのも当然だろう。」

「冗談。とにかく、真崎待つてるからにはやく行ったほうがいいよ」

「うん」

「しょんぼりとして奈津美が歩き出す、

それでも、振り返って、

「奥澤さんと仲良くしすぎちゃイヤだからね！」

なんて言う。

見送りながら、里奈は渋い顔になる。

「そんな大きな声で言ったら……。」

奈津美が階段を下りて行くまで見送って、里奈はやれやれと肩を落とした。

「ぱっかじゃないの、あの子」

「いずみが目を据わらせながら、リュックを抱えて歩いてきた」

「ほら、聞かれちゃってるし。」

「トホホ笑いを浮かべながら、里奈はいずみにごめんと謝った」

「そう言わないでやってよ」

「何が仲良くしちややだ、よ。精神年齢疑うわ」

いずみはリュックを背負うと里奈の足元でしゃがんで、雑巾を拾い始めた。

「洗うんでしょ？」

「わたしやるよ」

「二人でやったほうが早いよ」

「……ありがとう」

いずみは手際よく雑巾を絞って、新しい雑巾を流水にさらす。

てきぱきとした動作に、里奈とはまた別タイプの「頼られ屋」の姿が見える。

「リボンのこと、きいたよ」

「リボン？」

「瞬何のことがわからなかったが、ぴんと閃いた。」

「あー！」

「靴箱で悪さしたコたちにはきつく言っておいたから、もうやらな
いと思う。でも、根本さんが玲子さんのリボンを持っているってど
ういうこと？ 玲子さんに電話したら、根本奈津美なんて知らない
って。野々村さんにリボンをあげた記憶はあるけどって」

どうしよう。岩崎先輩にばれた。これが周囲に知れることになっ
たら奈津美はどうなるのだろう。

うるたえ始めた里奈の顔をいづみは眺めて、肩をすくめた。

「大丈夫よ。玲子さんに電話できる後輩はわたしくらいだし。誰に
も言うつもりはないわ。玲子さんも笑ってたしね」

「笑ってた？」

「うん。あのコらしいって笑ってた」

「……」

なんだかしよげてしまっ。

水道の脇には窓ガラスがある。

雨は次第に強くなり、まるでガラスを洗っているよう。

雨音に耳を傾けながら、里奈はごしごしと雑巾をこすり、いずみから目をそらしていた。

「英彰君とわたし中学同じなのね」

「ふうん」

「英彰君って素直なの。好きな人ができたら好きな人だけ見てるし、好きな人がかまってくれたらにやけてんのよ、そのたび。顔がああだから落ち着いた感じに見られてるみたいだけど」

「……あいつ、バカ？」

「かもしんない」

いずみは笑う。そして、きゅつと雑巾を絞って、

「わたし、英彰君に好きな人いるならそれでもいいんだ。寂しいって思うことは思うけど、英彰君が楽しそうにしているほうがいいんだ」
里奈が無言のまま見つめると、いずみは顔をしかめた。

「わたし、英彰君に告白なんて一度もしたことないよ。変な噂たてられて迷惑してるんだから。それに告白したって英彰くんは誰かにばらすような人じゃないし」

「そうなんだ」

「うん」

いずみは英彰に何度も告白をして振られていると里奈も聞いたことがある。

すべてデマだったということになると、それはそれで感慨が深い。

里奈も雑巾を洗い終えて蛇口をひねって、水をとめた。

「野々村さん、時間ある？ どこか寄り道していいこうよ」

今日は家庭教師の日ではないから、可能だ。

「なにか食べる？」

当然のように里奈が言つと、いずみはきょとんとしてそれからくすくすと笑った。

「野々村さんお腹すいてるの？」

「うん」

素直にうなずくと、いずみはますます笑い出した。

「ラーメンとか平気？ もしかして」

「平気というか、気にするようなことなの、ラーメンって」

「気にしなくてもいいけど、なんだか野々村さんのイメージ崩れた」

「イメージ？」

「放課後寄り道なんてしないひとかと思ってたのに」

「いいじゃない、校則で禁止してるわけじゃないし。わたし味彩亭

の味噌ラーメン好きだよ」

「それじゃ、味彩亭行こうか」

「うん、いいね」

普段そんなに仲良しでなくても、きつかけがあれば盛り上げられるもの。

味彩亭は里奈たちの高校の最寄の駅に近い、学生御用達のラーメン屋だ。

味最低とかそれこそ低レベルなことを言っただけの客もいるけれど、いつもそれなりににぎわっている。

運良くあいている席があり、そこにさっそく陣取ると、いずみはバッグを置きながら、

「部活の連中が来る時間じゃないから、まだよかつたね」

「うん」

雨でぬれてしまった制服の肩をハンカチでばんばんと叩きながら里奈が返事をする。

その間にいずみがセルフサービスのお冷とおしぼりを取ってきてくれて、里奈は感動してしまった。

「奥澤さんっていいひと」

「なに言ってるんだか」

普段、あれやこれやと世話を焼く立場の里奈だから尚更感動してし

まったわけで、そのあたりのココロの動きを説明すると、いずみは深くうなずいた。

「わかる。人に淹れて貰った番茶の美味しさと通じるものがあるわ。野々村さんもわたしもおせっかいなのよね」

おせっかい、には多少ぐさりときたが、正論でもある。

「特に野々村さんは周りを気にしすぎ」

「そ、そっかな」

「でもわたしも、だめなんだよね」

注文をとりに来たエプロン姿のおにいさんに、味噌ラーメンとタン麺を頼んで二人で水を飲む。

そうしてからふうと息を吐いて、いずみが、

「好きな人にも絶対に好きだなんていえないし、ばれたくもない。

見栄っ張りって言うかさ自信がないって言うか」

いずみの言葉は里奈も自分のそれとして口にできるほど身にしみている。

「……わたしも好きな人いるけど、そのひとは絶対に言えないな」

「英彰君？」

「ちがう。べつのひと」

いずみは目を見開いた。

なんで誰も彼もわたしと真崎を結びつけるかな。

いずみの視線を受け止めながら、手持ち無沙汰を感じた里奈は割り箸を2膳取って、一本をいずみに手渡した。

「でも、なんだか最近好きになって欲しいとか、そういうの超越しちゃった感じなんだ。見てると好きだなあってしみじみするけど、前みたいに切羽詰った感じはないの。片思いに年季が入ったのかも」といずみはせせら笑った。

「飽きてきたんじゃない、単に」

飽きたという言葉に里奈は力チンときて、微妙に目を据えた。

このあたしが、聡明のことを飽きるもんか。

クリスマスだ、七夕だとイベントがあるたびに真っ先に思うのは聡

明のこと。

口紅を選ぶ時だって聡明が好きそうな色を探してしまったり、ノート
の端に書かれた聡明のらくがきはたとえアホたれーとかいう
ふざけたものでも宝物だ。

ただ、前より落ち着いてきた感じがするだけ。

「わたし、好きな人いるんだ、じつは」

「実はって」

いずみの唐突な言葉に真崎英彰のことだろうと里奈が安直に思うと、
いずみはそれを読んだようににやりと笑う。

「英彰君じゃないよ」

「へっ?」

「英彰君のこと好きな女のコいっばいいるけど、本当に好きなのは
どれくらいいるのかなあって考えるとときがある」

「……」

「英彰君も案外そういう部分わかってて、そっけないのかもしれない
い。野々村さんには意味もなくかまってみせたり可愛いところあんの
にね」

「イヤ、それは」

「英彰君ってさ、昔からバカ正直なのよ。中学のとき彼女できたときも
浮かれてたもん。一つ上の先輩好きになって、気持ちを隠そうとしないって
いうか、いつも笑っててさ。性格なんてそうそう変わるもんじゃないでしょ。
今だって彼女できたりしたら、浮かれて歩いてるはずなのに今、全然笑ってないよ」

「ラーメンがやってきた。」

いずみはさっさと手を合わせて、どんぶりに箸をつける。

里奈はそんないずみのことを眺めながら、実にフクザツで。

「奥澤さんがわからない」

「ん?」

「なんであたしに真崎の話するのか、わかんない」

「わたしね、英彰君の好きな人が野々村さんならいいなあって思っ

てんの」

「な、なんでよ」

「野々村さんならいつかー、みたいな気持ちあんの。英彰君のタイプの女の子だって納得できるから」

あっけらかんと言われて、絶句する里奈を尻目にいずみは割り箸の先を里奈に向けて、

「中学のときの英彰君の彼女、野々村さんに似てるよ、雰囲気。学級委員とか必ずやってるタイプだったけど、威勢が良くて」

「……」

なんだろう、真崎の前の彼女と似ていると言われて、気分が滅入ってきたのは。

そんなことを感じながらラーメンをつついてみても、口に運ぶ気になれなくて。

「英彰君、さっさ野々村さんのところに来たでしょ？」

「うん」

「あれ、偶然じゃないよ」

「……」

「英彰君、いつもBの前の階段を使うでしょ？ Dの前なんか通らないのに、通ったのは、野々村さんがいたからよ」

「そんなことないよ、奈津美がいるからだよ」

「英彰君、しばらく野々村さんのこと見てたもん。突っ立ってどこ見てるんだろうと思ったら、掃除ロッカー相手に不機嫌そうにモッブでガンガンやってた野々村さんがいたんだもん」

なんともいえない気分だ。

恥ずかしいのと、照れくさいような、くすぐったい気持ちと。

「英彰君よりもかつこよくないのに、なんかね。気になる奴がいるから、こんなこと思うのかもしれないけど……。余計なおせっかいだって英彰君に怒鳴られそうだけど。最近、英彰君見られないからさ。いろいろと事情もあるんだろうけど、野々村さんも優しくしてあげてよ」

箸の動きを止めて、里奈は唇をちいさく噛む。

ごめんねって思った。

真崎にはやさしくしてあげられないの。

そんなことする資格ないの。

「あたし、根本さん嫌いだけど、かわいそうだなって思う。英彰君はどう見ても野々村さんが好きなのに。一生懸命じゃないあの子なりに。最低なことしてる英彰君見たくないから尚更あの子のことイラつくのかな。そうなるなら八つ当たりだよな」

「真崎の話、やめようよ」

「え？」

里奈はいずみから視線をはずしてそうつぶやいた。

あかん、泣きそうだ。

いずみの言葉を聞いていると、自分のしたことの酷さが身にしみてくる。

真崎も傷つけた、奈津美にも誠実じゃない。

なにやってるんだろう、あたし。

本当はこんなことをしているはずじゃなかった。

「野々村さん、すこーし、英彰君のこと気になってるでしょ」

「そんなことないよ」

そっけなく言い返すと、いずみは肩をすくめて再びラーメンを食べ始めた。

「食べないとのびるよ」

「うん」

真崎のことなんて好きじゃないし。

奈津美は大事な親友だし。

やさしくなんてできないよ。

「奥澤さんの好きな人ってどんなひと」

いずみは軽く里奈をにらんで、ニッと笑いかけてきた。

「おしえないーい」

夏休みが1週間後に始まる。

うっとおしい梅雨も明けたし、期末テストも終了した。それでも浮かれていられないのが受験生。

高校でも希望者のみ夏休みの午前中、夏期講習を行う。

真夏の暑い中、クーラーなしで4時間もがんばれるか、それとも予備校の快適なクーラーで午前中といわず一日を過ごすか。

いろいろと迷ったけれど、学校の夏期講習を受けることにした。訊いてみれば大野涼子委員長も学校の夏期講習を選択したそうで、奈津美がまたもすねそうだと里奈は内心ため息をついている。

「里奈、放課後図書館で宿題やってるの？」

昼休みに奈津美にそんなことを言われて、里奈はうんと返事をしただけで済ませた。

奈津美は里奈よりも彼氏を優先していることに後ろめたさを感じているらしく、里奈の放課後の動向をなにかにつけて気にかけてくる。

確かに、奈津美と英彰が付き合いだしてから放課後、家教の日以外は図書室で宿題を片付けてから帰ったりすることが増えた。

そうすると、例のふざけた根性の持ち主・小関輝樹なんか冷やかしに来て、里奈をイラつかせては楽しそうにケタケタ笑う。

今日も目の前には小関がいてああだこうだと話しかけては、里奈のこめかみに血管を浮き上がらせていた。

「でえとしましょーって」

「しません」

「それじゃ、勉強会」

「ばかいつてんじゃないわよ」

「俺の家庭教師になってくださいよ」

「あのねえ」

もっていたペンをパチンと机に弾くように置いて、里奈はじろりと小関をにらみつけた。

「それ以上、なんか言ったら叩くからね」

「叩く？」

問い返した小関は目をくりくりとさせて、あははと明朗そのものに笑って見せた。

「叩くつて、先輩、かわいいなあ、叩くだつて」

コノヤロオ、と里奈が腰を上げて本気でノートを振り上げたとき、避けるしぐさをして身をそらした小関があっ、と呟いた。

「真崎先輩だ」

「エツ？」

ほら、と図書室のドアを指差した小関の表情はなぜか不快そうに見えた。

「珍しいじゃん、校内で2ショット」

「りなー！」

英彰の隣には奈津美がいて、ニコニコと手を振つてとことこと歩み寄ってきた。

英彰はその場に足を止めて、こちらを伺いながら所在なさげにポケットに手を入れたりしている。

「図書室にいるかなあつて思つて」

「どうしたの、びっくりした」

「真崎も今日は塾ないんだつて。いっしょに勉強しよ」
アタタ。

無邪気に奈津美は言ってくれるけれど、里奈と英彰には痛い話だ。ちらりと里奈は英彰に視線を送った。

少しだけ彼に腹が立った。

なんでわたしがいるところに奈津美と来るかな。

「ごめん、わたし一人で勉強したいんだ。今暗記してて」
「え、暗記？」
「うん」

本当は古文の問題を解いていた。

古語辞典を片手に問題集に取り組んでいたので、暗記ではない。

「……そっか。そっかあ……」

奈津美が残念そうに頭を垂れるのをなんともいえない後ろめたさで眺めて、里奈はごめんね、とつぶやく。

すると奈津美はにっこりと笑って、胸の前で両方の手のひらを振ってみせた。

「いきなりきちやったわたしも悪いんだよね、ごめんね」

奈津美の視線が小関君に何気に向けられている。

小関は奈津美と目が合うと、ニコツと笑ってみせたりして。

「ち、ちがうよ、奈津美」

「わかってる、うん」

「ほんっとーに違うからね」

「わかってるよ。里奈は聡明先生だもんね」

「へッ？」

奈津美はわかってるよん、と里奈の肩をぼんぼん。

「里奈はつきり言ってくれないけど、里奈のことはわたしがいちばんよくわかってるもん」

「……あ、バレてたの？」

わざとらしくおどける里奈を小関が胡散臭そうに見上げて、そして、鼻で笑った。

いつの間にか英彰は、里奈たちからいちばん遠くで空いていた机に座って、ノートを広げたりしている。

「あ、ほら真崎がまつてるよ」

「う、うん。あの今日、一緒に帰ろうよ」

「うーん、考えとく」

奈津美が英彰のところに向かうその後姿を眺めながら、小関が言

った。

「相当おめでたいですね、あのひと。女子高生かくあるべき、みたいな。かわいいなあ」

「奈津美のこと、それ以上なんか言ったら殺すよ」

里奈は古文の問題集に視線を落としながら、ペンを握り締めて静かに言う。

「女の友情は、殺人までやるんですか」

「あなたにはね」

「俺、マジであのひと可愛いと思いますよ」

「ふうーん。でも、だめだからね。真崎がいるんだから」

「素直で可愛くて、守ってあげたくなるような女の子。でも、ああいうタイプがいちばんアレですよ」

落としていた視線を上に向けて、里奈は小関を見つめる。

小関の目線は英彰と奈津美の姿に向いている。

追うように里奈も、彼らが肩を並べて真ん中に置かれたひとつの教科書を見ている様を見つめてしまう。

「独占欲が強くて、すべてを自分の物にしておかなければ気がすまないんですよ」

「殺そうか？」

里奈が物騒なことを口にしたので、小関が肩をすくめる。

「どうしてそこまでお友達のために」

「友達だからよ」

「損なタイプですね、野々村先輩」

言われながら、里奈の目は奈津美と英彰を見ている。

友達は今、自分のそばにいないで、別の人という。

そして。

英彰が腕を伸ばして、奈津美のノートに何か書いている。そして、二人で笑う。

胸が痛んだ。

やりかけの古文の問題集。

あたしはコレをさっさとやり終えてここから出て行かなきゃ。

自分に言い聞かせて里奈は、ペンを握りなおす。

「なんていうか、先輩けなげでむかつきますね」

からかいをのせながらも、小関の声は乾いている。

里奈はそれを無視した。

「面白くないからって、俺に八つ当たりするのやめてもらえます?」

「……」

「あ、やっぱりいいですよ。八つ当たりしても」

里奈は小関を睨む。

「静かにしてくれない?」

「はい」

「どこかに消えてくれてもいいんだけど」

「それはだめです」

「どうして」

小関はおどける風に腕を広げる。

「俺がこうしていれば、先輩の視界からあの二人を遮れるでしょ。」

俺がいなくなったら風通しが良くて良くて」

「ばか」

たしかに英彰が座ったのは、里奈のいるところから離れているけれど、正面だから向かい合っているようなもの。

「俺が先輩のこと隠してあげます。なんでどーぞ、その雨月物語に全力投球してください」

痛いよーってうずいていたキモチがほんのりと暖かくなる。

それでも、この小関君の前では素直に笑えずに、里奈はそっぽをむいた。

「暇人」

「おれ、ジョン・レノン好きなんですよ」

「?」

「イマジン」

「……ごめん。オヤジギャグだったんだね」

「ワカモノぶらないでもらえます?」

里奈はくすりと笑った。それを見て小関も笑う。

「ばかね、と、もっていたペンで小関の頭をこつんと叩いて、里奈は胸の中でありがとうと彼に頭を下げる。

見えないようで、見える里奈の姿を、頬杖をついて斜めに上がった視線で英彰は見ている。

小関の頭をペンでこつんとやって、照れくさそうなはにかんだ笑顔を浮かべる。

その笑顔には見覚えがあつて、英彰の胸がざわざわとした。

ほんの少し前、桜の季節のころには自分に向けられていたそれ。

まぶたを閉じることで、里奈の姿を見ないことにするのに、残像がある。

奈津美がとなりで、小鳥みたいに可愛い声で話している。

その声を聞いていると、ささくれ立ちそうな気持ちをおしとどめようという理性が働く。

でも、何を話しているの、君は。

そんなに楽しそうに、俺になにを言いたいの?

ごめん、また聞き流してる。

なんの因果か奈津美が隣を歩いている。

駅までの帰り道、女の子同士の久しぶりの意味のない言葉のやり取りに奈津美はうれしそうだ。

しかし。

里奈の背後には小関がいて、そのとなりには英彰がいて。

英彰の不機嫌が背中に伝わってくるみたいで、居心地が悪すぎる。

石畳を模倣したコンクリート張りの歩道を歩いていると、駅が見えてくる。

「里奈、今日、聡明先生来る日だっけ？」

「ううん。明日」

「あれ曜日変わったの？」

「うん、聡明が仕事を始めてね、忙しくなっちゃったから、スケジュール変更。でも週2で来てくれるから」

「大学院やめちゃったの」

「ううん。院に行っても仕事できるんだって」

「ふうーん」

奈津美がふと、後ろを振り返って英彰を見る。英彰は奈津美と目が合うとにこりと口元で笑って見せた。

それを小関があきれたような目で見て、

「キモイな」

ぼそりとしたつぶやきに、英彰が睨んで返す。

無言で睨まれて、小関はフン、とせせら笑って返した。

その態度が癪に障って、英彰はますます不機嫌になる。

で、小関から目をそらせば里奈の背中が見えて、なんてこったと頭を抱えたくなる。

なんでこいつらと一緒に帰らなければならぬのか。

ましてカメラ小僧とは冗談でも並んで歩きたくないというのに。

「根本先輩、たのしそーっすね」

小関の言葉に奈津美が振り返った。奈津美は人見知りをする。面識の浅い小関にはまだ緊張するようで、頬をわずかに染めながら、

「そ、そうかな」

なんて愛らしく首をかしげる。

「そんなに好きならずっと野々村先輩といればいいのに」

「えっ？」

返答に窮したらしい、奈津美は言葉を返せない。

見かねて里奈が、

「彼氏がいるんだから、余計なこと言わないの」

「あ、怒ってますね。彼氏いない人が」

「うるさいわね。余計なお世話よ」

「だから、俺がなつてあげますって」

「いらないっ」

「照れちゃってー」

「バカじゃないの?!」

里奈が半分ムキになって言い返すものだから、小関は面白くて仕方ないというようにぼんぼんと言葉をなげてる。

「うるさいっ」

里奈がとうとう一喝した。

でも、小関はにやにやと笑って腕を頭の後ろで組んだりして余裕綽綽。

「怒った顔も可愛いです。カメラもってないのが悔しいっす」

カメラと言われて里奈は改めて小関の手元を見た。

「そっいえばカメラどうしたの？」

「いつも持ち歩いてるわけじゃないですよ。でも、まあ、小さいのだったりすれば、ほぼ毎日持ってますけどね。愛機はメンテナンス中なんですよ」

「メンテナンス？」

「レンズがね、傷ついちゃって」

「え、修理ってこと？」

「うん。だから寂しいの、小関君」

「あんたって奴は」

里奈の同情の目は、次の瞬間半分になって据わってしまった。

「慰めてほ・し・い」

なんて言いながら、里奈の背中に抱きついて後ろから腕を回してぎゅ、なんてしたので。

「なにすんのよ、この変質者!」

「いてっ」

里奈が叫んだのと、小関の悲鳴が上がるのはほぼ同時だった。

小関が離れてくれたのにほっとしながらも、まだ振り払うこともしていないのにと里奈がきよとんとすると、英彰が低い声で、

「いい加減にしろ、バカ」

小関が後頭部を抑えて、英彰にブツブツ言っている。

「すぐ暴力ふるうんだから」

「どうやら英彰が小関の頭を張り倒したらしい。」

英彰はイライラしている様子で前髪をかきあげて奈津美に言った。

「根本、俺、先に行く。こいつといると、イラついて仕方ない」

「あら、大人気ない」

「金輪際、俺の前に姿見せるな」

「見せたらどうなるんですか？」

「自分で考える」

英彰は奈津美の肩先を追い抜いて、足を速めてしまう。

奈津美が眉を寄せているのを見て、里奈は言った。

「追いかけたら」

「いい。今のは真崎のワガママだもん」

「おお、強気ですね」

「黙んなさい、全部あんたが悪いんじゃない。ふさげ過ぎ」

奈津美はため息をつきながら、

「いちばん好きな二人が仲良くないのは、寂しいな」

なんて言う。

里奈の表情が止まってしまふ。

叩かれたところをさすっていた小関の手の動きも止まってしまった。

「里奈、真崎と仲良くしろとは言わないから、普通に会話とかできない？　なんか二人して避けあってるんだもん。ツライよ」

ハイ？　と小関が耳を疑うしぐさをする。そんな彼をひと睨みして黙らせた後、里奈は口ごもりながら、

「ごめん、なんかうまくいかないの。よくないのはわかるんだけど」

「あのさ、根本先輩。野々村先輩困ってるよ。できないことはでき

ないんだからさ」

小関が冗談っぽく言って、奈津美に笑いかけた。奈津美は納得できないらしい。

「無理強いはなんでもよくないよ。先輩」

駅について、英彰がベンチに座って足を組んでいる姿を見つけた。ついでに腕も組んで下を向いていてさらに眼鏡をはずして目を閉じている。

「寝てるんですかね、あれは」

「さあ？」

里奈と小関が首を傾げあうのを聞きながら、奈津美は胸に広がる嫌な感情を押さえつけようと必死になった。

色で言うなら、それは灰色、夕立が来る前の雲の色。

なんで、真崎は里奈のこと避けてるの。

なんで、真崎は里奈にじゃれつく男の子に苛立つの。

その疑問に対して、奈津美の中にはちゃんとした答えがある。

でも、それを認めてしまうのは辛すぎるから、仲良くして欲しいとしつこいくらいに思うのかもしれない。

里奈も好き。わたしを大切にしてくれる。

真崎も好き。理想そのものの男の子だから。

どっちも好き。

好きなのに。

4時間目が終わって昼休みになると、里奈の机の前には涼子と奈津美がやってきた。

「ねえ、3人で外で食べようよ、天気もいいし」

奈津美が里奈のシャツをつかんで甘えたような声を出す。

涼子はちよつと待て、と腕を組む。

「いやよ、外なんて暑いし、紫外線は女の敵」

「日焼け止めかしてあげるよ、大野」

「野々村は根本に甘いんだから」

やきもちを焼いているとか何とか言いながら、奈津美は涼子にもなっている。

里奈がお弁当バッグをつかんで歩き出そうとしたときには、奈津美は涼子の腕にしがみついている。

「暑苦しい」

「仲良くしようよ、大野。あと3日で夏休みになっちゃうんだよ」

「こーゆー仲良しの仕方はイヤ」

「野々村さん」

呼ばれて振り返ると、奥澤いずみが固い表情で入り口から歩いてくる。

「あ」

いずみを見つけて笑顔を浮かべた里奈だが、彼女がどうしてか怒っている様子なので、腰が退けてしまう。一緒にラーメンを食べて以来、いずみとはぐつと距離が近くなって携帯でメールのやり取りをするまでになっただけだ。

いずみは里奈の前に立った。その様子は仁王立ちにも近くて里奈をはじめ、奈津美が怯えるほどの勢이었다。

そんな彼女に涼子が、

「どうしたのよ、血相変えて」

「どうしたもこうしたもないわよ。英彰君の志望校、地元は本命の1校だけ、あとは全部関西方面に変わっちゃったって」

「は？」

里奈がぼかんとする横で、奈津美が顔色を変えた。

いずみはなおもたたみかける。

「福岡だとか、名古屋だとか、大阪だとか、京都だとか、とにかくここから離れるところばかりよ。どう思う？」

「ねえ、それ本当なの？」

奈津美が口元に手をあてて、いずみに問う。

「本当よ。あなた知らなかったの？」

彼女なのに。

いずみの目がそれをありありと述べているから、奈津美は唇を引き締めて目をそらした。

傷ついた奈津美は泣きそうな顔をして、

「わたし、訊いて……」

と、つぶやきかけた横で、里奈が無表情になっていた。

そして、低い声でつぶやく。

「あのバカ」

「どこいくの、里奈」

里奈は返事をしなかった。

正確には頭に血が上って、聞こえなかったというのが正しい。

里奈はお弁当バッグをもったまま、歩き出していた。

それも競争に近い勢いで教室を出た。

呆然と里奈の背中を見送った奈津美のそばでは、涼子といずみが意味ありげなアイ・コンタクト。

「泣かないでよね、根本」

「泣かないよ」

むっとしたように奈津美が言い返した。

いなくなってしまうた里奈の背中を追いかけるようにいずみが首をひねって、

「野々村さんも唐突ね」

「もともとあーゆーキャラよ、野々村は」

淡々とそんなことを語り合う二人の間で、奈津美は嫌な予感を抱え込む。

それは今までにも何度となく感じてきた種類の重たい感情。

あのバカ。

廊下を闊歩する里奈の頭の中はそれだけ。

迷うことなく彼女は特別教室の4階を目指している。それも生物室。あの日以来、近寄りたくもなかった場所だったのに里奈は勢いよく扉を開けて、確認することもないままに声を張り上げた。

「真崎！」

窓際に椅子を二つ並べて窓の枠に腕をのせて外を見ていた英彰の背中がびくりと強張った。

ナニゴトかとおそろおそろ振り返った彼の表情は、里奈の剣幕に一瞬圧倒されたらしい。

素直に驚いていた。眼鏡が半分落ちるほど間の抜けた顔で。

しかし、そんな彼にお構いなく里奈は歩み寄って、怒鳴りつけた。

「関西つてなに？ 志望校！」

英彰の眉がひそめられた。

なんだそんなことかと言いたげに眼鏡を指で押し上げて、再び窓のほうを向いた。

生物室には英彰だけしかいなかった。

数名ががらりと戸を開けては、英彰がぼーっとしているのに驚いて、すすすごと戸を閉めてどこかに行ってしまった。

戸ががらりと開いた瞬間に振り返ったとき、冷ややかににらみつけたからだということの意識は英彰本人にはまったくないけれど。

「情報が早いな。提出したの朝だったのに」

「どづいうことよ」

怒っていますと顔に書いて、睨んでくる里奈に英彰は冷たく言い捨てる。

「野々村には関係ないだろ、俺の進路なんて」

そう言われて、里奈ははっと我に帰った。

カーツと昇っていた血が、すんと下がっていったみたいに。

勢い込んできただけにその脱力感はずさまじいものがあった。

里奈は近くにあった椅子に腰を降ろして、頭に手を乗せた。

「……ごめん」

「いいけど」

英彰のほうも、なんだか気の抜けたような顔で窓枠に腕をのせて、頭をのせた。

茶色の髪がさらりと揺れて彼の目を半分隠す。

そんな彼に里奈は尋ねた。

「ねえ、お弁当食べていい？」

「……」

英彰は頭を起こして、無言であたりを見回した。

蛙のホルマリン漬けやら、人体模型の標本やらがあったりして、なかなか不気味なこの教室で、それを言うかこの女は。

「いいけど」

「ありがと」

里奈のほうはそんなことに気がつかなかったと言うか、回らなかったというか、とにかく勢い込んでここに来てしまった気恥ずかしさとかで混乱していたし、お腹がすいていたことに気がついてみたらそっちのほうが一番先になっちゃったというか。

なぜか立ち去り難い、そんなキモチもあって。

机にお弁当箱をのせて包みを開きながら、里奈は英彰に尋ねた。

「真崎、お昼は？」

「パン食ったよ」

「ふーん。いただきます」

英彰はあきれたように里奈をながめて、それからため息をひとつついた。

何か言いたげな口許は、つぐんだまま。

里奈は里奈で、もくもくとお弁当を食べる。

奇妙な沈黙が漂う。

やがて、英彰が視線を窓の外に向けた。

彼が前髪をいたずらする風にイラついたように額を押さえたりしている間に、里奈は食べ終えてちゃっちゃとお弁当箱を片付けて、澄ました顔で水筒に入っていたお茶を飲む。

「なにそれ」

「冷水緑茶。真崎も飲む？」

「いい」

頭をふる英彰の横顔を里奈は無意識に見つめてしまい、我に帰ってあわてて視線をそらした。

動悸がわずかに早くなったことをもてあましながら、冴えない顔をしているなあと思ったり。

訊きたい事や言いたいことがたくさんあるのに、今はそれを口にするのはためらわれた。

不思議と英彰も口を閉じていて、無難なことしか言わないし。

この空気を壊したくないからかもしれない。

お茶を飲み終えて、里奈は水筒もお弁当バッグの中に収めた。

ちやうど昼休みの終わりのベルが鳴り、二人は目と目を合わせ、そして、

「5時限目、はじまるね」

「うん」

「行かないの？」

「気分じゃない」

そう、と里奈はうなずいた。
気分じゃないという、英彰のその感覚が理解できる自分が不思議だった。

普段の里奈なら授業をサボるなんてもつてのほかなんだけど、里奈は座ったまま英彰の背中を見ている。

「行かないの」

言われて里奈は虚ろにうなずいた。

「気分じゃないから」

英彰も先刻の里奈のようにうなずいて、目を伏せた。

「そこで寝るの大変じゃない？」

目を閉じたまま英彰が眉をひそめて、半分恨めしそうに振り返ってきたので、里奈はきよとんとする。

「寝てないよ」

「ごめん」

そうやって頭を伏せる彼の眼鏡が半分ずれていて、少々お間抜けなのが笑えたけれど、笑うとさらに怒られそうなので黙っておく。

でも、どこかに行けとは言わないんだね。

そう言わない君も不思議。

どこかに行こうとしないわたしも不思議。

そうやってボーっとして過ごすこと30分。

校内にいながら授業をサボったのははじめてなのに、焦ることもなく窓からそよいでくる風を頬に感じてぼんやりしている。

そんなことをしていたら、英彰が、

「5限終わったら、保健室に行けよ」

「どうして」

「サボったのフォローしてくれるから」

「ホントに？」

「うん。無駄に教師に怒られることないよ」

「真崎はどうするの」

英彰は答えない。去年、同じクラスだったときも彼は突然消えて、次の授業にふらりと姿をみせることがあったっけ。

「どうして、サボるの」

「授業中に暴れたくなるから。やるバカがいたら迷惑だろ、かなり」
「……」

今のは本気なんだろうか。

わからん、コイツ。

廊下にカツンと足音が響いた。

英彰の背中がぴくりとして彼は身体を起こした。

サンダル音だ、と里奈も表情を硬くする。

二人で教室の戸を見つめて、そして、英彰が立ち上がる。

「話し声聞かれたかもしれない。こっち」

落とした声で眼鏡を上げながら、英彰は里奈を手招く。

里奈は慌てて彼についていった。

授業をサボっていることが現行犯であればたら、さすがにまずい。

もともとの生真面目さ、優等生気質がむくむくとわきあがってきて、里奈は不安でいっぱいになる。

黒板の横にあるドアを開く。

生物準備室と書かれた小さな物置と化している部屋に足を踏み入れて、里奈はうつ、と口元を押さえて英彰をにらんだ。

入るとすぐに、雉らしき派手な鳥の剥製が羽を広げていたのだ。

里奈がびくついていているというのに、英彰はお構いなしで足を踏み入れて、ざっとあたりを見回すと清掃用具入れの扉を開けた。

中に入っているバケツやら、モップやらを音を立てないように慎重に取り出してそれを戸棚の陰に置く。

そして、里奈のシャツの背中中の辺りをつかんで引っ張った。

入れというらしい。用具入れの中と英彰の顔を交互に眺めて、混乱している里奈の背中を英彰はじれたように押し込んだ。

「ぼーっとしてんなよ、俺も入るんだから」

「えっ?! あんたみたいに図体でかいのが入れるワケ?」

「俺だつて見つかりたくないよ。やせるよ、瞬間的でもいいからやせるだろ?」

言い返してやるうと息を吸い込んだとき、ガラツと勢い良く扉が開く音がして、里奈は文字通り飛び上がった。

「誰かいるのか?!」

英彰はさっさと身体を滑らせてきて、とても自然に里奈の肩を抱きこんで、そおつと扉を閉める。

暗くなつた狭い空間のなかで、身をこわばらせる里奈の頭の上から英彰が押し殺した声で言う。

「もっと、こつち」

「え?」

顔を上げて驚いた。英彰が見下ろしていたので、思いのほか顔が近くにあったので。

英彰は背が高いから、身をかかめていないとツライらしい。

慌ててうつつむいたとき、背中に彼の腕があることに気がついた。けれど、それよりも壁の向こうから聞こえてくる男性教師の声や足音への恐怖のほうが強かった。おびえというよりは今の里奈には恐怖に近くて、立っていることも正直辛い。

そこに来て、準備室のドアを開ける音も聞こえてきて、里奈はますます身をこわばらせる。

「気のせいかな、あれ?」

教師の声が近い。その声は教頭先生の声に似ている。

背中にあった腕に力が込められて、引き寄せられた。

驚いて顔を上げると、耳元で英彰がささやくように、

「大丈夫。すぐに出て行くから」

言われて、少しだけ怖さが和らいだ。抱き寄せられたから里奈の額は英彰の胸の辺りにある。

夏服のシャツのポケットはそこにあつて、何かがある硬い感触もある。

るのに、とてもよく心臓の音が聞こえた。

それを聞いて里奈はくすりと口元だけで笑った。自分のそれと同じくらい速かったから。

足音と気配が遠くなつて、英彰の腕から力がわずかに抜けていく。里奈がほつと安堵して頭を上げたとき、背後にぶら下がっていた椅子とりを引つ掛けてしまったらしい。

「がたん、という音。」

「バカ」

英彰が舌を打つのと、教師の声がしたのは同時だった。

「誰だ?!」

蒼白になつて息をのむ里奈。

英彰は急いで扉を開けて、外に出た。

「真崎?」

何をしているのを目を見開く里奈に英彰は早口で言った。

「一緒にいたと思われると迷惑だから出てくるなよ」

用具入れの扉をさっさと閉めてしまった。

呆然とする里奈の耳に、教師の怒声が聞こえてきた。

「授業中だぞ! なにをしている!」

はらはらとしながらそれを聞いて、いつそのこと飛び出してやろうかと思つたけれど、英彰の最後の言葉がそれを押しとどめた。

激しい自己嫌悪。

「どうしよう」

やがて、静かになつた。

英彰は職員室に連行されたらしい。

そつとドアを開けて、里奈は用具入れから出た。

そして、その場にへたり込む。

顔を両手で覆つて、大きく息を吸つて、震える声を吐き出した。

「……なにやっつてんだろ、あたし……」

英彰に言われたとおり、保健室に行ってみたものの、うまい言葉が出てこなくてうつむいていたら、

「顔色悪いね、野々村」

平井養護教諭が言いながら額に手をあててきた。

熱がないだろうことを察して、彼女は里奈にため息交じりの優しいまなざしを送ってきた。

「麦茶のむ？」

いりません、と首を横に振ると、平井養護教諭は里奈の顔を覗き込んできて、

「野々村らしくないね。熱があつたりするわけじゃなさそうだから、寝てなくてもよさそうだけど」

「はい……」

「そこに色紙あるでしょ」

「はい？」

ボールペンでさされたところを振り返って、水色の大きな模造紙を発見した。

そして、平井養護教諭は机の中から太いマジックペンとプリントを取り出して、里奈に差し出した。

「この間の朝食に関してのアンケートの結果、ここにまとめてあるから、拡大して書き写して」

「はあ」

「さつさとやる」

「は、はいっ」

結局、6時間目もサボった。

平井養護教諭が担任に校内内線で野々村里奈は保健室にいますと連絡してくれたので、6時間目の始まりに担任が保健室にやってきて、椅子に座っていた里奈の顔色をみて、

「早退するか？ 野々村」

なんて言ってきたもんだから、里奈はぎょつとして、

「いえ、大丈夫です」

「でも、顔色悪いぞ。ココントコ暑いからなあ、暑気あたりしても仕方ないもんなあ」

「いや、ぜんぜんっ」

仮病なんです、顔色が悪いなんてことありえませんかっつてば。

「無理するなよ、大事な時期なんだから。でも、具合が悪いときは誰かに言ってから保健室に行きなさい。突然いなくなったかと思つて驚くから」

「はあ」

「もう少し寝ていれば、大丈夫と思いますよ。きつと寝不足と疲労からくる貧血でしょう」

ありがとう、ほけんのせんせい。

バカ正直に心配してくれる担任にももうしわけなくて、里奈はぺこりと頭を下げた。

と、いうわけで、せつせと里奈はポスター作りに励んでいる。

やるとなったら、一生懸命なのが里奈だ。

気分が滅入っていたこともあり、ことさら真剣にポスターに文字を書いた。

大きな定規を持ち出して、鉛筆で丁寧の下書きをして。

「こういう仕事やらせると、野々村はいいね。絵もなんか描いてよ」

「絵は苦手です」

「そっかー」

「でも、なんか貼ります。拡大コピーして色を塗ります」

「すばらしい」

教室に戻ると里奈はすばやく帰りの支度をした。いろいろと後ろめたくて、学校にいたくなかった。

それでも、英彰のことは気になって、3 - Aの教室をのぞいてみようか悩んでいたとき、姿が見えなかった奈津美が姿を見せた。

里奈を見ると、あっ、と口を開いて、駆け寄ってきた。心配そうに里奈を見上げてくるから、居心地がますます悪くなる。

「貧血だったって聞いたよ。昼休み保健室に行ってたの？」

「え？ う、うん」

顔では笑いながらも内心おろおろとしているから、里奈の返事はどうしてもぎこちなくなってしまう。

ごめんね、仮病なの、仮病なの。

「気分が悪いときとかはわたしに言ってよ。頼りないかもしれないけど、何かしてあげられるかも知れないんだから」

「ごめん」

「野々村ー！」

教室の入り口から低い声が聞こえて、里奈と奈津美が振り返ると、英彰の相棒の石河君が立っていた。

里奈のお弁当バッグを持って。

それを見た瞬間、生物室に忘れてきていたことを思い出して、アレレ？ と記憶をたどる。

とにかく彼に歩み寄ってみると、石河は里奈を廊下に呼びつけた。

ちらりと振り返って奈津美を伺うと、案の定怪訝そうにこちらを見ている。

廊下に出て、石河はお弁当バッグを里奈に渡して、

「真崎から」

「……」

ありがとう、と消えそうな声でつぶやく里奈。

「真崎、どうしてる？」

「ああ、真崎はサボリ現行犯で教頭に捕まったらしいけど、6限には戻ってきたよ」

「停学とかの処分は？」

「たかがサボりだからなあ。タバコやってたとかでもないし」

「タバコ？ あいつ吸うの？」

「家で吸ってんじゃないの？ 説教ですんだらしいよ」

「そっか……」

胸の痛みはまだあるものの、安堵したというのも本音。

停学とか親呼び出しとかになったらどうしようかとはらはらしていたのも事実で。

「ありがとう」

お弁当バッグを抱きしめて、石河が立ち去るの見送った。

一人になったら泣きそうだね、今のあたしは。

切実に聡明に会いたいと思った。

助けてって思った。

「大学のこと、知らなかった」

奈津美がかすれた声で唐突に言うから、英彰は無言のまま彼女を見下ろした。

駅までの道を一緒に並んで歩きながら、まともに彼女の目を見ることができないでいる。

進路希望調査紙を記入しているときも、提出したあとも。

奈津美のことなんて考えなかった。

とてもとても自然に頭に入れていなかった自分を知って、英彰はストリートにうろたえた。

自分のやっていることの、重さとやらがずしんと。

泣かせないと里奈に言った。

でも、泣かせなければいいだけの話ではない、そう、コレは。

このまま行くと、面倒なことになる。

単なる意地で始まったことに、巻き込まれてしまったこの女の子をどうすればいいんだろう。

とつさに感じた罪悪感と恐怖。

罪悪感はまだいい。

恐怖は卑怯者であることの証明なので、英彰は憂鬱になる。

「真崎？」

呼ばれながら、英彰はぼんやりと前を見ていた。

遠い目で返事もせず思い出すのは、午後の生物室。

抱きしめた腕にまだ残っている。

「真崎？」

苛立ちを含んだ声がする。

英彰は奈津美を見下ろした。

どうして君は、野々村里奈に告白の手伝いをさせたの。

ことの始まりはそれだ。

それを思ったとき、奈津美がどうしようもなく疎ましく思えた。

「なに？」

「だから、大学。地元は1校しか受けてないって」

「うん」

「それじゃ、卒業したら離れちゃうよ」

ああ。

英彰は頭を抱えなくなる。

泣かないでくれと頭を下げて拝み倒したい。

ここで泣かれたりしたら、いよいよ救いようがないじゃないか。

「第一志望に俺、落ちるみたいじゃない」

奈津美がはつとする。

地元に残した唯一の1校は、第一志望だ。

先輩には都村聡明さんが院生として住みつかれていらっしやる。

「あ、ごめん」

それから奈津美が口を閉ざして、なんとも重い沈黙だった。

もうすぐ駅になる。

その距離を目で測っていたら、突然、奈津美が言った。

「手、触ってもいい？」

「手？」

意味がわからず英彰は自分の右手と奈津美の顔を交互に見た。奈津美は真っ赤になっていた。

わけがわからず首をかしげたところで、私服姿の彼氏彼女が英彰と奈津美の間を突っ切っていった。

彼らは仲睦まじく手をつないでいる。

それも、自然に、当然のように。

なるほど、ようやく理解ができた。

正しくはつないでいい？ だ。

奥ゆかしいというか、なんというか。

単純なことだけれど、奈津美に対して苛立っていたことがすっと消えた。

今まで手なんてつないだこと、ないよね。

でもねと英彰は思う。

君と手をつないだり、キスをしたり。

僕からすれば、とても簡単にできてしまうといえれば、できてしまう。

酷いって君は思うと思うけど、ココロなんていらぬこともあるんだよ。

でも、君は。

野々村里奈の友達で、それが大きな壁になって僕を制止する。

手をつなぐことくらい、本当になんでもないことに見えるけど。

真崎英彰にとって、根本奈津美はこの世で一番壁が高い女の子だ。

迂闊に指の一本も触れられない、そんな女の子。

だから。

「手なんか、触ってどうするの」

笑い飛ばすことにする。

英彰が笑うと、奈津美は彼にあわせるように笑った。

「そ、そうだよね」

歩道の石から強烈な太陽の照り返しを受けて、尚更暑い。

制服の袖で頬に流れた汗をぬぐい、眼鏡を押し上げた。

夏休みは予備校の夏期講習に行く予定だから、こんな暑さに我慢することはできない。

そう。夏休みになる。

里奈とも奈津美とも会わなくてすむ。

今よりは楽になれるはず。

度のないレンズ越しに、ゆらりと揺れる空気を見て、英彰は眼を眇めた。

あんなにそばにいて、気持ちが悪転するなというほうが無理だ。

震えているのがわかった瞬間、愛おしくて抱きしめてしまった。

だから嫌われるんだな、俺は。

衝動を押さえられない自分の幼さとか、気持ちはまだ冷めることのできない惨めさとか、いろいろとあって、混乱していた英彰の思考から抜けていたことがある。

里奈がなぜ、生物室に現れたのか。

> 5 <

夏休みに入って、最初の家庭教師のお時間はコレだった。

「夏が来れば思い出すー、地獄の模試、中井塾」
お気楽大学院生がそんなことを歌いだすから、里奈は脱力して机に

突っ伏した。

「やめてよ、頭が腐る〜」

「2番もあるんだぞ」

「いいよ、歌わなくて」

里奈は恨めしげに聡明を睨んだ。

テキは学習机に座る里奈の背後にいて、まるで覆いかぶさるように手を机についている。

聡明からすれば、単に里奈の開いている参考書をのぞいているだけなんだけど、毎度ながらこの体勢は心臓に悪い。

「浜崎先生のほうがいいな、もー」

苦し紛れに出た言葉。

すると聡明はぱこんと里奈の頭を叩いて、

「あいつは今それどこじゃねえよ」

「浜崎先生、忙しいの？」

「ああ。なつがくーれば思い出すうー、癒しの模試、正文社〜。正文社つけとけよー」

「研究とか？」

「ああ、いろいろあつてな、総合模試が君を呼んでる 私大模試は現場で受けて〜」

「聡明、それ誰が作ったのよ」

「受験生の前で歌っちゃいけねえ歌つつのもあるんだぞ」

「聴きたくないけど、なに」

「中森明菜のデザイナーって歌があるんだけどな、それがまた……」

「知らない。なにそれ」

「きいたことねえのかよ。まっさかさーまーにー 落ちて受験生

炎のよーおーに燃えて受験生」

なんとも調子の外れた聡明の歌。

なんとも言えない気分で里奈は頭を抱え込んだ。

聡明が変だ。

見た目はいつもと変わらないのに、変。

里奈は聡明を見上げて、まじまじと観察してみた。

聡明は顔を半分参考書で隠しながら、渋い表情で首をひねっている。自分でもおかしいと気がついたのかなあ……。

「聡明、カゼでもひいたの？」

「イヤ、寝不足で頭が無駄にハイなんだ。ワリイ、べんきよーすつか」

「うん……」

寝不足くらいでこんなになるの、聡明は？

「どれくらい寝てないの」

「3日くらいか」

「へッ？」

「1日1時間くらいは寝てるから、気にすんな」

「なんで」

聡明はゆるく笑った。笑って、里奈の頭をぽんとやさしく叩いた。

「勝負してんの。俺も結構がんばってるから、お前も頑張んな」

わけがわからず里奈は聡明を見つめた。

「勝負って、誰と？」

聡明の目から笑いが消えた。

いつもニコニコして冗談を飛ばしている聡明がそんな顔を見ると、焦るというか、どきりとする。

思わず息を詰めた里奈に、聡明は低い声で言った。

「 浜崎佳乃」

その真剣勝負の内容とやらは聡明は明かしてくれなかったけれど、聡明はかなり本気らしい。

おせっかいは里奈の性分で、気になるときはどうしようもなく気になる。

まして、聡明のこと、佳乃が関わるときたらとても気になる。

聡明には絶対に訊くことができない、そのことの成り行き、でも気

になるったら気になるったら。

そこで佳乃にどういうことになっているのか訊いてみたくなり、以前渡された手作りの名刺を机の上のせて思い悩むこと1時間。

浜崎 佳乃

K大学理工学部建築環境研究室

時計を見ると、もう11時を回ろうとしていた。幸い明日は土曜日、ガッコの夏期講習も休みだ。

「明日にしよう」

にしても3日ほとんど寝ていないって、どういう勝負なんだろう？

翌日の午前中、里奈は携帯電話に登録した浜崎佳乃の名前を見ては何度もため息をついていた。

悩んでいても仕方ないよね、と思い切って電話をかけてみたけれど、なかなか佳乃が出てくれない。

呼び出しが10回を数えたあたりで、ようやく、

「もしーもし？」

と、いつもの佳乃らしからぬ、どんよりとした声が。

里奈は目を丸くして、耳を疑いながら、

「浜崎先生ですか？」

「ん？ わたしを先生と呼んでくれるのは……野々村里奈ちゃんですか？」

「そ、そうです」

「ドーシマシター？ なにかアリマシタカー？」

「……」

携帯電話を耳に当てながら、里奈は半分泣き顔になっている。変だよー、浜崎先生、変だよー。

声がまっすぐだよ、抑揚つてもんがないよー？

夕べの聡明なんか比ではないほど、彼女の様子は変。

「あ、あの」

「なあに？」

「い、生きてますか？」

確かに佳乃に訊きたい事を的確に表現した言葉だけれど、言っちゃまってからしまったと思つて、里奈は青ざめた。

佳乃からの返答はしばらくなくて、

「……生きてるといえば生きてるな。里奈ちゃん、いまなんじ？」

「10時過ぎたところです」

「何日？」

「はっ?! いや、あの7月23日ですけど」

「23日……あ、まだ23日なんだ。良かった」

聡明が昨日の時点で3日まともに寝ていなかったとして。

現時点では4日目を迎えているはず。

4日もまともに寝ずに人間、生きているものなのだろうか。

「お邪魔していいですか、先生のおうち」

「んー、今、凄い有様なの。びっくりしちゃうと思うから、今度で

いいかなー。ごめんねー」

「気にしませんから、先生の邪魔もしませんから、今から行つてもいいですか」

「……どして？」

なんでつて、アナタがとつても変だからです。

「いいけど……うちわかるの？」

「ごめんなさい、わかりません。おしえてもらえますか。住所と最寄の駅と」

「ドラえもんの歌にのせてラップで決めていい？」

思わず目頭を押さえてしまった。涙が出そうだ。

言っていることが夕べの聡明よりへんてこりんになっちゃってます。お願いですから歌わないでください、決めないでくださいと哀願して佳乃に場所を聞きながら、メモをちまちまとしっかりとつて、電

源を切り、速攻で身支度を始めた。

おせっかいもあるんだけど、怖いもん見たさもあることは事実。

にしてもラップで決めるって。

しかもドラえもん……。

ピーカンの昼前はまさに地獄の暑さ。

里奈は帽子を深くかぶって、駅からの道のりをてくてく走った。

「日焼け止め意味ない感じ」

ぶつぶつ言いながら、自分で書いたメモと電信柱に書かれている住所を比べて、佳乃のアパートを発見する。

佳乃の部屋は2階の角部屋。

たったったつ、と一直線に伸びている階段を登って、さっそくピンポンした。

白いドアに、何もかかれていない表札。

それを見て女の人の一人暮らしはなにかと物騒なんだろうなあと思ったりもした。

出てきてくれる気配がないので、もう一度ピンポンする。

ようやく鍵を開ける音がして、バスタオルを頭にかぶった佳乃が顔をのぞかせた。

「いらっしゃーい」

「……ご、こんにちは」

シャンプーのいい匂いした。

「ごめんね、お風呂に入ってたの。どうぞ。散らかってるんだ、本当に。ごめんね」

佳乃は言いながら、ドアを大きく開けて里奈を招き入れた。

「忙しいときに押しかけて、ごめんなさい」

散らかっているといいながら、佳乃の部屋はこぎれいで、強いて言えばアジアンテイストなゴミかごが紙くずであふれんばかりになっ

ているくらい。

おずおずと靴を脱ぎかけた里奈は、次の瞬間悲鳴をあげながら佳乃の肩をつかんでいた。

「きゃあああーっ、浜崎センサーッ!!」

佳乃が玄関で突然ふらりとよろけて、壁にごちんと頭を打ち付けたからだ。

かなりの音がしていたから、相当痛いはず。

右手で頭を押さえて、左手で里奈にしがみついた佳乃がてへへと照れたように笑いながら朦朧とつぶやくことには。

「おなか空いてるから、ちよつとよろけちゃった……」

佳乃のぬれた髪を頬のあたりに感じながら、里奈はこれではいかなと拳を固める。

「ご飯、いつからたべてないんですか」

「……いつだろう?」

「だめじゃないですかー、もー、なんか食べてください」

「あ、いいの、いいの。冷蔵庫も空っぽだし。それにおなか空いてると眠くないから。おなかいっぱいになると寝ちゃうんだ」

あつはつは、と佳乃が空元気に笑う。

里奈はそれを睨みつけることで黙らせて、きつぱりと言いつつ放った。

「そんな過激なダイエットはしちゃいけませんっ!」

「あ、里奈ちゃん、まって……」

か細く呼び止められたけど、知るもんか。

「コンビニに行つてきます!」

このおばかなおねえさんに何か食べさせないと、死んじゃうじゃないのっ。

佳乃のアパートの階段を駆け下りながら、里奈は携帯をバッグから出して、都村聡明に電話をかけた。

浜崎先生の一大事だ、聡明に助けてもらわなくっちゃ。

携帯に出た聡明は、

「おお、どした」

なんていつもの調子。いささかほっとしながら、里奈は早口にまくし立てた。

「浜崎先生が大変なの、かなり衰弱して、立ってるのもやっとみたいな感じなの！」

駅の途中で見かけたコンビニを目で探しながら、里奈は聡明の言葉を待った。

しかし、聡明は、

「……衰弱って、意識は？」

「ハア？」

「意識はあのかって訊いてんだよ。立ってるのもやっとってことはあいつ立ってるんだろ？」

「立ってるけど、ふらふらだったよ！」

「生きてんなら大丈夫だろ。くだらねえことで電話してくんな信じられない言葉を聞いたような。」

里奈は足を止めて、

「ちよつと、くだらねえつてなによ」

「佳乃だつて子供じゃねえんだよ。あいつがぶっ倒れようと何しよう、あいつが自己責任でやってることの結果なんだよ」

一気にこみ上げた怒りで里奈は息を飲んだ。

聡明が。あの、聡明がこんなことを言うなんて。

シヨックのあまり口を数回ばくばくしてしまったが、やっとの思いで声を絞り出した。

「聡明、見損なつた」

「見損なつてくれて結構。あいつには構うな」

「いーよ、聡明になんて頼まないから！ この冷血漢のスケベおやじー！ 夏の思い出でも100万回歌つてればいーのよ、目が細い癖にいつつもえばっちゃってさっ、最低最低、最低おやじっ」

叫んでいる途中で、ますますむかついた。

都村聡明さんは、里奈ちゃんが絶叫している途中で通信を断ってしまわれたんでございます。

「ばかーっ!!」

見損なっただわ。

怒り心頭、暑さもどこへやら。

涙なんか出てきちゃってるのは、汗よ、汗。

ちくしょお、聡明のバカタレ、裏切られた感じ。

目をこすりながら、コンビニのドアをくぐるうとして、里奈は足を止めた。

くるりと首をひねって、ガラス越しに並ぶ雑誌を眺めている青年を凝視する。

そして、里奈はコンビニに駆け込んだ。

「真崎、なんでコンナトコにいるのよ!!」

突然背後から怒鳴られて、真崎英彰は背中全部でぎよっとする。

持っていた雑誌がヤンマガ、しかも開いているページが水着グラビアだったりして、振り返るとともに里奈を見つけて絶句。

「な、なんでって、ここ、俺んちの近所だから」

今までの学校での気まずさもどこへやら、英彰はしどろもどろになつて言い訳をした。

「近所？ 駅が違うじゃない、駅が!」

「マンションの東側にも駅があるんだよ。あそこ俺んち」

ほれ、と窓の外を指さす。確かに見覚えのあるレンガ色の高い建物がみえた。

そっか。路線が違ったから、わからなかった。

「近いとこのコンビニに行けばいいじゃない、こんなに暑いのに」

「このコンビニのとろろそばが食いたかったんだよ」

「とろろなんて、自分ですって食べなさいよ!」

ハア？ と英彰は眉をひそめて、雑誌を閉じた。

そして、ようやく動揺が収まってきたらしく、里奈を指さして、「おまえこそこんなことでなにしてんの」

そう問われて里奈は自分のやるべきことを思い出した。

「あつ、立ち話なんてしてる場合じゃなかったんだ」

くるりと里奈は踵を返して、とつととお弁当コーナーへ。

すると、なぜか英彰もついてきた。

里奈の隣に立つて、前言通りにとろろそばなんか手にしちゃって、

「なにやってんの」

「ねえ、やつぱり夏ばてにはおそばなんかいい感じ？」

「いい感じだろうけど、2つも食うの？」

「だれがよ。浜崎先生の分」

「お前なら……いて！ 浜崎先生？」

英彰のすねに即座にけりを決めて、里奈は早口に言った。

「浜崎先生は浜崎先生よ」

それからジューズコーナーへと移動。扉を開いて、大きなお茶のペットボトルを手にした里奈に英彰がたずねる。

「浜崎って、都村さんと同じ研究室の？」

都村と聞いて、里奈は目を据えた。

「都村とか言わないでよ」

「……さつきから、なんだよ」

「勝手についてきてるんでしょ、もー、急いでの、浜崎先生が餓死したらあんたのせいだからね！」

「餓死？」

なんで、わたしは真崎英彰の自転車の後ろに乗っているのですしょう？

英彰はすいすいと自転車をこぐからかなりのスピード。

ためらいはたくさんあったけれど、落とされたらたまらんと彼の背中にしがみついた。

そうしたとき、英彰の背中が一瞬びくりとして、そして、なんか言われたような。

「つかまるなら、腹にして」

とかなんとか。

「背中弱いんだ」

自転車を降りたときに言うと、英彰はむっとした様子で口をつぐんだ。

そして、返事をせずに佳乃のアパートを見上げる。

「ここに住んでたのか。たしかに近いな」

「アリガト」

挨拶もそこそこに里奈は階段を駆け上がって、ピンポンもそこそこに佳乃の部屋のドアを開けた。

そして、佳乃がうつぶせにうずくまるように廊下に倒れているのを発見。

血の気が引く思いでドアを閉めて、2階から英彰を呼んだ。

「真崎、悪いけど手を貸して！ 浜崎先生自宅で遭難してる！」

自転車に乗っていた英彰は、素直に降りて鍵をかけると、ジーンズのポケットに手を入れながら、とっとととつ、と階段を登ってきた。おろおろしている里奈の隣からひよいっと中を覗き込んで、瞬きをひとつ。

「……まじで、自宅で行き倒れてる」

「でしょー?!」

失礼します、と英彰は中に入って膝を折ると、伺つように佳乃の肩に手をかけた。

そして、バスタオルに包まってすやすやと眠っている佳乃の顔を見て、くっ、と笑いを噛み締める。

背後でおろおろしている里奈を振り返り、

「寝てるよ」

「ねてる？」

寝かせておいてやれば、と英彰は言うけれど、こんな廊下で寝ていたら夏とはいえいいことはありません。

「運ばなきや」

お弁当やらを廊下において、里奈はよっこらせと佳乃の腕をつかんだ。

佳乃が小さくうなったとき、英彰が手をさし伸べてくれた。

「運ぶなら俺やるけど……1時間くらいそっとしておいてやればいいのに」

「でもさー」

里奈がおずおずと手を引くと、英彰はよっこらせと佳乃の背中に腕を回して彼女の半身を抱き起こす。

「こんなところで寝ないでくださいー、ちゃんとしたトコで寝まじょうねー」

ごめんなさい、と思いながら里奈が佳乃の部屋に足を踏み入れて、ベッドの上にあるタオルケットを広げた。

しかし、廊下では。

「どっかで見たまよーなハンサムくんだけど、思い出せないな」
肩を抱きかかえられながら、頭を抱える佳乃さん。

足はしっかり廊下についているけれど、どうにもふらついて英彰に寄りかかってしまふらしい。ふらつくというよりは寝ぼけているというべきか。半分目が閉じているし。

「真崎です。説明は後でしますから」

「あ、おろして、おろして」

佳乃は言うけれど、足は地に付いている。

「大丈夫ですか？」

「うん、かっこいい男の子が至近距離にいと、おばさんは抱きつきそうだからさー」

「抱きついてもいいですけど」

「で、きみ誰？」

「真崎です」

佳乃は部屋の真ん中にあるテーブルの前にぺたんと座って、ぼつと天井を見ている。

「だめだ、頭が働かない、まとまらない。あたしってやっぱりバカなんだ」

ぼつりとつぶやいて、里奈を怯えさせる。

あつちの世界に行っちゃってる感じがするのは気のせいでしょうか？

「聡明に電話したら、ほっとけて言われちゃったんです。二人でなんでそんなにがんばってるんですか」

佳乃の前にお茶とおそばを出しながら、里奈がしかりつけるように言うと、

「ほっとけか。そう言うでしょうね」

あつさりとつぶやき、佳乃は額を押さえてテーブルに肘をつく。

かと、思うと。突然拳を固めて、

「あいつに負けられるか。あたしがこうして脳内凍結させている間にもあいつは余裕で論文書いてるんだ、いやだ、もー！」

里奈と英彰は無言で視線を交わした。

「……」

「……聡明も余裕じゃなさそうですよ。寝てないとか言っていましたから」

佳乃がほえ？ とその言葉に反応する。

「あの様子だと聡明も絶対におかしなことになってます。この間は変な歌連発であたしの頭も腐りそうでしたから。あんな奴に負けないでください。食べて休めば浜崎先生は無敵です。聡明なんかに負けるもんですかっ。あいつなんか夏の思い出ですよ」

「……寝てたら間に合わない」

「廊下で寝てた人がなにを言っているんですかつ」と、やっていたらピンポンとなった。

佳乃が顔を上げて玄関に出て行こうとするのを里奈が制して、代わりに出ようとすると英彰が腰を上げていた。

「俺が出てやばい人いないでしょ？」

「顔のわりに結構失礼だな、君」

英彰がドアを開くと、女の人の焦った声が聞こえた。

「あっ、あのっ、ごめんなさい、まちがえました！」

ナニゴト？ と、廊下に顔を出して玄関を覗き込むと、外に回って表札がないことを発見して口を押さえて立ち尽くす女の人が、英彰の前でひとりで慌てていた。

対する英彰は冷静そのもの。

「ここは浜崎さんの部屋ですよ」

「えっ?! そ、そうですか」

きれいな人だけど、なんか。

里奈が首をひねるとなりに佳乃が這ってきて、

「あ、也美さんだ」

「あ、よしのちゃん！」

挙動不審だった女の人は都村也美さんというらしい。

長い髪を夏らしくひとつに束ねて、ふんわりと微笑む。

きれいな人だなあと感嘆した後、都村という苗字にはっとした。

「そ、聡明の？」

「うん、おねえさん」

佳乃がぼんやりと答える。

英彰はなぜか驚かないけれど、里奈は目を丸くして呆然に、似てない。

也美さんにはっこり笑って、頭をさげる。

「いつも弟がお世話になってます」

「聡ちゃんの生徒さん？」

佳乃から里奈をそう紹介されて、也美はうれしそうに口許をほころばせた。

「そうですか。聡ちゃん乱暴なところあるから大変でしょう？
これからも弟をよろしくお願いします」

「いえっ、こちらこそ」

也美はテーブルの上にあるおそばを見つめて、佳乃を見た。

「佳乃ちゃん、食べないと。やつれてるよ」

「……はあ」

「大丈夫。聡ちゃんも唸ってたから。夕べはパソコンを怒鳴りつけて、なだめてを繰り返していたし。隣の部屋で寝ていながら怖かったわ」

だ、大丈夫なのかな、聡明も。

里奈が眉をひそめると同時に也美も表情を曇らせて、

「佳乃ちゃんも寝てないの？」

佳乃は答えない。

也美はため息をついた。

そして、佳乃の肩に手をおいて、やさしく説くように言った。

「聡ちゃんも今寝てるから、佳乃ちゃんも寝たほうがいいよ」

「でも」

すると、也美さんは平和そうな顔を不敵に微笑ませて、

「聡ちゃんの目覚まし止めてきたから。朝まで起きないはず」

佳乃があんぐりと口をあけて也美さんを凝視する。

里奈と英彰には佳乃のその反応の意味がいまいちわからないけれど、とにかく佳乃さんには衝撃的な発言だったらしい。

「日ごろ佳乃ちゃんに散々迷惑かけておいて、自己責任だとかなんだとかえらっそうに言っちゃう聡ちゃんはよくない。電話を聞いていたら腹が立って、仮眠している聡ちゃんを目覚ましを止めてきてしまいました」

「イヤ、これは」

「そのほかにも聡ちゃんは日々反省するべきところがいっぱいあるのよ。それに聡ちゃんにこーゆーことできるのわたしくらいだし」

「聡明、起きたら荒れてますよ、絶対」

「大丈夫」

也美さんはとてもきれいに微笑んだ。

「ご飯を作る人がいちばん偉いの。わたし世帯主だし」

だから寝なさいねと也美が言うと、佳乃は脱力しきった感じで肩を落とした。

そして、おそばに手を合わせていただきますとつぶやき、里奈に頭を深々と下げた。

「りなちゃんありがとう」

佳乃はおそばを食べ終わると、お茶を飲んでもくもくと歯を磨いた。

寝るなら寝るできっちりしている人だ。

なので、里奈は帰ることに。

也美さんという聡明のお姉さんもなにやら出かける支度をしているし。

「お邪魔しました」

「あ、里奈ちゃんお昼代」

佳乃はお財布を取り出して、千円札を一枚。

「これでたりる？」

「おつり出しますね」

「あ、おつりはいいです。頭が働いていなくてどうしようもないから」

「そういう問題では」

「もらっとけば」

英彰が横から口を挟んで、里奈のお財布を引っ込める。

お財布だけをつかんだ也美さんが明るく声をかけてくる。

「佳乃ちゃん、晩御飯つくってあげるね。何がいい？」

「……ごめんなさい、なにも思い浮かびません。おそばで胸がいっぱいです」

佳乃は也美には甘えるようで、部屋の鍵を渡してあくびを噛み締めた。

「お言葉に甘えて寝ます。3時間後か6時間後かに起こしてください」

「6時間後にまず声をかけるね」

「ありがとうございます」

「起きたらご飯だよ。ゆつくり休んでね」

なんかふわふわした人だと里奈は也美を見て思った。

この人に何か頼まれたらたぶんイヤだと言えない。

お買い物にでも行くつもりだっただろう也美は、玄関のドアを閉めて鍵をさし込みながらあつ、とつぶやいた。

里奈と英彰が彼女の背中を見詰めながら、そのあつ、は何？ とやっていると、也美はこまったわーと手のひらで頬を押さえた。

「このあたり、スーパーとかあるのかな」

「ありますよ」

地元民の英彰が答える。

「近いですか？」

「近いといえば近いですけど」

「よかったです。行ってきます。今日は本当にありがとうございます。気をつけて帰ってくださいね」

也美はほっとしたように微笑んで、階段をとんとんとゆつくり下りていく。

なんとなく里奈は不安だ。

思わずつぶやいていた。

「道、わかつてると思っ？」

「迷子になるな、絶対」

英彰の言葉どおり、也美さんはアパートの駐車場を出たところで、

さつそく足をとめて困惑している。
右か左か、まずそこで迷っている。

「……一緒にいてあげたら？ 真崎」

「野々村も来いよ」

「うん」

也美さんは恥ずかしそうに頬を染めながら、里奈と英彰に頭を下げた。

英彰は自転車を押しながら、口許だけで笑っている。

駅とは反対方向にあるスーパーに行くには英彰の住むマンションの前を通らなければならない。

英彰は自転車をマンションの自転車置き場に置いてきた。

「家においてこなくていいの？」

「帰って来たらでいいよ」

英彰は普段、自転車ごとエレベーターに乗って、自宅の玄関先に自転車をおいている。

住宅街を歩きながら、也美と英彰が世間話をさらりとしているのを聞きながら、里奈は二人の後をついて歩いた。

まだ人見知りをしてしまうけど、このひと好きだなあ。

也美のことをちらちらと見ながらそんなことを考えたりして。

聡明の姉という存在だけでも、かなりの意識をしてみようけれど。

まだ強い午後の日差しに目を細めていたら、也美と目が合った。

也美は里奈ににこりと笑いかけ、

「佳乃ちゃんのこと、心配して駆けつけてくれたの？」

「えっ、いや、あの……そうです」

本当のことなのだから認めるしかない。

でも、純粹な親切心から始まったことではなくて、聡明と佳乃の間
に何があったのが気になっての行動だったから、そのあたりが後

ろめたくて。

聡明といえば、昼間の彼の言葉には絶望した。あんなことを聡明が言うとは思わなかった。

でも、確かに余計なおせっかいだったよね。

結果的には浜崎先生の論文の邪魔をってしまったわけだし。

「でも、そうめ……じゃなくって、都村先生にはしかられました」あのときの聡明の声の調子とかがリアルによみがえってきて、しゅんとしていたら也美が怪訝そうな顔になった。

「……あの、ね」

遠慮がちに也美が口を開く。

「聡ちゃんが佳乃ちゃんの様子を見てきてって、わたしに頼んだの。あなたが電話をくれなかったら佳乃ちゃんあのまま倒れちゃったかもしれないし。でも、聡ちゃんが言うには勝負してるとかそんなことらしいから、聡ちゃんは敵に塩をいくらでも送れる人だけど、送られた方は嫌でしょ？ だから、わたしに様子を見て来いって言ったんだと思うの。だから、怒ったりはしていないと思うよ」

え？ とばかりに也美を見つめると、也美はふわりと微笑んで、

「聡ちゃんも今、余裕がないのね、相手が佳乃ちゃんだから、きつと聡ちゃんも本気でかからないと負けちゃうかもしれないんだよね。佳乃ちゃんもあんなにがんばるのは聡ちゃんが相手だからなんだろうし」

聡明が怒っていないのなら、聡明の本意が也美の言うとおりならば、やっぱり聡明はいいなあと思う。でも、なんか寂しい。

今までのいろいろで充分にわかっていたこと。

聡明は佳乃には本気になってくれるけど、里奈には絶対にそんなこととはないってこと。

佳乃は対等、里奈は被保護者。

也美がふと遠い目をした。

「佳乃ちゃんがどんなに大切な人か、聡ちゃんにもわかればいいのね。聡ちゃん、佳乃ちゃんには自分勝手するから」

そうだったから、也美はあつと口を押さえて恥ずかしそうに苦笑い。
「こんなこと、生徒さんに言っちゃってごめんなさい。また、聡ちやんにしかられそう」

首を横に振って里奈は笑った。

「……いえ」

「目覚まし止めてきたって本当ですか？」

英彰が突然そんなことを言い出した。

也美は頷いた。

「はい」

「……そうですか」

聡明が怒る。それはそれは怖そうだと里奈は思う。けれど、也美さんはなんでもなさそうにさらりと。

「姉ですから、弟が拗ねるのなんて平気です」

スーパーまでたどり着くと、也美は二人に丁寧にお礼をして、帰りは大丈夫ですと笑顔で手を振った。

いささかの不安があったが、相手は一応里奈たちよりも一世代近く上の大人だ。

「……大丈夫かな」

「迷子になりそうだけど、本人いって言うんだから英彰が穏やかな顔で言う。」

「ねえ、真崎はびっくりしなかったの？」

「なにが」

「聡明のお姉さん、あんなだと想像つかなかったから、驚いちゃった」

「そうなんだ」

「うん。キレイなひとでびっくりした」

「確かに似てないよな」

「うん……なんとというか、テンポも似てない」

英彰がくすりと笑う。

そして、腕にしているがっちりとした時計を見た。

「ダイバーじゃないのに、ダイバースウォッチ持ってるのヤダ」

どうにも気分が冴えないので、憎まれ口を叩いてしまう。

すると、英彰もむっとしたようで、

「パイロットウォッチもってるやつのはほとんどがパイロットじゃないよ」

ふん。

高校生の癖に、高そうなのつけちゃってさ。

里奈がそっぽを向くと、英彰はしらっとした目つきで里奈を眺めた。そして、

「俺といえるのそんなに嫌なんだ」

「頼んでないもん」

「悪かったな、おせっかいで。ペットボトル2本と弁当抱えて暑い中歩くのは大変だろうなと思った俺が悪かったと」

「……」

ああむしゃくしゃする。

里奈は唇を尖らせて、ひたすら前を見て歩く。

時間はもう、4時を過ぎようとしていて、気がつくとなれだけ青かった空にどんよりとした灰色が広がるうとしていた。

「散々、無視してたくせに、突然そんなことしないでいいのに」

「それはお前だろ。生物室に押しかけたきたの誰だよ」

「そ、それは。あの時はごめん」

英彰が里奈のせいで職員室に連行された一件を思い出した。

あれを思い出すと、どうにも立場が弱くなる。

謝られて英彰は拍子抜けしたように、口を閉じて、ふう、とため息をひとつ。

「野々村はわかんないよ」

視線を落として、英彰は言う。

気まずい空気になってきた。

いろいろなことを思い出してきたので。

生物室準備室のロッカーに隠れていたとき、コイツに抱きしめられたような記憶があるので。

そりゃあもう、心臓が飛び出すかと思うほど驚いたけれど、安心してたりもした自分。

とてもとても速かった心臓の音。

頬に触れた英彰の前髪を感じとか、背中にあつた腕の感じとか。

ああ、いやだ、なに考えてんだろあたし。

「真っ赤になってる」

英彰に言われて、里奈はますます頬が紅潮。

まさかあんなのことを思い出してましたとは言えずに里奈はそっぽを向いた。

「あ、雨が降りそうだよ」

「夕立になるな」

なんとなく二人は空を見上げた。

そして、思い出したように顔を見合わせた。

「聡明のお姉さん」

「都村さんの……」

也美さんがスーパーを出て来る頃にはきつと、土砂降りだ。

「ずぶぬれになっちゃいそう」

「子供じゃないんだから、自分でなんとかするだろ」

「それじゃ、かわいそうだよ」

英彰は肩をすくめた。

「お前もこのままここでボーっとしてたら濡れるよ、おせっかい」

「なによ、おせっかいって」

「野々村はおせっかいなんだよ。万事が万事そうなんだよ」

「なにそれ」

「余計な期待したりする人間もいるんだよ。期待させといて、違いましたって平気でやるんだよ、お前は」

「そんなことないよ、そんなことしてないよ」

「少なくとも、俺にはしてるんだよ。俺にかまうなよ、俺の前に現れるなよ」

俺にはしてる。

その言葉は里奈をひるませる威力をたつぷり持っていた。

でも、俺の前に現れるな、には反論しておかなければ。

「同じ学校なんだから仕方ないでしょ。わたしだって真崎に会わないようにしてるよ。そっちこそ、この間わたしが勉強してるの知ってて奈津美と図書室に来たじゃない」

「俺は知らなかったんだよ」

「でも、わたしがいるのわかった時点で、消えればいいじゃない」

「あー、邪魔したんだ、悪かったよ」

「はい?!」

「新聞部のバカと仲良くしてるとこ邪魔して悪かったよ」

「ちがうってば。小関くんはそんなんじゃないよ」

「そんなんってなんだよ」

「そんなんって、そんなんよ」

「意味わかんないよ」

「あんたのほうがよくぼどわかんないよ。なによ、突然小関君のことなんか言い出してさ。小関君がなによ。あの人をなめたような態度には腹立つことも多いけど、いいところもあるよ、あの子。真崎なんかよりずっと大人びてるよ」

「あいつと比べるなよ」

「真崎は子供なの、子供すぎるの、子供っぽいのよ」

英彰が舌を打つ。

睨みあって、英彰の言葉を待っていると、彼は不満という不満を顔に浮かべて口を開いた。

「お前に言われたくないよ」

「わたしだってあんたにおせっかいだなんて言われたくないっ」

「お前はおせっかいなんだって」

「そーういうところが真崎は子供なんだってば」

そんなことをやっていたらとうとうぱつりと大粒の雨が。

それはかなりのスピードで水玉模様を歩道につけて、やがて本格的に振り出した。

英彰がもう一度舌を打った。

「お前といると、こーゆーのばっかだよ」

「それはお互い様!!」

雨宿りできそうな場所は、20メートル先にある真崎家の属しているマンション。

「ほら、走れよ」

えらそうに英彰に言われて背中を叩かれて、里奈は彼を睨みつけた後、とことこと走り出した。

コイツのマンションで雨宿りなんて、今の状況じゃ屈辱だ。

エントランスに駆け込んでほっと一息つき、ハンカチであちこちの水滴を払う。

しかし、英彰はそんな里奈をおいて、さっさとエレベーターに乗ってしまった。

たしかにここまでつれてきてくれただけで充分だけど、なによあの態度。

ますます脳内沸騰させられて懨然としながら、強くなるだけの雨足を眺めていた里奈の背後で、チンというかわいらしい音がした。

振り返ると、エレベーターの扉が開いて英彰が傘を3つ持って出てきた。

そのひとつを突きつけられて、きょとんとして彼を見上げると焦れた様子で英彰は里奈に言った。

「貸してやるから、これで帰れば」

「あ、ありがとう」

受け取る里奈の手はなんだか震えがきていて、動きがぎこちない。

「どこいくの?」

この土砂降りの中、傘を広げた英彰に里奈が問うと、英彰が振り返った。

「都村さんのお姉さん」

「あつ」

「お前は来るなよ。さっさと帰れよ」

拗ねたみたいなぶつきらぼうな言い方。

生物準備室のあのときと同じ。

走り出してしまった英彰の姿を見ながら、里奈は持っていた傘を握り締めた。

「どうもありがとうと、真崎君に渡してください」

聡明がそう言っつて傘を差し出したので、里奈はうっ、と言葉を詰まらせた。

華奢で上品そうなピンク色のそれは、きつと英彰の母親のものだろ
う。

すると聡明はうんざりとした顔で腕をくんで、

「またややこしいことになつたんかよ」

「あいつとはややこしいことになりようがないほど陰悪です」

きっぱりはつきり言っつて、ノートを広げる里奈を聡明はあれあれと頭に手をおいて眺める。

「うちのバカ姉が言うにはだな、彼は傘をさしていたにもかかわ
らず走つてきてくれたためずぶぬれに近い格好で、スーパールでおろ
おろしていたトロい俺のねーちゃんにコイツを貸してくれたそうだ。
さらに、帰り道をすっかり忘れていたことを見抜いて送つてくれた
そうだ」

「……」

「お前が心配していたから傘を届けたとゆつていたそうだ」

「……」

「がきんちよに頼むのも筋違いかもしれねえよな、俺がきつちり返
しにいくべきなんだよな。ねえちゃんが自分で返しに行くとか張り
切つてたもんで奪つてきたけどな」

「……わ、わかつたわよ、渡しておくわよ」

里奈が傘をつかむと、聡明はニコリと笑つた。

「わりいな」

論文は終わつたのだらうか、聡明はずいぶんとすつきりとした顔
をしている。

怪しい歌も歌わないし。

このごろ聡明の指導法が変わってきた。

前の週に宿題を出されて、その答えあわせから始まるのだが量が
増えた。

宿題を忘れるなどというミスは犯したことがないが、きっちりやっ
ておかないと、お話にならないこの頃の都村先生の授業。

それでも脱線したくて、聡明にいろいろとからんでみるけれど、以
前よりもノリが悪くなっている。

「ねえねえ、この爪、いい感じだとおもわなーい？」

シャーベットピンクの上にパールを重ねた、夏休みだからできるネ
イルの芸当。

でも、聡明は。

「お前の頭のほうがいい感じだ」
なんて言う。

唇を尖らせると、聡明はこのボケと里奈の頭をばかりと叩く。
が、里奈の爪をまじまじと眺めて、感心したように、

「お前の息抜きは、ずいぶんと手間がかかるんだな」

「足も塗ってるの。トゥリングが欲しいんだ、実は」

「なんだそりゃ。つま先にリングなんて邪魔だろ」

「可愛いんだつてばミュールでやると、ホント可愛いの」

しめた、つれてきた、と思った矢先、またも頭を叩かれた。

「……あぶねえ、またやられるところだった」

「つまんなーいっ」

「つまなくなねえよ。べんきょーだ、べんきょー、おら、参考書開
け」

叩かれた頭をさすりながら、里奈は胸の中でつぶやく。

浜崎先生に勝っちゃったの、聡明は。

佳乃がよれよれになっていた姿を思い出して、目の前にいる態度し

な先生がなんだか憎たらしくなってきた。

傘を返すだけなら簡単。

あのバカの教室に行つて、呼び出して突きつけりゃあそれで終わるわけ。

あのバカを呼ばずとも、誰かに頼めばよい。でも、それができないからこまっているんだ。

今、里奈の手元には傘が二つ。

一瞬奈津美の姿を頭に浮かべて、とんでもないと慌てて打ち消した。奈津美だけはだめだ、なんでこの傘がと疑問をもたれた日には里奈は泣き出してしまつかもしれない。

そうしたいわけではないのに、なにかと奈津美には後ろめたいことばかり。

奈津美に対しての神経が自分でもあきれれるほどぴりぴりしていて、ある意味腫れ物にでも触るような感覚だったりする。

そもそも原因である、真崎英彰と遭遇する確率がこんなに高いのは何でだと頭を抱えながら、里奈は傘を抱え込む。

「夏休みだから、あいつはガツコないしなあ」
でも、あさつては登校日だ。

英彰はサボるかもしれないけれど、そのときに返せばいいかな。
キレイなピンクの傘。

布に防水加工が施してあるらしく、同色のピンクの糸の刺繍模様がハイソっぽい。

去年のクリスマスに一度だけ会った、真崎のおかあさん。
かなり若い印象を受けたけれど、彼女ならこの傘が似合いそうだ。

「傘がないと、お母さん困るよね」

そしてもうひとつの傘は、タータンチェックの深い緑。

ため息はつき始めると、果てしないような。

携帯がなった。

着信メロディが奈津美の好きなアイドルグループの曲なので、里奈ははあとため息をついた。

「奈津美電話多いなあ」

夏休みに入ってから、里奈とはたくさん一緒にいられる。

けれど、英彰とはとんと会えなくなって、彼が電話をかけてくれるのが待ち遠しい毎日。

受験勉強をがんばっているであろう英彰の邪魔になるようなことはしたくないので、奈津美は自分自身の進路の行方もあわせて、なにかと情緒不安だ。

それで、ますます頻繁に里奈に電話をかけてしまう。

里奈と英彰の関係が良くわからない。

廊下ですれ違っても、お互い醒めた目で見ているか、視線をそらしあっているか。

とてもとても険悪だと奈津美がはらはらしていると、英彰は里奈にじゃれつく後輩の頭を叩いたりする。

里奈には英彰の事を話せなくなっているし、英彰には里奈の話をしづらいし。

風通しが悪くて、奈津美の不満は募るばかりだ。

「あの、真崎と仲良くなれない?」

無理だよと里奈はいつも言う。

なんで?

だって、あっちが無視してるから。

里奈の口ぶりはいつも歯切れが悪い。

「仲良くしてよ。あ、一度話しあおうよ、ねえ」

「話し合っつて、なにを」

「お互いのここがいやだから、直してとかさ、誤解があるかもしれないから語り合ってみるとか」

「仲良くって意味がわからない。真崎の彼女は奈津美なんだから奈津美と真崎が円満ならそれでいいじゃない」

それを聞いたとき、奈津美は胸の辺りにこみ上げるものを感じてしまっ。

もやもやとそれは広がって、奈津美の口元を引き締めさせた。

「普通に接してって言うてるの。特別仲良くなんならなくていいよ。でも、嫌なの。どっちにも気を使ってはらはらしたりしてるの嫌なの」

二人はなんでもないうって、証明して。

あんなに避けあうなんて逆に変だもの。

喉元まででかかったそれを奈津美は飲み込んで息を詰める。

うっすらと涙が浮かんできて、その次の言葉が話せない。

わたしってとても嫌な子だ。

里奈に八つ当たりしてる。

「……機会があつたら、考えてみる」

沈みがちな里奈の声がますます惨めにさせてくれる。

どうしてそんなにいい子なの、里奈は。

わたしがいないところで二人はどんな会話を交わすのだろう。

登校日といっても、夏期講習で高校に通っている里奈には苦痛でもなんでもない。

髪をみつ編みにしながら鏡を見つめて今日は編みこみにしようと思いい直して髪を解く。

一本にまとめられた髪のほうが暑くなくていい。

「髪、切るのかな」

前髪が伸びてきた。自分で切るのも面倒な気分だし、気分転換した

いし。

午後から身体が空くから、制服のまま髪を切りに行ってしまうおうか。それとも奈津美と買い物にでも行ってみようかな。

身支度を整えて、ダイニングに行くと、朝食の準備がととのっていて、父親がテーブルでコーヒーを飲みながら朝刊を広げている。

「今日は登校日なの？」

母親が里奈の前に皿を置きながら尋ねる。

里奈はうなずいて、

「奈津美と午後出かけるかもしれない。息抜きしたい気分だし」

「息抜きね。受験生も大変ね。でも、今日は都村先生がいらしてくださる日だから、早めに帰ってきなさいね」

「はいはい」

言われなくとも。

このあたくしが聡明との逢瀬に遅刻などしたことありましたか、お母さま。

「コーヒーに牛乳いれる？ 里奈ちゃん」

「え？ あ、うん」

「都村君は今年で家庭教師のバイトをやめるらしいよ」

父親がぼつりとそんなことを言ったので、里奈と母親は顔を見合わせた。

新聞の端からちらりと顔をのぞかせて、父親はさらに言った。

「来年から本格的にどこかの学校の臨時講師になるかして、スケジュールを調整しながら院の研究に専念するらしい。今も本当はそんな感じで忙しいのかもしれない」

「里奈ちゃんの面倒は最後まで見てくださるのはうれしいけど、無理をさせているようで心苦しいわね」

母親がため息をつきつきつぶやく。

母親は聡明のファンだ。

「今から違う先生を探すのもなんだしなあ、里奈も都村君がいいんだろう？」

「うん。聡明じゃないと嫌だな」

変えられてたまるものか。聡明がやめるといわない限り、こちらから変更なんて頼むもんか。

「今更違う人なんて、何もしないでいるほうがましだよ」

ああ、朝から気分の悪い話題。

もくもくと食事を済ませて出かけてしまつことにする。

玄関まで見送りに来てくれた母親が、里奈に言った。

「晴れてるのに、傘？」

「うん、借りたものだから返すの」

「そうなの。気をつけてね」

「はいはい」

ドアを開けたら、朝日が思いのほか眩しかった。

洗面所でまたも母親が背後にいる。

居心地が悪くて、英彰はため息ばかりをついている。

昨日、とうとう担任からは親に連絡が入ったらしい。

多かれ少なかれ、夏休みの終わりにある三者面談ではれることになつてはいたのだから、それが少し早まったというだけだ。

ただ、朝なのはウザイ。

今日は登校日だというのに。

「受験する都内の大学が1校だけで、後は地方って英ちゃん本気なの？」

「本気だよ」

「都内にもたくさんあるでしょう」

「都内じゃないと受験したらいけないの」

「そうは言わないけど、でもね」

「決めたんだ。俺は物理をやりたいの。同じ理工学部っていつても大学によって内容が違つし」

「英ちゃん、お母さんにわからないと思ってる？」

「なにが」

「英ちゃん、お母さんといたくないからそういうことするんですよ」

「……」

「お母さんのこと、嫌いなんですよ。だからそんな回りくどいことをして、ここから出て行きたいんですよ」

大人気ないことを言う大人だ、なんなんだこいつは。

英彰ははつきり言っすべてにおいて母親似なのだが、自分ではそのあたりを気がついていなくて、腹が立つだけ立っすまう。

「……言っすいいことと悪いことがあるだろ。わかれよ大人なんだから」

ぴくりと母親の表情が引きつる。

しばらく黙っすいたが、彼女は腕を組んで英彰の背中に言い捨てた。

「とにかくお母さんは反対。面談で先生にもちゃんと言っす。それでも自分のワガママを通すつもりなら、受験費用は自分で何とかしなさい。お母さんは知らない」

受験費用。

カツと頭に血が昇りかけたが、英彰はそこを必死で押さえ込む。

タオルで口元を押さえて返事をしなかつた。

金銭関係を突かれると、扶養家族の立場は弱い。

こんなときだ、早くとっす成人してしまっすべてにおいて独立したいと思っすのは。

自分の部屋に戻っす、英彰は制服のシャツを手にして制服に着替える。

眼鏡をかけて、部屋をでる。

ダイニングには朝食の準備ができていた。テーブルについた母親が不機嫌そのものの顔で英彰を無視するかのように体をそらして、テレビを見ている。

英彰はその前を素通りした。

いつもなら、朝ごはんはとけたたましく追いかけてくる声がなく、

英彰は靴をはきドアを開く。

英彰が玄関のドアを閉めた音が聞こえた後、母親はポーズを崩して目頭を押さえる。ふうとつかれた重々しいため息とともに、

「どうして眼鏡なんてかけるのかしら」

どうでもいいようなその呟きにも、彼女の想いがある。

彼女は英彰のかけている、本来ならば必要のない眼鏡が嫌いだ。

薄いレンズが存在するだけなのに、英彰の目はそれをかけるとますます隔たりを作るような。

壁なのかしら。

どうして、壁なんて作るのかしら。

全校集会なるもので、校長先生の長いお話を聞いてから、教室に戻ってHR。進路指導用のプリントをもらって、なぜか卒業アルバム作成委員を巨大なあみだくじで選出。

「ええっ」

作成者の涼子と里奈がにんまり笑うと、あたりくじを引いた生徒が頭を抱え込んでその場にうずくまった。

「作成委員は5名。そんだけいれば受験勉強のさしさわりにはならないでしょうよ。Fまでの6クラスで5人ずつだから、30人もいるんだもの」

「まあねー」

涼子がさっさと黒板に書いた巨大なあみだくじを消していく。

そうして午前中のスケジュールが終ったの帰り際、奈津美に呼び止められた。

傘を英彰に返しに3・Aに行くところだったので、里奈は過剰反応して、とびあがる。

「な、ナニ？」

「話があるんだけど、放課後残れる？」

「話？」

うん、と奈津美がうなずく。

また、英彰と仲良くしろと言われるのかな。

里奈はうんざりとしてしまう。

仲良くしろと懇願されても、仲良くできるものならばとっくにいるのだ。

朝、母親とやりあったことで英彰の気分はサイアクだった。

それでも石河やクラスの友人と久しぶりに顔をあわせて、雑談で盛り上がっていたら落ち着いてきた。

HRが終わって、すぐに携帯にメールの着信。奈津美からだった。うちのクラスまで来て待ってて。

珍しいこともあるものだと思った。

英彰が上履きで殴られるという目に遭って以来、奈津美の上履きは盗まれることもなく嫌がらせのようなものはされていないらしい。

それはそれでほっとする。

英彰にとってファンと名乗る女の子は重荷でしかない。

アイドルでもあるまいし、なんでこんな束縛をされなければならぬのか。

春先、バスケット部の後輩が英彰にこんなことを真顔で尋ねてきたので後頭部を張り倒したことがある。

「真崎さん、トイレに行かないってマジっすか？」

真顔が嫌だった。真顔が。

「行くよ、馬鹿。今度つれてってやるっか？」

「い、いいです」

「遠慮するなよ」

「いえ、マジいいっす」
あんなアホなことを言われてしまったりするのは、すべてこの顔のせいだ。
母親の遺伝子のせいだ。

なんであんなのが俺の母親なんだろう。

奈津美は基本的に善良にできている少女だ。

そして、潔癖ともとれるほどに擦れていない部分も持っている。
朝、突然担任から推薦入試の件でHRの後職員室にきなさいと呼ばれ出された。

推薦入試ともなると、奈津美はクラスでいちばん早く受験に挑まなければならぬ立場にあるわけで、里奈にそのことを相談したかった。

相談したところでナニが解決するというわけではない。

受験はしなければならぬし、それで受ければ万々歳だ。

ただ、現実味を帯びてきた「受験」に奈津美はひるんでしまっているわけで、里奈に話を聞いて欲しかった。

そのあと、英彰を待たせることになることも思い出した。

先に帰ってもらおうとも思ったけれど、夏休みになったからまともに彼と顔をあわせていなかった。

本当に付き合っているのかしらと拗ねたくなるくらいに、英彰は淡々としているので、どうしても今日は一緒に帰りたかった。

外で待たせるのはこの暑さでは彼がかわいそうだ。

短絡的に奈津美は自分の教室で待っていて欲しいと思い、英彰にメールを出した。

あとで英彰のクラスで待ってもらえばよかったとも思ったけれど、何度もメールを出すとしつこいと思われそうでやめた。

手をつないでみたいと遠まわしに頼んだとき、英彰は笑って聞き流

した。

あのショックで、できてしまった傷がある。

それは顔で笑えば笑うほど、深くなって痛くなる。

3・Dの教室には誰もいなかった。

それをイイコトに英彰は堂々と足を踏み入れて、窓際に立った。

自分の教室と同じつくりのはずなのに、女子の多いこのクラスは小ざれいな印象を受ける。

というか、野郎ばかりの3・Aが小汚いのかもれないが。

野々村里奈の席がどこなのか、すぐにわかってしまう自分が嫌だ。どうしても向いてしまう視線をそらそうとして、あれと思った。

野々村の机がこんなに乱雑になっているわけがない。

そんなことを真剣に考えてしまった自分に尚更嫌気がさしてきて、英彰は軽く頭を振ると、窓辺に向かって足を進めた。

窓が開けたままになっている。

窓枠に手をつけて、英彰は校庭を見下ろした。

トラックを陸上部の生徒が走っていて、中央ではサッカー部が20人ほどでリフティングを一齐にやっているという不思議な光景。

「あれ、なんで真崎いんの」

去年同じクラスだった男子生徒が入ってきて、振り返った英彰を見て目を丸くする。

「んー、ちよつとな」

言葉を濁す。女の子を待っているとは言い辛かった。

雑談を少ししたあと、帰るといって彼を見送って、英彰は息をつく。居辛い。

自分のクラスに戻ることにして廊下に出た。

Dにいなかったら、Aの教室を奈津美はのぞくだらうと勝手に考え
て。

「あ、待って」

呼び止められて振り返ると、階段を里奈が駆け上がった。

「真崎、待つて」

里奈から学校で声をかけられたことに驚いて足を止めた英彰は、彼女の手には購買部のパンが5袋抱えられているのを見て、つい笑ってしまった。

「なによ、その笑いは」

「いや、お前はいつも食べるもん持つてるなあと思ってさ」

「奈津美のこと待つてなきゃならないから、お昼でもしようかと思つて買つてきたところだったのよ、悪かったわね」

「根本？」

里奈は頷いて、あつ、と口元を押さえた。

「真崎も待つてるの？」

「うん」

「そつか……それじゃ、わたし帰ろうかな」

里奈の視線が下向きにさまよう。

「真崎がいるんじゃない、わたしなんて待つてる意味ないもんね」

「んなことないだろ」

はあ、とため息をついた後、里奈は気をとりなおしたように顔を上げた。

「この間の傘返すね。聡明からも預かつてるの」

「傘？ 都村さんが？」

「真崎が聡明のお姉さんに貸してくれた傘。本当はもっと早くに預かつただけけど、登校日に返そうと思つて今まで持つてたんだ。ごめんね」

「いや、いいけど」

「待つてて、今、持つてくるから。自分の教室に行つて！」

両手にパンを抱えてた里奈が、背中を向けて小走りしていく。

しばらくそれを眺めて、英彰の足はAの教室に向いた。

里奈はすぐに戻つてきて、パンの代わりに深緑の傘とピンクの傘を持つてきた。

Aの教室の戸口で首をのぞかせた後、英彰しかいないと見ると足を踏み入れる。

「ごめんね、突然」

里奈はそう言っつて、ピンク色の傘を英彰に手渡してくれる。それを受け取っつて、英彰は言っつた。

「野々村の席、変わった？」

里奈は目を見開いて、なんで知っつてるのとつぶやいた。

「夏休みの直前に席替えしたのよ。夏期講習希望者の席を中央に集めたの」

「ふうん」

「奈津美の席は隣」

「訊いてないよ」

「……あのさ」

里奈の表情が曇る。

あまりいいことを聞かされるのではないかと悟っつた英彰は視線を一段落として、里奈を見た。

目はまともに見ることができないから、彼女のうなじのあたりで視線を止めて、細い首してゐるなあと、場違いなことを思っつたりしてゐる。

「奈津美がわたしと真崎が仲悪いの嫌なんだっつて」

またその話かと英彰も肩をすくめてしまふ。

もっつとも里奈からされるのは初めてだけだ。

「奈津美の前だけは普通にしようかなっつて思っつんだ。だから、真崎もそうしてくれるとうれいんだだけだ」

英彰は目を眇めた。

なに言っつてんだこいつ。

「普段はあたしのこと無視しててもいいから、奈津美の前だけでは挨拶とかさういうのしようよ」

「なんで俺が」

「俺がっつて、なにが？」

いらつく英彰の表情を伺うように里奈が見上げてくる。

こういう表情をされると、英彰は逃げ出したくなる。バカ正直にどきりとする自分がいるからだ。

つまりは動揺しているということ、それを悟られたくなくて、英彰は強い口調になってしまふ。

「なんで俺がそういうことをしなきゃならないの？」

「奈津美の彼氏なんだから、彼女が嫌がっているんだもの、少しはさ」

ぶつぶつ言う里奈を英彰は睨みつけた。

「お前のそういうところ、本当にいらつくよ」

「どうして怒るの？」

里奈のほうもむっときているらしく、語気が強くなっている。先刻までおどおどと英彰を伺っていたはずの視線も強くなる。

「無神経すぎない？俺にどこまで奉仕しろっていうわけ？」

「奉仕？」

「振った相手によくそんなことが言えるよ。悪いけど俺は振られたあとで爽やかに笑ったりできないんだよ」

「振つ……そんなのしてないじゃん」

「振っただろ。それでなくても、俺なんか問題外でさ」

「……」

「そういう相手に、よく言えるよ。普通にしろ？ どうやって」

「だから、それは」

「本当に無神経でおせっかいだよな」

唇をキュッと引き結んで、里奈は英彰を睨む。

英彰は腕を組んだ。斜めから彼女を見る。

可愛さあまって憎さ百倍とはもまさに今の感情そのもの。

どうしてコイツは、こういう奴なんだろう。

「何度も言うけどさ、俺にかまうなよ。どうせなら、大嫌いだからそういうの言えよ。思ってるんだろ？ 言えよ！！」

里奈の唇は引き結ばれたまま。

そらされた視線が動くことなく、彼女は黙っている。
ややあつて、ようやく絞り出た言葉は、小さい音で掠れていた。

「……あなたこそ、あたしのこと嫌いなくせに。そう言えばいいの
に」

泣いているのか、怒っているのか。

里奈はうつむいて顔を隠してしまう。

英彰は奥歯を噛んでいた。ギリリと歯軋りの嫌な音がするほどに。
喉元に熱いものがこみ上げるのを押しとどめたくて。

うつむいたままの里奈の肩が大きく震えた。

それを見た瞬間、頭の中が真っ白くなった。

好きなんだと思う。

どうにもならないくらい、それこそバカみたいに。

かなりの力で腕を掴んでいた。自分のほうに引き寄せようとしてい
た。

里奈は反射のようにそれを拒んで腕に力を込めて振り上げようとする。
る。

「やめてよ、バカ!!」

叫んだ里奈の片手は目の辺りをこすっている。

「あなたなんか」

里奈の言葉が突然途切れた。

突然に戸口のあたりを伺い、きよろきよろとしたかと思うと、紅潮
していた顔が蒼白になる。

涙がひとつこぼれながら、里奈は不安そうに呟いた。

「誰も、来なかったよね」

英彰は彼女の腕から手をはずした。

戸口へ首をひねって見たけれど、人の気配はない。

里奈は口元に手をあてて、

「足音、したような気がした。誰か見てたような気がした」

言われてもう一度戸口を見て、英彰はそちらに走る。手をついて、
廊下を覗き込んでみたけれど、誰もいない。

振り返って里奈に向かって首を振ってやる。

実際のところ、頭に血が昇っていた英彰には、そんな足音なんて耳に入らなかつた。

目の前にいる里奈のことしか頭になかつた。

「気のせいだよ」

里奈は首を横に振る。

「戸が開いてたし、誰か来ればわかるよ」

「……」

里奈が突然走り出して、英彰の傍らを抜けて、廊下へと出た。

そのまま自分の教室へ戻ってしまう。

英彰はため息をついて、戸に額をこつんとやって、またため息をつく。

里奈がDの教室から一步出て、言った。

「奈津美の鞆がない」

その声は廊下に静かに響いて、英彰のため息を止めた。

「追いかけてよ」

里奈が言う。

「まだ近くににいるかもしれない、あんたの脚なら追いつくから」
離れたところから、里奈は言う。

英彰の脚は躊躇する。

本当に根本奈津美に先刻の話を聞かれたのだろうか。

英彰には聞こえなかつた足音を追いかける気にはなれないから、英彰の脚は迷う。

たとえなにを奈津美に聞かれても、もういいような気もする。

はじめからひどいことをしていたのだ、今更いい人を演じてもそれこそ偽善だ。

投げやりな気分で英彰は教室を出た。

廊下に並ぶ個人のロッカーから、バッグを出して肩にかける。

「早く!!」

里奈はじれたように叫ぶけれど、英彰の脚はゆっくりと彼女の方に向かう。

すると、里奈はなぜか怯えたような顔をした。

里奈の前に立つと、英彰は神妙な顔で静かに言った。

「ごめんな」

「なにそれ」

「職員室に行ってみるよ。根本がいなかったら、根本に会いに行くよ」

「会いに行くって……」

女の子たちの高い声が廊下から響いてきて、それが合図だったかのように英彰は背中を向ける。

「もう終わりにする。こんなバカバカしい事」

「ばかばかしい？」

耳を疑って、里奈は英彰の背中を凝視する。

奈津美はいつも笑顔でいたのに。

どうしてバカバカしいなんてひどいこと言えるんだろう。

英彰と女の子の3人組がすれ違う。

一人が英彰の姿を首をひねって視線で追いかけるけれど、英彰は涼しい顔で歩いていき、階段を下りて、姿を消してしまった。

「奈津美見なかった？」

里奈が彼女たちに声をかけると、

「奈津美ちゃん、さっき、玄関にいたよ。急いでたみたい」

「走ってたよね」

「うん」

「野々村、奈津美ちゃんのこと待ってたの？」

「うん。すれ違っちゃったみたい」

取り繕うように明るく言いながら、里奈は笑って見せた。
ああ、やっぱりだ。

あのとき感じた視線みたいなものは奈津美だったんだ。
英彰に掴まれた腕が痛い。

それを押さえながら、なんて力だったのかと今更ながらに怖くなつて、里奈はこの場所から逃げ出すことにした。

不安に胸をふさがれる前に、逃げなければ。

奈津美は今、どうしているんだろう。

今日、奈津美のうちに行っていない？

里奈は奈津美にメールを出したけれど返信はなかった。
電話もコールはなるけれど、3回ほどで切れてしまう。
家に電話をしても、誰も出ない。

西駅のロータリーのベンチで待ってる。気が向いたら来て。

駅で里奈は電車を待ちながら、しょんぼりと携帯電話をバッグにしまった。

きつとこのメールにも返信はないだろう。
制服のまま、このまま、奈津美が利用している駅まで行くことにした。

家に戻ってバッグを乱暴に放り投げた英彰は、着替えて時計を見

る。

今夜は塾がある。

宿題は済ませてあるから、このまま出かけても問題はない。

腕時計をはめながら、里奈にからかわれたことを思い出しで、口元を歪めてしまう。

ダイバーじゃないのに、ダイバースウオッチ持ってるのヤダ。つまらないこと言いやがって。

あれから奈津美に電話をすると奈津美は、沈んだ声で先に帰っちゃってごめんねと真っ先に言った。

里奈の言うとおり、奈津美は聞いたか見たかしたのだろう。

英彰と里奈のやり取りを。

しかし、あれだけの大声だったのだから、奈津美が気がつかないほうがおかしい。

奈津美に家に来てと言われたことが、意外だった。

鮮やかだった空の色が、曇り始めるとともに空気はますます湿り気をふくむ。

雨の前の匂いがした。

腕にまとわりつく不快感そのもの。それを感じながら改札口を出た英彰はふと足を止めた。

駅からわずかに離れた、ロータリーの敷地内に、東屋を模倣したような建物がある。

老人と女子高生が向かい合うように座って、女子高生は英彰の高校の制服。彼女はこちらに背中を向けていた。

里奈に似ていると思った。

けれど、髪形が違う。今日はひとつに編みこんでいたのに、後姿の女子高生は髪を解いている。

遠目に見ているから見間違っただのと、英彰は頭に手を置いて自分

に呆れながら歩き出した。

奈津美と一緒に出かけたと、家まで送ったことが数回ある。彼の足取りは不思議なほど冷静で鈍ることがない。

そんな自分の冷淡さを英彰はいささか苦々しく思いながらも、奈津美になにを言われても聞きいれようと思っっている。

責められても仕方ないことをした。責められたほうがむしろほっとする。

玄関のドアを開けてくれたのは、若い女性だった。

奈津美にはひとり姉がいて、亜季美とかいう名前だった。

彼女は奈津美とは異質な雰囲気の詳細の美人で、英彰を見るなり、にこりと笑った。

「真崎君？」

「はい」

「奈津美、お客さんだよ」

彼女は上を向いて大きな声を出す。

そして、英彰を手招き、中に入るように言った。

奈津美が階段を下りてくる。

静かに足音がしないほど、恐る恐る。

そして、自分を見上げている英彰と目が合つと、ウサギみたいに赤い目をこすりながら英彰にぎこちなく笑いかけてきた。

「上がった」

亜季美がどうぞ、英彰に言う。

「お邪魔します」

低い声。英彰は居心地の悪さを押しやるように奈津美をもう一度見上げた。

すると奈津美はくるりと背中を向け、階段を昇り始めてしまった。

女の子らしい部屋だった。色も置いてある家具も何もかもすべてカーテンの色がパステルピンクで、奈津美らしいなと思った。

こんなにふわふわとした、女の子そのものみたいな子。

里奈でなくとも、過保護にしてやりたくなくなるかもしれない。
ドアのところで足を止めたままの英彰に、奈津美はどうしたのと声をかける。

落ち着いた様子で、彼女は部屋の真ん中のテーブルでティーポットを傾けている。甘い紅茶の香りが漂う。英彰は彼女の前に腰を下ろした。

「はい、どうぞ」

可愛い花柄のカップを置かれて、英彰は一瞬たじろぐ。
程よくクーラーがきいているとはいえ、この暑さに熱い紅茶。

奈津美はくすりと笑って、

「わたし、紅茶好きなんだ。落ち着くの」

「……」

「先に帰っちゃってごめんね」

奈津美の目が赤い。先刻まで泣いていたようなくらいに。
かつて泣かせないと里奈に言い捨てたことを思い出して、憂鬱になる。

「なんで帰ったの？」

そんなことは言葉にして確認しないまでも、奈津美の目の色が物語っている。

でも、奈津美は力なくはにかんで、

「……ごめん、気分が悪くなったの。おなか痛くなっただってどうか
意外に思いながら、奈津美を見つめた。

奈津美は見なかったふりをするつもりだろうか。

英彰と里奈のやり取りを。

ここで、奈津美の嘘を受けいれるべきなのだろうか。
受け入れては、また同じことを繰り返すだけだ。

奈津美の気持ちを推し量るよりもまず、英彰は解放されたかった。

「野々村と話してたの聞いたから？」

奈津美の表情がこわばって、眉がひそめられる。

返事に窮しているのか、答えるつもりがないのか。

英彰は静かに続けた。

「聞きたいことはない？ 全部答えるから」
ぴたりと。

奈津美の表情が止まった。

そして、今までには見たことがないような冷たい目を向けてきた。

「ひどいこと言うね」

「ごめん」

英彰の声も冷たかったはず。

奈津美は英彰から視線をそらして、目の前の一点を見つめながら、

「里奈と仲が悪いのはどうして？」

「できないから」

「どうしてできないの？ 前は仲よさそうだったのに」

ためらいがどうしても消えてくれない。

答えは喉まで出かかっているのに。

「……真崎は里奈が嫌い？」

「嫌いじゃないよ」

「それじゃ好き？」

ゆっくりと目を向けられて、英彰は答えるように伏目がちに視線を落とした。

向かい側にいる女の子に試されているような気がする。

喉が渴く。

「……俺は、根本に負けたんだ」

「……」

「野々村は、根本と俺を秤にかけて、根本を選んだ。だから、俺はそのとおりにした」

「里奈が真崎に伝えたから、わたしと付き合っつて返事したの」
頷くことでYESと伝える。

突然、奈津美が笑った。

でも、笑みは一瞬で消えて、涙が溢れ出した。

「ひどいね」

「じめん」

「真崎、ひどい」

「……」

奈津美が涙をぬぐう。

ぬぐいながら、昂ぶりだした声で、

「どうしてわたしなんかとってずっと思ってた。真崎は里奈が好きだってみんな知ってるから、わたしだけじゃなくて、みんな不思議そうにしてた。でも、でも、真崎がそういつてくれたから、信じようって」

好きだとかそういう言葉、あなたはわたしにくれなかった。

付き合うよ、明日から。

そんな短い言葉だけが始まりだった。

「どうして里奈なの」

ややこしいなと英彰は思った。

里奈と関わっているから、君とも関わっている。

「親友に裏切られるキモチ、真崎にはわかんないよね」

親友。

ちくりとまた胸が痛んだ。

里奈はその言葉のために散々悩んで、振り回されて。

今日の放課後、泣いたのは奈津美のためだろう。

「野々村は悪くないよ。俺がひねくれてるから、こうなったんだから」

「親友なのに」

奈津美は首を振る。

横に振って、顔を手のひらで覆ってしまう。

英彰の目が険しくなる。

今まで申し訳ないという気持ちで、しょげていた英彰の感情を逆撫でする言葉を聞いた。

親友なのに。

確かに非は英彰にある。

ここで、奈津美が責めるべきは英彰であって、里奈ではない。

「みんな嫌い」

奈津美がつぶやく。

「里奈は真崎なんか好きじゃないよ。なのにどうして真崎とあんなふうにするの。だから、みんなが誤解するんじゃない。里奈が悪い、最初……！」

「野々村は悪くない」

奈津美の言葉をさえぎるように、強く英彰が言うと、奈津美は驚いたように目を見開いた。

「野々村は、根本を選んだんだよ」

「……」

「それが悔しかったんだ」

何度も何度も言葉にして、伝えてきた気持ちがある。

どんなに真剣に訴えても、あっさりと超えられてしまった。

だから、あの時、悔しくて。

親友だとかそういう二人に嫉妬したんだ。

「根本がうらやましかった。ごめん」

それからしばらく二人は黙っていた。

奈津美は涙も止まったように、身動きひとつしない。

息の詰まる空気の中、ドアにせつかちなノックをして、姉の亜季美が顔をのぞかせた。

二人の気詰まりした空気に一瞬たじろいだものの、

「ねえ、里奈ちゃんと約束したの？」

奈津美は困惑した様子で亜季美を見た。

「……里奈がどうしたの？」

「里奈ちゃんのお母さんから電話がかかってきているの。奈津美と会うからって、連絡したきり戻らないんだって。家庭教師の日だからって心配してるみたいよ」

「まだ帰ってないの？」

「ねえ、あんた約束していたの？」

うつん、と奈津美は上の空で答えた。

窓の外を見る。

まだ明るい日ざし。

でも、時計は午後の6時半をすぎている。

「里奈ちゃんがないしてるか、知らないの？」

「知らない」

亜季美が怪訝そうにしながらも、ドアを閉めて階段を下りていく。

その足音を聞きながら、英彰はここに来るときに見た女子高生の後姿を思い出していた。

「野々村、駅にいたよ」

「……」

奈津美が唇を噛んだ。

「ひとりで、いた。根本のこと待ってるの？ あいつ」

「そんなはずない」

「どうして」

「会うなんて返事してないもの」

英彰はもう一度時計を見た。

英彰がここに来てから1時間はすぎている。

「あいつは何時間でも待つよ。そういう奴だろ」

「一体、いつから？」

「里奈とは付き合わないで」

「……何言ってるの？」

「里奈に言う。これから里奈に会う。そう言う。わたしが頼めば里

奈は絶対そうしてくれるんだから」

「そんなのどうでもいいことだろ」

いらだってそう言い放った英彰を奈津美はキッと睨んで、

「わたしのことなんだと思ってるの?!」

叫んだ後、奈津美はそのまま細かいながらも、声を荒げた。

「絶対に嫌。二人が付き合うようなことになったら、里奈と一緒に
いられない。いたくないよ。里奈のこと嫌いになりたくないの、だ

から真崎お願い」

目の前で泣き崩れる女の子と、駅で見かけた後ろ姿。そんな距離を作ってしまったのは、自分だ。

「今から、野々村のところに行つてやつてよ」

奈津美はうつむいたまま、首を横に振る。

「根本が行かないなら、俺が行くよ」

多分、行つても。

里奈は英彰になんて会いたくないだろうけれど。

「……さよならだよね」

奈津美がポツリと言う。

「でも、さよならなんて必要ないよね。付き合つてなかったんだか

ら」

「……」

どうして。

そんなことを言いながら、君は笑うの？

嫌味とかそういうものが伺えないような、そんな顔で。

「里奈は真崎のこと、好きじゃないよ。真崎、つらいだけじゃない」

傷つけた女の子は笑顔を浮かべて、そんなことを言う。

英彰は立ち上がる。

後ろめたさと、自己嫌悪。

重いだけの気持ちはそれで一杯なのに、言葉が出てこなくて。

「世界で一番、あいつに嫌われてるんだ、きつと」

赤い目が英彰を見上げる。

「しかたないよ、俺、そういうことしたんだから」

拗ねた顔をしていたらしい。

奈津美がくすりと笑った。

そして、何を思ったのか、英彰の前で正座をきちんとしなおしたかと思うと、三つ指なんかをついて、ぺこりと頭を下げた。

「ごめんなさい。ひどいことたくさん言って」

「えっ？ イヤ、あの」

面食らった英彰がおろおろする前で、奈津美は頭を下げたまま、

「でも、まだ平気って言えないの。真崎の顔も平気で見られないの。里奈のこともだめなの。ごめんね。まだ、だめだから……ごめんね」胸にしみるよう。

この子のやさしいところとか、不器用に誠実なところとか。

先刻取り乱したことでさえ、状況からすれば当然だよなと、いとおしく思えさせる。

こんな女の子だから、里奈は大切にしたがるのかもしれない。

俺が負けたのは当然かもしれない。

俺はアホか。

うんざりしながら英彰が背中に背負い込んでいるのは奈津美への敗北感。

人間的観点からもそれをしみじみ味わいながら、胸を傷めながら。

それでも英彰は走るわけで、理由は雨が降りそうだから。

先刻まで晴れていたはずの空が、夕暮れとともに嫌な感じにどんよりと曇りだして、湿った風が吹き始めたから。

あの後姿が里奈であることは、英彰の中ではすでに確信になっている。

駅前には夕方の帰宅ラッシュの波も引いて、商店街の終わりにある書店の看板に灯りがついた。

歩道脇に建っている東屋風のベンチには、女子高生の背中。

たったひとりでそこにいる。

うつむいているのか肩は落としがちで、長い髪が風に吹かれても乱されるままにしている。

なんでかなあと、しんみり思った。
なんでありつはここにいるかなあ。

もしもあの時、あの生物室で里奈に奈津美からの告白を聞かされたとき。

癩癩なんて起こさずに、奈津美に対して自分の気持ちそのままを伝えていたら。

奈津美なら一日泣いたくらいで許してくれたかもしれない。

里奈はこんなところでこんなふうな背中を丸めていなかったかもしれない。

離れたところからそれを眺めながら、つんと鼻先が痛くなるのを感じながら。

自分のことをみつともないなあと、思った。

カツコわりいとかじゃくて、みつともない。

恋をするとみんな変わってしまう。

友情が恋愛かなんて腐るほど聞かされた議論の答えは、大筋で間違っていないのだ。

結局奈津美はこなくて、それでも待つていたくて、しつこくベンチに座っていた。

今日は聡明が来る日。

なによりもどんな都合よりも最優先だった。

でも、それよりも奈津美を優先することで、奈津美にもそうしてもらえたらと半分願掛けのように座り続けていた。

そんな自分が惨めになってきた頃、夕暮れが迫って、夕立でも来そうな空になった。

鬱々と唇を尖らせて、東屋風の建物の中から雲行きを確かめようとして、里奈はぽかんとした。

「なッ……」

絶句、そりゃもう絶句。

なんでこんなところにあいつがいるんだ。

色のあせたジーンズの長い足がむかつくなあ。

二人の間には車道。

その向こうとこつちで目が合った瞬間からの数秒。

見詰めあつて呆然として、こみ上げるものを感じたとき、里奈はすつくと立ち上がった。

バッグを掴んでまるで追い立てられるかのように東屋を飛び出した。頭が逃げると言ったのではない。

身体が逃げていた。

それは本能に近い。

なぜに逃げるのだあいつは。

先刻までの殊勝な真崎君はあつという間に消えてしまつて、むっと目を据わらせてしまつた真崎君がいる。

だいたい、あいつは俺の気に障ることばかりする。

だから、あいつの前ではみつともないことばかりしてしまうんだ。

足が勝手に里奈のほうに向かつて走りだす。

ガードレールをハードルのように走るついでに飛び越えて、車が来ないの見計らいながら、車道を渡つて最短距離を。

なんでー?!

英彰がガードレールを越えた。

まったくなんて身軽なんだろう、飛び越えたというより、ひよといまたいだだけのような身のこなしで、英彰が車道を渡ってくる。

それを視界の端で捕らえながら、里奈は駅までの歩道を走つた。

ナニを必死に逃げているのか、わからないけれど、逃げなきゃと思う。

真崎英彰に捕まっていけない。

でも、英彰は俊足だから駅の改札口に突っ込むところで追いつかれた。

定期券なんて嫌い。自動改札のバカ。

「なんで逃げるの？」

肩で息を切らしながら、英彰が言う。

腕をつかまれたわけでもないのに、その言葉に捕らえられた。

脚が止まって、はあはあと乱れる呼吸を押さえる様に胸に手をあてて里奈はその場に佇む。

「なんで？ 野々村」

怒っているような声の色。

それを聞いて。里奈は唇を噛んだ。

この、バカ。

なんで現れるのよ、なんでここにいるのよ、どうしてあんななのよ。

……わたしは都村聡明の教え子です。

こんなときに聡明先生の課外授業が役に立つと思いませんでした。

痴漢に追いかけられたら、振り向いて、痴漢に向かって走りなさい。

振り返ると、怒っているというより、拗ねたような顔の少年がいた。背が高く、人群れの中でも頭ひとつ高いところにあるような彼なのに。

その後、お前はまっすぐに走りゃいいんだよ。

痴漢が不意を突かれてびびるだけじゃなくてだな、振り向かなきゃ

なんねえから、もたつくしな。

「えっ？」

面食らった顔の英彰に向かって足を踏み出した。

彼の傍らを走り抜けて、再び駅構内を飛び出した。

「この……！」

あの女！

英彰は振り返る。

こっぴどいたら意地だ、意地。

走り出した英彰も奇妙な目で見られていることは感じている。

畜生、マジみつともねえ。

どうして、俺はあの子を追いかけるんだろう。

可愛いから？

顔をあわせることが多い学校では、真面目そうなのつまんない

女じゃん。

ナマイキだから？

どうしてそんなのが理由になるんだろ。

俺のせいで泣かせたから？

俺だって泣きたいよ。

いろいろと考えてみるけれど、誰よりも真実を解かっているのは自分自身。

本気なんですよ。

すべてはその切実さゆえの行動。
振り向いて、振り向いて。
振り向いてくれないなら、振り向かせるよ。

100メートルも走らないうちにあっけなく掴んだ里奈の腕。

里奈はよろけて英彰の胸にこめかみの辺りをぶつけて、小さく唸った。乱れた髪の内からのぞく瞳が怒っている。

「なんでこういうことするのよ!!」

「逃げるから」

「なんでここにいるの」

「根本に呼ばれて」

里奈はその言葉に、ショックを受けたみたいにしよんぼりとした。

先刻までの勢いがしぼんでしまって、ぺたんこになってしまったみたいに、里奈はつぶやく。

「やっぱり、友達より男か」

そんな台詞を里奈から聞くと思っていたいなかった英彰は一度耳を疑って、そして、しんみりと。

「……振られた」

「当然よ」

わたしも奈津美に振られちゃったよ。

「ふたりしてひどいことしたんだもん」

里奈の声は涙の気配。

雲行きがいよいよ怪しくなって、歩道の途中で立っているのはいささか危険。

女の子の涙に対する通行人の視線と、夕立寸前の空が英彰にそう警告するけれど、英彰もうつむくしかなくて、里奈の腕を掴んだまま立ち尽くしている。

彼女は声にしないで、静かに静かに泣く。

こんなふうに泣く女の子に何をしてあげられるだろう。

もしかしたら。

なにもしないことが最善かもしれない。

着ているのはまだ夏服だというのに、大野涼子が職員室から抱えてきたプリントは文化祭というタイトルがついていた。文化祭。

「11月のはじめ、文化の日に絡んだ連休」

教卓にプリントの束を置いた涼子は、ポケットから取り出したハンカチで額に浮かんだ汗を押さえ始めた。

里奈はプリントを一枚手にして、ざっと眺め、涼子を見た。

「どーするー、3年になると模擬店って相場が決まってるし」

「んー、模擬店の儲けは半分クラス会費になるからね
そうなのだ。」

必要経費を除いて模擬店で出た純利益は半分文化祭実行委員会を通じて、1/2は学校へ、残りの1/2はクラス会費となる。

クラス会費の使い道はクラスよるが、主に文化最後の打ち上げに使われるか、卒業式後の打ち上げに使われるかがオチ。

「学校で稼いで飲むって、不純だよな」

「飲めるほど稼げないわよ。クラス全員にジュース一杯を労うのがせいぜいってトコでしょ」

涼子が口許で笑い、ふう、とため息をついた。

「夏も終わるわね」

「うん」

頷いて里奈は胸の辺りにちよつとした感傷を覚えた。

夏休みが終わって、夏が終わる。

「なにせよ模擬店って3年向きだわ。3年は部活動も引退してるから、クラスでしっかりしたもんでもやらないと文化祭の間居場所がないし、文化祭準備に追われるほどなにかを作らなければならな

いわけでもないし。放課後の準備なんてみんな嫌がるだろうし」

「受験勉強も本格的になつてきたしね。部活をやめたみんながぐんぐん成績を上げてきてるから焦る。特に男子の追い上げて半端じゃない」

「男子のそういう集中力はすごいと思うけど、所詮男と女は頭脳のつくりが違うのよ。野々村は今までコツコツやってきた蓄積があるし、受験本番で争うのはこの生徒ばかりじゃないのよ」

「そうだけど」

涼子はどうしたのよ、と眉をひそめて、どことなくしょげている里奈を凝視した。

「高校生活最後の文化祭よ。文化祭が終わったら行事なんてあとは卒業式だけなのよ。なにか面白いことやって終わりたいじゃない？」

「そうだね」

高校生活最後の行事である、文化祭。

よかつた事として思い出に残るようなものにしたいなあ。

6時限前の教室は、休み時間とは思えないほどに静かだった。

あさつてに控えた校内模試に備えての自習をしている者、机に腕をつけて寝ている者。

「女クラでもこんな感じだもんね、男クラなんてもつと殺伐としたもんよ」

涼子が苦笑いをする。

文系クラスの3・Dはクラスの2/3が女子なので、ジヨクラと呼ばれたりする。それに引き換え、理系クラスはダンクラと呼ばれるほどにクラスの男女対比は偏っている。

里奈はちらりと、教室の後ろのほうでひそひそと雑談をしている女の子の集団を見た。クラスの中でもおとなしいとされる女子生徒のグループの中に奈津美がいる。

夏休みのあの日から、奈津美は里奈と言葉を交わそうとしない。

無視されているとかそういう陰険さはない。けれど、奈津美は里奈から距離を置いている。

教室の移動も別になった、昼食も別になった。

確かに奈津美にはああいうタイプの控えめなコたちが合っているのかもしれないね。

わたしみたいににぎやかでうるさいのよりも。

そんなことを寂しさ紛れに胸の中でつぶやいていたら、里奈の視線を追ったのか涼子が言った。

「あんなにつまんなそうな顔して、なにやってんのかしら」

「誰が」

「根本」

隣から奈津美が消えたショックは、夏の終わりからじわじわ広がって、時々里奈の心の中すべてを占めてしまう。

親友に嫌われた。

でも、そうされても仕方ないと自分で思うから、修復の方法もなにも思い浮かばない。

「根本、真崎と別れたんだってね」

「あ、ああ、そう」

どきりとした。涼子はズケズケと臆面もなく核心をつくから。

夏休みが終わってからのしばらくの間、里奈と奈津美の間にできた不穏さに対してなにも言わなかったから気にしていないのかと思っていたのに。

「あなたに泣きつかないだけ根本にも根性があったってことよね」

「……」

別れたんじゃない、振られたのよ。

真崎とわたしは。

振られたんだもん、どうして泣きついてなんかもらえるのよ。

始業のベルが鳴った。

それを合図に涼子が教壇の上から声を張り上げた。

「HRにセンセ遅れてくるって言ってたから、とっととはじめるわよー!!!」

次の時間はHR。

議題は「文化祭の演し物について」
里奈は無言のまま黒板に向き直り、チョークを握んだ。

ここしばらく真崎英彰の姿を見ていない。

涼子に真崎の名前を出されて、初めて気がついた。

今まで奈津美のことに気をとられすぎて気がつかなかった。

視界に入ればあの目立つ男のこと、気がつかないわけがないのに。

すとな、と何かが落ちたような感覚。

なんだろう、胸がすとなって言った。

体温が冷えた感じ、なんだろうこれ。

胸を押さえてしまってから、里奈は自分で不思議に思う。

なんで、寂しくなってるの、わたし。

今の今まで気がつきもしなかったくせに。

なんとなく予想はしていたことだけれども、文化祭の模擬店に何をやるかなんて活発に意見が出るものではない。

地味に、それは本当に地味に、たこ焼き屋、焼きそば屋、喫茶店、ドーナツ屋などの文字が並んだだけ。

漫画喫茶という意見もだが、回転が悪すぎるのではという意見により、却下された。

「せっかく女子が多いクラスなんだから、手作りケーキとかを売ろうよ。クッキーとか。そういうのなら、当日にあせて何か作らなくても前日に分担して用意しておけば済からラクじゃん」

元、調理クラブの部長の意見に涼子が飛びついた。

「ケーキ。クッキーね。女の子ウケはしそうだけど、男はどう？」

「男だってケーキくらい食べるわよ。なんなら、惣菜パンでも焼い

てやるし。コーヒーや飲み物のテイクアウトも用意すれば？　ワッフルなんかその場ですぐにできる」

「ウリは手作りってことで。カントリー風の」

女子がにぎやかになってきた。

一方で男子がつまんなそうな顔。

「カフェやろうよ、カフェ！」

「パンか、おいしそう」

「パンは当日に焼かないとおいしくないんだけど……限定で作るっではどう？」

「コーヒーも豆から淹れちゃったりして」

「あんまり手の込んだことはできないわよ、ほどほどにね」

涼子が一応の注意をした。

しかし、女子の盛り上がりはカフェという方向で団結しつつあった。あまりの意見のまとまらなさにイラつきはじめていた涼子の顔にもようやく笑顔が浮かび始め、里奈は挙手なしに出てくる意見を黒板に書き連ねるのに必死。

「エプロンつくろうよ、おそろいのっ。メイドさんみたいなひらひらの白いヤツ」

「なにそれ、悪趣味」

「どうせなら可愛くしたいよねー」

「エプロンなら制服の上から着ればいいからラクじゃない？」

「人数分の布代、活動費から出るかしら」

涼子が頭を抱えながら、里奈に訊ねた。

里奈は首をひねりながら、

「人数分って、男子のも？」

それを聴いて、涼子がはっとした。

その表情に里奈が戸惑っていると、やがて彼女はにやりと笑い、我関せずな態度で口を閉ざしているノリの悪い男子生徒に向かって、

「……男子もヒラヒラエプロンって、いいわねえ」

女子の間から笑い声が起こり、男子生徒たちはぼかんとしたり、な

んだよそれはと声を張り上げたり。

「ヒラヒラエプロンなら製図するよっ。エプロンなら流れ作業すればすぐにできるよ、布地だって白一色まとめて買えば安く済むって！」

「おお、さすが手芸部」

「まかせときな！」

「勝手にまかせられてんじゃねえよ!!」

そこで、涼子がパンパンと手を叩いた。

喧騒が静まり、彼女に注目したクラス中の生徒たちに涼子はお名前の通り涼しげにあっさりと言った。

「飲食店に関わるとなると保健所に検便を提出しなくちゃならないわよ。その覚悟できてる？」

「ぎゃああああー!! と断末魔のような悲鳴があがったのは言うまでもない。

「大野! あんた黙ってりゃあ美人なのに、どうしてそんな単語すらすら言えるのよ!」

「検便は検便よ。ほかになんて言うのよ、お検便とでも言えっつての?」

「おおのー」

地を這うような低い声を出したのは、保健委員だった。

「回収はあたしってかー」

里奈は渋い顔でため息をついた。

「手伝うよ」

とにかく文化祭は飲食店・カフェをやることに邁進し始めた3-Dだった。

受験生というのは日ごろの鬱憤がたまっているものだ。勉強勉強、それ勉強。

サボれば非国民のように避難されてしまうし、がんばっても成績が下がればその努力なんて価値はないとまで決め付けられる。

が、文化祭は違う。

ガッコがやれというのだ、お勉強以外のことを。

そのあと、推薦入試が控えていても。

「文化祭が近いけど、浮かれんなよー」

文化祭色に染まりすぎた感のある3・Dのクラス担任がそう言うけれど、その実は浮かれているドコロの話ではない。

クラス中が切羽詰ったように、自分の役割分担をこなすことに集中していた。

放課後、女子は40枚分のエプロン作成のため被服室にこもってひたすら流れ作業。

男子は少数精鋭ながら、教室で大道具、小道具作成。

大野涼子委員長の指揮の下、放課後の2時間勝負でそれは日々行われ、教室の後ろの掲示板には大々的にスケジュール表が貼られている。塾がある者、都合の悪い者はそのムネを書き込むことになっていた。

「いいの、野々村、欠席なしで」

涼子がスケジュール表を眺めながら、自分のことは棚に上げてそんなことを言う。

「放課後2時間なら」

涼子は家に持ち帰っての作業は禁止した。

文化祭関係の仕事は学校で済ませること。

「忙しくしてるとなんだか充実感があつて楽しい」

被服室で裁断しながら、ミシンを動かしながら、みんなでワイワイやっているのはホント楽しい。

でも、作業が遅れたらどうしようというプレッシャーも里奈にはあ

る。

「根本も意外とがんばってくれてるじゃない、あの子推薦近いのに」
「……うん」

ぼんぽんと涼子が里奈の肩を叩く。

「嫁に逃げられたダメ亭主みたいな顔してないですよ。沈んでると周りが見えなくなってるもんよ」

「どつという意味」

「それくらいは自分で考えなさいよ」

「あ」

放課後、教室から被服室へと白い布の束を抱えて歩いていた奈津美が足を止めた先には、帰り支度ですよという風情の真崎英彰がいた。茶色い髪が廊下の窓からの光で明るく透けている。

ただでさえ真崎は目立つのに、後光を背負って立っているなんて反則だよ。

昨日まで、奈津美は彼を見ないようにしていた。

見えても見えないふりをしていた。

でも、こう、二人きりではったりしてしまうと、見えないふりはできそうにない。

英彰のほうも奈津美を見ているし。

「こ、こんにちは」

早口にそう言っつて背の高い彼の隣をすり抜けた。

英彰は足を止めたまま、首だけ振り返り奈津美の小柄な後姿が通り過ぎていくのを見ている。

振り返らなくても、それがわかって奈津美はことさらに足を速めて彼の視界から消えてしまおうと階段までを急ぐ。

見えないふりをしていても、彼を見かけると切なくなるし泣きたくなる。

けれど、同時に姉に言われたことも思い出して、唇を強く噛んでし

まったりもする。

夏休み、英彰が奈津美の部屋から帰った後で、奈津美は亜季美に泣きつくように訴えた。

奈津美は一人で辛いことを抱え込むのが苦手だから、何があっても誰かに自分のココロとか気持ち吐露してしまうところがある。

英彰と何があつたのか亜季美も興味があつたようで、奈津美の話を黙って聞いてくれたけれど、一通り聞き終えての亜季美の言葉は意外に冷たいものだった。

「マサキくんが一番かわいそ」

奈津美の姉、亜季美はシビアだ。

それは無関係な人間の考えだからかもしれないし、彼女が奈津美よりも4歳ほど年上だからかもしれない。

奈津美の話だから、多少は奈津美に都合のよい話になっていたはずだ。

受験勉強に集中するために、真崎に告白してしまつて気持ちをさっぱりしようとした。けれど、直接は言えなくて里奈に気持ちを伝えてもらった。そうしたら、彼は付き合ってくれた。でも、彼はわたしじゃなくて里奈が好きだった。それならばどうしてわたしと付き合うなんて言つたのか、最初から断ってくれたらよかったのに。

こんなことを、奈津美は泣きながら訴えたわけで。

英彰が里奈を好きなんだろうなと気がついていたことは言えなかった。

「あなた、男つて無条件に強いとか思つてない？」

悲しさ真つ最中だというのに、なぜそんなことを言われなければならぬのかわからず、奈津美は口を引き結びそっぽをむいた。

「振られても何しても、男は強いから大丈夫とか思ってるんですよ」

「……」

「でもね、好きな子から、シンユウガアンタノコトスキダツテ、なんて言われたら人間誰だってへこむもんよ。傷つくのよ」

「……」

「みんな悪い」

「……」

「真崎君も悪いけど、あんたも悪い。自分で告白できないなら、言わなきゃよかったのよ。今、あんたがそうして泣いてるのは自分のせいでもあるんじゃないの？」

優しい言葉をかけて欲しかったのに、どうしてこんな酷いことを言うんだらう。

今のわたしには、人のことなんて思いやれる余裕なんてない。

奈津美が唇を噛んで大粒の涙をこぼすと、亜季美はいささか声のトーンを優しくした。

「あんたが泣いてるくらい、真崎君も泣いたかもしれないってこと。奈津美らしくないよ、人を責めるだけなんて」

「わたしらしくないって、どういうこと亜季美ちゃん」

亜季美は困ったように口許で笑った。

「とにかくあんたらしくないって思ったのよ」

階段を登り始めて、奈津美は足の速度を落とした。

胸に抱えられた白い布の束をぎゅっと抱きしめる。

真崎の傷ついたのかな、わたしと同じくらいに。

真崎を傷つけたのは里奈だけじゃなくて、わたしもそうしたのかな。

推薦入試の日程が近いというのに、奈津美は放課後文化祭の準備には毎日参加している。

塾に遅刻することもあったけれど、それでもかまわないと思っっている。

クラスの大人しい感じの女の子たちと一緒にいるから1人ではないけれど、寂しいから。

里奈が涼子とばかり行動を共にしているのが、寂しいから。

里奈は行事とかあると人一倍がんばってしまうから、ささやかな

がらその手伝いをしているつもりだ。

でも、里奈に歩み寄ることも今更できない、里奈に近づきすぎると胸の中に黒いもやもやが発生してしまう。

自分でもどうしていいかわからなくて、時には涼子に嫉妬してしまうっている自分に気がついて。

「里奈なんて大嫌い」

こんなことをつぶやいてしまう。

わたしらしさって一体どんなことなんだろう。

「仮装？」

3年A組、真崎英彰のクラスでは文化祭の催し物に写真館をやるということになっている。

3-Aの生徒たちがそれぞれに仮装をして、デジタルカメラを持ち寄り、お客の写真を撮って、パソコンで加工して1時間後にお渡しというシステムだ。

プリクラもできるし、ポストカードにだってできる。

携帯電話のカメラの撮影だってOKしちゃうし。

衣装もタキシードからウエディングドレス、セーラー服、ゴジラの着ぐるみとどこで集めてきたのか多彩を極めている。

極めつけは、一緒に写真を撮りたい人間を指名すると、3年生の権力をフル活用して3-Aの生徒が校内のどこからか拉致ってきてツーショットのお写真が撮れるという。この場合、相手によっては拒否権はないものとする。

「忙しいのは当日だけだから」

確かにそうだ、確かに。

窓際の後から2番目の席で、真崎英彰は頬杖をついた姿勢で欠伸を噛み締めた。

「石河、仮装だつてさ」

隣の石河君が英彰のほうを向いた。

「やるしかないべ」

「そーだけど、なにする」

「父親の衣装借りるさ、祭服」

「あの、聖歌隊が着てるみたいなやつ？」

「平服でもいいかねえ。まあ、貸してくれるやつを着る。あんたは？」

「俺？俺は……」

英彰は少し考えて、

「ダースベイダーのマスクでもかぶるかな。イトコにロス土産でもらったのがあるんだ」

「顔が見えないじゃない」

「なんで見えないとダメなんだよ」

「いやー、それはねえ」

石河君は笑いながら曖昧な口ぶり。

英彰が訝しげに目を細めると3-Aの委員長が石河君を手招いた。

立ちあがりながら石河君は早口に言った。

「俺も家から借りるんだから、あんたもそうしたら。タダだし」

「親父の厨房服借りろつて？」

「あんた、実家バイトでウェイターのカッコしてたじゃない。アレだつて立派な仮装だろ」

「……あー、あれか」

面白みはないが、手っ取り早くていいかもしれないと英彰は思った。どーせ、単なる文化祭なのだし。

石河くんがいなくなってしまったので英彰は頼杖をつきなおして目を閉じた。

英彰の前の席で理系クラスには貴重な女子生徒がこそこそ話をしてる。

「3年はBが鉄板屋で、Cが和風喫茶で、Dが手作りカフェで、E

がフリーマーケットやるんだって」

「やっぱり食べ物系多いよねー」

Dと聞いて、英彰は目を開いた。

野々村里奈のクラスはそんな面倒なもんをやるのか。

「……………」

彼女のことを考え始めようとした自分の愚かな思考回路に待ったをかけた。

あいつのことなんて考える必要はない。

夏以来、あいつの視界から消えてしまおうと努力してきたじゃないか。

春に告白して振られたんだから、今更遅いくらいだ。

もともとはこっちの気持ちの自然消滅を狙ってたのかもしれない。

だったら、バカにすんじゃねえよと頭にもくるけれど、それはそれでひとつの答えだ。

それに俺は受験生で。

家庭内不和も抱えて、第一志望に受からないことには格好がつかない、浪人するなんてもつての他だ。

だから、面倒なことのひとつくらい排除したほうがいいんだ。

彼女なんていつでもできる。

……………べつに、今じゃなくても。

……………べつに、あいつじゃなくても。

そーだ、そーだ。

そーなんだよ。

文化祭の準備が思いのほかスムーズに進んでいるというのに、里奈の気持ちは焦るばかり。それを空回りと自分でもわかっているのだが、完了するまできつとこのイライラにも似た焦りは消えないの

だろうと思う。

昼休み、お弁当を残してしまったし。

昨日から始まった生理のせいでお腹も痛いしで、里奈は休み時間もあまり動かず、自分の机でぼーっと過ごしていた。

次の授業が体育だというのも気持ちが悪入る。

「顔色悪いよ、また生理？」

その通りだよ、悪かったね、と里奈は隣のクラスの世話焼き屋を睨みつけた

里奈の机に両手をついて奥澤いずみはいささか心配そうに、里奈が無意識に片手で押さえている下腹部に目を向けた。

「痛いの？」

「前はこんなじゃなかったんだけどなあ。でも、さっき薬飲んだからそろそろきいてくると思うんだ」

「……おんなってイヤよね、こういうときだけは」

「うーん」

お腹を両手で押さえて里奈が机に突っ伏したとき、いずみは声のトーンを落として、

「根本さんのことだけど、心配しなくてもいいからね。英彰君と別れたって広まったけど、陰口叩くやつはシメといたから」

「しめといたって、あんた……」

「見せしめ」

「……奥澤さんの活動の根拠って何？」

「クラブ活動みたいなもん。そろそろ引退する。イヤなのよ、姑息なこと。それだけ」

各方面にとって彼女の活動自体余計なおせっかいであることは本人もわかっているらしい。ので、里奈は口を閉じたまま目も閉じた。

どーにも全身がふらふらする。

お腹も痛いし。

「保健室いけば」

「……それほどでもない。平気」

いずみは無理しないでよ、と言いながら、自分の教室に戻って行った。

よっこらせ、と里奈は頭を上げて椅子から立ち上がった。

こんな体調のときに体育。

「マラソンじゃないといいなあ」

陽射しも和らいできて過ごしやすくなってきたとはいえ、昼食後の体育は胃腸によくないと思う。

薬はなんとなくきいてきたような気がするけれど、微妙なだるさが全身を包んでいる。

今日の授業はありがたいことにバレーボールだった。

体育館でのバレーボールなら試合に出ていないときは座っていられる。

隣のコートでは男子が熱いゲームを繰り広げていて、低い歓声が体育館に響いている。

それを見ながら里奈は下腹部を押さえた。

どうしてこんなに生理痛なんか。

今までこんなに痛くなかったのに、最近変だ。

「ののむらー、出番」

「あ、うん」

女子のゲームがひとまず終了したらしい。

負けたほうの生徒たちがコートから出て、里奈たちと入れ替わろうとしたとき、コートの端の方を歩いていた里奈に向かって、何人もの声が飛んできた。

「ののむらー!」

「あぶなっ」

たくさん息を飲む音、なんだ？　と思うまもなく、里奈の頭に横からバレーボールが直撃した。

男子の渾身のスパイクがブロックされて、それたボールらしい。

里奈のみつあみがはねあがり、よろけて頭を押さえながらコートにしゃがみこんだ。

やばい、貧血になりそおだ。

「副委員長、ごめんな」

ブロックを決めた男子が保健室までやってきて頭を下げるものだから、里奈は恐縮しまくって首を横に振り続けた。

保健委員もそばにいてやたらと気遣ってくれるから、なんとというかこそばゆい。

「ぼーっとしてたあたしも悪いから、そんなに気にしないで」

彼らは6時限の予鈴がきこえると教室にもどり、里奈と養護教諭が残された。

養護教諭は里奈のためにベッドを整えてくれた。

「寝てなさい。わたしはこれから保健室を空けるけれど、何かあったら職員室に連絡しなさい」

はい、と里奈は素直に従った。

授業に出なきやとか思う気力が目減りしていて、寝ていていいならそうさせていたきたい。

がんばるしか能のないあたしなのに、なんか怠け者っぽいな。

しゅん、としながらジャージ姿のままベッドに横になった。

ベッドを覆うカーテンを閉めてもらうとわずかに薄暗くなった。

枕に頭をのせて目を閉じたとき、にぎやかな声にいやいな予感。

「センセ腹痛と頭痛がいつぺんにきてるんですけど」

「安心しろ、それは気のせいだ」

「疼いてます、キテマス、キテマッス」

「さっさと教室にもどれ、6限始まるぞ、小関。」

小関って、やつぱし、小関輝樹かい？

見つからないように見つからないように、タオルケットにもぐりこんでみたけれど、現在、保健室でベッドを使用しているのは里奈1

人だけ。

2年生の新聞部のパパラッチ、小関輝樹くんはこの春以降何かと里奈の前に現われる。

目の前をぶんぶん飛び回る蚊のようにウルサイけれど、どこか憎めないところがあつたりするから始末が悪い。

「わたしはこれから保健室を留守にするんだよ。おとなしく寝てるならいてもかまわないが」

「こんなに病人なのに何をするっていうんですか、俺が」
「軽犯罪」

「……センセつてば」

「即座に警察に通報するからな。その前にあることないことつけてさらしもんにしてくれるから覚悟しとけ。わたしは有言実行タイプだ」

軽犯罪くらいならやりかねないかもー、小関なら。

だけど、保健のせんせいなら、さらしものの刑くらいにはしてくれるかもー。

ベッドの中で息を殺していたら、養護教諭は荷物をまとめて出て行ってしまった。がらがらとドアを開けて閉める音がした。

すると、見計らったような間の後、カーテンの向こうから声がした。

「野々村さーん、寝てますかー？」

「……！！！」

「寝てるんですか、あけちやいますよう」

な、なんであんたはあたしだってわかるんだ、それよりなにより、なんでカーテンを開けようとするんだ、バカッ。

「や、やめてよ、あけないでよっ」

「あー、やっぱり野々村先輩だ」

小関君のニコニコ顔がカーテンの向こうにはあるに違いない。

「な、なにやってんよ、頭痛と腹痛はどうしたのよ」

「痛いですよ」

「なら寝てなさいよー！」

「添い寝してくれます?」

「……悪いけど、わたしは本当に寝ていたいよ。邪魔しないでくれる?」

「ああ、生理ですか。女の人は大切にしないと」

「……」

なんでこう、コイツはー。

言われたくないところをずばつと言われてしまって、思わず涙ぐみそうになりつつ、里奈は拳を固めた。

殴れるもんなら殴ってやりたい。

「思ったより元気そうじゃないですか」

「あなたのおかげだね」

「放課後にまた来ますよ、寝ててください」

「来なくていいわよ、来るなっ」

「どーして」

「どーしてもこーしてもっ」

里奈が声を張り上げたとき、静かに保健室のドアが開く音がした。

「ゆっくり休んでくださいねえー」

「うるさいっ」

シーンとした保健室で、里奈は目を閉じた。

生理痛なんてキライ。

こんなことでヘタレてるわたしもキライ。

なんでこんなに痛くならなきゃならないのか、だるくならなきゃならないのか。

受験の不安なんだろうか。それとも、奈津美との事が原因?

奈津美に嫌われたなんて、やっぱりイヤだ。

でも、謝るにしてもどうしていいわからない。

謝るのは余計にこじれそうだということを里奈は直感でわかっていて、実行しないでいるといったほうが正しい。

頼んでみようか、もう一度仲良くしてよ、と。

でも、キライな人間と仲良くすることなんて誰だって嫌なはず。

後悔は毎日している。

けれど、あの時。

奈津美に真崎英彰への告白を頼まれたときに一体どうすればよかったのか、里奈は今もわからないままにいる。

ただ、これだけはわかる。

二人とも里奈の前から消えてしまったことだけは。

「俺としてはお前の希望に異議はないよ。どこをみても申し分のない大学ばかりだし。ただ、家の方が心配されているみたいでなー」「すいません、変な親で」

「そういうことを言ってるんじゃない。自分の息子の進路だからな、心配しない親は珍しいだろう。どういう心境の変化かわからんが、とにかくもう一度第二志望以下の大学を首都圏に絞ってみてもいいと思うぞ?」

俺の進路だ、べつに志望校のランクを落とすわけじゃないんだから、やかましいんだよ。

喉までそうでかかると言葉を英彰はむっつりと黙ることでおしとどめていた。

母親がとうとう今日の午前中に学校にまで押しかけたらしい。

おかげで進路のことで職員室に担任に呼び出されてしまった。

担任は6時限目の授業は持っていないらしく、6時限目が始まった後もしばらくしつこく志望校についてよく考えろと念をおしてくださった。

「えんちゃん、俺、6限出ないと」

「……あ、それもそうだな」

相変わらずアバウトな担任だ。

英彰とは去年から2年越しのお付き合いだが、このアバウトさがい味でもあったりするからたまらない。

この担任に怒るのは方向が違う。

息子が思うままにならないからと、高校の担任に訴えるという大人気ない母親の実力行使に英彰の怒りは爆発寸前だった。

この英彰の性質は母親から来ているものでもあるのだが、似たもの同士はお互いのことをナカナカ理解しあえないものなのかもしれない。

英彰が職員室を出ると、珍しく眉間にしわを寄せた養護教諭に遭遇した。

英彰を見ると、養護教諭の眉間からしわが消えて、いつもの彼女になった。

「なにやってんだ、こんな時間に。授業は？」

「進路指導されてました」

「はー、それはそれは」

彼女は教頭に用事があるとかで、ここにやってきたらしい。

面会相手が教頭ともなると、彼女の眉間のしわもうなづける。

「真崎、6時限の間中は留守にしているからな、保健室に来るなよ」

保健室の住人、というと虚弱体質やらお生意気なみなさんやらと相場が決まっているけれど、真崎英彰君もそのなかの1人だ。

「……最近行ってないでしょ」

「お前は授業が中途半端になると大抵来るからな。女子生徒がバレーボールを頭にくらってベッドで寝てるから」

「別に俺がなんかするわけでもないでしょうが」

「寝てるのが野々村里奈だから言ってるんだ」

この養護教諭の台詞に英彰はいろいろな意味で絶句して、そして、背筋が冷えるほどの焦りを覚えた。

なんでこのおばはん、野々村だからなどと言うのだ。

これは、わかっているぞと暗に言われているのではないだろうか。

「野々村も頑張りすぎてるみたいだから、ヘタにかまわないでやれよ」

「……」

不覚にも何も言い返せなかった。

不意打ちはどんな相手でも弱いものだとしても、これは痛すぎる。

「バレーボールにあたるなんて、ばかじゃん？」

体温は上昇、頬の辺りが熱い。

手のひらを握ったり開いたり。

落ち着かない、何かが壊れたみたい。

授業は終業のベルがなる前に終わった。

英彰にとって、なんとも落ち着かない30分間であった。

あの養護のババアに訂正しておかなければ。

そういう思考に頭の中を支配されつつあった。

色恋に関してむきになって反論なんぞをすればするほどに、人間と
いうものは正論であると確信をするものだ。

が、そんな簡単なことすら思いもよらないほど、彼は焦っている。

養護教諭の口から出た名前がどうでもいい人間ならば英彰もここ
まで焦らない。

そう、本当のこと、それもうまくいっていない真実だから、なんと
いうか。

混乱してしまうのだね。

「真崎君、掃除！」

「悪い、すぐ戻る」

「サボリ〜!!」

俊足英彰は保健室に走った。

まだ授業をしているクラスばかりで廊下はすいていて実に走りやす
かった。

階段を一気に駆け下りて、保健室に向かった。

保健室のドアを開けたとき、養護教諭のデスクが無人である様子に
英彰はぽかんとした。

養護教諭がまだ職員室にいるだろう事は頭の中にはなかった。

……落ち着いて考えれば、すぐにわかることだけど。

「アホ、俺」

がつくりとドアにもたれて英彰は頭をたれる。
なにやってんだろ、俺。

しんと静まり返った保健室。

いくつか並んでいるベッドのひとつ、一番手前のベッドのカーテンが引かれて、誰かがそこで休んでいることを示している。

……。

回れ右して帰れよ、俺。

ベッドのカーテンを見つめながら、英彰は胸の中で呟く。

けれど、ベッドで休んでいる病人と英彰のほかには誰もいない。

帰れッたら、俺。

ここで養護のおばちゃんにばったり会ってみろ、それこそ事態はサ
イアクじゃないか。

「……」

ちらりと、ベッドを見る。

見るだけ、そっとカーテンをつまむだけなら、少しだけなら？

バレーボールにあたって倒れたとかいうマヌケたやつ顔を少し見るだけなら？

「……」

ドアが開いた音に、里奈は目を覚ました。

浅い眠りだった。

誰か来たのかな、ベルはまだ鳴っていないような気がする。

保健のセンセが戻ってきたのかもしれない。

とろとろと薄く開いた目に天井が見えた。

保健室で寝ちやうなんて。

春の体育祭の時は、タイヤを取り合ってスニーカーを顔面にぶつけ

られてもピンピンしていたのに。

本当に目に見えてへこたれている自分を励ましたくて、夜は夜でお肌のお手入れなんぞに力を入れすぎてかえって頬の辺りに小さいにきびができてしまつて、余計にへこんだりしている自分が空回りしているみたいで、里奈はますます憂鬱になつてくる。

がんばつてもがんばつてもダメなときつてあるのかなあ。

「アホ、俺」

そんな声がした。

その声に、里奈はぎくりとして身体をこわばらせた。

男子生徒の声、それも聞き覚えがある。

イヤ、男の子の声なんて似てるもんだ、まさか、まさか。

ベッドの上でおろおろしていると、心臓がますますバクバクしてきた。

カーテンが不自然に動いた。

げげっ。

手が。

長い指をした、その手がカーテンを少しだけつまんだみたいに動いた。

だから、とつさに目を閉じた。

そつとのぞいて見てみたら、彼女は眠っていた。

いつもはきちんと隙なく結わえられているみつあみが、ベッドで眠っていたせいか少しだけ解れている。

眠っていることに安心して、英彰はつまんだカーテンをさらにつまんでベッドのそばに立った。

寝顔なんて見たのは初めてかもしれない。

目を閉じるとまつげが長い。口許を引き締めて眠っているのがわずかに奇妙で、でもこの娘らしくもあつて。

久しぶりに見た。

こんなに近くで。

大野涼子が言っていた言葉が脳裏をよぎる。

野々村里奈から離れてやりなさい。

そのほうが野々村のためよ。

夏の一件でそれを英彰自身も感じて、距離を置こうと思ったのに、いろいろな理由をつけて、英彰なりの努力をして。

でも、そんな苦労なんて一瞬で泡のよう。

手を伸ばしていた。

その指先は恐々と里奈の額に触れて、前髪を撫ぜた。

ボールが当たったのは、このあたり？

「無理してんじゃないよ、バカ」

唇からこぼれたそれは自分の声とは思えないほどに、弱くて優しい。

どうしてこんなにみっともないことばかりしてしまうんだろう。

退くと決めたら、退けばいいのに。

今まで、こんなにみっともない真似、したことなかったのに。

女だぞ、たがが女じゃん。

6時限の終わりを告げるベルが鳴った。

弾かれたように触れた指先を外した。

逃げるように彼は彼女から離れる。

そのまま足は保健室を出た。

狸寝入り解除。

ど、どーして真崎が。

金縛りにあったように体が動かないまま、目だけ開いて里奈は天井を見つめる。

そうしたら、そうしたら。

「野々村さん、今、真崎先輩とすれ違いましたけども？ えっらい
ダッシュかましてましたけども？」

本当に戻ってきやがった、小関輝樹。

べつに彼には狸寝入りなんかしなくてもいいのに、里奈は慌てて目を閉じた。

こうなったら地蔵のようにとぼけてやるんだ。

「野々村先輩ってば」

寝てます、わたしや、寝こけております。

小関は里奈のベッドのカーテンを開けると、小首をかしげた。

「野々村先輩、寝てるんですか」

はい、その通りです。

そもそもなんであんだ、ここに来るんですか？

「ねえ、真崎先輩、ここにいたんでしょ？」

寝てる相手に話しかけないですよ。

「ねえ、野々村先輩？」

なんだろう、小関の声がとても近く感じる。

言葉と共に、なんだろう、なんだろう、息遣いまでも感じるような

……ちよつとまて！！

「んぎゃあああつっ！」

里奈は慌てて両手を突き出した。

唇まで至近距離にあった小関の顔を、意味不明の絶叫と共に押しつけた。

飛び跳ねるように半身を起こして、里奈はぐいぐいと小関の顔をなおも押し続けた。

小関は里奈の手のひらが口許に押し付けられて話せなくなっていたらしい。

彼はぺろりと里奈の手のひらを舌でなめた。

「きゃー……！」

手のひらに感じた異様な感触に里奈は再び悲鳴をあげて、手を引っ

込めた。

ベッドの端ににじり寄って上目遣いに小関を睨む里奈に、小関は悪びれもせず平静そのもの。

「起きてんじゃないですか」

「あんたってヤツは……」

小関はベッドの脇に立って腕を組み、にこやかに言った。

「野々村先輩のいるところに、必ず真崎先輩が現われるんだから。

ボク登場が3分遅かったですね」

「なに言ってるのよ。いい加減にしなさいよ。人のことからかってばっかり」

猛然と怒りがわきあがってきた。

コイツ、やること言うことすべての冗談の質が悪すぎる。

「どいてよ。教室に帰るんだから」

「あ、怒っちゃいました？」

小関の言葉を無視して、里奈はベッドから降りる。

まだだるさが体に残っているけれど、怒りのパワーはそんなもの吹き飛ばす勢이었다。

嫌な気持ち、本当にイヤだ。

「……」

今まで自分が寝ていたベッドの上を簡単に整えて、里奈は保健室を出て行こうとした。

「先輩、怒らないでよ」

小関の声はいつもよりも神妙だった。

でも、それを聞いた位で里奈の怒りが収まるわけもなく、返事をせずに里奈はドアに手をかける。

「俺、心配してるんですよ」

そんなもん、してくれなくていいわい！

必要以上に怒り心頭なのは、混乱しているからだ。

里奈は自分の額を撫ぜた。

あいつ。

前髪にも触った、額にも。

なんでだろう、泣きたい。

こんなグラグラな気持ちは生理だからだ。

イヤだ。

だから女の子なんてイヤなんだ。

> 2 <

「来てよね絶対」

「暇があればな」

「あー、絶対こないでしょー、その言い方」

天下無敵のはずの家庭教師様・都村聡明は、先刻から異様なほどに文化祭に来てよねとばかり繰り返す教え子に辟易している。

ここしばらく収まっていたはずの里奈の甘ったれた態度。

「里奈、がんばってるんだよ？ むちゃくちゃがんばってるんだから」

そう拗ねて見上げるその目つきときたら。

ため息をついて聡明は丸めた参考書で、里奈の頭をぱこんとやった。手を突いていた学習机から身体を起こして、参考書で顔を半分隠す。

「おまえね、迂闊にそういう顔すんなよ。誤解されっぞ」

「なによ、誤解ってー」

「あのな、俺はお勉強しに来てるの。お前におちよくられに来てるわけじゃねえの」

「おちよくってなんかないよ」

「文化祭はわかった。時間があつたら様子を見に行つてやるよ。でもな、約束はできねえから、期待はすんな」

「そーめい、忙しいんだ」

「それなりにな」

しゅん、として里奈は唇を尖らせる。

思わず笑ってしまう。

持ち前の細い目をいっそう細くして、聡明は里奈の頭を拳で柔らかく小突いた。

「がきんちよ」

小突かれたあたりを手で押さえて里奈は聡明を睨んだ。

「なによう」

「アマツタレ」

生徒が甘えたいなら、甘えたい分だけ甘やかしてやりたいところだが、そもものんびりとしてはいられない。

里奈の受験は目前に控えている。

聡明にじゃれついてみたけれど、すつきりしない。

以前よりも聡明が相手をしてくれないからだと思ふ。

バカだのアホだの罵詈雑言でもかまわない、聡明にかまって欲しい。なのにこの頃の聡明は半分オトナの顔をして、里奈のことを突き放す。

つまらない、つまらない。

ふてくされて頬に手の平をあててそっぽを向いた。

そうしたときに中指でこめかみを押さえていて、その指先が一瞬戸惑った。

額に触れられたことを思い出した。

ざわざわする。

胸の辺りが。

里奈は落ち着かない素振りで鎖骨の辺りを撫ぜた。

何かが爆発しそうな、こみ上げてくるものを感じる、そのあたりから。

無意識に自分の首の付け根を押さえつけるように手のひらで押さえていた。親指に力が入って息苦しい。

「……どうしたんだよ？」

聡明が言った。

彼の声に反応せず里奈は1点を見つめたまま、唇を引き締める。
なんで、なんで。

あたしばかり。

こんなにがんばってるのに。

奈津美のバカ、小関輝樹のバカ、真崎のバカ……。

「聡明のバカ」

「ああ？」

なんだよ突然、と聡明が目を眇め、そしてため息みたいに小さく息をつく。

頭に手をのせられたので、聡明を振り仰いだ。

彼は笑っている、どーしたよ？ って。

いつもなら、そう笑ってくれて頭をぽんぽんしてもらえば、元気になれるはずなのに、元気になれない。そればかりが尚更腹が立ってきた。

「ばかつて、ばかなんて、浜崎先生が言ったら怒るくせに！」

「ハマサキ？ ああ。佳乃か。なんで佳乃が」

「怒るくせに！！」

「怒らねえよ。ベンキョしたくねえならそれでもいいからよ、まあ落ち着けよ」

屈託なく笑いながら聡明は里奈の頭をぽんぽんやさしく叩く。

「もお、やめてっつてばっ」

癩癩を爆発させて里奈は彼の手を振り払った。

聡明の驚いた顔。

一瞬、しまった！ と思ったけれど、その思いとは裏腹にはじけた何かもあって、里奈は椅子ごとくるりと身体の向きを変えて、聡明と向き合った。

「聡明はなんにもわかってない」

「……」

彼の表情から驚きは消えていた。

聡明は里奈に視線を向けて腕を組み、そして思いなおしたようにその腕を外し、腰の辺りにおいた。

「なんで、なんで、聡明はえらそうなの。わたしだってがんばって

るんだよ、がんばってるよ、ホント、いっぱいがんばってるよ!!」

「わたしなんてどうせがきんちよよ! 聡明は聡明はいつつもそうやって子ども扱いしてさ、えらっそうでさ、わたしのことなんて……!」

涙が出てきた、涙も感情も収まらなくて、里奈は手で涙をぬぐいながら、聡明を睨んだ。

「同じに見てくれない、どうしたって絶対に見てくれない。どれだけががんばったらしいの? 見下さないでよ、聡明から見たらガキだろうけど、それなりに本気なんだよ!? わたしの気持ちなんて聡明は絶対にわかんないんだ、どんなにあたしが……!?!」

口許を手のひらで押さえられて里奈の言葉の洪水がストップした。

それはやんわりとではなく、かなり強引にもう黙れというような強引なやり方。

涙の残る上目遣いで彼を見ると、聡明は静かに言った。

「後悔するようなことは言うんじゃないよ、ガキ」

こくりと息を飲む。

意識が戻ってくる。

聡明の手が離れた。

呆然とする里奈に聡明の声が降ってきた。それは厳しさも混ざった静かなトーン。

「お前と俺の間には境界線があるんだよ。俺は何年も前に受験とやらをクリアしてるからな。お前はまだまだの挑戦者だろ。あつち側とこつち側だよ。見下してるつもりはねえけど、そうされても文句言えねえ立場だったこと覚えとけ」

「……」

「大学に受かればエライってワケでねえよ、マジで。お前が大学生じゃなくて例えば……極端な話、鳶になりたいと希望したとしてもさ、懸命にやって一人前になったら俺はすげえと思う。お前は今、大学合格を望んでるんだから、それをクリアして初めて俺と同じラ

インに立てるんだろ？ 同等であるかなんて話はそれからだが」「……」
くすつと。

聡明が笑う、細い目がもつと細められて口許がゆるんで。

「わかったか、がきんちよ」

なんだかわからないけれど飽和状態。

また涙が出てくる。

うつむいてそれを手でぬぐっていたら、

「バスタオルいらねえのかよ」

からかうように聡明が言うから、里奈は拳を作って彼を殴るマネをしたあと、椅子から立ち上がった。

家庭教師様は、泣いててもいいぞとおっしゃってくださいました。でも、もう泣けない。

例えばがきんちよでも女の意地がある。

聡明の前では泣かない、絶対に泣かない。

「べ、べんきよーする」

ちくしよつ、聡明の前では鼻がかめないじゃないか。

必死ですすつていたら、聡明がひよいと腰を上げて、勉強机の上にあつたティッシュケースを放り投げてきた。

それが結構な威力で里奈の額にコツツーンと当たったので、里奈は彼をギョツとにらみつけた。

「いたらない、いたらないろっ!!」

怒つてみせたら聡明はいたらずこみたいにやりと笑った。

「ちやーんとちーんつてできまちゅかー？」

「うるっさーいっ!! 来年の3月、見てなさいろッ! そのひん曲がった口からオメデトウつと言わせてやるんらからっ!!」

叫ぶだけ叫んでティッシュボックスを小脇に抱え、里奈は聡明に背中を向けて豪快に鼻をかんだ。

だけどぞ。

聡明が帰ったらバスタオルだ、きつと。

このウーロン茶ペットボトルのヤツと一緒にのかな。

奈津美はストローを噛みながら、そんなことを考えた。

だいたいファーストフードの飲み物はコップの半分くらい氷。

現にこのウーロン茶だってストローを回すとしゃりしゃりと音を立てる。

こんなに氷が入っていると冷たすぎてイヤ。氷抜きつてオーダーできないうのかな、氷少な目とか、ソーユーの。

放課後のエプロン作りをキャンセルして奈津美は、駅から近いファーストフード店の2階にいる。

彼女と向かい合っているのは、夏休みが終わってから知り合った後輩。

背が高く可愛い女の子だ。

かわいいというよりはキレイ、女優のりょうという人に似ていると奈津美は思っている。

これまで接点などまったくなくコだった。

電車の中や校内でなぜか彼女のほうから奈津美に会釈をするようになり、学校帰りに立ち寄った雑貨店で偶然会って、声をかけられた。冷たい感じの外面とは違って話すと屈託がなく、人見知りをしてしまふ奈津美も彼女の話に笑みを浮かべてしまふほど、懐こい。

それから、校内ではちあうと立ち話をしたりする間柄になった。

「中田さんのクラス何するの？」

「なにつて、なにがですか」

「あの、えつと、文化祭」

「ああ、わたしクラスのほうはあんまり参加しないんです。美術部なのでそっこのほうに」

「美術部なんだ」

「絵は描きませんけど。モデルの真似事してます」

「モデル？　すごいな、中田さんきれいだもんね、ふうんそっか。でも、あれって動いちゃダメなんでしょ？　瞬きもしちゃだめだつて」

「慣れですよ、それにもともとじっとしてるの苦手じゃないし、先輩のところは何するんですか？」

「カフェ。手作りパンとかお菓子とかあるから来てね。おごるよ」
中田衣里という後輩はきれいに微笑む。

「はい。ぜひ」

氷の少ないアイスコーヒーが彼女にはとても似合うと奈津美は思った。

集中力が欠如している。

教科書を開いても、文字が目映るだけ。

それが意味を成すことがない。
なにやってんだらう。

たしかにこのあたりは塾で予習済みだけど。

ふー、と真崎英彰が息をついて腕を天井に向かって伸ばしたとき、隣の席から石河君の声がした。

彼の視線はきちんと前を向っていて、ノートにペンを走らせている。

「朝、野々村見たんだけど、見た？」

「見てない」

低い声で英彰は答えた。

「すげえ顔してた。腫れて」

英彰は石河を見た。

彼は相変わらず前を見たまま、言葉を続ける。

「目が、パンパン。蚊さされたんかな、アレ」

「目」

泣いたな、と思った。

なんでまたそんなに盛大に泣いたんだろう。

気になったところでどうすることも出来ないのが今の英彰のポジション。
ヨン。

気にしてしまう自分がますますイヤで、英彰は眉を寄せて軽く唇を噛んだ。

カツコワリイ。

想いが暴走する。

これで2度目だ。

腫れたまぶたを指で撫ぜながら、里奈はふとそんなことを考えては表情を曇らせている。

聡明が口をふさいでくれなかったら、わたしはあのままなにを言っていただろう。

それを思うと、背筋が凍る、絶対に絶対に隠しておかなきゃならないことを口にしてしまったのだろうか。

異常なほどふさぎこんでしまった里奈の耳を教師の声が素通りしていく。

聞こえているけど意味を成さずに、噛み砕かずに飲み込むよう。

朝から万事が万事そんな調子で、朝食の席で両親と交わした会話、電車の中での友達との挨拶、すべて受け答えているのに記憶にない。聡明に恋をしてから、思えば恋愛相談なんて誰にもしたことがない。深刻であればあるほどに口や胸を閉ざさなければならぬ想いだ。

「つままないな」

こんな恋、つままない。

キヤァって他愛ないことで女の子同士で盛り上がれる、そんな恋がいい。

深刻な顔で他愛もないことを愚痴ったり相談したり出来る、そんな恋がいい。
さびしい。

絶対に叶わない恋なんて嫌だ。

失恋というけじめでもいい、はつきりしてしまいたい。

そんなことを思う人はすごいと里奈は思った。

失恋は怖い、叶わないことは思い知った、これは失恋したことになるのかもしれない。

けれど、決定的な事実にしてしまうことは怖い。

失くしたくない、まだ。

臆病な女の子が瞼の裏で膝を抱えて拗ねている。

里奈の目が腫れた翌日、白い布はここ数日の頑張りによりエプロンとなった。

クラスの中で元気なタイプの女子生徒が制服の上に試着してみると、3・Dの教室は黄色い悲鳴でいっぱいになった。

「かわいいー!!!」

裾のヒラヒラ感がまたたまらんと、身体を揺らしてはスカートをはきヒラヒラ。

「その動きなんかえっちっぽい」

「そーおー?」

女の子同士でじゃれあう様子を眺めながら、期日までに出来上がったことに安堵して里奈は腕を組んだ。

一仕事終わった。

「これアイロンかけるのむずかしそ」

「クリーニングに出しちゃう?」

「予算がない」

「うー」

男子生徒は大道具小道具作りに設計図などを眺めてはあーだこーだと顔を寄せ合っている。

「バイトでウエイトレスやってる人いる？」

「バイト禁止の高校でそれを訊くのはどうかと思うよ、大野」

里奈がこめかみの辺りを押さえながら涼子に突っ込むと、涼子は渋い顔で腕を組んだ。

「家業の手伝いならいいけどって？」

「仕方ないじゃん、校則なんだから」

「小さい声で言うわよ」

「同じだって」

「とにかくお茶の入れ方の練習するから、当日のウエイトレス係、考えといて」

家業とウエイトレス。

ふと真崎英彰を思い出してしまつて、里奈は眉間にしわを寄せた。なんであいつがでてくるんだ、第一ほかのクラスじゃないのよ。

……ましてオトコだしさ。

無意識に額を触っていた。

保健室で真崎英彰の指が触れていったあたり。

「推薦入試、もうすぐなんですつてね、先輩」

「うん、文化祭の後」

背の高いキレイな後輩は、校内のあちこちで奈津美を見つけては声をかけてくれる。

里奈と離れてからの奈津美は孤独だった。

教室移動やお昼を一緒にする友達はクラスにいる。

けれど、奈津美と同じように内向的なタイプばかりだから、話題も大人しく、当たり障りのないものばかり。

寄りかかって甘えさせてくれる存在に飢えていると言ってもいい。「これから帰りですか」

「うん」

「それじゃ一緒に帰りましょうよ。わたしすぐ戻りますから待っていてくださいね」

先輩であるという気楽さと、話題を選ぶことなく話せる気楽さ。

中田衣里は奈津美を慕ってくれているようだし、彼女と話していると心地がよく楽な気持ちなれた。

実際、中田衣里は奈津美の話をよくきいてくれる。

絶対に反論しないし、余計なことを詮索しない。

心地よさは奈津美の口を滑らかにして、時々、余計なことをこぼしてしまったりする。

真崎英彰と別れたことも奈津美から話した。

そのいきさつまではさすがに言えなかったけれど、別れたことを衣里は知っていたらしい。

奈津美の話を一通り聞いて、

「わたしも彼氏と別れたんです。2年になってから」と、衣里は言った。

「中田さんみたいにかわいいひとと別れちゃうなんて、その口の目は節穴なんだよ」

憤慨した奈津美の言葉に衣里は笑うだけだった。

それから、衣里は自分のことを一切口にしなかった。

失恋したことを口にして癒されたい人もいれば、触れられたくない人もいる。

そう思うと奈津美から彼女に恋愛関係のあれこれを尋ねることもできなくなった。

だから、二人の話題は奈津美についてばかりだ。

駅の近くにあるベーカリーのティールームで向かい合った奈津美

と衣里は、文化祭のことを話していた。

自分のことばかり話すのも悪いような気がして、衣里のクラスの催し物について尋ねてみたりしたけれど、思いのほか彼女の反応は鈍く、結局奈津美のことばかり。

「今日、エプロン完成したんだ。里奈もホツとしてるだろうな、あのコ真面目だから」

「根本先輩もがんばりつてましたもんね」

「そんなにがんばってないよ……わたし」

「だって、先輩、推薦入試近いのに毎日残って作業してたじゃないですか」

何でも出来るように見えて、実際の里奈は影で努力するタイプだ。プレッシャーに弱いというかとにかくがんばりすぎるから、文化祭の準備期間中はとてもじゃないけれど見ていられない。しかし、大丈夫かと声をかけることもできずに奈津美は連日放課後残ってせつせとエプロンを縫ったのだ。

我ながら意気地がないなあと、なんとなくため息をついたことが。

「野々村里奈先輩は文化祭の日、係とかあるんですか」

突然、衣里が里奈のことを言ったので、奈津美は驚いた。里奈の話はしたくなかった。

おかしなもので奈津美からするのはよいのに、というか、勝手に野々村里奈という名前が出てくるというのに、聞かされるのはイヤだ。過剰に意識して不機嫌にするのもどうかと思い、奈津美は心持視線を落として、小さな声で答えた。

「ウエイトレスかな。午前中。わたしと同じ時間帯なの」

「一緒に仕事をするとかすると、忙しさに紛れて気まずいのか忘れちゃうかもしれませんよ」

衣里が涼しい顔でそんなことを言うので、ドキリとした。動揺を隠せずにおろおろした風情の奈津美に、衣里は小さな笑みとともに優しい声で続けた。

「どうしてかは知りませんが、最近お二人が一緒にいないじゃないな

いですか。わたし、根本先輩と野々村先輩のコンビ、好きでしたよ。女の子の仲良しって感じてかわいいなあって。だから、できれば仲直りして欲しいな、なんて」

「……」

仲直りができるなら、とつくにそうしている。

胸の中でそうつぶやいたとき、かつて奈津美自身が里奈と英彰に繰り返して「仲良くしてくれ」と繰り返したことを思い出した。

二人が仲良すぎるのはイヤだった。

けれど、仲が悪いのもイヤだった、だって、意識するから反発してしまう証拠のような、見ていてとても痛かったから。

奈津美は怖くて英彰とケンカなんてできなかった。

……里奈にはできて奈津美にはできないことがなんて多かったことか。

結局、わたしは。

二人の間でジタバタとワガママを言っていただけだった。困らせて困らせて困らせて。

こんな自分、情けなくて恥ずかしすぎる。

消してしまいたい、できるなら。

こんなふうに気分が沈むと、里奈のことを思い出す。

それは片思いにも似ていて、とても切ない。

「仲直りしたいのよ、本当は」

「意外と簡単かもしれないよ、本人が思っているよりも」

「そうかな」

「仲直りできますよ。あんなに仲がよかったんだから」

弱々しく奈津美は頷いた。

衣里はさも容易そうに言ってくれるけれど、もう一度里奈と並んで歩く自分なんて現実になるものかどうか、自信がなくてどうにもぼんやりとしすぎている。

文化祭を1週間前に控えた放課後、3-Aの教室はとても賑やかだった。

文化祭当日の衣装をそれぞれに身に付けて、まるでハロウィンのよう。

なにをやっているかというと、各自が用意した仮装で倫理的にオツケーなのかどうか委員長が不安だったので、予行練習ということになったのだ。

「どっから仕入れてきたんだ、その給食の……」

「妹が小学生なの。給食当番なんだって」

「妹今日の給食何着て配ってんだ??？」

「げっ、それなんだよ、カラーコンタクト?」

「ガクト」

「ガクトに失礼な話だなー、ソレ」

「だれかバカ殿やれよ、バカ殿」

「てめえがやれよ」

家業であるレストランから制服を借りてきた英彰はクレームをつけられることもなく机でのんびり。

昨日も塾で少々寝不足だったりするので、欠伸を隠すことなく豪快にやって目を閉じた。

塾で寝不足というより、受験勉強をがんばりすぎましたというのが本当のところ。

なにしろプライベート方面でつくづく冴えない身の上なので、勉強でもしていないと落ち着かないのだ。これで受験にこけたら救いがない、だから勉強する。

「真崎、もう着替えてもいいらしいよ」

「石河おまえ、似合うね」

「そーお?」

石河くんはお父様の祭服をお借りして、牧師様のいでたちでにっこりとした。

「跡継ぐの」

「わからん。ボクんちは三人兄弟だからして、そんなに大きなプレッシャーはないね」

「兄弟」

「坊さんになるかもしれんし」

真顔で突然そんなことを石河が言うものだから、英彰は噴出した。

「あり得ないだろ、それ笑うトコ？」

石河は首を横に振った。

「真面目に聞くところ」

「ゴメンネ」

そついう英彰の目は笑いをこらえきれずに机に肘を突いて手のひらで目を覆った。

石河君は胸に手をあててちよつと陶醉。

「そこまで笑ってもらうとなんだか自分が好きになりそう」

自分を好きになりそう。

それがひっかかって、英彰は妙な気分になった。

英彰には絶対に口にできない言葉だからかもしれない。

自分を好きになるような、そんな自分、どっかにいればいいのに。そんな己はきつと、誰からも好かれていたのだろう。

「真崎」

突然委員長に呼ばれて、英彰は顔を上げた。

「職員室に行って、遠藤先生呼んで来てくんないかな」

「え？」

「お前くらいだしさ、まともなかつこうしてるの」
まとも。

言われて英彰は辺りを見回した。

給食当番にピカチューになんちゃってガクト。

その中ではたしかにまともな部類かもしれない。

ここはどこだ、いったい何の集団だ。

実に怪しい。

「エンちゃん、職員室にいなかったらどうするわけ？」

「いなかったらいいや。一応見せとくかな、って感じだし」
ふんふんと頷きながら英彰は腰をあげた。

とはいうものの、目立つ。

高校の敷地内で、ギャルソンエプロンなんて異色だし。

急ぎ足で階段を下りていると、すれ違う生徒たちの目が点になったり、足を止めて振り返られてしまったり。

「真崎、なにそれ」

「文化祭」

他クラスのバスケット部仲間呼びとめられて、短く答える。
足を止めたくなかった。

「重そうだなあ、田村っち」

彼はジャージ姿でベニヤ板などの大道具を肩に担いでいた。
クラスは3-Dだ。

階段の真ん中で二人は向き合った。

タムラくんは英彰の姿をあたまからゆっくりと下に眺めて、

「胡散臭いな、Aってなににするんだっけ？」

「写真館とか何とか。おまえんところはカフェだっけ」

「オンナが盛り上がって、ついていけねーって感じ」

彼は苦笑いをしながら、

「これから校庭に行ってペンキ塗りだよ」

「屋上のほうがいいんじゃないか」

「屋上はダメだってよ。コンクリ汚れるとかなんとか」

「ふうーん」

バタバタと走ってくる足音。

「田村君ッ、スプレー缶忘れてるよッ」

その声にはぎくりとした。

声の主は上の階段の手すりからひよっこりと顔を出して、英彰を見つけてかなりの衝撃度で驚いてみせた。

英彰のほうも反射的に見上げてしまい、目がばっちり合ってしまったので、気まずいことこの上なかった。

そして、彼女の頭には白いレースのカチューシャがついていた。

以前ならすかさずコメントしたけれども、今は黙っていることにする。

なんだそれは。

「副委員長、あたま」

「えっ？ あっ、やだ、忘れてたっ」

顔を真っ赤にして里奈はすばやくカチューシャを取った。

「みんなで試着してたから」

早口で里奈は言っつて、英彰を視線から省くように顔をタムラくんのほうに向けた。

それがちよっぴり面白くなかったりしたが、ここは立ち去るに限る。

「またな」

「おう」

階段を下りながら、意識は背中にある。

彼女の声がした。

「ペンキ塗りわたしもやるね、一人だと大変でしょ？ 着替えてくるから」

「ヘーキだつて」

「手が空いてる女子、男子の手伝いすることになったんだもん」

「汚れるから」

「大丈夫、あたまからビニールかぶるから」

「死ぬつて」

「目鼻口くらいは穴あけるよ、いくらわたしでも」

アホか、まったく。

英彰はくすくす笑いながら階段を降りる。

里奈の早口な声が響いているから、くすぐつたいようなこの空間から逃げたいけれどそんなに急ぎたくもなくて。
アホは俺だな。

「あれは、犯罪」

突然背後から大野涼子の声がしたので、里奈は首だけ振り返った。
涼子は里奈の隣に立ち、手すりにつかまって下を覗き込んだ。
真崎英彰の背中が踊り場から消えるところだった。

「宣伝もいいところね、Aのヤツ。真崎にあの格好で校内うろつかせれば目立つわよ。そろそろ見物人でも出てくるんじゃないの」

「まさかそこまで」

「商魂たくましいわね、負けられないわ。コンナトコで油をうつて呑気にしてる場合じゃないのよタムラっちょ」

「ちえけらっちょ、負けず嫌いだね、委員長」

「バカじゃないの、あんた」

淡々と毒舌な涼子はその調子で二人に言った。

「購買部の残ったパンを買占めに行くんだけど、あんたたちもいる？」

「うん、いる」

放課後に作業をしているとおなかが空く。

「大野、文化祭がんばって、みんなでラーメンくらい食べられるようにしたいよね」

「ジュースだけじゃ物足りないものね」

「教室に出前やりてえな」

「いいねー、やってみたい」

里奈が笑いながら頷くと、涼子はふふん、と鼻で笑った。

「出前？ やるなら、家庭調理室にラーメン職人を出張させるくらい
の意気込みがほしいわね」

「あんた、本当に負けず嫌いねー」

思わず真崎英彰に戦争意欲をかきたてられたらしい。
あの男はどうしてああなんだろ。

自分がどれほど目立つかなんて、わかってないんだ。
英彰が両親のレストランを手伝っているのは有名だ。

里奈は思わず眉をひそめた。
嫌なことを思い出した。

去年のクリスマス、そのレストランでとっても嫌な思いをしたので
あった。

そのとき、英彰はあの格好だったわけで。

ああっ、思い出す、ムカつく。

おいしそうな料理の味もまったくわからず。

あのあとへこんだ里奈を元気にしてくれようと聡明がカラオケに連れていってくれたことはステキな思い出だったのに、今は胸の辺りをちくりしてくれるし。

境界線かあ。

聡明、キツイよ。

今年のクリスマス、なにやってるんだろ、わたし。

ひとつの決心をして奈津美は緑色のリボンをきゅっと握り締めた。

里奈からもらった大切なもの。

でも、このリボンの持ち主は、わたしじゃなかったね。

真崎英彰が短時間ギャルソンスタイルで校内を歩いただけで、3

- Aの「写真館」は校内で話題になってしまった。

それは本人の知らないところであったりするのがなんとも言えない

ところ。

しかし、英彰の知らないところというのは奥が深い。

3 - Aの水面下ではいろいろな画策がなされていて、後に彼はギョッとさせられることになる。

「真崎、客きてるよー」

一方の3 - D。

文化祭前日の今日、最後の追い込み。

ユニフォームもそろった、テーブルクロスをはじめとする室内装飾も整った、調理器具の調達も済み、教室内は赤いチェックを基調としたカフェとなった。

と、なれば後はケーキとパンとクッキーである。

調理室内はなんとも言えない甘い香りが漂い、やがて、パンが焼けてくるころには香ばしいものに変った。

味見味見とはしゃいでいると、売り物がなくなりそうので苦笑いしたり。

奈津美はお菓子作りが得意なため、家でパウンドケーキを3種類、ブラウニーを2種類焼く予定だ。徹夜になりかねない量を抱えているので早く帰らなければならぬのだが、この日の彼女は悲壮なまでの決心をして3 - Aの教室まで来ていた。

調理室を抜け出して、歩いてくるまで何度引き返そうと思ったことか。

組んだ指先が震えていた。

「……根本？」

待つこと数秒、呼び出した真崎英彰は急いで廊下に出てきたらしい。奈津美を見下ろしてわずかに目を見開いている。

そんな英彰を正面から見つめられずに、奈津美はつつむき加減。裏返りそうな声を絞り出して、早口に言った。

「写真撮影の予約をしたいの」

何の意味か、英彰は一瞬わからなかったらしい。

わずかな間の後、確かめるようにゆっくりときいてきた。

「明日、客になってくれるんだ」

「うん。今日までに結構予約入ってるみたいって聞いたから、だから」

「予約？ あー、そういえばそんなこと言ってたな。いいよ」

英彰の様子が変に構えることもなく自然なので、胸をなでおろしながら奈津美は彼を見上げた。

「あのね、里奈と撮りたいんだけど、里奈には言ってないの」

里奈という名前にも、英彰は動じることがない。

「撮りたい相手連れてきてくれるってきいたから」

「できるよ」

「真崎、連れてくるのは、真崎がいいんだけど。真崎じゃなきゃダメなんだけど」

「……俺？」

奈津美はこくこくと頷いた。

ようやく戸惑った表情を浮かべた英彰に奈津美は言葉を重ねた。

「みんなで仲直りしよう。里奈と、仲直りしよう」

まず、あなたと仲直りをしに来ました。

卑怯だったわたしを許してください。

あなたが誰を好きでもいい。

あなたは誰を好きでもいい。

あなたを思い出すたびに泣きたくなくなるような気持ちになるのは寂しすぎる。

それはわたしの高校時代を否定することになるみたいなんだもの。

「野々村は、俺じゃ、来ないと思うよ」

「そんなことないよ、大丈夫！」

「かるーく言ってくれるね」

「だって、真崎にがんばってもらわないと」

「野々村と仲直りしたいなら、根本が電話すれば済むんじゃないかな」

それは考えた。

何度も里奈に電話をかけようとした。

「できないから、頼んでるんじゃない」

英彰は一瞬言葉を失い、そして眉をひそめた。

「ずるくない？ それ」

「ず、ずるくないよつ。だいたい……」

勢い込んで、奈津美は英彰の腕を掴んで歩き出した。

教室の前で話すのは目立ちすぎる。

付き合っているときは手を繋ぐこともできなかったのに。

英彰は面食らった顔で奈津美にひかれるままついてくる。

階段を登ると屋上に出るから人影もなくなるのをいいことに奈津美は続けた。

「だいたい、真崎が最初にきちんとわたしのことを振ってくれなかったから。里奈が好きだから付き合えないってはっきり言ってくれたらよかったのよ」

ぶつぶつそんなふうに言ってから彼を振り返ると、英彰の表情は眉をひそめながらの困惑そのもの。

「そしたら里奈がどうであれ、じゃ、応援するねっ、とかなんとか、わたしだって言えたんだから」

本当に言えたかどうか自信はないけれど、この際そういうことにしておく。

興奮すると人間、口が滑らかになるものだ。少なくとも奈津美はそういうタイプだ。

「だからっ、真崎は、わたしのところに里奈を連れてこなきゃダメなの!!」

「ほかのことなら何でもするから、それは」
ぴたりと奈津美は足を止めた。

目いっぱい恨みがましく英彰を見上げてやった。
英彰が目に見えてひるんだので、口を開いた。

「……ほかのことじゃ納得できない。ダメ」

「だから、野々村は俺じゃ絶対に無理だって」

「無理でも何でも連れてきて」

「無理だよ」

「無理じゃないよ、無理だったら無理じゃなくなる方法考えてよ、
真崎頭いいんだから！」

「そういう方面、バカなんだよ、俺は」

「バカでもなんでもいいのっ。里奈と仲直りしたくないの?!」

それをきいたときの英彰の顔を見て、奈津美は泣き出しなくなった。
メガネの奥の茶色い瞳がこんなにもデリケートな表情を浮かべるな
んて。

見たことのない、思いもよらない、なんというか。

守ってあげたくなっちゃうみたいなの、そんな顔だ。

口では言わなくても、仲直りしたいよって。

こんなにわかりやすかったのに、見ていない振りをしてごめんね。

里奈が大好きだって、知っていたのに知らない振りしてごめんね。

「……仲直りって簡単に言うけど、連れてきたくらいで。根本なら
まだしも、俺は……」

ダメでしょ、完全に嫌われてるから。

「ダメじゃないよ。真崎と仲直りしなかったらわたしが里奈のこと
叱ってあげる」

「え?」

「里奈の意地っ張りはよくない。ぜーったいによくないの」

そうして奈津美は我にかえった。

今日は早く帰ってケーキを焼かなければならないのだ、それもたく
さん。

「予約、入れておいてね。待ってるからね」
「待ってるからねって……根本、おいっ」
英彰にバイバイして、奈津美は走り出した。
「今日は早く帰らなきゃならないの、ゴメン」
英彰のため息が聞こえるような気がした。
でも、聞いてやんないよーだ。

失恋したぞ。

完璧に失恋しちゃったよ。

涙が出てこないよ。

なんか元気だよ、わたし。

はじけちゃいそうだよ。

うんにゃ、はじけちゃったよ。

失恋してやったんだから！！

中田衣里に電話をかけたのは、ケーキを焼く作業が半分終わったころだった。

仲直りをしたらどうかとすすめてくれたのは彼女だったし、話を聞いて欲かったし。

衣里は10時過ぎの電話にも迷惑そうな素振りも見せず、明るい声だった。

「そうですか、よかったですね。真崎先輩、うまくやってくれればいいですよね」

「きつと今頃、悩んでるよ」
「で、いつ、写真を撮るんですか？」

「予約がいつぱいなんだって。1日目の午後の一番最初に入れてくれるって」

「1日目、ですか」
時折衣里の声が聞き取りづらく感じて、奈津美は首をかしげた。

キッチン椅子から立ち上がり、オーブレンジの中を扉のこちら側から覗き込みながら奈津美は尋ねた。

「……なんか、車の音とか聞こえるね。外にいるの？」
「コンビニにいるんです」

「そっか、ごめんね、外だったんだ。じゃ、切るね」
「あ、待って」

「なに？」
「野々村先輩、1日目の午前中、教室にいるんですよ」

「……うん」
どうしてそんなこと聞くのかな。

些細な奈津美の疑問はすぐに消えた。

「うまくいくといいですね。応援してます。あした、先輩のクラスに行きますね」

寝不足だった。

緊張して眠れないままに夜が明けた。

里奈はいつもより早い電車で登校し、校門に設置されたバールーンアートを施されたアーチをくぐった。

文化祭委員たちだろうか、すでに校門でなにやら数人が作業をしている。

空を見上げた。

キレイな秋晴れだった。

午前中こそ客の出足はまばらだったものの、昼食時になるとDの手作りカフェはにぎわい始めた。

里奈は仮設厨房の中でコーヒークップに注いだり、サンドイッチを皿に並べたり、かなりハードに働いている。

本日はかりは副委員長ではなく、副店長と呼ばれているのが恥ずかしいといえは恥ずかしい。照れる。

しかし、店長である涼子は午後の当番なので午前中の責任者としてあちこちを仕切らねばならず、自分の仕事だけをこなしていればよいというわけではないのが辛いわでもかなり切羽詰っている里奈だった。

「副店長、サンドイッチ足りないよー！」

「えーっ、これからが稼ぎ時じゃん」

トラブル発生。

思った以上に手づくりサンドイッチの売れ行きがよく、残りわずかとなってしまった。

パンを並べてあるカウンターの前で、白いエプロン姿の女子数人が

集まり里奈を中心に顔を見合わせて、困惑しきり。
サンドイッチはパン屋から仕入れたサンドイッチ用の食パンを使用している。

今朝、50セット作ったにもかかわらずこの売れ行きに嬉し涙が出そうだけでも、予想が甘かったとも言えて里奈は焦っていた。まだまだ売れるのに、もったいないッ。

「追加作ろう、パンなら明日の分あったでしょ」

「あるけど、明日のどうするの」

「これから追加して、午後を買ってくるよ。材料も仕入れてくる。

わたし、午後はフロア当番じゃないから」

「行くんならわたしも付き合うよ。ひとりじゃ大変じゃん」

フロアからテーブルの後片付けをしていた奈津美が、皿を数枚のせたトレンチを抱えながら輪の中に入ってきて里奈に尋ねた。

「わたし、調理室で作ってくる。バターロールサンドとかクロワッサンサンドならすぐにできるよ。売れ行きがよかったのってどれ？」

「卵とツナ」

反射的に返事をしながら、里奈はまじめにびっくり。

奈津美が話しかけてきた。

「わかった。里奈、がんばろうね」

がんばろうね、と言われて、里奈も我に帰った。

ぼけっとしている場合じゃない、がんばらなきゃ。

「みっち、奈津美と一緒に調理室に行つて、追加作ってきてくれる？ 奈津美ひとりじゃ大変だと思うから」

「いいよ」

エプロンもそのままに奈津美が駆け足で教室から出て行った。

「繋がなきゃね、出来上がってくるまで」

そこに、どやどやとにぎやかな足音が響いて、ゴジラの着ぐるみを着た男子生徒が登場。

「あー、いたいたっ」

と、声を張り上げたかと思うと、里奈の前でコーヒーを待っていた

男子生徒に歩み寄り、その肩をがしつと掴んだ。

「君、中村雄介くんだよ、2年C組の」

「はあ」

「君と写真撮りたいという人がいてね、これから3年A組まで一緒に来て欲しいんだ」

「えっ、でも俺これから飯」

「飯はいつでも食える。なんならテイクアウトすればいいじゃないか。野々村、テイクアウトできる？」

「できるけど、3-Aなにやってんの？」

「写真館さ。君も誰かと2ショットしたければ来てくれ」

「行っちゃダメですよー、本職の営業妨害してくれちゃって」

「あ、小関くん。久しぶり。なんか食べていきなさいよ」

ひよっこりとゴジラの背後から現われたカメラ小僧に、里奈は並べられたパンを押し付けるようにすすめた。

「おごりですか、悪いなあ」

「おごらないよ」

「冷たい、冷たいな」

「こっちは商売なのよ。あ、で、テイクアウト？ 3-Aさま」

「しちやって、しちやって」

「俺、友達待ってるんすよ」

「時間はとらせないよ、新しい希望の世界が広がるかもしれないよ、さあさあ」

「あっあっ」

「サンドイッチとチョココロネとカレーパンとコーヒーで400円です」

「中村君、400円だ！」

「ええっ、えええっ?!」

嵐のようにゴジラと中村君が去った後、カメラ小僧小関がコーヒー一杯ご注文。

立ったままそれを飲みながら、小関はふうと息をついた。

「いい写真撮れた？」

「まあまあです。これは新聞部の文化祭の特集とか学校のホームページに使うらしいから堅いのも多いですけどね」

「ちやらちやらした印象の小関だがカメラを構えるときはさすがに真顔。」

そうしていればナカナカかっこいいのに、どうしてふざけるんだろ。

「ねえ、野々村、ねもっちゃん調理室だよな？」

「調理室でサンドイッチ作ってるよ」

「お客がきてるんだけどな」

ウエイトレス担当の女の子が浮かない顔で窓際のテーブルにひとりで座る生徒に視線を向ける。

つられて眺めた里奈の隣で小関が眉をひそめてコーヒークップを口につけたまま「あんだよ」とかなんとかつぶやいた。

「なに、知り合い？」

「同じ学年なんで知ってますよ」

「キレイな女の子だね」

「俺、仕事あるんで行きますね。カレーパンとそのピザみたいなもの持ち帰りください」

「あ、はいはい」

紙袋にパンを入れて手渡すと、いつものようにへらへらとするわけでもなく、小関がさっさと立ち去ってしまったので、拍子抜けしながら里奈は時計を眺めた。

「お昼過ぎたつてのに、結構大変なんだなあいつも」

「うれしーい、うれしーい!!」

当番が終わって一息ついた里奈の前には、近隣のクラスから調達してきたお汁粉があり、お団子があり、お好み焼きが、焼きそばが、たこ焼きがあった。

トレンチの上に山のように重ねられたそれらを大野涼子は里奈の腕

に押しつけるように言った。

「おつかれー、おなか空いたでしょ。また明日もがんばってちょうだい」

涼子はエプロンを身につけながら、早口に言っつて颯爽とフロアに出て行く。

「屋上行く？ おなかぺこぺこ」

午前中の当番は昼食返上だったのだ。

Dの教室はカフェ会場になっているので、教室で食べるわけにも行かない。屋上なら天気がよいのでとても気持ちがいだろう。

エプロンもそのままそろそろと屋上に足を向けると、ちよつとした注目的になった。

「男子もあのエプロンなんだ」

男子のエプロン姿もナカナカにかわいらしく周囲の爆笑を誘っているのがDの女の子たちにはご満悦だ。

当の本人たちは不服のたつぷりだろうけれど、今のところはちゃんとヒラヒラエプロンを身につけている。

「あ」

奈津美が調理室からまだ戻ってきていなかった。

焼きそば、奈津美好きなんだよね。

自分の手にあるまだ包みを開いていないそれを里奈は見つめた。持っつていっつてあげようか、な。

奈津美から話しかけてくれたことの嬉しさがじんわりと胸に広がっつてきて、里奈の口許は自然とほころぶ。

涼子から受け取つたトレンチを後ろを歩いていた男子生徒に手渡して、里奈は言つた。

「調理室にいる二人、呼んでくる」

「そーだね、呼んできたほうがいいよね。功労者だもんね」

「二人の分、とっつておいてくれる？」

軽く手を振ると、足取りも軽く里奈は階段を降り始めた。

「野々村先輩」

特別教室棟へつながっている渡り廊下を歩いていると、知らない女の子から声をかけられた。

背の高い少女で、襟元のリボンの色が紺色だったので、2年生らしい。

彼女は里奈のところへ足早にやってくると、涼しげに笑いかけた。

彼女が歩み寄ってくるに連れ、里奈は思い出した。

先刻、奈津美を訪ねて教室に客としてひとりやってきていた少女だ。

「根本先輩のことで話があるんです」

相手は知らない生徒だが、奈津美のことを出されると話とはなんでしょうという気持ちになってくる。

「根本先輩、夕べ電話で野々村先輩と仲直りしたいって言ってましたよ」

「電話？」

あの人見知りの奈津美と電話をするほど親しいのかこの子は。

里奈は目の前の少女を頭からつま先までゆっくりと見た。

値踏みしているような目と評されても仕方ない目つきであったけれど、奈津美が自分の知らない人間とそこまで親しくしていることが意外でならなかった。

「今、根本先輩、第二美術室に野々村先輩のこと待ってますよ」

「奈津美が？」

相手は頷いた。

「謝りたいんだそうです」

「謝るって言っても」

奈津美から話しかけてきてくれたことだし、そういう気持ちになっ
ていても不思議はないというか……とにかくそれはとっても嬉しいぞ。

「第二美術室は展示とかしてませんから」

「……そうなの」

「はい」

一緒に来てもらえますね、と彼女が目で促した。

「みんな、どこいちゃったかと思った」

屋上で輪になり座り込み昼食をとっている同級生のもとに小走りに近寄って、奈津美はぶうつと頬を膨らませた。

「あれっ、副委員長は？」

「エ？」

焼きそばの皿を手渡されつつ、奈津美はきよんとした。

奈津美に視線を集めて、口々に、

「根本のこと呼びに行ったんだよ」

「行かなかった？ 調理室に」

「こなかったよ、誰も……。みっちと後片付けしてる間、ほかのクラスのひとつもだーれもこなかったよ」

ね、と二人の少女は首を傾げあった。

「え、それじゃ、どこに行ったの、野々村」

「すれ違っちゃったかな」

「ま、食べなよ、。そのうち戻ってくるって」

ちらりと屋上の入り口の重そうなドアを見て、奈津美は首をかしげた。

今、里奈がいないのはまずい。

もうすぐ、3 - Aで予約した時間になる。

真崎は里奈のこと連れてきてくれるのかな。

「おい、午後イチの予約は担当真崎？」

「手が空いてるやついたら、頼みたいんだけど」

「みんな忙しいよ」

そっけなく言われて、英彰は口許を歪め、眼鏡を指で押し上げた。

昨日、根本奈津美に強引に押し付けられたものの、気が重くて仕方ない。

野々村里奈に積極的に関わることをやめたというのに、どうしてこうなるのか。

Aの教室の一角では、貸衣装での撮影が行われており、なかなかの盛況ぶりだ。

そんな中で、携帯のカメラを向けられたりして嫌な思いもしている英彰だった。

ふてくされた英彰の顔がいくつかの携帯の中に画像として残されているはずだ。

そんなこんなで憂鬱を抱え込んでいたら、祭服姿の石河が1年生の男子を肩に担いで現われた。

「ほいつ、おまち」

小柄な1年坊主を待ちかねていたのは、こりやまた小柄な女の子だった。

私服なのでこの学校の生徒ではない様子だが、二人は面識があったらしい。

ぎこちなく笑う女の子と、赤面しちゃって顔をあげられない男の子。そんな二人を仮装した3年生がわらわらと囲んで無責任に盛り上げて、強引に並ばせて、写真を撮り始める。

これで午前中の申し込みがすべて片付いたことになる。

「真崎、飯食おう。どっかの模擬店にもぐりこんで空腹ではあったが、英彰は首を横に振った。

根本奈津美が受付にいる。

どうやら観念するしかないらしい。

「野々村はどこ」

「それが、いなくなっちゃったの、教室にもいないし」

別れたはずの英彰と奈津美が自然に言葉を交わしているので、周囲からかなり奇妙な目で見られた。

これからしばらくあれこれと噂されることだろう。

真崎英彰に関わったからそれは仕方のないことだ。

それに今の奈津美にはそんなことどうでもいい。

「探して」

嫌な予感がする。

クラスの友人たちは奈津美に差し入れをするために出て行ったと言った。

里奈がわたしに。

とても勇気がいることだろう、奈津美自身一声かけるだけでもとても勇気がいったのだから。

「探すの手伝って、真崎」

「落ちつけよ、いなくなっただって言っても校内だろ？」

「学校の中だつて危ないトコいっぱいあるじゃん！ 里奈はああ見えてもドジなんだよ！」

「それは知ってる」

ボソツと英彰はつぶやいて、口許を歪めた。

彼は明らかに落ちつかない風情。

里奈が心配になったのならば、探しに行けばいいのに。
もし、もしも。

「わたしに遠慮してるの」

「は？」

「わたしに遠慮して里奈のこと探しにいけないなんて考えてるんなら……まっ、真崎はバカだからねっ」

バカ、と言われるとむっとするらしい。

英彰は今まで奈津美に見せたことのない顔をした。

「勝手なことばかり言うなよ」

「だつて真崎バカじゃん」

こみ上げてくる涙をこらえながら、奈津美は英彰を見上げた。

英彰には奈津美が泣きそうになっているのがありありとわかるほどに目が赤くなっているのだけれど、彼女は精一杯のやせ我慢をして英彰にくっつかかった。

「里奈のことかえしてよつ。里奈のことっ」

英彰は目を見開いて、そして、あたりを伺った。

教室前の廊下の前で奈津美に泣かれたら。

さすがにまずい気がする。

「根本、こつち、こつちで話そう」

ざっと目をあたりに走らせ、気のないところを探した。

けれど、文化祭の真っ只中、そんなもんが都合よくあるわけもなく、英彰と奈津美は並んで階段を降りた。

自分でも興奮気味だったことに気がついた奈津美は英彰の後を歩きながら、声のトーンを落として、

「里奈のことあきらめちゃうの」

英彰の背中がぴくりとそれに反応する。

わずかに動いたくらいのそれ、でも、かなりの動揺。

振り返らずに英彰は言った。

「付き合っなって根本言っただじゃん」

「言っただけど……言っただけど。でも」

「俺、あいつに嫌われてるし。もうイヤなんだよ、あいつに振り回されるの」

彼の背中を見つめながらいつの間にか強く握り締めていたグーの手。奈津美はそれにさらに力を込めて言った。

「真崎がいい」

恋という眼鏡を外してみれば。

このひとはいつもいつも一生懸命に里奈を見ていた。

里奈だけを見ていたのかもしれない。

うらやましかった。

このひとにそうしてもらえることが。

このひとに限らず、誰かにそんなふうに思ってもらえること、それはとても。

「里奈の親友として言う。里奈の彼氏は真崎がいい」

まったく身勝手なとんでもないことを口走ったものだその後から奈津美はゆでだこのように赤面してしまっただけれども、英彰も相当に驚いたようで振り返ろうとして階段を一段踏み外した。

あわやのところ得手すりに手をかけて、英彰は深い息をつきつき、それに寄りかかった。

「なに言って」

「だって本当だもん」

「コロコロ変わるのよせよ。なに言ってんの？」

「ゴメン、でも」

あの時も本音、今も本音。

「とにかくもう、いいから」

「……ねもと」

「なに」

「なんか腹立つよ、おまえ」

「ゴメンね」

「ゴメンじゃないって」

ふてくされた横顔。

今。

知っていたけれど、知らなかった、本当のあなたに会っているような気がする。

こんなふうにあふてくされたり子供みたいに怒ったりするあなたに里奈はたーくさん会ってるんだね。

「カツコワリイのもうヤなんだけど」

「だけど？」

英彰はうつむいて片足をぶらぶら。

何度目かのため息をついて、彼は顔を上げた。

「でっ？」

「ん？」

「いつごろいなくなっただって？」

英彰と奈津美が3・Dの教室に行くと、涼子がカウンターから出てきて、奈津美の腕を捕まえた。

「野々村、いないの？ 明日の分の買い物に行くとか言ってたそうじゃないの。買い物にいったとかいうことはないの？」

奈津美は頭を振った。

「玄関の靴、そのまんまだったし、里奈が黙ってひとりで校外に出ちゃうのって考えられないよ」

「そうよね」

大きく頷いた涼子は英彰に視線を移した。

「なんであんたがいるの」

「仕事だよ。野々村と写真撮りたいんだってさ」

「だれが」

英彰が奈津美に視線を送ると、奈津美はもじもじしながら小さく手を上げた。

「回りくどいことするのね、まったく」

言いながらも涼子の目は笑っている。

そして、口許を引きしめて、

「悪いけど、わたし今はここからぬけ出せないから、頼むわね」

時計は午後2時を過ぎようとしていた。

第二美術室は美術室とは名ばかりの授業では使用されていない物置部屋で、美術準備室と美術部員は呼んでいるらしい。

もちろん生徒の出入りは少なくその前の廊下を通る生徒も少ない。

里奈のように入ったことがない生徒も珍しくはないという寂しい場

所だ。

そんなところになぜ奈津美がいるのか不思議に思いながらも、気分が高揚している里奈は深刻にはとらえなかった。

「どうぞ」

ドアを開けてくれる。

彼女はドアに手をかけたまま、あっとつぶやいた。

「やだ、根本先輩来てない。約束したのにどうしたのかな」

「奈津美なら調理室で仕事しているはずよ」

「呼んできます」

里奈はため息をついた。

「いいから。わたしがこのまま調理室に行けばおんなじことよ」

「それじゃ、だめです!!」

とても大きな声だった。

里奈が目を見開くほどに大きくそして甲高い響きの声は、次にはぐつと低くなって続いた。

「ここで、待っていてください。絶対に連れてきますから。誰にも邪魔をされないで話したいって根本先輩が言っていましたから」

突然、荒っぽく彼女は里奈の手首を掴み引かれて一歩踏み出した里奈の背中を押した。

「早くしてください!!」

背中を押した力に加減なんてものはなく、里奈はドアの向こうに押しやられた。あまりの勢いに躓いて転ぶところであった。

「な、なにすんのよ!!」

とっさにつかまった石膏像が埃だらけなことに気がついてギョツとした瞬間、ドアが閉められた。

状況がまったくつかめずに少しの間ぼかんとしてしまったが、カチっという不吉な音に反応して締められたドアに走りより里奈は外に向かって言った。

ついでにドアを開けようとしてみたけれど、動かないじゃないよ、

ナニコレ!?

「悪ふざけやめてよ!」

「このドア鍵が壊れてて内側から開かないんですよ」

「ハア?!」

「内側の鍵が壊れてるんです。ドアノブが壊れてるんです」

歌うようにその声は聞こえた。

楽しそうに、

「後でまた来てあげますから」

「後でって、ナニソレ!」

ドアのノブを両手で掴んでカチャカチャまわしてみたものの、なんとも頼りない手ごたえだった、空回りしている。

そして、手を止めてみると誰もいなくなったような静けさ。

「や、やだ、ちょっと開けてよ!」

ドアをバンバンと叩いてみたけれど、当然何の答えもなかった。

どうしよう。

動揺しまくりの里奈の目前は埃だらけの石膏像が何体もあって、窓際にはイーゼルがいくつか並べられていた。壁際には古い机がいくつも積み上げられて、中央を仕切るように3つおかれた大きなスチールラックには油絵の具やキャンバスが裏返しになって重ねられていた。

「教室のクセにドアがひとつしかなくて、そのドアは壊れていて……って」

ブツブツつぶやいて、里奈はぎゅっと目を閉じた。

泣きそうだ、どうしたらいいのかわからない。

こんな特別校舎の4階の隅っこ、本校舎でにぎわっている文化祭の最中に誰が来るもんか。

「後でって、奈津美を呼んで来るまで逃げないように閉じ込めておくってこと?」

どうしよう、明日のサンドイッチ用のパンの仕入れ！！

思わず口許を手で押さえた。すると、鼻がむずむずとしはじめて里奈は大きなくしゃみをひとつ。

「こんな埃だらけの部屋に閉じ込めやがって、ばかあ！！」

里奈の両手は埃で真っ黒だった。

それをみて里奈はますますへたりこんだ。

里奈が行方不明だということがクラスに知れると大騒ぎになる。

だから、しばらくは騒がずに探せと涼子が強い調子で言った。

「教師に知れたらサボりと疑われて野々村大変なことになるじゃない」

「本当にサボりかも」

英彰のつぶやきは女子2名からきつく睨まれた。

「んなわけないじゃん。里奈だよ、リーナ」
はにかんではかりの健気な女の子だったはずなのに、根本奈津美はケンモホロロに言い捨てる。

「絶対にサボりなんてしないよ、里奈は。真崎と違うんだからねっ」
英彰は言葉にせず胸の中でこそっと反論。

あいつサボったことあるんだよ。

何でか知らないけど、俺がサボるって言ったら一緒にさ。

夏の生物教室のロッカーの中。

理性がくじけて、抱き寄せてしまった肩。

彼女の髪が口許に触れて、思わず背中に戻ってしまった腕。
わずかな震えが伝わってきて、胸がきゅっとなったこと。

リアルに思い出して、英彰は顔をうつむかせた。

目の前にいる女の子たちに英彰の頭の中をのぞかれたりしたら、批難を浴びて罵倒されまくったあげく、これだから男はみたいに蔑まれちゃうだろう。

「なーにしてんですかつ、まーさーきーさーんっ」

突然背後から飛びつかれて、英彰は反射的に振り払うように身をひねった。

が、飛びついたほうもしぶとくて、英彰の首にしっかりと腕を巻きつけている。

「降りるよ、バカ！」

「暴れないでくださいよー」

「なれなれしくしてんじゃねえよ、放せよ！」

強力に首に巻きついた腕を引きはがした。

声でわかりきっていたけれど、小癩を絵に描いたようなカメラ小僧・小関だった。床に尻餅をついてへらへらと笑いながら英彰を見上げている。

喉をさすりながら英彰は小関をにらみつけた。

「先輩に対する態度じゃないだろ、バカ」

そんな英彰の言葉に涼子がかうかうように言った。

「先輩だって。所詮体育会系ね、バスケ部」

「悪かったな、頭古くて」

「いいえ」

英彰の不機嫌にかまうこともなく、小関はゆっくりと立ち上がると、涼子に顔を向けた。

「野々村先輩、休憩ですか」

「いいえ。残念だけどあんたがイヤで戻ってこないんじゃない？」

はははと小関は薄く笑った後、奈津美に眼を向けた。

「俺、先輩に聞きたいことあって来たんですよ」

「な、なに？」

奈津美は小関君が苦手だ。

嫌いじゃないけれど苦手。はっきりものを言うから、怖い。

小関は頭に手をのせて、口許を歪めつつ、

「衣里はなんで先輩に会いに来てたわけ？」

「えり？ あ、中田衣里ちゃんのこと？」

「そーそーそーです」

今度は奈津美のほうか首をかしげた。

「どうして小関君が中田さんを知ってるの？」

英彰と涼子はなんとなく視線を合わせた。

そして、涼子が口を挟む。

「中田衣里ちゃんって何者よ」

「えーっと2年生で」

「この女なんですが」

小関が首に下げていたデジタルカメラの画像をオンにした。

小関以外の3人はデジタルカメラの小さなディスプレイを覗き込んでそれぞれにコメント。

「先刻のこの教室の写真じゃない」

「ごちゃごちゃしてるの見たってわかんないだろが」

小関が示したのは3・Dのカフェが繁盛している様だった。

机を繋いでつくった赤いチェックのテーブルクロスは満席だった。

「あ、このコ」

奈津美が指差したのは窓際の席にひとりで座っている、髪を一つにアップにしたほっそりとした少女。

「……」

再び、英彰と涼子が一瞬視線を合わせる。

そして、英彰は小関の手からデジタルカメラを奪うと眼鏡を外して画面に顔を近づけた。

「……知ってるコイツ」

「わたしも」

今度は英彰の手から涼子がデジタルカメラを奪って、軽く唇を噛んだ。英彰が眼鏡をかけながら涼子に言った。

「俺の顔、上履きでぶん殴ったやつ」

「ビンゴ」

涼子は小関の手にデジタルカメラを乗せながら、詰め寄る。

「で、あんたはどうしてこの女のことを訊きに来たの」

小関は宙を仰いだ。

大きくため息をつきつき、

「モトカノです」

「うっそーっ!!」

この中で一番事情が飲み込めていない奈津美が一番大きな声を張り上げて、ついでに眼まで見開いちゃって、はじけたように騒ぎ出した。

「えっ、なんで、なにがなんなの？ みんな、中田さんのこと知ってるの？ モトカノって、え？」

英彰の目が据わっている。

冷ややかに小関を見ながら、ぱしんとアタマを張り倒した。

「なんなんだ、アイツ」

「それがわかったらコンナトコに来てませんよ、俺も」

「根本、あんたと中田衣里ってコ、なんなの」

「えっと、友達」

「ともだちー?!」

小関がびっくりを絵に描いたような顔をした。

奈津美はそれにむっとして、唇を尖らせた。

「いけない？ いい子だよ、あのコ。礼儀ただししいし、お買い物とか付き合ってくれるし、気さくに声かけてくれるし」

「礼儀ただししい？ お買い物にお付き合い？ 気さく？ 誰の話してんですかあんたは」

「だから中田さんよ」

「はー？」

小関は馬鹿にしたような斜に構えた目をして奈津美を見下ろした。しかし、彼が何かを言いかける前に涼子が、

「その気さくな後輩、あんたの上履き焼却炉にポイ未遂犯よ。あたしと真崎で現行犯逮捕したけど、真崎がアマちゃんだったからまんまと逃げられた」

「誰がなんだって？」

英彰に睨まれても涼子はあっさりと無視して奈津美の肩に手をおいた。

困惑顔の奈津美に小関が言う。

「アイツならやってもおかしくないですよ。俺、夏休みに一晩第2美術室に閉じ込められましたから。カメラは叩き壊すし。なんでもありですよ、マジ」

「閉じ込められた？」

「一晩。あの物置小屋に。次の日の朝に偶然教頭が通ってくれたんで出られましたけど、教頭だったんで俺停学寸前でしたもん」

「うそ、そんな」

「小関君。野々村、実は行方不明なのよ」

黙っていると言ったはずの涼子が突然口にしたので、奈津美は彼女を見つめた。

小関も驚いたのか一瞬眼を見開いた。

涼子はなぜかコレでもかというほどに高飛車な姿勢で小関を見あげて、

「直接、話聞きましょう」

「里奈と関係なかったら？ 里奈探るのが先でしょ」

「闇雲に走り回るよりはましよ」

いたるところに文化祭の熱気があふれていた。

生徒たちのはしゃぐ声が足音が廊下でこだまして、実ににぎやかだ。その中で、奈津美と英彰と小関は浮かない顔、怒った顔、妙に落ち着いた顔をそれぞれして向かい合っていた。

涼子は模擬店の責任者なので現場を離れることができないからと、教室に残った。

「俺、アイツ探してきます」

「俺は第2美術室に行ってみる。特別棟の4階だろ？」

「外からなら鍵がなくても開きますよ。ノブが壊れてて内側から開

かないだけなんであそこ。多分アイツでしょ」

「美術室にいなかったら、どうするの」

「違うところ探すよ。根本は俺のクラスに行つてて。連れて行くから」

言うのが早いか、英彰は背を向ける。すれ違う生徒たちとぶつかりそうになりながらすんでとこでかわして英彰が走っていくのを見ながら奈津美はつぶやいた。

「中田さんがどうして里奈のこと閉じ込めたりしなきゃならないの？」

「いつしよに訊きに行きますか？」

「え？」

「俺もアイツに話しあるし」

奈津美は首を横に振った。

「待つてるよ。二人のこと。そつちのほうが大それたもん」

「それがいいですね。聞かなきゃいいこともあるかもしれないし」
上履きのこととか、本当は気にかかる。

けれど、怖い。

あんなに親しくしてくれた衣里と皆が話している女の子が同じ人物だとはどうしても思えない。

「里奈……大丈夫かな。先生に言ったほうがいいのか」

つぶやくと小関が笑った。

「真崎先輩が担いで来ますよ。ドアの一つや二つぶち壊しますよ、あのひとのことだから」

小関の笑い方が寂しそうに見えて、奈津美は不思議に思う。

そして、ひらめくように思い出した。

小関が里奈になにかと付きまわっていたこと、度が過ぎるほどにからかったこと。

小関君は里奈のこと本当に好きだったりして？

頬を手の甲でこすると、ざらつとした。

手の甲を見れば太い埃の筋ができていた。

きつとコレと同じ汚れた線が顔にもついているに違いない。

せつかくみんなで作った白いエプロンだって埃だらけだ。

それも里奈の眉を下げさせている。

ひらひらでかわいいのに、みんなで作ったのにな。

脚に錆が目立つ机をドアの前に2つ置いて、その上に一つ。

簡単ピラミッドが出来上がり、そのてっぺんに埃だらけの椅子をそつと乗せた。

パンパンと叩いた手のひらも真っ黒だ。

何度かドアに体当たりしてみた。

弾き返されて肩や手のひらが痛いだけだった。

窓を開けてみた。

誰もいない自転車小屋の屋根が並んでいるだけだった。

しかもここは4階。

上を見た。

ドアの上に小さな窓があった。

換気と採光のためだけに作られたような小さな窓が。

古い年代ものの窓ガラスだ、レールだってそんなに立派なものではないだろう。二枚とも外してしまえば里奈の頭と身体くらいはなんとか通る。

問題は廊下に出られた後で、どうやってこの高さから降りるか、だ

が、そんなことまで考えていたら日が暮れる。

「飛び降りてやるわよ、あたしはっ」

明日のパンを買いに行かなきゃなんないんだ！！

「掃除しろ美術部員のバカーー！！」

悔しかった。

こんなところに閉じ込められてしまったこととか、いろいろとマヌケな自分とか。

癩癩バクハツのため、石膏像の一つでも叩き割ってやろうかと思っただほどだ。

そして、こんなときに助けに来てくれるような人が思い浮かばなかったこととか。

昼間のこの時点では親は娘がこんな目にあっているなんて思いもよらないだろうし、この文化祭の最中、里奈がいなくなったことを教師が気がつくとは思えない。さぼりとか思われたらイヤだ、そんなのイヤだ。

ぶんぶんとアタマを横に振ると、みつあみが耳の側でびゅんびゅんと音をたてる。

里奈は短いため息をついた。

へこたれていても仕方ないからがんばることにする。

脚を机に乗せて引っ掛けてよっこらせーっとよじ登り、その上に乗せてあった椅子の背に手をついた。同時にもう片方の手はドアにつき、里奈は恐る恐る椅子の上に片足を乗せた。

思ったよりもバランスが悪い。グラグラする。

机二つと椅子一つの高さは、ちょうどドアの上、小さい窓のところに里奈の腰がくる。

くらくらと足元が心もとない。腰が引けつつも里奈は窓に手をかけた。

足場が不安定なので力を込めるのが怖い。

窓枠に手をかけた。

思ったよりも簡単に窓ガラスが外れ、里奈はそれをそーつと下に下ろした。

窓の棧から首を出してみる。

文化祭だというのに誰もいないこの特別教室棟ってなんなのよ。

「よし、もう一枚だみーてーろー！」

首を引っ込めて無意識に腕まくりをした時、足音が聞こえた。走ってくる上履きの音。

里奈は再び顔を窓からのぞかせた。

そして、口を開いたまま言葉を失った。

足音の主は、高いところから頭を出している里奈を見つけてびっくりにしたらしい。

走りながら彼は言った。

「な、なにやってんの?! おまえ!」

半分悲鳴に近い、そんな声だった。

「なにやってんの」

ドアの前に立って、真崎英彰がもう一度問いかけてきた。

今度は静かに冷静に呆れたように。

彼に見上げられることなんてめったにないし、夏休み以降、ろくに口も聞いていないし……で、小窓にひっかかっている里奈も困惑することしきりだ。

どうして真崎英彰君がこんなところに現れるのか。

さっぱりわからない。

そして、彼はいつもの学校制服ではなく、ご実家のフレンチレストランのギャルソンの制服。

高校生ではないみたいに大人びて見えるから、里奈の困惑は高まるばかり。

眼をそらしたまま、早口にこたえるしかできなかった。

「なにやってんのって、出るのよ」

「そこから？」

「だって、ドア壊れてるんだもん」

怒ったような口調になってしまう。

英彰は里奈を見上げたまま、

「どうやってそこまでのぼったの」

「机を積んだの」

「あぶないじゃん」

「そんなこと言ったって」

英彰は廊下からドアのノブに手をかけて鍵をひねった。

カチツという音がして、あっさりとドアは開いた。

「……」

開いてしまえばかなりあっけないもので、里奈が拍子抜けしている
と、英彰が感心したようにつぶやいた。

「すげ」

彼の視線は里奈が積み上げた机と椅子に注がれている。

「バカ力？」

「殴るよ？」

椅子の上から噛みつかんばかりに言つと、英彰は肩をすくめた。
とにかくドアが開いた。

机から降りなきゃならない。

しかし、のぼるよりも降りるほうが怖い。

椅子に膝をついたまま、恐る恐るつま先を下に伸ばした。

こんな緊張みなぎる瞬間に、英彰はわけのわからない話を始めた。

「写真、お前と撮りたいってやつがいるんだけど」

「はー？ そんなのやってる場合じゃないってば、ここから降りた
らわたしはパンを買いに行かなきゃなんないんだ」

「ダメなんだ？」

「ダメ……って、なにすんのよあんたわ！！」

英彰が2段目の机の脚を両手で掴んで揺らしたので、里奈はあわて
て窓枠にしがみついた。せっかく下ろしたつま先も元に戻って椅子

の上で正座状態。

「危ないじゃないのっ」

「写真、撮る？」

英彰が見上げてくる。眼鏡の奥の目と口許がイジワルな感じで笑っている。

「撮らない！、きゃあああっ、揺らさないでよ、バカッ」

「写真どうする？」

「ぜーったいにイヤ、なんで見ず知らずの相手と写真なんて撮らないとなんないのよ」

「野々村」

「なに」

英彰が腕を伸ばした。

長身の彼がかかとを少し上げれば、里奈に容易く届く。

「コレ、見られても平気なヤツ？」

「きゃああああ！！」

英彰にスカートとエプロンのヒラヒラを掴まれて横からめくられた。窓にしがみつきつき英彰と会話をしている状態の里奈だったけれど、とっさにスカートを両手で押さえたおかげでバランスを崩してもう一度悲鳴。

「きゃ！」

里奈の傾きかけた背中を受け止めるように支えてくれた英彰はこともあるうにコンナコトを言うのだ。

「パンダはやめたほうがいいんじゃない？」

支えてくれた手は、腕は。

先刻スカートをめくりやがった手だ腕だ、だつてのにさらにそーゆーことを言うのか。

「うるっさいわねっ、いいじゃないの、アンダーパンツなんだからっ」

「そのまま降りれば。俺の手貸すから」

「イヤ、いららない。手どかして」

「危ないよ」

「あんたが変なことしなきゃノープロブレムよ。なんなのよ、さっきからもー!!」

英彰の手が離れてくれない。

背中から離れてくれない。

彼は里奈を見上げて、静かに言った。

「ごめん。ふざけすぎた。みんな心配してた。教室に早く戻ったほうがいいよ」

「……」

振り返って見下ろすと、真摯な顔で英彰がそこにいる。

「怪我でもしたら、困る」

「どうして真崎が困るのよ」

「野々村が怪我したら俺はいつでも困るよ」

どういう意味、それ。

戸惑いを隠せずに里奈は英彰を見つめる。

「野々村になんかあると俺の頭の中制御不能になる」

だから、と英彰は促すように里奈に向かって手をさしのべた。

それを聞いて里奈は切ない瞳になる。

英彰のことをまともに見ることができなくなって、節目がちに視線落として、こくりと小さく頷いた。

おそろおそろ身体を振り返らせて手を伸ばして英彰の肩につかまると、ウエストの辺りに手を添えて支えてくれた。

多少驚いたものの、英彰の次の行動にはもつと驚いた。

「軽いな、意外と」

「へっ?!」

床に下ろしてくれることを期待していた里奈のつま先は見事に裏切られた。

あるうことか肩にのせられた。

担がれてる？ わたし?!

ばんばんと英彰の背中を叩いてみた。

「なにこれ」

「面倒だから」

「面倒つて、ちょっと、足触らないでよっ」

「触ってないよ、押さえてないと野々村落ちるからさ」

「落として、そのまんま落としてよっ、すけべっ」

「だからさつき確認したじゃん」

「確認つてなに」

「パンダ」

淡々と英彰が里奈を担いだまんまそんなことを言つて歩き出した。

言われたほうは顔を真っ赤にして、あわてて片方の手でスカートを押さえた。

「見えてないよ」

「そーゆー問題か、ばか！」

「気になるんだつたら押さえててやるうか、スカートの上から」

「お尻触るつてこと？ それ?!」

「ひとを変態みたいに言うなつてば」

「おろしておろしておーろーせーっ!!」

足をバタバタさせてみたけれど英彰にとってはなんともないことらしく、彼は歩調を速める。

こんな格好で校内を歩かれたら、たまつたもんじゃない。

それも真崎英彰に、だ。

「走るからつかまつてよ」

「や、やだつて、本当に降ろしてよ、目立つじゃん」

「目立つ。いいじゃん」

「よくないよ、また、また……誤解されるよ」

英彰が足を止めた。

首をひねつて里奈を見る。

里奈も泣きそうな顔をしながら、英彰を見た。

そうはしてみても彼の顔を見ることはできないから、きつと英彰にも見えていないに違いない。

里奈の背中を押さえている英彰の手に力がこもったような感じがした。

身体をすくめる里奈の耳に小さな声。

「守るよ」

里奈は眼を見開いた。

「俺が」

息を飲んでしまった。

「嫌がらせとかするやつは俺が……させないようにする」
「……」

胸が。

痛いほどに強く打ちはじめる。

ときどきする、どうしようもなく。

これは、だめだ、ずるい。

「どこに行くの、こんなことして。ちゃんと説明してくれたら自分で歩くのに」

ぼそぼそと里奈が言うと、英彰は困ったように口許を歪めたまま、
答えない。

「へんなの」

ぼん、と英彰の背中を叩く。

赤面しているのは里奈だけではないのかもしれない。

第一美術室は美術部の作品展となっていた。

教室はテカリを押さえた和紙のような風合いのボードで仕切られ、
油絵を始め、人物のオブジェなど、個人個人のスペースに分けられて
展示されていた。

入口付近に机を二つ並べ白っぽい布をかけられた受付に女子生徒が
ひとり。

ボードの向こうには数人の生徒の気配がしたものの、受付付近には

彼女だけだった。

「おひさ」

口許が笑っているのに、眼がまったく笑っていないという顔で小関は彼女を呼んだ。

顔を上げた中田衣里は露骨にいやな顔をして、受付の席から小関を見上げた。

「なによ」

「やってんじゃねえよ」

「なにを」

「第二美術室だよ、わかっただろ」

衣里の目がわずかに笑った。

口許も。

それを見て小関の顔からは笑みが消えていく。

「根本さんにはいい後輩やってんだって？ 上履き盗むような真似しといて」

衣里の目が輝いてゆく。

「ほかになに知ってるの」

「しらねえよ」

「嘘、知ってるくせに」

身乗り出しそんな衣里に小関はますます眼差しを厳しくする。

そんな彼の前を二作品コーナーを廻り終えたらしい女子生徒が二人、肩をすくめるようにして通り過ぎて、美術室から出て行った。

「あのひとに関わろうとするな。うっとおしいんだよ、お前」

「あのひと」

小関の口調を真似して、衣里はくすくす笑った。

「あのひと。あんたがそんな言葉使うなんて気味が悪い。わたしがなにしようといいじゃない。あんたには直接関わりのないことなんだから」

「いい加減ね、別れたのを恨むつつつか怒ってんのやめてくんない？ 好き嫌いの前に、俺、お前のそういうトコロそ気味が悪いんだ

よ

「性格なんてどうでもいいって言ったじゃない。写真にきれいに写るからすきだって」

視線をそらす。

小関はそうしてため息をつく。

「あのひとのほうがきれいに写るんでしょわたしより。だーからーわたしは捨てられたんだよ、わかってるんだよ」

衣里の眼は笑い続ける。

からかうみたいに楽しそうに小関を見上げる。

小関は目を閉じて、そして、開いたかと思うと突然口許を歪めて笑った。

衣里は表情を止めた。

こんなタイミングで笑われるとは思わなかったらしい。

いつもの笑みを口許に浮かべて、軽い調子で小関は言った。

「そーだよ。だってお前、だんだん不細工になってくんだもん」

すうっと衣里の顔から笑みが消えた。

眼を見開いて小関を見つめる。

「今のお前、今まで俺が見た中で一番ブサイク。そんなヤツどうしてモデルにし続けなきゃなんないんだかこっちが教えてほしいね」

「……」

「あのひといじって俺の気を引きたいんでしょ。感情のプラスマイナス関係ナシに。そういうのがうざいつての。いじったって俺はお前に障んないよ、おつかねえもん」

「のこのこ出てきたくせに、よく言うよ。逃げてばかりだったくせに、よく言うよ」

「あのひとをどうしたって俺はべつに痛くもなんともないし、お前がこれからもまだなんかやるつもりなら、知ってること全部ぶちまけてやるし」

「誰に」

「俺口軽いから。根本さんでしょ、それからあのひとたちでしょ、

夏に俺を閉じ込めたアレ、職員室にチクるのはさすがに俺がカッコワリイからやめとくけど、あのひとを今日あの物置部屋に閉じ込めて監禁したのとかは……ぺらぺらとやっちゃうかもしない。事件ですよこれは」

強張った顔で衣里は小関を見つめている。

「言っとくけど好きだったから。だからあんまり醜くならんですよ」

「醜くなんてないよわたしは」

衣里はそう言い捨てた。

小関はバイバイと口許を動かした。

美術室を出て、振り返りもせずに歩いていく背中を、衣里は張り詰めた目で見る。

睨むわけでもなく、ただ、涙の気配がある、そんな目で。

文化祭1日目の終了間近になっていた。

午後3時には中締めとして、明日の一般公開に備える。

店は閉めても明日の準備に奔走するのが3年生の模擬店のサダメ、まだまだ忙しい。

「おっそーい」

「どこ行ってんだよ、真崎い」

里奈の前を歩いていった英彰が3-Aの教室の中にはいると、あちらこちらからブーイングが起こった。

しかし、彼の後に里奈が申し訳なさそうにうつむきながら教室に入ると、その声はぴたりとやんだ。

教室の中は4つに仕切られていて、受付兼待合室、更衣室、衣裳部屋、スタジオ撮影室と看板がたてかけられ、スタジオと更衣室には暗幕がかけられていた。

「明るいトコで写真が撮りたいなら、ベランダでも撮れるらしいよ」
英彰は里奈にそういうと、きよるきよるとあたりを見回し、身近にいた男子生徒に尋ねた。

「根本は？」

「根本？」

「Eの女の子だよ、小さい」

「ああ、アイツ。いるよ、さっきまでそこで待ってたよ」
待合室に並べられた椅子をあごでさす。

英彰は小さく唸って、里奈を見た。

「ゴメン、探してくる」

「……奈津美？」

「うん」

英彰の返事は短い。

里奈の戸惑いを見ない振りをしているように、彼は眼をそらす。
そのとき、更衣室から激しい声がした。

「コレはいやだよ、もう！！」

奈津美の声だった。

思わず更衣室に走り寄った里奈は、突然開いた暗幕にびびって眼を大きく開いて絶句。

その背後では英彰が眼鏡を半分ずり落としそうな間抜けな顔。

「りっ、里奈？！」

飛び出してきた奈津美も里奈の姿に心底驚いたらしい。

「おひめさま？」

「……しらゆきひめ。ありえないでしょ」

伏し目がちに視線を落とした奈津美はぼそりと答えた。

奈津美の後ろから満足そうに3・Aの女子が3人出てきて、英彰にVサイン。

「ねもっちゃん待ちすぎてかわいそうだったから、可愛くしてみたから！」

英彰がとうとう笑い出した。

それを睨んで奈津美は英彰に言った。

「おっそーい」

「ごめんごめん」

英彰は笑い続けて、そして里奈と奈津美に手を振った。

「受付して、写真撮影してもらって。俺は行くから」

「真崎」

里奈が細い声で振り返って呼びとめる。

「わたしと写真を撮りたい人って奈津美なの？」

「そうだよ」

髪に赤い大きなリボンをつけた白雪姫が里奈の手を掴んだ。
きゅっと強く。

いろいろと話さなければならなかったことがあるのはお互いにわかっていたけれど、コレだけ大勢に囲まれていると深い話もできるわけがなかった。

周りをよく見てみれば、英彰のギャルソンなんてまだましなほうで、給食当番の白衣を着ているのがいたり、まさにへんてこりんな世界。ここならやれるわ。

密かに温めていた夢をここでかなえてやるわ、ビバタカラヅカ。

里奈はキラキラと瞳を輝かせて受付に座っている生徒に尋ねた。

「あたしも仮装していいの？」

「いいよ、残ってる衣装ならなんでも着ていいよ」

「んじゃ、王子様になる」

「王子様」

奈津美がぼかんと口を開く。

手を握って見たものの、なにかから話そうかと思いついていた白雪姫はイキイキとした里奈を見て、思い出した。

「里奈、コスプレ大好きだったね、そういえば」

「ちよっと待ってて」

踊るように里奈は衣裳部屋に入っていた。

白かったはずのエプロンがあちこち汚れていたり、頬が一箇所薄く黒い筋が入っていたり。一体なにがあったのやら。

「変身前のシンデレラみたい」

その後、シンデレラは真っ白いモーニングを着て、髪の毛を一つに束ねて上機嫌で白雪姫の前に現れた。

「ちよつと大きいよ、コレ」

「結婚式のモーニングだもん、王子様なんて用意してるわけないでしょが」

「ええー、でもタカラヅカがさ、背後にでっかいハネとかさ」

「んなもんでもいいよ、根本 & amp; 野々村かまーん」

本日最後のお客様は撮影は、ベランダで終了した。

眼鏡のギャルソンは教室の隅のほうで腕を組んで一部始終を眺めていたが、やがて教室を出て行った。

「楽しかった」

屋上へ続く階段の真ん中に二人で腰を下ろして、出来上がった写真を眺めながら、里奈は言った。

奈津美は口許に手をあてて、

「やつちやうと楽しかったかな」

なんて頬を染めながらぼそぼそ。

二人だけの話をするには人気がないところがいい。

だからこんなところで、冷たいお茶のペットボトルを片手に写真を見たりして、それでもなかなか話が出来ない。

いつそのこと、このまま何もなかったようにできればいいなあと里奈が思っていたとき、奈津美が制服のポケットから赤いリボンを取り出した。

「これ、返すね」

差し出されても里奈は受け取ることができない。

「岩崎先輩のリボンはやつぱり里奈のだよ」

「……奈津美にあげたんだよ」

「わたしもうつらないもん。正しい持ち主に返す」

「正しい持ち主って、何？」

奈津美は小首をかしげて、うーんと唸った。

里奈の頑固者。

だからぐつと押し付けた。

里奈の膝の上に置かれたのまんまの手のひらを掴んでひっくりかえして押し付けた。

「これもらってくれなきゃ仲直りできないよ。あたしは仲直りしたいの、里奈と仲直りがしたいの。一緒に帰ったりお弁当食べたりドーナツ食べたり長電話したりメールしたりしたいのっ」

「それはわたしもだけど、でもそれとコレとは」

「わたしはあと1ヶ月で受験なんだよ。落ちたら誰に慰めてもらえばいいの。わたしは里奈にあまーい玉子焼きを作ってあげたいの、たーくさん作ってあげたいの。卵見るたびに泣きたい気分になるのいやなの。わかった？」

「……」

いつにない奈津美の迫力に里奈は押されてリボンを受け取った。

「玉子焼き……食べたいけど」

「たくさん作ってあげるよ、だから仲直りしよ」

なにかが違う気がするけど、奈津美がそう言うならそれが一番いい。鼻の奥がツンとしそうになって、里奈は唇を尖らせた。

「里奈」

奈津美の声も涙色。

「もう、いいよ。真崎のことは」

「……ごめん、本当にごめん、あたし」

「ねえ」

突然、奈津美が立ち上がった。

驚いて顔を上げると、奈津美はとんとんと階段を降りて首をひねって見上げてきた。つられて顔を下に向けた里奈に奈津美は笑いかける。

「真崎って、一途だよね」

「は？」

唐突にそんなことを言われて里奈は眉をひそめた。

「応援することにしたの、真崎が選ばれて」

「はあ？」

勢いよく立ち上がり里奈は階段を降りた。

奈津美は逃げるように、先刻もらったばかりの写真をひらひらさせながら、からかうように階段を降りていく。

「だってさー、あんなに一生懸命なんだもん、応援するしかないじゃん」

「しかないじゃんって、なにそれ、ころっと変わっちゃって、なにそれ」

「里奈が聡明先生なのは知ってるけど」

「そつ……聡明のことはいいの！！」

「真崎のこと好きになってもいいよ。わたしのこと気にしないで。されても頭にくるし」

「絶対にありえないよ、絶対にあいつのことなんて誰がっ」

「そんなことないじゃん、未来のことなんか誰もわかんないよ。キラइटだったりしても好きの裏返しだったりなんてよくあるじゃない」

「ないないないないない！！」

「里奈はどうして真崎のことになるとそんなにムキになるんだろうね」

「あいつが大嫌いだからよ、そうに決まってるじゃないのっ」

里奈が顔を赤くして奈津美を追いかける。

以前よりもちよっぴりたくましく、かなり図々しくなった奈津美は笑いながら階段を降りて最後の一段でびよん、と両足で着地。跳ね上がった制服のスカートの裾の元気のよさに里奈は言葉を失ってしまふ。

「奈津美、どうしたの」

「なにが？」

「なんか、無理してる?」

奈津美の明るさと相違してどよんとした里奈は最後の一段を残して立ちすくむ。

「無理? してないよ」

「……でもなんか」

「しつこいな。だから里奈は生理痛が重くなっちゃうんだよ」

「し……」

再び言葉を失う里奈に奈津美は背中を向けて、

「カッコつきたいんだもん。あのまんまじゃわたしカッコ悪すぎるから、カッコつきたいんだ。それを無理だって言うなら、そう言うていいよ。でも、今までより全然ラクチン」
カッコつけさせろ、か。

どうしたものかしばし思いあぐねて奈津美の華奢な背中を眺めていたら、なんだかよくわからなくなって、どうでもいいかなあみたいになってきた。

「奈津美のことずっと気になってたんだよ」

「わたしも里奈のこと気にしてたよ」

笑みが里奈の口許から広がって、ぴょん、と最後の一段を飛び降りた。

どちらもともなく手を繋いだ二人は足取りも軽く、4階から3階へと階段を降りていく。

「生理のときって身体が冷えるものをたべちゃだめなんだって」

「アイスとか食べてないよ、べつに」

「身体を温めるものを食べるっていいってことだよ。生野菜とかダメだっけ」

「生野菜?」

「身体によさそうなお弁当を作ってあげるから、その代わりに里奈は真崎に優しくするんだよ」

「だから、それはわけわかんないって。あいつにどうしてわたしがやさしくしなきゃならないのかわかんない」

「わかんなくてもそうして」

「わかんないっ」

「わたしの玉子焼きが食べたかったら、言うとききなよ」

「……」

奈津美がこんなことを言うなんて。

驚きながらも、里奈は一気に浮上したこの距離が嬉しくて、たまには拗ねるのがわたしでもいいかぁ、なんて思ったりして、つらつらと言葉を重ねた。

「玉子焼きとあいつのこと一緒にするのはずるい」

「ずるくないよ」

ごめん、奈津美。

ありがとう、奈津美。

でもお、真崎英彰のことは約束できないよ。

.....

翌日も晴天だった。

一般公開される今日は、父兄の姿もよく目立ち、里奈の両親も仲良くコーヒートサンドイッチの昼食をとって午後2時ごろまで校内のあちこちを見ていた。

そんな両親に少しだけ付き合った後も里奈はいつものようにこまごまとよく働き、午後は違う高校へ通う中学時代の友達に再会して、黄色い悲鳴をあげたりした。

そして、午後3時直前の店じまい。

「野々村、チャーシュー麺は無理かもしれないけど、クラス全員にラーメンくらいなら行き渡るかもよ」

生徒会室から借りてきた金庫の蓋をがじんと閉めて涼子は言った。
「ラーメン？　すごいじゃん」

里奈が表情をぱあつと明るくして片手のひらをかざすと、それに涼子が右手でパンといい音をたてて叩く。

「やったね」

「お疲れ、野々村」

がんばった。

絶対にいい思い出になる。

なによりなにより、楽しかったよ。

そんな感傷に浸っていたら、にぎやか過ぎる大群が教室のドアから飛び込んできた。

「野々村いるか?!」

「あ、あたし?」

突然のご氏名に眼を見開いて自分を指差した里奈の足元に、3 - Aの委員長が突然スライディング土下座。

「真崎の行きそうなトコ教えてくれよ、お願い!!」

総勢8名の男子生徒にお願いされて、里奈はたじたじ。

ことの起こりは午後2時を過ぎた頃に、3 - Aの教室前にずらりと行列ができたことから始まる。

「なんだよ、また増えたの?」

午前中の係りを終えて、保健室でのんびりとした午後を過ごしてい

た真崎英彰くんは、至急教室に戻ってこいと携帯電話で呼び出され、この教室に戻ってきたわけだ。

そして、この行列を見て、忙しくなって人手が足りなくなったのだと勝手に理解した。

「3時までにはけるのこれ」

受付に座っていた石河くんに尋ねちゃったりして、英彰もここまではまだ平和。

石河は、

「うん、大丈夫」

とかなんとかいいながら、英彰の手首を掴む。

掴まれた右手を眺めながら、英彰は言った。

「なんだよ」

「なんでもないよ」

「なくないだろ、気持ち悪い……は？」

背後からがっしりと羽交い絞めされている。

英彰は首だけひねって羽交い絞めしている生徒を見る。

「なに？」

「これから」

「離してよ」

「これから真崎英彰くんと写真撮影大会が始まるからだめ」

眉をひそめたまま英彰が黙ること数秒。

廊下には大層な行列ができています。

私服の女の子もちらほらいたりして、そーいや視線がこっちに集中しているじゃないですか。

英彰の頭が事態を把握した。

「俺、聞いてないぞ！！」

「聞いてたら逃げるじゃん」

「決まってるだろ、なんで俺が！！」

「えー、かわいい顔してコイツは大変暴れん坊ですので、皆さん」
注意……」

「石河、てめえ!!」

英彰はそう吼えた後、羽交い絞めしている普段ならばお友達のはずのクラスメイトに言った。

「ゴメン」

そして、アタマを後ろに倒して頭突きしてみた。

それは結構な威力だったらしく、羽交い絞めから解放された。

「イタイツ、痛いよ真崎君っ」

「だからゴメンって」

言いながら英彰は走り出した。教室の出口は塞がれていたから、ベランダへ。

逃がすものかと追いかける男子生徒の手と女子生徒の悲鳴、そんなものを潜り抜けて、英彰はベランダの手すりに手をかけ足をかけ。

「まままま真崎、ここは3階……」

よっこらせーっつと足でまたいで隣のクラスのベランダに移動した英彰はそのまま、ベランダを突っ走る。

もちろんとなりのクラスもたこ焼き屋さんなんかをしていて、ベランダに人がいたりしたので何事よと眼を見開いて英彰の暴走を見送ってポカーン。

「確保しろーっ!!」

「で、真崎は3・Cの教室を突っ切って、あんたたちの包囲網を突破して、現在行方不明、と。情けない」

里奈が冷たく言い放つ。

「だって、あいつ異常に足が速いんだもん」

「通常比1.2・5倍の早さでしたな」

そりゃー、撮影会だなんてものに担ぎ出されるくらいならば、必死で逃げるでしょうが。

「水面下で進めていた苦勞が」

後頭部を何度かさすりながら里奈はやれやれとため息をついた。

「真崎の出没ポイントはね……」

去年、委員長&mp;副委員長コンビで1年間がんばってやったことといえば、大半が真崎英彰探しだったのだ。

大抵の行き先は見当がつく。

「保健室なんかには絶対に逃げ込むと思うわ。あそこは1階だから逃げ道も多いしね」

それから数箇所のポイントを教えていってらっしゃいと見送り手を振った。

そんな里奈に奈津美が言った。

「いいの？」

「まあ、真崎なら逃げきるでしょ」

「そっか」

あっさりと頷いた後で奈津美が里奈に紙袋を差し出した。

「なにこれ」

「なんででしょう？」

奈津美のくれた紙袋の中身は奈津美の作ったチョココレートのパウンドケーキだった。

「里奈のために焼いてきたケーキだからね」

「……ありがとう」

いつもならば嬉しさのあまり悲鳴をあげて喜ぶのだけれども、奈津美の次の言葉がいけなかった。

「ひとりでたべちゃだめだよ。わたしは真崎と仲直りしたよ」

「……あのねえ」

「真崎はチョココレートのパウンドなら食べるんだって、里奈言ってたじゃない」

「だからさー」

「閉じ込められたの助けってもらったり、いろいろ真崎には助けられているんだから、お礼するのが筋だよ、里奈はそんなこともできないの？」

涼子がくすくす笑っている。

困っている里奈に奈津美がたたみかけて、涼子の笑いをますます大きくする。

「奈津美、キャラかわったね」

「そうかな。そんなことはいいよ、真崎と食べなよね、でないといけない」

「そんじゃいらないよ、と言いたい気持ちもあつたけれど、やっと仲直りできた親友にそんなことがいえるわけがない。」

里奈はしぶしぶ、

「真崎に食べさせるわよ」

一般客もすべていなくなり、校庭では後夜祭の準備が進められていた。

展示の後片付けも進み、文化祭委員たちが校門に作れたアーチを取り外している。このアーチはキャンプファイヤーで燃やされることになる。

それを見るたびにがんばってやってきた文化祭が終わってしまうまだなあとしみじみして、そして寂しくなる。

「最後のフォークダンスだ」

奈津美がポツリと言った。

去年の奈津美は英彰に片思いをしていたから、英彰と踊れますようにと指を組んで祈っていたっけ。

肝心の英彰はフォークダンスに参加しなかったけど。

あの頃も英彰とはサイアクだった。

顔も見たくないと大嫌いだと、世の中のうまくゆかないことすべてが彼のせいのように思っていたほど。

今はね。

会いたくないけど。

気まずいけど。

大嫌いじゃないの。

それが本当の気持ちなんだけど、なんでだろうね、認めたくないの。どうしようもなく、恥ずかしいんだ。

後夜祭が始まるというアナウンスが流れた。

後片付けが済んで疲労と興奮の余韻が入り乱れていた生徒たちは立ち上がりはじめた。

「貴重品預けてないひといないー？」

貴重品袋と書かれた貧相だけれども丈夫そうな巾着袋を持ち上げて涼子が声を張り上げた。

「あ、財布ーもっててー！」

貴重品袋を広げながら、涼子がふと里奈の手荷物に目をとめた。

「野々村、その紙袋いいの？」

「食べ物だから」

奈津美とのやりとりを見ていたはずなのに、その紙袋に入っているものがなにであるかもわかってるのに、涼子はそんなことを言うわけで。

「さっさと行きなさいよ」

「あんた面白がつてるでしょ」

「いいえー」

追っ手にたびたび遭遇しては逃げ、タイムアップしたあともなんとなく校内で息を潜めていた。

ようやくたどり着いた特別棟の生物室で膝を抱えながら、どうして行く先がばれているのかと考えて、野々村里奈を思い出した。

英彰が校内のどこにいても必ず探し出しては、委員長のお仕事をしなさいよと小言を言い続けた女の子だ。

「あいつならバレてもしかたないか」

後夜祭が始まるうとしている。

夕暮れも深まり、校舎の中には生徒の気配がない。

そつとドアに歩み寄り、開いて伺ってみた。

廊下の終わりにある非常灯の緑色のランプが英彰の足元に薄い影を作っている。

このまま最後までは後夜祭に出てみようか。

でも、あんなふうに逃げたばかりだし、校庭に行つてクラスの連中と顔をあわせ辛い。

このまま帰ってしまうのもなんとなく寂しそうで、英彰はそのままドアを閉めて生物室に戻つた。

灯りをつけてしまうとサボリがばれるから暗いままにして、椅子をひとつひっぱり出して窓辺に置いた。

腰を下ろして足を上げて、窓の棧にかかとを乗せた。

天井を見る。

壁を見る。

蛙のホルマリン漬けと目が合った。

まあ、あつちには眼があるんだかないんだか……。

「つまんねえ……」

「真崎いる？」

突然そんな声がしてドアがあいちゃったりしたものだから、英彰はバカ正直に驚いてドアを見た。

野々村里奈がいた。

「なに……」

いろいろな驚きで声が掠れてしまった英彰に、里奈はてくてくと歩み寄つて椅子の後ろに立った。

そうされて英彰は足を下ろす。

「奈津美が」

「え？」

「奈津美がチョコレートパウンドケーキを焼いてきたのよ。クラスの方だけでも大変だったっていうのがんばつてね」

「……」

「真崎と食べるって言うの。でなきゃあげないって言うの。わたし

「これが大好きなの」

「……で」

「食いたいから、真崎と一緒に食べるわよ。いい、勘違いしないでね、枕詞はあんたじゃなくて……」

「わかったよ」

里奈の早口は英彰のちよっぴり不機嫌な響きの声でストップ。

それからも首をひねって里奈を見つめていると、里奈は顔をうつむかせて、

「お茶、コーヒー……インスタントだけどさ、あるから。お湯もミルクも砂糖もあるし。クラスで使ってたグラニュー糖もらってちやつただけど……」

「淹れてやるうか」

予想外の言葉だったに違いない。

里奈が顔を上げて英彰を見つめて、その瞳がわずかに見開かれている。

英彰は椅子から腰を上げて立ち上がった。

「せっかくだからさ。ちょうど腹へってたんだ。格好も格好だし」

逃げ続けたままだったので制服に着替えていないのだ。

手を伸ばして紙袋を受け取る。

「あの、電気つけちゃダメ？」

「サボってますってバレるよ」

「あ、そっか」

なんとなく。

なんとなくだけど、息苦しい。

体温だつて上がっているに違いない。

けれど、そんなもの悟られるわけにはゆかないから、平然と振舞わなくちゃならないから、英彰は里奈から目をそらした。

窓際から一番近い机に紙袋を乗せて、中身を出してゆく。

紙コップが2つ、紙皿が2枚。

「砂糖とかミルクはセルフで頼む」

「あの、パウンドケーキカットしてあるから、セルフで取るうかお互い」

「うん」

そして5分後、二人は向かい合って、パウンドケーキを食べながら、紙コップのコーヒーを飲んでいく。

当たり前障りのない話をしながら。

「Dは評判よかったんだって？」

「売りあげは上々。そっちは」

「さあ……俺、学級委員じゃないし」

「貢献しなかったしね」

「あ、野々村、あいつらに俺の行き先教えたる」

「教えたよ、きかれたもん」

「言っなよ。マジで焦ったんだから」

「でも、ここは教えてないよ」

「……」

なんで、と唇が動いたけれど、声にならなかった。

里奈の次の言葉が、

「真崎の一番お気に入りの場所ですよ、ここ」

だったりしたから。

お気に入りというか、なんというか。

きれいではないし、不気味だし、いいことないけれど、人が来ないことが唯一の利点でしかないのだけれども。

特に里奈に關係して、いろいろ忘れたいことも多い場所なんだが、それでも、まあ、何かあると独りになりに来る場所でもある。

「野々村は大嫌いな場所だろ？」

軽く睨まれた。

肩をすくめる。

つん、と眼をそらして里奈は窓の外を見る。

「キライじゃないわよ。別に」

「あ……そう」

「そーよ」

ぱくぱくぱく。

それからなぜか里奈は勢いよくケーキを平らげて、もう一つに手を伸ばす。

「キャンプファイヤー近くで見たかったな。フォークダンス出たかったな」

「……出ればいいじゃん」

「今更。暗いね、この部屋。こんな暗いところでケーキ食べてコーヒー飲んでるあたしたちって一体なに？」

「なんだろうね」

適当に頷きながら、英彰は立ち上がった。

そして、胸のポケットを探り煙草のケースを取り出した。

それを見て里奈の眼がまん丸になる。

「あんった、やっぱりっ、校内でっ、見つかったら退学じゃないのっ」

「俺、フロンティアなんて吸わないよ。拾ったの」

「拾ったって、どこで。そういうものを拾ってどうするのよ」

「職員室に届ける」

「嘘つきなさいよー？」

「そのパウンドケーキの入ってるアルミ貸して」

「アルミ？」

ペリペリとケーキからアルミホイルをはがして里奈は不思議そうな顔をしながら英彰の前においた。スプーンのグラニュー糖を見つめる。

「ステイック砂糖貸して」

「ステイック砂糖？」

言われるままに里奈が手渡してくれたから、封を切ってアルミホイルの上にさらさらとこぼした。3本ほどやると小さな山になった。

「グラニュー糖だけでは燃えないから」

「なんであんたライター持ってるの」

里奈は英彰を問い詰める。

「それも拾ったの？」

「これは自前」

「あんたってひとは」

緑色の100円ライターの炎で里奈の顔を照らして、すごい勢いで睨まれていたのがわかって少し腰が退けた。

本当に拾い物だったフロンティアという煙草を一本取り出して、くわえたままもごもごと話を続ける。

「保健室のエタノールとかオキシドールとか」

「えたのー……」

「アルコールランプのメチルでもいいんだけど」

「なにさつきからわけわかんないことを……真崎、煙草に火をつけてんじゃないってばっ」

まあまあと里奈をなだめながら、アルミホイルの上にこぼしたグラニュー糖に煙草の灰を落として、ライターの火を近づける。

「あ、ついた？」

不機嫌だった里奈の声のトーンが明るくなる。

オレンジ色と青色の炎がグラニュー糖の上から広がって、まるでキヤンドルのよう。

「さつき点かなかったのに」

「化学の実験」

英彰は椅子に腰を下ろした。

「カフェ・ロワイヤルっていうの昔オヤジに教えてもらったんだ」

返事かわりに里奈が見つめてくる。

ドキリとする。

胸が痛む。

「コーヒーカップの上にスプーンをのせてさ、こんなふうにブランデーに漬けたグラニュー糖をのせて火をつけると、こんな色じゃない青い火になって……」

吸いかけの煙草に口をつける英彰に里奈は今度は文句も言わず、グ

ラニユー糖の燃える様子を眺めている。

「青いのもきれいだと思う……けど、これもきれいな机に肘を突いて目の前で指を組む。」

組まれた指には吸いかけの煙草が挟まっていて、その細い煙の向こうには里奈がいて。

湧き上がってくる感情があるけれど、ここはあまりにも静か過ぎる。瞳を輝かせている彼女の邪魔をしたくなくて、見つめるだけにする。話しかけるのもしばらくやめよう。

組んでいる指を解いて手を伸ばせば、届くところに君はいる。よくわからないけれど、実際の距離もそんな感じがする。

そんなの錯覚なんだとわかっているけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9591z/>

Babyleaf 2nd season

2011年12月30日01時46分発行